

俺がT S属性の二重人格者であるのは間違いないんですけど？

春の雪舞い散る

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現国担任であり生活指導の教師でもある平塚静に引き摺られて訪れた特別棟の空き教室に待っていた見目麗しき乙女は…

比企谷八幡女体化ですので苦手な方は読むことはおすすめしません

原作で描かれるユリユリしい程度のいちやいちはあります

短編ネタ物には多重有り

目次

出会い

比企谷八重 | 1

家族会議と新しい制服 | 6

トツカエル降臨 | 11

悪魔のように黒くえもいわれぬその味わいは… | 17

不審者の正体、それは厨二 | 22

ガハマ印 | 27

テニスの王子様と薄っぺらな王様… その① 自称奉仕部員のガ

ハマさん | 31

テニスの王子様と薄っぺらな王様… 戸塚強化計画 | 35

テニスの王子様と薄っぺらな王様… 裸の王様とキャバの女王の

乱入 | 39

テニスの王子様と薄っぺらな王様… ドツキリテクスチャーな葉

山隼人 | 44

テニスの王子様と薄っぺらな王様… 闘い、その先に見えたモノ

51

G
W

初めての大型連休… 前半 | 55

初めての大型連休… 初めての仲間と一緒に… | 59

初めての大型連休… 連休の谷間 | 66

初めての大型連休… ガハマさんよ、勉強しろよ? | 70

初めての大型連休… 母ちゃんと彩加と奉仕部の二人と | 74

初めての大型連休… 乱入者達 | 80

初めての大型連休… 皆で動物園 | 85

初めての大型連休…葉山隼人がフットサルに怪我で不参加なのは
自業自得である

初めての大型連休…出発進行

初めての大型連休…湯上がりの一時

海老名姫菜のバースデー

初めての大型連休…コスプレ少女とラベンダー畑

初めての大型連休…彩加と初デート!!

熱に浮かされた彩加のバースデー

天使達と…

川崎沙希、ご乱心? 取り敢えず大志、お前は小町に近寄るなっ!

川崎沙希、ご乱心? 幼い二人の為に

川崎沙希、ご乱心? アカツキニヤン参上、誰得? 雪乃得

130

川崎沙希、ご乱心? エンジェルラダーの攻防

川崎沙希、ご乱心? 交錯する思いと姉弟の和解

幕間く 沙希と始めるアルバイト

職場体験保育園編…アタシが知りたい職場?

職場体験保育園編…何処のリアルオママゴト好きの園児だよ?

職場体験保育園編…この思い出がいつか…

誕生日

ガハマさんのバースデー…引かれ合う三人

ガハマさんのバースデー…私の為に一日空けてくれないかな?

172

165

163

157

151

147

140

134

126

119

116

112

109

105

100

95

89

比企谷八重のHAPPY BIRTHDAY〜八幡 BIRTH D

A, S S S S

ギザギザハートの子守唄〜葉山隼人誕生日SS

総武高の愉快的な仲間達

戦うっ！ 男達はっ♪

守るべきっ！ 女達に？

戦う、女達はっ！

もしも総武高野球部が甲子園に行ったなら

さあ、お前達の罪を数えろ

愛する男達へ？

何を賭けるのか？

何を残すのか？

外伝的な話です

流し素麺

女子会〜比企谷八重と愉快的な仲間達のパジャマパーティーその①

由比ヶ浜家

職場体験は親父の会社NGESで

女子会〜比企谷八重と愉快的な仲間達のパジャマパーティーその①

由比ヶ浜家後編

比企谷八重のハッピーバースデー？

再編中

私達の未来予想図アタシとアナタそしていつかきつと

アタシ達の未来予想図？男子達は全くだらしない

243

239

236

234

230

①

227

223

①

220

217

214

212

205

201

199

196

191

188

185

D

アタシ達の未来予想図？予定は未定	245
アタシ達の未来予想図お誕生日会	247
結衣の誕生日と魔王降臨	249
結衣のハッピーバースデー、東京ワンにゃんショー	254
結衣のハッピーバースデー、プレゼントは内緒でな	257
結衣のハッピーバースデー、サブレと魔王	263
結衣のハッピーバースデー、予約入りました	266
陽乃さんの聖誕祭前日	269
テニス対決番外編	272
口は災いの元	274
八重1／2	278
テツナのバスケ	280
イグナイト	286
第69話	289
奇跡のストバス	294

出会い

比企谷八重

プロローグ

① 比企谷八幡の本人も知らない悩み

「ああ、今なんつったよ？このぺちやぱいがっ！
ナニが性根が腐ってるだ？

ならお前は存在そのモノが腐ってるんだよっ！ 八とアタシの事をナニも知らないくせにフザケタ事抜かしてると潰すゾッ！」
そう低く唸ると

「比企谷：女子相手にその発言はかなり不味いぞ：それになんだ？ お前の声や口調が…」

訝しげな目でアタシを見ながら

「その目は節穴かよ？アンタ等が見ている比企谷八幡という男の背が縮んでいってるのがわかんねえの？

大きな声で言えることじゃねえけどこの際だからはっ言ってる、今のアタシがセクハラには当たらないはずだ：何せ比企谷八幡は隠れTS能力者で今のアタシは自称比企谷八重、比企谷八幡の女性体なんだからな

因みに八は今アタシの中で眠っていてアタシの事はナニも知らず自分の事を夢遊病者だと思っている」

そう言っただけにぶかぶかになってるブレザーを脱いで見せると確かに胸部の膨らみは雪の下よりは気持ちよくよかな胸が自己主張していてそれに気付いた雪の下が歯軋りをして悔しがるのを見て笑う八重

「で、どうするんですか？平塚センサー、今この場で身体検査デモするんですかあ〜っ？

先生のお気に入りだかなんだか知らないけどこの責任どうとって

くれるんですか？

アタシは別に構わないですけど怒りに任せて表面に出てきたから当分八には戻れそうにないから明日から当分学校を休みたいくらいなんですけど？」

そう言つて二人を嘲笑うと

「何をフザケタ事を言つてるのかしら？ そんな堂々と」
どっちがふざけてるんだ、明日うちのクラスは体育があるんだぞ？
この状態で男子に混じつて着替えろつて正気か？

体育がなくなつて体格や顔つきに声とかいつまでも誤魔化せるわけないつかすぐにバレるつかお前ダレ？ 状態だろうがっ！

それともなにか？ 人が必死に隠してるTS体質をカミングアウトしろつて言うのか？

今の世の中TS能力者が世間からどんな扱いを受ける知つてて言つてるのかよ？

TSだけでも厄介なのに二重人格者のアタシにどうしろつて言うのさ 二

そう言つて睨み付けてやるとさすがにナニも言えなくなつたらしい…バカめが

変体を終えたアタシの比企谷八幡の名残はアホ毛と腐った目だけでその特長を知らない者達には身長差がほぼ30cmもある八とアタシが同一人物に見えるわけがない

今日の前で見えていてさえ信じられないものを見た…そんな顔をしてアタシを見ている

「わかつた？ わかつたらこれ以上八とアタシに関わるな…」
忌々しげにそう吐き捨てるアタシだった

② 雪ノ下雪乃は提案する

雪ノ下雪乃はアタシにそう言われたけどそれで

『はいそうですか、わかりました』

と、引き下がるような女じゃなかったのはアタシの計算外だった：え、計算してたのかって？ 細かい事は気にするな

： 互いににらみ合いながら

「 周期は安定してるの？」

そういきなりイミフな事を聞いてきたから

「 周期つてナニ？」

と、首をコテンと倒して眩くと

「 平塚先生、どうやら彼女は女の子が学ぶべきものをナニも学んでないようです

おそらくはTSの発症時期が起因するものでしょうが生理の周期も知らないようですから： 平塚先生に提案があります 」

そう言つて平塚先生に向き直り

「 依頼内容を比企谷八幡の更正ではなく比企谷八幡及び八重の兩名の学校生活のサポートにしていただけませんか？

私が言うのもなんです色々なものを一人で抱えてきた八重さんの力になりたいんです

それにね、八重さん： 貴女の言った女子であることの不都合をまだ理解できてません

もしまだ学校生活を続けたければ取り敢えずは保健室の養護の先生だけにでも打ち明けなさい

で、なければ生理痛で保健室で休むことができないしナニよりまだ始まってないのでしょ？」

そのいきなり生々しい話しに赤面するアタシを見ながら

「 やはりの中でしたか： 現状は不確定な要素が多く私達は情報が乏しすぎますからご両親、主治医と話し合う必要があると思います
が如何でしょうか？」

その上で保健室の養護の先生の理解を得れば保健室登校で当面を凌ぎその間に対策を考える時間が作れます

確かにナニも知らない私たちにどれ程の事ができるかはわからな
いけど貴女一人じゃ抱えきれない事なのは当事者である貴女が一番
よくわかつてる事よね？」

そう言つて私の頭を抱えて頭を撫でる雪ノ下は

「頼りないかも知れないけど私達を頼つて…」

そう言われアタシは泣いた… アタシがアタシと言う自我に目覚めて以来人初めて前で泣いた… しかも大号泣だ

その後何とか落ち着いたアタシをつれて保健室に行き養護の先生に話すと

「わかりました…まあ当然と言えば当然の話ですが比企谷八重さんはしばらく私が預かり女子が小学校で学ぶ保健の勉強を教えましょう」

雪ノ下さんもその必要性を感じたからこそ私に事情打ち明ける必要があると感じたのでしょ？

私もそれほど知識がある訳じゃないけど比企谷さんのように発症の遅い子はその年令なら知っていて当たり前と言う一般論により知っているものと勘違いされ勝ちなんです…」

そう言つて雪ノ下を見ると雪ノ下も

「そうなんですか… 私はなにか嫌な予感がしましたから周期を聞いたのですけど周期と言われてもその言葉の意味を理解できませんでした」

雪ノ下がそう説明すると

「そう言う事です、確かに貴女達の年令なら習っているはずの事でも比企谷さんは男子の保健を習ってきているため女子が習うべき事を全く知らないはずです」

ですがいつ比企谷八幡君に戻るのかが不明である以上今すぐになすべきはそう言つた知識の習得だと思います

症例数が少ないから断言できませんが命に関わる病気ではないが今の医学の力では治癒の可能性はない不治の病

と、言われてるそうですからある日突然TSが治まったという話は聞いたことがあります」

その話を聞いたアタシが溜め息を吐くと

「比企谷、ご両親は今夜ご在宅か？ ご在住なら一度今後の事を話し合わなくてはならないと感じたのだが…例えば修学旅行、現状で

の参加は難しいよな？」

そう深刻な表情で言われたので気持ちを楽しにして貰うために

「八なら心配要りませんよ、八なら行かなくても良いと知ったら喜んで家でだらだらしてますよ

それに両親も元々八が寝たらTSする体質は知ってますし八はともかく私が男子の部屋で寝るとか親父が認めませんけどだからと言って女子の部屋に行ける訳ありませんからね

八はクラスに友達は居ませんし私に至っては知り合いは雪ノ下しか居ませんから：

いいえ、それ以前にアタシは家族以外の人間と初めてまともな会話をしているってことに今さら気付きました

なので私も修学旅行に出席しなければいけない意義は見いだせません」

そう言っ修学旅行の出席を拒否すると

「それに関しては未だ時間はあるから結論を急ぐ必要はあるまい？」

平塚先生は溜め息混じりにそう呟くのだった

家族会議と新しい制服

③ 緊急会議

「うん、そんなわけで先生が親父と母ちゃんと話がしたいって…え？ 自分の気持ち？… アタシの気持ちは… わからない…でも、一度くらいアタシの姿で普通に学校行ってみたい…」

でも八を見てたら… ね？ 普通じゃないアタシが受け入れられるのか？ そう考えると怖くてたまらない

ん、そーだね…わかった… 先生に来てもらう…ん、アリガトウ小町」

そう言つて通話を切り

「八時ちよつと過ぎくらいに帰つてこれるそうだからそれで良ければ先生と話し合いたいそうですが…」

アタシが小町が二人から聞いた話を伝えると

「そうか、わかった… 事はデリケートかつ緊急を要するから雪ノ下を送り比企谷の家に…」

「いいえ、私も同行します…ご両親との話し合いはともかく妹さんを交え私達は私達で話し合うべきですしやはり状況が状況だけに姉に頼ろうと思います…」

そう答えるのを聞いて神妙な面持ちで答える雪ノ下に

「わかった、協力を頼んでくれ…」

(アイツにしてみればこんな面白そうな話だろうから下手に隠してバレたときに敵にでも回られたら厄介だ

雪ノ下もそう判断しての事だろう… 何しろ雪ノ下が自分から進んであの姉を頼るくらいなんだからな)

私は車の支度をするから帰る支度をして待ちなさい
そう言つて平塚先生を待つことになったアタシは

「済まないな… 雪ノ下に養護の… 『鵜飼』 鵜飼先生…
こんな事に巻き込んだんじやって…」

そう言つて二人に詫びるアタシに二人は

「それは違ふよ、比企谷さん…？」

あまり良い話とは言えないけどTS病自体はその患者数は増えつつあるらしい…と、言う研究報告がありますからいずれ貴女以外の子が今の貴女のように相談にくる日がないとは言ひ切れません

それにね、比企谷さん… 私達は普通、こんな風に一対一では生徒さんと関わる機会何て早々ないんですよ？

そんな私を頼つてもらえて嬉しいんですから平塚先生とは異なりますけど遠慮なく頼つてください」

「私は巻き込まれたのではなく自らの意思で飛び込むのだから変な遠慮はしないでくださらない？」

その… 貴女となら良いお友達になれそうな気がしたし… なりたいたいと思つたからあくまでも私の都合なのだから気にしないでほしいわ」

アタシは、現状の八がアタシ中で深い眠りについていつ目覚めるのか見当もつかない状態であることを告げ…

「もしも許されるなら学校に行きたいし普通の暮らしを経験したい
い

小町がイヤじゃなきゃ一緒にシヨツピングとかしたい… アタシが望んでも… 良い… のかな？」

感情のコントロールが効かなくなった私は涙を流してそう訴える
と

「小町言つたよね？ 八重お姉ちゃんとお買い物行つたりカフェでまったりお茶したいって

お兄ちゃんを否定する訳じゃなくてお姉ちゃんもほしかつたって願いが叶うんだよ？」

そう泣きながら言う小町に

「小町は覚えちゃい無いだろうけど幼い頃の小町にお姉ちゃんが欲しいと言われて妹じゃダメって聞いたなら妹じゃなくてお姉ちゃんっ！」

そう言われてなら大人になった八幡にお嫁さんが来たらその人に義お姉ちゃんになつてもらいなさいって誤魔化したんだけど…

あれが小町が『お兄ちゃんのお嫁さん候補』って事を言い出す切っ掛けだったんだよね」

と、今明かされた衝撃の事実を前に啞然としていると

「覚悟はできたんだね？」

ただ一言聞いてきた母さんに

「勿論、不安が全く無いわけじゃないけど雪ノ下…平塚先生に養護の先生がいるから一人じゃないんだから頑張れる」

そう母さんに答え親父を見ると悲しそうな顔で

「俺とは出掛けてくれんのか？」

だつてさ、だからそれを聞いた小町は親父を白い目で睨み母ちゃんには呆れられて平塚先生と雪ノ下には苦笑いされてるから

「お父さんとデートしたいなっ♪」

そう可愛く言ったら

「お父さんに任せなさい」

そう胸を張って答える親父に心底呆れる母ちゃんと小町だった

その後、当面保健室登校を勧められたことを話自分もそれで様子を見ようと思うことを話すとお金を渡され週末に小町とららほに出掛け小町のプロデュースで服を買うことにしたんだ

どうだ八、小町とお出掛け羨ましいかっ… ああ、お前は面倒臭がるヤツだったな… まあ良いんだけどな

夢を見ていた…

夢の中でアタシは八と会って身体を乗っ取ってしまった今の状態を謝ると

「気にすんな、俺はお前でお前は俺なんだからな…」

それにお前がそうして表に出てくれているお陰で俺は堂々と引き込もって電腦空間で戯れている」

そう言つて笑っている

「暫くはネットゲで修行してるから面白いことがあったら呼んでら助けにくるからな…」

その言葉を最後にアタシは目を覚ました

第1章 八重の新生活

① アタシの罪

八の目覚めが悪かったのははつきり言っただけでアタシのせいだろう

極端に言ったら八が昼の人格なら私は夜の人格

八が眠りについていたら私は目覚める… そういった関係なので八は寝てるけど私が一晩中ネットの海で遊んでいるから八の身体（アタシの身体でも有るんだけど）は休まる暇がないのだから

あ、因みに八同様に小町LOVEな私が受験生の小町に家事をさせたくないで八を起こすのは朝食と弁当を作ってからで小町のリクエストに応え毎日プチトマトを弁当に入れてある

え？ 八が食べなきや意味がないって？

甘いな、そいつはマツカンより甘いぞ

ちよつと手元を狂わせて八の口の中に放り込むのは容易いのだろうか

ふつ、だから八はトマトに慣れるしかないのですよ慣れるしかね

保健室登校初日： と、言いたいけど念のため病院に寄ってから学校に行くことになっている

因みに事が事だけにあらかじめ病院に連絡を入れて裏口から入れてもらった

勿論そのくらいの我が儘は許されている、どんだけ言い繕おうとも病院にとってアタシ達は貴重な…それこそSSSRかGRクラスのレアサンプルなんだからね

いつものように血液検査から始まりMRI、エコーにレントゲンを

済ませてから登校の問題を担任と話して欲しいと頼みアタシの通学が比企谷家の総意であることを告げた

その後登校するところちょうど空き時間だった平塚先生がすぐに昼休みだから部室で自習しててはどうかと提案されて別に体調悪くない

そう、今は別に体調悪くないし逆に体調崩した誰かが来ないとも限らない以上本当に体調が悪い時以外は極力避けた方が良く思うしナニよりそろそろお昼時だと考えて平塚先生の提案を受け入れることにしたのだ

そして昼休み…

「えっ…と、ソレハナニカナ？ 雪乃」

そう自分で言うておいてなんだけどそれってうちの女子の制服だよねしかもおまけ（ 女子用の下着 ） 付き

「わかってるなら着替えなさい、そのブカブカな男子の制服のままだから変に目立つのよ？」

大丈夫、マンモス校の我が校で全生徒を把握してる人なんか居ないわ

その一理ある雪乃の説得を受け入れつもりだったんだけど…

「どうしたの早く着ないと風邪を引くわよ？」

そう言われたのだけど手にした胸当てを睨みつつ唸るアタシに

「あら、もしかして着けるのが恥ずかしいのかしら？」

そう挑発的に言われて

「まあね、たかが胸当てと思えば大した問題じゃ無いけど付け方がわからないってのは相当に恥ずかしくて言えない事だとは思う…つか正直恥ずかしいとゆーより情けない」

そう答えると何がそんなに嬉しいのかはわからないけど嬉しそうな顔で

「それならそうと早く言えば手伝ってあげたのに…こちらにいらっしやい…」

そう言われたアタシは大人しく服を着せてもらうことにした

トツカエル降臨

② 可愛いあの子と第一次接近遭遇とハゼロ巨乳

それはお昼休み終了間近の事だった

雪ノ下は授業のため既に教室に向かっけていてアタシは八がベスト
プレイスと呼んでいる場所に急いでいる

勿論、大好きなマツカンを買うためだ

多少の差異はあれ基本趣味嗜好は同一人物なだけに変わらないか
ら八が好きなものは大抵好き

八が好きでアタシが嫌いなものと言えぱなんと云つても巨乳だろ
な：八のスケベ

なので八のクラスに存在する葉山王国の一員であるピンクのお団
子メイドは嫌いの筆頭だけどそう言う意味じゃ平塚先生の事も大嫌
いとまで言える、怖いから言わないけど

そう最初の頃はそう思っていたのだがどうやらあの先生はどうや
らリア充ではないみたいだから好きじゃないと言うレベルに格上げ
した

だがあの女王のメイドはなんか引つ掛かるモノはあるけどまあア
タシ等とは交わる事の存在だからどうでも良い、関係無いと思ってい
た、あの時までには

まあそんなことは今のアタシにはどうでも良いことでアタシは

「マツカン、マツカン〜っ♪」

と、口ずさみながら走つてたら軽い衝撃とその後にお尻に衝撃があ
り状況が飲み込めない私がブーツとしてると

「…ご、ごめんね…君、大丈夫？僕がブーツとしてたせいで…」
そう狼狽えているから

「大丈夫だ、ブーツしてたのはアタシも同罪なんだからな

なんなら妹から『お姉ちゃん、お願いだから目を開けたまま
寝ないでよ、キモいからっ！』って怒られるくらいにブーツして

るまでさえある」

と、あまり自慢にならない事を無い胸張って言うアタシに

「君って比企谷君みたいな話し方をするんだね？ 僕は2-Fの戸塚彩加、痛いところが有ったら後からでも言ってきて」

そう心配そうに言ってくれたから

「わかった、覚えていたら言いにくい、だがアタシは今重要なミッション遂行中だから先を急いでいる

それ故に先を急がねばならぬから縁があつたら又会おう、記憶力に自信はないがな」

そう言つて跳ね起きるとツインテを揺らしながら自販機に向かうアタシをボーッと見ていたけど

「あつ、名前聞くの忘れた… クラスも聞きそびれちゃったけどあまり見掛けたことない娘だったからから一年の子かな？

でも… あの愛敬たつぷりのアホ毛に憂いに満ちたあの特徴のある瞳… 案外あの子って比企谷君の妹さんだったりしてね…

つと僕も急いで教室に戻らなきゃ… 授業が始まっちゃうよ

比企谷君、明日こそは学校に来るといいのにな…」

そうポツリと呟いたけど彼のその事言葉は浜風に流され遠い沖へと流されていった

春の暖かい日差しを受けながら転た寝をするアタシと昼休みに結ったアタシのツインテをリボンで飾る雪乃

最初の出会いこそあれだったけど雪乃はアタシには優しい

八には未だ蟠りがあるようだけど少なくとも初対面の時の敵意までは感じない

そんなことをぼんやり考えているとこちらに近付いて来る足音と気配に気付いたアタシが左目だけを開けるとそれに連動して揺れるアホ毛

「雪乃、来客らしい…」

その言葉を聞いて耳を済ますと確かにこちらに近付いて来る足音に気付き気配を探っているとノックの音がして雪乃が

「どうぞ」

「牛、ここは隣人部部室ではないから小鷹はいないぞ… 他を当たれ、お帰りはあちらだ」

入ってきた人物を一目見て流れるように退出を促すアタシに

「う、牛って何だしっ！」

怒ったように聞いてくるから

「そんなこともわからないから牛なんだよ、自分の胸に手を当てて聞いてみるんだな」

そう言っただけなら

「あたしなんかあの子に嫌われてるみたいけどどなんですか？」

「

と、マジに聞いているよ…アタシを越えるアホさだな

そう思いながら

「嫌いじゃないから安心しろ、私の（心の）平和のためにはむしろ殲滅せねばならぬ敵と認識してるだけだっ！」

ドンツ！と言う効果音をバックに描きどや顔で言っただけ

「雪乃、アタシはこの牛と馴れ合う気はないから依頼の話は貴女に任せ私は飲み物を買うに行くか何が良いんだ？」

それと牛、まことに遺憾だが依頼人のお前の分も買ってきてやるから欲しいものを言え」

そう言っただけ二人のリクエスト聞いて八のベストプレイスで靴を脱ぎマツカンをちびちび飲んでると銀髪の美少女が声を掛けてきた

「あつ、君は… さつきはごめんね？ 身体大丈夫？ どこか痛いところはない？」

そう心配そうに聞かれてついうっかり

「誰だ？ お前… アタシのお友達帳には登録されてない美少女だな？ どのプロダクション所属だ？」

と、軽口を叩くと悲しそうな顔で

「僕、男の子なんだけどな…」

そう言われて

「知ってる、知っている上での暴言だからきにするな、だかそれが

嫌なら二度とアタシに関わるな… エンカウント率の低いレアキャラなんだからな、アタシは…

痛いところはないかってきいたよね？

今痛いのは頭だね、ピンクのコブがついた牛に話し掛けられたら…
あ、わりい… そう言えばあの牛はアンタのクラスメイトだったわ
仲良いかどうかは知らねえけどアンタも男の子だから… うん、嫌
いなわけないよな…

まあそんな事アタシにやなんの関係ない話だな…

ん、じゃアタシはもういくから縁があつたら又会おう…
そう言う」と

「もしよかったらなんだけど、君の名前とクラスを覚えてもらえたら嬉しいんだけどな…」

上目使いで聞いてくる彼に八ならイチコロだな… と思いつつ

「アタシに関わるなって言ったよね？ アンタが優しくして良い奴だからアタシが良いと判断したレベルまで話そう…

アタシはTS能力者、TS患者じゃなくてね…でも、その違いは部外者にはわからないだろう…場合によっては国家機密にさえなりかねない極秘事項なのだからね

TS患者自体数万人に一人って珍しい病気なのにアタシはその中でも更にレアなTS能力者、意思で変われる訳じゃないけどコロコロ性別が変わる化け物…

特にアタシみたいにTSした時に人格が変わる者は更に少なくホンの数例しかないって医者共は興奮してた

いや、アイツからしたらアタシという化け物にとり憑かれたと言わべきかもしれないって現状はアイツの身体を乗っ取っているとさえも言える

そして一番大切な事はアイツはナニも知らないって事… 医者や家族にもアイツにはナニも知らせないでほしいと頼みであるのだから…

だからこれ以上の介入詮索は止めて欲しい、アンタはアタシとゆー

寄生虫がいるとことだけでも十分すぎる程に迷惑を掛けているからこれ以上アイツを傷付けないで欲しい

多分アンタはアタシの本当の姿を知っている…はずだ、アンタがアイツに対してどんな感情を持つてるかは知らないけどね

だからさ… 頼むよ… お願いだから… もう悲しむアイツはみたくないんだよ…」

無意識の内に土下座で頼んでいた… アタシはいつの間にか泣いていた…

「そつか… そんな事情があつたんだね… 君と彼には…

彼と同じ憂いに満ちた瞳とチャームポイントのアホ毛からもしかして彼の妹さんかな？」

って、思つてただけど…まさかその本人だったなんてね… 今度はいつ彼と変わるの？」

そう優しく聞かれて

「わからない、今まではアイツが眠るとアタシが現れアイツが目覚めるとアタシが引つ込みそのたんびに変体してるからアイツの寝起きはすこぶる悪いし授業中の居眠りもそのせいだ

そして今、アタシ達のこの現状を知る学校関係者は平塚先生と保健室の養護の先生に雪ノ下雪乃の三人でアンタが四人目だ…」

そう言うと八が小町によくやつてるみたいにアタシの頭を撫でてくれて

「僕、君達と友達になれないかな？」

その思いがけない言葉に慌てたアタシは

「八とは友達に…あ…」

「やっぱり比企谷君だったんだね？」

失言に気付いて口をつぐむアタシに優しく聞く彼に

「そうだ… TSしてるアタシに妹は八重つて名付けてくれて八重お姉ちゃんつて呼んでくれるし…」

娘至上主義者のバカ親父は八には申し訳無いけど八の分まで可愛がってくれてる」

そう打ち明けると

「あ、あはは… 最後のはものすごく微妙だね？」

八重ちゃん… そう呼んで良い？」

そう聞かれたアタシは

「自分の存在を隠しているアタシがそう呼ばれて嫌な相手には名乗る義理はない、条件はくれぐれも他言無用で頼む… だ

少なくとも今回の件でいつまでも隠しきれないことを思い知らされたから…

これからの八とアタシの処遇がどうなるかわからないけど何らかの方法でアタシの口から八にこの事実を伝え詫びると共に一緒に考えたい…

少なくともこの手の展開の常套句で死んで償う事はできない

何故ならアタシの死は八の死だからなんの償いにもならないところか余計に迷惑掛けることになるのだから…

そう思ってるから最低でもアタシからちゃんと八に告げるまでは知られたくない

それはアタシの責任でありアタシの懺悔なのだから… じゃあ戸塚君、アタシは保護者の元に戻るからこれからは八と共におねがいするね、八も友達居ないから」

悪魔のように黒くえもいわれぬその味わいは…

そう言つて戸塚と別れて

(少し遅くなつちやたかな?)

そう思いながら部室に戻ると

― 調理実習室に來なさい

と、いかにも雪乃らしい達筆で書かれたメモが貼られてたからそれを剥がして調理実習室に行つたはずなのに…

「雪乃…ごめん、変な事聞くようで悪いんだけどここつて調理実習室だよね？」

アタシ、間違えて炭焼き工房に來ちやつのかと思つたよ、練炭術師さん…それ一体何なの？

もしかしてクツキーのつもり？ 調理台に並ぶ道具や材料から察するに…

でも、ハッキリ言つてやるけど自分が可愛いアタシは死にたくないから毒味は断固拒否するっ！

最低でも製造者のアンタが食つてからでなきや絶対に無理だからね？」

そうアタシに言われて恐る恐る口に運ぶと涙目で

「 苦い… 」

そう一言こぼすのを見て山菜などの毒味の要領で極微量の欠片を舌に乗せて溶かしてみると

エスプレッソより苦くマツカンを遥かに凌駕する甘さ… 舌がピリピリする程のこの刺激は一体どうしたら…

「 そもそも何でクツキー焼く氣になつたんだ？ 」
アタシが聞くと

「 ある男の子にお礼がしたくて… 」

ほほを染めもしもじしながらはさかずかしそうに言うのを聞いて

「 そうか、成る程…取り敢えずはぜろリア充っ！ 」

そう毒を吐いてやったら

「な、なんでだし？」

そんなおめでたいことを言ってくるから

「さっきの宣戦布告が聞こえなかったのか？なんなら明日白の手袋の左手袋を用意しても良いんだかな？」

と、そんな冗談はさておくとしてそう言う話ならとりあえず現状を知れ、優しいみんなの葉山くんならこれでも食べてくれるんじゃないのか？

アイツの靴箱に入れてみて確かめてみるよ？

なんならアタシが代わりに入れといてやるから今日はもう帰んなよ？アタシが可愛くラツピングしていれといてやるからさ

クツキーについてはまた明日にでも付き合っつてやるからさ」
そう言っつて調理場から追い出して雪乃と後片付けをしてると

「貴女、葉山隼人がアレを食べると思うの？」

と、わかりきったことを聞いてくるから

「100パー棄てるしさすがにこれを食べとは言わないけどどこに捨てるかによるんじゃないの？」

せめて校外に持ち出すくらいのおしよしさは見せるべきだろうけどあのエセ紳士は確実に玄関のゴミ箱に捨てるよ

皆の葉山くんの癖にさ…明日が楽しみだよそう言っつて調理場の片付けを終えるとアタシ達それぞれに家路を急いだ」

翌朝予想通りに葉山玄関のゴミ箱に捨てそれを見ていた由比ヶ浜が一日中落ち込んでいたのを知っているのは優しい戸塚が心配して

「今日は由比ヶ浜さんが一日中落ち込んで静かだったのはなんでかな？」

そんな事を言われてホントは訳を知ってるけどそれは守秘義務で言えないことであるのと戸塚が由比ヶ浜が心配してるのが気に入らなかつたアタシは

「知らない、アタシは由比ヶ浜の知り合いですらないしハチも認識すらしてない

アタシにとつてはせいぜい葉山グループの一人くらいでしかない

からね……

戸塚、そろそろ教室戻った方がいいよ？アタシも部室で自習してるから未だ八に戻って……いやなんでもない忘れて

それとこれ、アタシが昨日焼いたヤツなんだけど……迷惑だったらせめて学校の外で……アタシがいないとここで捨てて……」

昨日アレから家に帰ってから晩ご飯の支度ができなかつたお詫びにクッキーを焼いて小町と食べたんだ

勿論たくさん焼いて親父と母ちゃんの弁当と一緒に持たせたから皆と食べてくれてる……

いや、母ちゃんはともかく親父の事だから隠れて一人食べてる可能性は高いよな？

まあ葉山みたいに不味そうだからって送った相手が見てるかもしれない場所で捨てる訳じゃないからかもしれませんがな

そう言つて逃げ出すように駆すアタシは格好悪かった

その戸塚はと言えば、アタシがクッキーを渡してるところを見ていた材木座にやつかまれていたのはアタシの知らない話だ

② 復活のガハマさん

今日は特に依頼が無いから授業に出てないアタシ達を心配した雪乃が勉強を教えてください

因みに八はアタシが得た知識などの経験値は睡眠学習として獲得できると言う全く良いご身分である

しかしやはり学年一位は伊達じゃないな、頭脳面は八の劣化番であるアタシはかなり理解力が足りてないので今のままでは学年の中の上くらい

簡単に言ったら平均よりチョイ上くらいって所だからやつぱり早々に八に目を覚ましてもらわないと色々と面倒臭い事態になるんだろうな……

そう思つてたら

(この気配と足音と気配……)

「雪乃、牛が来たぞ…」

アタシがそう告げると一拍置いて

「ヤツハロー」

なんともアホっぽい挨拶をして来たが付き合ういわれはない

「牛よ、昨日も言っただけはいいがここは隣人部じゃないし小鷹も居ないから他を当たれ、それとお帰りはあちらだ」

そう言っただけで退室を促すと

「だからなんであたしが牛なんだしっ！」

と、煩いから

「ヒントはボクに友達は少ないと言うラノベを読め答えはすぐわかる、それと見てわからんか？アタシは有能な師の導きで勉強に忙しい静かにしろ

お前は私の敵だといったはずだが？」

そういう掛けてアゴに手を添え考え込み…

ニヤリと笑うと鞆から可愛くラツピングした包みをだして

「悪いが雪乃、タベあたしが焼いたクッキーだが是非味を見てほしいのだが…」

妹や両親は美味しいと言ってくれてくれるがやはり身びいきがあるから素直に受け取ってよいのかわからなくてな…」

アタシは内心由比ヶ浜んせせら笑いながら雪乃に渡すと中身を見た雪乃がホッと息を吐き

「生姜のクッキーね？」

そう言われて

「さすが雪乃だ匂いだけで気付いてくれるとはな、雪乃が淹れてくれる美味しい紅茶に合えば良いなと思って焼いたんだが…」

そう言っただけで感想を待っていると

「貴女の勉強もキリが良いからお茶にしましょう、せっかく貴女が紅茶に合うクッキーを持ってきてくれたのですからね…」

よろしければ由比ヶ浜さん、貴女ももご一緒にいかがかしら？」

そう言っただけで誘われた由比ヶ浜がアタシの顔を見ながら

「八重ちゃん… 私も一緒に良いの？」

そう聞いてきたから

「？、忘れたのか？ クッキー作りに付き合おうと言ったのを…
みんな仲良くと言いながら送り主が見てるかもしれないあの場で
平気で捨てるような葉山と一緒にするなっ！

そんな葉山隼人か一緒にお茶したいと言ってきたとしても雪乃が
どう取り成そうが断固拒否るがな」

それにどうせ呼ぶならアタシ的には他に呼んでほしい人がいる…

アタシは言葉に出来ない戸塚への気持ちが変わらずモヤモヤとし
ながらそれでも由比ヶ浜の馬鹿話をぼーっと聞き流していた

不審者の正体、それは厨二

③ 不審者の名は厨二で良いよな？

今日は戸塚と顔を合わせ難いアタシは昼休みにあの場所に行かなかった

今のところアタシと戸塚の唯一の接点はあそこだけだからあそこに行かなければ顔を合わせなくて済む： アタシ、ズルいな

放課後になる前にマツカンを買に行き部室に戻るとナゼか雪乃由比ヶ浜が部室の前で中の様子を伺っているから

「部室内に不審者が居るのよ：」

そう言われてアタシも中を覗くといかにも不審者にしか見えないヤツが居るから

「……………もしもし、警察ですか？ 学校内に不審者が：」

そうわざと中に居るヤツに聞こえる様に通報してるふりしてやつたら

「ま、ま、ま、待て我は不審者ではないから通報するのは：」
アタシのニセ通報にビビったヤツが部室から飛び出すのを見て

「してねえよ、だがどう見ても不審者にしか：」ム、ムムム
ムツ：主は戸塚氏にクツキーを渡していた少女ではないかっ！

アタシの言葉を遮ったその言葉を聞いたアタシは
「なるほど、ちよつと記憶消す必要がありそうだな：ナニ、大丈夫

だ： 安心しろ、痛いのはホンの一瞬の事だからな
しかもアタシは全く痛くもなんともないからなんの問題もない」

そう言っ指をわきわきさせながら脅しをかけていると
「この部屋に一体何のようかしら？」

そう雪乃が聞いたがこいつが女子：ましてや雪乃みたいな美少女と口が聞けるわけもないがなんとか頑張っ

「ここに我が盟友、比企谷八幡が居ると聞いてやってきたのだが
：」

そのウザい喋りと説明がめんどくさいから

「お前誰？　つかそのしゃべり方厨二かよ？」

そう言つてやると由比ヶ浜が

「八重ちゃん、その厨二つてなに？」
つて聞いてきたから

「厨二病の事」

「病気なの？」

「いや、少なくとも医者が直せる病気じゃないはず

アニメや漫画の世界に入り込みその世界観でキャラを演じる人：

あくまでも一例で色々タイプはあるけどアタシもそれほど造詣が深い訳じゃないからしらないからなんともね」

アタシがそう解説してやると

「ふーん、そうなんだ… え？　ヒツキーこの部に入ってるの？」

今の流れでヒツキーが八の事だつてわかるがあえて聞く

「は？　ヒツキーつてだれ？　アタシは雪乃以外の人間は見た事ないんだけど…」

アタシのその言葉を聞いて肩を震わせ笑つてるけど嘘話いつてないよね？　アタシが八を見るなんてドツペルゲンガーかなんかじゃん

「え？　ヒツキーはヒツキーじゃん」

「だから誰、宇多田ヒカル？　あの人くらいじゃないのヒツキーとか呼ばれて喜ぶの？」

アタシならヤだな…：そんな呼ばれかたは悪気なくてもなんか引きこもつてるみたいでさ」

そう、ある意味私はずつと引き込もつてたし八なんか閉じ込められた状態なんだからそのあだ名は全く洒落になつてない

「あたしそんなつもりは…」

「つもりがなければ許されるならセクハラ問題も減るだろうね？　そんなつもりはないで済む、済まされるんならさ…」

そうあたしが言うのと表情を引き締めた雪乃が

「そうね、色々な場面でよく使われる詭弁ね…：悪気がなくても許されない場合があるから言動に気を付けないと…」

貴女自身つい最近悪気がなくても心無い仕打ちで酷く傷付いたはずなのではなくて？」

そう言われて葉山にクツキーを捨てられたこと思い出し

「う、確かに…八重ちゃんも言ってたけどどっか私の知らないところで捨ててくれてたらよかつたのにつ…そう思ったらあれから隼人君の言葉が信じられなくなったよ」

そう力なく呟く由比ヶ浜だけど

「あ、あの私の願いは…」

すっかり空気と化して忘れ去られていた材木座がそう泣きそうにいうから

「厨二煩い、空気読めっ！ アタシと由比ヶ浜の二人の誤解が解けて友情の再確認（無いと判明）して和解すると感動シーンなんだぞ？」

そう調子の良いことをポロっといってしまうしまったけどもう遅い

瞳をキラキラさせた由比ヶ浜が

「八重ちゃん、あたしをやっと友達って認めてくれたんだね、嬉しいっ！」

そう言ってアタシの顔をぎゅっと抱きすくめられたアタシは窒息寸前になり雪乃が

「由比ヶ浜さん、八重さんはこの中で一番態度は大きいけど誰よりも小柄で華奢な子よ？ 取り扱いにはもつと気を遣ってほしいものだわ」

（…って、ナニそれ、小さな体に大きな態度っ♪ってヤツかよ？）
勿論そんな突っ込みはいれないけどそう注意を受けてしまった由比ヶ浜は

「え？ 取り扱いには… あ、うん… こめん…」

と、またしても空気の材木座に
「前置き要らんから用件をさっさと言えっ！」

何とか回復したアタシに何やら紙の束を渡して
「ウム、これは我が書いた小説なのだが読んでもらいできれば感

想も言ってもらいたいのだが…」

「そう言われてアタシは

「読む代わりにアタシ達の前ではそのキャラ禁止っ！後、超電磁砲（護身用のスタンガンの事）を喰らいたくなかったら戸塚の事は二度と口にするな

それが原因で数少ない友人の一人である戸塚に嫌われたらどうしてくれるんだよ？」

「…え、ナニ？由比ヶ浜、アタシは今材木に説教くれてやるのに忙しいんだけど？」

材木座のネクタイ根本を掴みながら由比ヶ浜に聞いたなら

「八重ちゃんって彩ちゃんの事好きなの？」

「そう言われたアタシのバックには見る者によつてはボンっ！と言う効果音と頭から湯気がたつていたのは間違いない

「なっ、な、な、な、ナニゆつてるの？アタシみたいなんがかっこワイイ戸塚の事を好きなんて言ったら戸塚が迷惑だろ？」

「そう言つてあせるアタシに

「いや、私の聞き違いでなければ戸塚氏は主の事を八重ちゃんと呼んでおつた筈だが？」

と、地雷を踏み抜きやがったから

「余程死にたいらしいな…誰がお前にその呼び方を許したよ？」

怒りと羞恥に震えるアタシに

「取り敢えず八重さんはそのニヤケきつた男から離れなさい」
「そう言われて材木座を見たら…」

（うわっ、マジキモいっ！そーいや八はコイツの事の事口リペドワナビーって思つてたっけ…）

「うわっ！」

思わず叫ぶと材木座を突き飛ばし… たつもりだけ重い材木座は微動だにせず、アタシはとにかく雪乃の後ろに逃げ込み

「我ながらナニやってるんだか…」
「そう呟いてから

「感想を言うの明日で良いな?!材木」

そう言って原稿を受け取ると最終下校時間までその原稿を読んで
過ぎした

できるだけ持ち帰る量を減らしたいからだ…たく、無駄に量が多い
ぞ材木座

ガハマ印

② その評価言葉にするまでもなく

午前中を保健室で保健の勉強をして過ごし、午後は奉仕部の部室で自習をして過ごしたアタシは例の場所の販売機でマツカンを買って部室に戻ると雪乃が机に突っ伏して居眠りをしていた

あれで徹夜はキツイよな…

そう思いながらマツカンちびちびやってると

「ヤツハローっ♪」

と、何度聞いてもアホっぽい挨拶をして入ってくる由比が浜…

『アホツダローっ！』

と、返したらどんな反応するのか興味はあるけど面倒臭いからそんなことは言わない、後うるさいし

「静かに、雪乃が寝てる… それと材木来てないからなんなら今の内に飲み物買ってきたら？」

そう声を掛けると

「じゃあちよつと行ってくるね」

そう言って出掛けていった

その後目を覚ました雪乃とジュースを買ってきた由比が浜と三人でお菓子をつまんで待つことに

なぜこうも遅かったのかよくわからないけどようやく現れた材木座がアタシ達のスコーンを羨ましそうに見てたから

「羨ましいかあ…、アタシの手作りスコーンっ♪」

そう言って最後の一個を食べてから

「残念ながら今のが最後の一個だったがどうしても欲しかったらこれをやろう」

そう言って特製クッキーを渡した

そうガハマ印の練炭クッキーを…

ナニも知らない材木座が大喜びで掻き込み

「……」 チーン…

「それがお前の原稿に対する感想だ、あんなもの読ませやがって
」
アタシがそう言い捨てるのと苦笑いの由比ヶ浜と溜飲を下げたらし
い雪ノ下

「さ、雪乃と一緒に過ごす時間が減るのシヤクだけど夕べは誰か
のせいで無為な事に貴重な睡眠時間をとられちゃったから今日は早
めに終わりにしよ？」

そう言つて三人がかりで材木座を部室から放り出し帰ろうとした
ら

「遊びに行こうよゆきのんと八重ちゃーんっ♪」

そう甘えるようにゆーのは良いけどアタシを縫いぐるみか何かみ
たく抱き抱えるのは止める、由比が浜

見る雪乃がご機嫌斜めじゃん？ つて思つてたら
溜め息をひとつ吐いて

「八重さんの言う通に早く帰つて身体を休めるのも良いけど今日
は金曜ですから気分転換に出掛けるのも悪くないかもしれないわね
？」

それとも八重さんは私達とは出掛けられない？」

雪乃がそう言つてアタシを見ると

「そっだよ八重ちゃん、彩ちゃんと同じやなきや嫌なの？」

そう声を荒げて言うから

「前にも言ったと思うけど戸塚とはそんな仲じゃないし学校の外
で会つたこと一度も無いよ、登下校中も含めてね…」

でも怖い： わからない： アタシなんか： 許されない：！
アタシは咎人： なんだから普通を求めちゃダメなんだ： アイツ
を苦しめてるアタシなんか： 「

そうぶつぶつ呟くアタシに

「（もくつ、そんな難しく考えないでせ楽しもーよおくつ！）」

そう言つてアタシの左腕を抱き込み拉致する由比ヶ浜と呆れなが
らもアタシ達の後ろをついてくる雪乃

アタシが初めて学校（部室） ↓ 家以外のルート始めて

選択とゆーか取らされた瞬間だった
恐るべしガハマさん

③ 奉仕部の放課後

そんな感じ構内を出たのは良いんだけどさ… ガハマさんよ

「どこ行く？」

ってそれなんだよ？ だからアタシはハッキリ言っただけだよ

「アタシは寄り道する予定無いからいつもジューズ代くらいしか現金持ち合わせてないんだけど？」

それに、こんな風に遊び行く経験なんて今までなかったから聞かれても困るんだよね」

とも…

八もあまり寄り道するヤツじゃないからそれほど熱心に観察してた訳じゃないしな…

そんな事をぼんやり考えながら歩いてたら

「さっきから気になったんだけどそのアニマルリュックが八重ちゃんカバン？荷物それだけなの？」

お化粧道具もろくに入らないよね？そのサイズじゃ？」

お弁当に水筒、おやつ持参を知ってる結衣がそう言うから

「は？化粧品… っってそんな校則違反じゃないん？つかメンドイし化粧品の臭いって嫌いなんだけど？」

そう露骨に嫌そうな顔をして答えると

「妹さんは何も言わないの？」

そう、雪乃に痛いところを突かれたアタシは何も答えずにパイッと横を向くと溜め息を吐かれて

「言われてる… でもメンドイ（アタシ一人の体じゃないんだし…）」

そうぶつぶつ言い訳する私に

「…取り敢えず無香料タイプの制汗剤と薬用リップなら妥協できる

でしょ？」

口をへの字に曲げたアタシが

「ヤダ、一度妥協したら終わりだ… アタシは徹底抗戦するっ！」

そう勇ましく宣言しながらも

「あつ、この薬用リップは彩ちゃんが寒い時季使ってたメーカーなのだ、制汗剤も練習後に使ってるのと同じのだし」

そう言われて

「…そうか由比ヶ浜、貴重な情報に感謝する」

そう言って会計を済ませるとジト目で睨む雪乃に

「雪乃どうかした？」

そう言われて溜め息を吐いた雪乃は

「別に何も… 貴女、ホントにその戸塚君の事が好きなのね？」

そう言われてアタシは

「八の記憶の中には妹の小町以外の人間に好意を向けたことがないからアタシも雪乃をちゃんと知るまでは誰かを好きになった事が…

特に元が元だけに男に対して好意的な目で見れる日が来るなんて思っても見なかった…

でもそれが由比ヶ浜がゆー意味で戸塚の事が好きなのか？

って、そう考えたら自分でもわからないし怖い深くから考えたくない…

それが今のアタシの正直な気持ち」

自分でも理解できない戸塚に対する感情に戸惑うアタシに

「そう、その答えは焦って出さなくても良いと思うわ… (色々

な意味において未成熟な貴女はね)」

そう雪乃に心配されているのは勿論私を知るよしもなかった

その後雪乃の勧めでパンさん関連のグッズを買いアタシのアニマルリュックがくたびれてると言ってパンさんのリュックを買ってくれた雪乃に感謝

そしてフードコートでハンバーガーを食べてから各々の家路にいったんだ

テニスの王子様と薄っぺらな王様… その① 自称
奉仕部員のガハマさん

① 彩加と再会… ダジャレじゃないし

クッキーを渡したあの日以来、戸塚と顔を合わせるのが気まずく昼休みとか戸塚と遭遇する可能性のある時間帯はあの場所には近寄らないようにしていたのに何でこうなった？

戸塚が教室に近付く気配をいち早く察知したアタシが窓から逃げ出そうとしたら錯乱したアタシが窓から飛び降りようとしてると勘違いした雪乃に引き留められてる内に由比ヶ浜に案内されてきた

彩加の顔を見ても諦めの悪いアタシは

「雪乃、ちよつとお花摘に行きたいんだけど放してもらえませんか？」

「そうお伺いをたてたけど」

「先程マツカンを買いがてら行ってきたはずではなかったかしら？」

「そう言われてジュースを買いに行くと言う作戦も事前に封じられてしまった…」

諦めて一言だけ

「一応言っておくけどね、雪乃… 三階の窓から飛び降りても平気だからね?!猫並みに身の軽いアタシにはそれくらい楽勝なんだからさ… 筋力は乏しいけど」

「そう言つて雪乃と共に椅子に座り」

「で、由比ヶ浜は何しにきたの？」

「そう聞いたら大いなる夢と希望の詰まったあれを反らして」

「部員として相談者を連れてきたんだよっ♪」
と、訳のわからないこと…いや意味はちゃんとわかるよ？由比ヶ浜じゃないんだからそれくらいはさ
ただ… そう、問題があるとするならば

「雪乃、アタシの聞き間違いじゃないきゃ由比ヶ浜が部員だつて聞

こえたんだけどそんな話し聞いてないんだけど？」

そう言ったら雪乃も

「奇遇ね、私もそう聞こえたのだけど彼女から入部届けを受け取ってなければ平塚先生からもそのような話しは伺ってないわ

私は由比ヶ浜さんは八重さんの所に遊びに来ていたのだと思っていたのだけど違ったみたいね？」

そう二人に言われて焦った由比ヶ浜が

「書くよ書く書く、何枚でも書くからあたしも奉仕部にいれてよっ！」

そう言ってカバンからルーズリーフを取り出して

ーにゆーぶとどけー

（ ってそれくらい漢字で書けよ？ ホントに総武の生徒か？ アタシも書類上は在籍してないけどな ）

そう思いながら雪乃を見たらいつもの頭いたポーズをとってるし戸塚はそんなアタシ等の一連のやり取りを優しい笑顔で見ている

由比ヶ浜が入部届けを平塚先生に出しに行くのを見送り

「では貴方が依頼人で間違いありませんね？ 貴女の名前と所属クラスを教えてください」

そう雪乃が聞くと

「由比ヶ浜さんと同じ2ーFの戸塚彩加、テニス部所属です」

そう言われて驚いた雪乃がアタシの顔を見たけど勿論そらしているけど

「あの、雪ノ下さん… 僕に何か問題でも？」

そう聞かれた雪乃が戸塚に視線を戻し

「失礼を承知で言いますが貴方が男性であることに驚いたのと部員の八重さんが以前に貴方の事をカッコカワイイ戸塚… そう言っていたのを思い出しただけです」

そんな事を言われて顔を赤くしてアタシを見る戸塚と益々戸塚に視線は向けられないし身の置き所の無いアタシアタシは小さな体を益々縮こまらせていた

アタシのその様子を見て溜め息吐いた雪乃が戸塚を見ると

「由比ヶ浜さんは知らないみたいだけど、雪ノ下さんは聞いてるんですよね？ 八重ちゃんからそう聞いてます」

そう話し始める戸塚に

「そうよ、それがどうかしたのかしら？」

そう挑むように言う雪乃に対し戸塚は

「ううん、どうもしないよ：ただ、雪ノ下さんの様子見て八重ちゃんが大事にされてるのを見てホツとした：って感じかな？」

そう面と向かって言われてさすがの雪乃も暫くは沈黙していたけど

「そろそろ依頼の話に移っていただいても良いかしら？」

雪乃に言われた戸塚がテニス部の現状と戸塚の希望を話してくれた

「つまり自分の実力が上がれば向上心の乏しい他の部員だつてやる気を出すんじゃないか：と、言うわけね？」

八重さんはどうこのについて依頼思うのかしら？」

そう聞かれたから

「雪乃の言う通りに、最初の戸塚の依頼はアタシ達の手には負えないし最悪顧問間のいさかいにまで発展しかねないから受けられないよね？」

少なくともアタシはテニスの経験は壁打ちとサーブの練習くらいしかしたことないからさ」

そうアタシに言われて肩を落とす戸塚に

「戸塚の強化が部員のやる気に繋がるかもわからないけど戸塚の強化策についてはアドバイスとゆーか提案はあるけど聞いてみる？」

「

そう聞いたら

「言ってみてよ、今は藁にもすがり付きたい気持ちなんだからね？」

そう戸塚が答えたから

「ん、わかった：でも、その前に一言言っておくけど藁にすがつたって助からないからね？」

そうアタシが言えば雪乃も

「そうね、あれは元々は溺れる者は藁をも掴むですがり付くものではないしそれで助かろうと思つて掴むわけではないのよ?」

そう説明したらちようど戻つてきた由比ヶ浜が

「え、そうなの? あたしはてつきり藁に当たりがあつて当たりを引いたら助かるんだつて思つてたんだけど違つてた?」

そう言つて首をコテンと倒す由比ヶ浜を見てアタシは千葉の…ひいてはこの国の入試制度の抜本的な見直しを求めたくなつてしまつたが

「由比ヶ浜、それに関しては後日ユキペディアで調べてくれよ?

いまは戸塚の話を進めたい」

そう言つて雪乃と顔を見合せ溜め息を吐いたのは仕方無いと思う
： 戸塚も苦笑いしてるし

「戸塚のプレイスタイルは見たこと無いから知らないけど昼休みの壁打ちを見て言えるのは経験値、スタミナ、筋力の不足かな?」

でも、経験値は女子でしかも素人のアタシ達じゃどうにもならないし短期間で何とかできる問題でもないのはわかるよね?

それはスタミナ、筋力もそうだけど中、長期的に取り組む気があるなら雪乃が運動力学を考慮した有効的なトレーニング方を提案できるけどどうする?

ただし、それについてはアタシ達は提案するだけで決めるのは戸塚自身なんだけど?」

そう問い掛けると

「雪ノ下さんお願い出来ますか?」

そう言つて戸塚が頭を下げると

『了解したわ、その件については早急にプランニングしますので任せなさい』

そう力強く言つてくれる雪乃が頼もしかった

テニスの王子様と薄っぺらな王様… 戸塚強化計画

② 天使の羽で

「スタミナ増強、筋力アップは自主トレでもらいアタシ達が付き合うトレーニング内容を話す前にプレイスタイルの見直しは受け入れられる？」

これについてもやっぱり押し付ける訳にはいかないから聞いておきたいんだけどどうかな?！」

そうアタシが聞くと

「そうした方が良いならそうするしまだこれが僕のプレイスタイルだっと思えるほど固まってもいないからね?。」

と、言う答えをもらい

「さっきの問題点が克服されてきたらとれる戦術も増えるけど今の戸塚にお勧めするのは打ち合いをしない、だよ。」

そう言ったら多分力強いラリーの応酬をイメージしていたのだろう戸塚には通じなかったようで

「つまり相手に強打させないテニスをしなさいってことね?。」

そう雪乃が解説してくれたので

「確かにベースラインでの迫力のあるラリーの応酬に憧れるのはわかるけどまともに打ち合ってたらず々のテクニックじゃ最終的にスタミナ切れになるよ?。」

そうアタシが言ったら

「う、うん… 試合でスタミナ不足を感じるかな?。」

そう言っとうつつ向く戸塚に

「だからこそその提案なんだよ、戸塚

筋力やスタミナなんてちよこちよこつとやって簡単に身に付くものじゃないよね?。」

そこでまず先に身に着けて欲しいのがサーブのコントロールとキックサーブとスライスサーブのマスター

サービスゲームを落とさないって事は勝つためには必須でしょ?。」

サービスエース狙いは勿論リターンエースなんか決められちゃダメだよ？」

そうアタシが言うと

「それができればサービスゲームの主導権は握れそうね？」

と、またしてもユキペディアさんの解説が入り

「そして強力な武器を手に入れたらダッシュしてボレー攻撃」

「サーブ&ボレーね？」

そう間髪入れずに雪乃が答え

「打ち合いにさせない為の速攻で、別に打ち合いをしないと云っても消極的な戦術をとれて訳じゃないんだよ？」

そう、ゆーなれば攻撃は最大の防御ってやつだよ」

と、言うアタシに合わせて

「迫力と言うよりは決まれば鮮やかと言われる戦術ね？」

そう捕捉してくれたから

「後は勇気を出してネットを制しムダに走り回らないようになりとどめのストップザボレーとロブ」

「ベースラインに居るときはストップボレーで前に出ようとしたらロブで追い返すってわけね？」

雪乃言葉に頷き

「勿論、これらを完璧にマスターするのは容易じゃないけどサーブ & ボレーを確立するだけでもサービスゲームをとれる確率は

ぐんと上がると思うよ？」

そう言つて締め括ると

「じゃあまずはサーブの練習とサイドステップを強化の為の練習すれば良いのかな？」

そう聞かれたから

「後は… ループスイングの取り入れかな？ 戸塚はテイクバックはストレート派だよ？ 何で？」

そう聞いたら

「戻りが早いから… かな？」

そう答える戸塚に

「そんなに違うかな？それにソフトボール何か良い例だよな？」

アタシソフトボールに詳しくないけどソフトボールのピッチャーの投球フォームも言わばループスイングなんじゃないのかな？」

「私もそれほど詳しくはないけど打球を早くするにはテイクバックを大きくしろと言われるのだから間違いではないしスピンの効いたボールは相手もてこずるはずよ？」

雪乃にそう言ってもらい

「どうか、アタシの提案？ 勿論これで戸塚が求める強さが手に入るかはわからないよ？」

だからアタシにできるのはあくまでも提案だしいかなる方法をとろうとも最終的には戸塚が頑張るしかないんだよ」

そう言つて今度こそ本当に言葉を区切ると

「わかった、八重ちゃんの言った事は大体僕の悩みに一致してるからプレイスタイルを変えてみるよ」

そう答えが返ってきたから

「練習はいつから？時間帯は？期間はどれくらいの予定？」

アタシがそう聞いたら放課後は部活の練習があるからお昼休みにとの事

「なら明日のお昼にはトレーニングプランをたてておきます、それでよろしいですね？」

そう戸塚に問い掛けると

「はい、それをお願いします」

そう言つて頭を下げると練習に戻つていったがなせか由比が浜が一人で興奮していたが気にしないで

「あーっ、そーいやラケットどーしよーかな？ 今持つてるの貰い物でグリップ太いから扱い難いんだよね…」

そうぼやいて頭を搔いてたら

「私が今はもう使かわないラケットがあるから今日の帰りにでも見にいらっしやる？」

雪乃のその美味しい提案に

「あーっ、八重ちゃんばっかしずるいあたしもゆきのんのお家に行きたいっ！」

（って何で家に行くのが主目的なんだよ？）

そう思ってた

テニスの王子様と薄っぺらな王様… 裸の王様と
キャバの女王の乱入

初日、フリーダムなアタシは一足先にお弁当を食べ柔軟体操と軽くサーブの練習で体を暖めて待つことに

その後はループスイングでの壁打ちは体格から考えるとかなり鋭いなと感じながらやはり八に比べたら数段落ちるのはやむを得なかった

戸塚のウォーミングアップが終わりまずは軽くアタシのサーブを受けてもらうことにして… 第一球目

コーナー結構良いとこ決まったけどアタシの球速じゃ簡単に返されたけどアタシのサーブを返せないんじゃないからな… とは、言えっ！

「甘いっ！」

そう叫ぶと共にネットに詰めていた私が逆サイドにボレーを決めると

「八重ちゃんスゴいっ！」

と、大興奮の由比ヶ浜が理解できない

第二球目はスライスサーブか決まりサービスエースだけどちゃんとネットに詰めている

第三球目はフォームが変わり警戒はしたけど戸塚の予想を超える変化に何とか返したけどやっぱりボレーの餌食

そして第四球目は先程と同じフォームからフラットサーブで裏をかかれた戸塚はやっぱりボレーの餌食になりゲーム終了

「戸塚、アタシのサーブ & ボレーはどうだった?!」

笑いながら話し掛けると

「そつのないコンビネーションとスライスサーブのフォームから打つフラットサーブに同じくキツクサーブのフォームから打つフ

ラットサーブ： 全く見分けがつかなかったよ」
苦笑いで言う戸塚に

「あはは、あれはちよつとね… ある意味詐欺なんだよね… と、
ゆるかアタシは狼少年っていつ言ってるんだけたどね」

そう言ったら雪乃が

「それはいいえて妙なネーミングセンスね？」

そう雪乃が笑って言う

「あ、もしかして…」

どうやら戸塚も気付いたらしいから

「そう、アタシはフラットサーブはただの一度も打ってない…
と、言うか本来アタシくらいスピードでフラットサーブって呼ぶこ
と自体おこがましいんだけどようはミスサーブ

特にキックサーブの後のサーブは警戒し過ぎでただの棒玉にまで
反応できなかったんなよね？」

そう言ってアタシに笑われて赤くなって

「そんな風に種を明かされるとなんかスゴく恥ずかしいね？」

そう笑っているときまだ理解できてない由比ヶ浜が

「え、え？どーゆーこと？」

と、言って頭から煙が出るよ… そう思っただけで説明しようとしたら
「八重さんは戸塚さんにサーブの指導をなさい、由比ヶ浜さん
は私から説明しますからね？」

そう言われて前半はサーブの練習に後半は何処からともなく現れ
た材木座が球拾い担当でボレーの練習と単調な練習を繰り返した

依頼二日目

サーブとボレーの練習を組み合わせたサーブ&ボレーの練習に移
行地味にダッシュを繰り返す練習にも根を上げない彩加を応援した
い

依頼三日目

ボレーにこちらの指示でストップザボレーを織り混ぜさせるのは

咄嗟の状況判断で動けるのが望ましいから

依頼四日目（金）

戸塚にサーブの自習をしてもらい雪乃と連休中の打ち合わせをしていた

そしてマツカンを買ってからコートに入ると…

「なーんで昼間の学校にキャバ嬢とチャライホストが居るのかなあ〜っ？」

そう言つてやったら

「ふん、小学生のガキがほぎくなっ！」

「わっ、出ましたあーっ！ 若さを妬むおばはんの決まり文句っ♪ おばさん、フアンデーションが汗で流れてるぴおくんっ♪」

と、吠えるキャバ嬢をおちよくりまくるアタシ

「アンタ、あーしにケンカ売ってるの？」

そう言わせておきながら

「学校内での無許可の営業は禁止されていますからお売りすることはできませんえ〜んっ♪」

因みにケンカになった場合恥をかくのはあんただからな？ 人を

ガキ扱いしといて対等なんかよ？

アタシをガキ扱いするならアンタも大人の振る舞いをしなよ、厚化粧のお・ば・んっ！」

そう言つてやったら周りも苦笑してたが金髪ドリルに睨まれ黙り混んだ

それを見てそれまで黙っていた金髪のチャライホストが

「まあまあ、そんなケンカ腰にならずみんな仲良く…「バカじゃなのいの？ アタシは無法者をおちよくってるだけでケンカ腰に見えるんだ？」

戸塚が言ったはずだ練習中だつてな、小さい声だけど戸塚なりに精一の声はでな

確かにテニス部以外の人間も居るがアタシ等奉仕部は正式な協力者として平塚先生を通してテニス部と連名でコートを借りてる

言わば正式な部活中のこの場に無断で入り込んできて遊ばせろだ？

なら、明日にでもフットサルのボール持って遊び行ってやるから喜べ、アタシの華麗なる超次元サッカーを見せてやんからよ？」

そう言っただけならパシリのチャラが鼻で笑いやがったから行儀悪いがテニスボールを浮かせて：

「フ・ア・イ・ヤ・ト・ル・ネ・ードっ！」

必殺のシュートが炸裂して鼻っ柱にぶつけて

「これがアタシの超次元サッカーだ、普通にサッカーしたら接触プレーで当たり負けするけどこれくらいのは芸当はできんだよ

逆にオメーができんのかよ？ 本職のサッカー部さんよっ！」

そう言っただけで鼻で笑い返すと

「ちっ、アンタの言う事に一理も二理も有るし：ここで手え出したらダツセーにも程があらあ

それによ、アンタをフットサル誘えたら仲間が大喜びそうだよべーしょ？」

そう言ってくれたから

「そうか、いきなりボールをぶつけて悪かったな」

そう言っただけで頭を下げると

「あーしにも謝れし「お前が戸塚に練習じやましてご免なさいって謝ったらなっ！」

そう言っただけで

「何でそんな事をアンタに言われなきゃなんないんかわけわかんないんだけどおーっ？」

と、アタシをバカにしてるつもりだろーけど

「お前バカなの？ それとも難聴系ヒロイン？ アタシは戸塚にテニスの練習に付き合っただけってほしいって頼まれてるって言われてるのも理解できないわけ？」

そう言っただけで嘲笑っただけ

「ならテニスで決着つけるってのはどうかな？ それでお互い恨みっこなしってことで」

こいつ、理不尽極まりないな…

「断るアタシ等にメリット」「やるよ、自分の大切な場所はやっぱり自分で守らなきゃ…」

そう言ってきた戸塚に

「ん、戸塚がそう言うならアタシもいい加減腹に据えかねてるし

… ただし試合中の怪我は自己責任だからなっ！」

そう金髪ホストに言い捨てやった

テニスの王子様と薄っぺらな王様… ドツキリテク
スチャーな葉山隼人

はつきり言っアタシを小バカにしてるのがまるわかりな三流ホ
ストに向かい

「で、アンタがそれ言ってきたってことはミックスタダブルスって
事なんだな？ なら時間もそうないからスリーゲームマッチ、先にス
リーゲーム取った方が勝ちで良いよな？」

「ルールは？俺はダブルスの経験はないんだが？」
そんな事を言うから

「安心しろ、アタシはシングルスすら経験無いから知識はあつて
も実践でちゃんと対応できる自信がないからな、ただの打ち合いでよ
かろう？」

（もつともまともに打ち合ってる気はないしお前らには戸塚
の丁度良い踏み台になってもらおうつかアタシと戸塚に踏み荒らされ
ろ、バカ共がっ！）」

黒笑みを浮かべながらそう思うアタシ

「戸塚、テニスの腕はともかく身体能力は戸塚に分の悪いあの男
は実戦練習が欲しい今の戸塚にピッタリな練習相手だからネット際
の攻防を体感してくれ、アタシがサーブとレシーブで相手を切り崩
す」

そう戸塚に言っ

「体格差のハンデにコートの選択とサーブをこちらからくらは
要求してもバチは当たらないよな？」

アタシがそう言ったら

「勝手にしろっ！」
だってさ…

と、言う訳でキャバ嬢とホスト × アタシと戸塚のミックスタブ
ルスが始まったが一連のやり取り

そして絵面的に小中学生苛めてるようにも見えるし何より三浦嫌

いがここにきて表れてるのでホストの客たちも一部を除きノリが悪い

別にそんな事はどうでも良い事でアタシかサーブを打つのは見てレシーバーはキャバ嬢、ホストが前衛の布陣をとる

試合が始まりアタシがツイストを踊る

きれいに決まったサーブは大きく弾みキャバ嬢の顔を襲い小さく悲鳴をあげて尻餅を着くのを見てアンチ三浦派が失笑するが

「君も女性なら自分の顔を狙われたらとは思わないのか?!?」
そんなトロい事ゆーから

「雪乃と戸塚はアタシのフォームからキックサーブを打ったのはわかっていたし経験者らしいその女もわかるはずなのにアタシの事を見下す事しかしてない

だから、そんな簡単な事を見落として予測をする事すらもできずに無警戒にボールに突っ込んだその女自己責任だろうか?」

そう言っっちゃったら

「隼人は黙ってるし、今度はアタシがあの子をギャフンと言わせてやるっ!」

そう言っただけど残念だったな? 逆にまたアタシがギャフンと言わせてやんよ

セカンドサーブはミスサーブにも関わらずにさっきの今じや意思に反して身体が反応できる訳なくあっさりトサーブミス

サーブは、スライスサーブに切り替えて思い切りスライスした: そう、対戦相手の二人を斬る位の気迫でな

それなのに、未だにアタシを見下しているキャバ嬢にはアタシの気迫のスライスサーブに対応できるわけなく気付いた時にはボールに逃げられていた

三連続サーブミスに退けフォースサーブはスライスサーブのスピンの速度が更に増しているのにそれを考慮しないから今度はちやんとラケットで捉えながらもまともに返せずレシーブミス

何様のつもりかは知らないけど: 第一ゲームの結果は、アタシのサーブに手も足も出ずに終わったからアンチ三浦がせせら笑って

る

本人もそれがわかっていているからさらにカツカして冷静さを失っているのに、ナンのフォローもしない葉山隼人は例えてゆーならドッキリテクスチャーだな

後日、アタシが葉山隼人をそう評したらその意味が通じる陽乃さんと材木が大爆笑したとだけ言っておこう

が、まあ中途半端な言葉に耳を貸すタマでもないからなゆーだけムダかも知れないが： 詰まるところ、アイツ等の繋がりが関係はその程度に過ぎないって事

仲間の言葉に耳を貸せないお前らって、本当に友達ナノか？

ってか、お前らリア充がゆー友達とか仲間ってその程度の繋がりが：存在って事か？

第二ゲームのサーバーはキャバ嬢にレシーバーはアタシで速い球足で威力はありそうだけど逆上してるからコースは甘い

イヤ、甘いのはコースだけじゃないんだらうけどな

ループスイングでパワーを乗せしつかりスピンをかけてキャバ嬢の逆サイドを狙うが初めてスピンボールを受けるらしいホストはスピンボールに弾かれ浮き球になり戸塚が鮮やかにボレーを決める

多分サーブに自信が有ったんだらう、それをあつさりと返されアタマに血が上ったキャバ嬢は更に力んで棒玉になったのを見てネットに背を向け：

振り返りながらその回転から生まれる遠心力をボールに叩きつける

「ハンマースローイングショットっ！」

そう叫ぶ材木が正直五月蠅いが、アタシと材木は友達じゃないから塩味な関係で十分とゆーか塩をかけたら縮んでくれると有り難いんだが

体育である程度見ている戸塚と違い全く情報のないアタシの予想以上のリターンにホストが対応できるわけなくリターンエース

続くキャバ嬢のサーブもなんなくリターンしたらさすがに今度は

きつちりかつちりと返してきたけど連携のなっていないペアとは違い待ち構えていた戸塚のボレーの餌食に

次を落とせばブレイクゲームって状況に追い込まれてやっと冷静さを取り戻したけど時既に遅しでキャバ嬢のサーブに鋭さが出てきたけど帰宅部で遊んでたブランクは大きく…（多分な）本人が思うような威力はないからあっさりとりターン

もちろん、ホストも返してきたし彩加のボレーの餌食っ！…には残念ながらもならなかったけど浮き玉が返ってきてチャンスボールに向かつて翔びながら

「こんなこともあるーかと♪」

そう陽気に言ったら

「ムッ、李・紅蘭っ！」

材木ウザいと思いつつながら全身のバネをしならせ一気に爆発させる

ーハゼロ、リア充っ！ー

と、呪文っぽく叫んだら

「な、なんだと？ 女王蜂（クインビー） ダイナマイトだとっ!」

（…ってオイオイ、お前もこのネタ知ってるのかよ？ 材木）

と、アタシがのんきに思ってたけどアタシが解き放った女王蜂の襲来を受けるホストはまたしてもラケットを弾かれ浮き球は戸塚に返されブレイクゲーム

そして小休止になり材木が喜んでパシリになり…（アタシは

材木なんぞに貸しは作りたくないから遺憾なんだよな）スポーツドリンクを買ってきてくれた

僅かではあるけど休憩を挟み、彩加のサーブでゲーム再開

球威自体は未だ、さほど上がった訳じゃないけど逆に言えばコントロール重視にしても落ちてないんだから総合的に見たら確実にパワーアップしている戸塚

その戸塚がこの三日間、アタシのサーブを受けながら自分で考えてきたサーブを試すときがきた

相手はこー言っちゃナンだがこの総武のテニス部ならレギュラー

になれそうな男だから今の彩加にはこれ以上の練習台はない

遠慮は要らん、使い潰せ

戸塚のサーブはホストからエースを奪うには至らないけど、ホストが持つ戸塚のデータを修正させる位には驚かせ…

甘い囁きならぬ甘いリターンを又してもパクリ技のクロコダイルバイブレーションで返してホストはなんとかダブルハンドで返すが腕にダメージを与え続けた

第三ゲームは一進一退の攻防になりその迫力に息を呑むギヤラリーけどアドバンテージを奪いついに決着の時を迎えたアタシ達の闘い

本気の闘い、それが戸塚を練習以上にパワーアップしてくれていてこれまで以上に鋭さが増した戸塚のサーブ

それに負けじと返すホストにアタシも微妙に甘いリターンを思い切り沈み込んでハイジャンプ

「ウルトラループスイングっ！ （八重バージョン）」
って材木マジにウザい

アタシのスマッシュをよせば良いのに十字ブロックで返したけど完全に棒玉

そして風を感じたアタシはどこかで聞いたフレーズを思いだし力ないボールを思いきり掬い上げ叫んだ

「青春のバカヤローっ！」
と、叫びながら空を見上げた…

今のアタシのリターンが決定打になったららしいホストは右腕を抱え踞っているからボールを追い掛けるのはキャバ嬢だけど

（残念だったな？…この時間帯空がから風向きが変わるんだよ、海風から浜風にな）

そのアタシの思いに答えるように風向きが変わりボールは沖に向かう風に流されていくが周りも見え無いキャバ嬢がフェンスに向かってる事にホストが気付き立ち上がると激突をなんとか直前に回避

ボールは二人の足元に転がりアタシ等の完全勝利

敗北を認めた二人が握手を求めにきたけどアタシはそれに応えられない

戸塚に雪乃が気付いて駆け寄りそれで気付いた由比ヶ浜と材木に戸部も集まってきたなか

「貴女まさか…」

その眩きに気付き

「何、雪ノ下さんは心当たりあんの？」

そう聞いてきた三浦の耳元で

「辛いとは思うけど多分あれだから保健室で休ませてあげるくらいしか私達にできることはないわね」

そう言われて

「こりゃ相当重いね…」

と、眩き

「姫菜と結衣はふたりでこの子を保健室に連れてって休ませな」

そう言われて二人はピンときたけど

「それなら俺か戸部が…」何で雪ノ下さんがあーしにだけ小声で言ったのか… それくらい察しろし… 隼人」

そう言われて

「す、すまない…」

と、慌てて頭を下げたが他の男子達は気付かなかった

そして制服に着替えた三浦が保健室で見たのは不器用に生理用具を扱うアタシで

「何、その不器用さ… いくらなんでもあーし等の年で初めてな訳ないっしょ？」

そう言われて

「確かに普通ならね… でも…（話して良い？ の視線に気付いて頷くと雪乃も頷き返し）」

この子の名は比企谷八重、比企谷八幡と言う男子生徒がTSした姿よ」

そう言うのと鵜飼先生も頷いたけど

「ゆ… 雪ノ下さん、それ本気で言ってるの？」

三浦にそう聞かれた雪乃は

「そうね、私もこんな風に話だけを聞いたら貴女と同じ反応をす
ると思うわ… と、言うか実際にTSしてるのを目の前で見ていたの
に時々あれは夢だったんじゃないのかしらって思うんですもの

だから見てない人が理解できないのは当然だけど残念ながら医学
的にもそれは証明され定期的にも医者にかかったたそうよ？

詳しい話を聞きたかったら放課後奉仕部に来なさい、そろそろお昼
休みも終わるわ

鵜飼先生、八重さんをお願いします」

そう言われて

「任せなさい、それより急がなくても…ほら、予鈴が鳴りましたよ
？」

そう言われて教室に向かう姿を鵜飼先生とまるでスタンドの様に
アタシの枕元に立つ八が四人を見送っていた

テニスの王子様と薄っぺらな王様… 闘い、その先に見えたモノ

③ 終戦

奉仕部の部室に集まったのは由比ヶ浜に数少ない事情を知る者の一人の戸塚、何だかんだとアタシの周りを彷徨く材木、三浦に姫菜、葉山は右足右腕を痛め病院行っており他の三人の男子は部活中

因みにテニス部は今日の勝負を見た者や噂を聞いた者達の入部希望者の対応に追われパニック状態らしいが寝てるのはアタシの知らない話

「T S病って時々ニュースで聞くけどよくわからないから何だか教えろし！」

そう聞かれた雪乃が

「T S病、トランスセクシャル… つまり性別が変わることを指して魚類等には環境の変化で当たり前前に起こる現象だけど人間の場合何万から十数万に一人

しかも生命には関わらないものの治療困難な難病とされてるけど比企谷八幡が患っているのはその中でも珍しい通称T S能力者でさらに厄介な事に二重人格者

だから比企谷八幡は八重さんの存在は知らず夢遊病を患っていると知らされているそうよ

個人差はあるけど文献によれば過去には自在に性別を変えたとされる伝説の人もいてT S能力と呼ばれる所以らしいんだけど比企谷八幡の場合彼が眠ると八重さんが目覚めると言う二重生活を送っていたそうよ」

そう言って用意しておいたお茶で口を湿らせてから

「因みに八重さんの様にT S発症の遅い人は変わった性別の二次性徴が遅くなるらしいとも言われてるそうだから男子はそこをあまり掘り下げないように」

そう言つて戸塚と材木座に釘を指し

「それが今のところ私や平塚、鵜飼の両教諭が主治医や八重さん本人から聞いた話よ」

それを聞いた由比ヶ浜結衣が

「それじゃあ八重ちゃんはあたしの事も最初から知ってたの？」

震える声で聞く結衣に雪乃は

「ボツチの八、八重さんは比企谷八幡をそう呼んでるのだけどボツチの敵になりそうなりア王と女王以外は気にする必要はないつて言つて由比ヶ浜さんと海老名さんと言つたかしら？」

八重さんにとって貴女達は葉山くんと三浦さんの傍で見掛ける顔、くらいにしか認識してなかったそうよ」

と、言う

「僕も顔は知ってるけど… 多分あの時もそうかな？何かぶつかる直前にマツカン、マツカンつて言つてたのが聞こえてた記憶があるしマツカンの売つてる自販機に向かつてかか一目散に駆けてつたからね？」

そう言つて苦笑いの戸塚に

「え？ 彩ちゃんラブの八重ちゃんが彩ちゃんよりマツカン優先？」

そう言われて

「え、八重ちゃんが僕の事を？」

顔を真っ赤にして驚く戸塚に

「色恋に疎い我でも気付くほどにな、戸塚氏よ？」

そう材木座に

「八重さんに命が惜しかったら戸塚くんの事だからかうなと言われているはずよね？」

そう言われ結衣からも

「そのすぐ後に失言してよつぽど命が要らないらしいなっ！つて怒らせてたよね？」

そう言われて顔を青くする材木座に

「貴方も、ラノベ作家目指すならもう少し乙女心を知りなさい

八重さんは未だ性自覚の無い幼い子供のそれで未だ完全に女の子になりきれないその心はどちらかと言えば男の子寄りだけど多分それが今の状態…

それは多分八重さんの心身の変化の兆しかもしれないと言われけど目覚め始めている恋心と体の二次性徴の始まり… が、その証し…それが主治医の診たてで先生の仮説の正しさを証明しようね？」
そう呟く雪乃に

「で、八重だっけ？ この先も授業でなきや卒業はおろか進級も難しいんじゃないの？」

そう言われた雪乃が

「現在TS病患者の認定申請中だからそれが済めば後は学校との話し合いだけになるのだけど…

以前に一度だけ聞いた事ですが

『比企谷八重として学校に通いたいし、普通に生活してみたい』
そう泣きながらそう言ってたわ

でもその反面八重さんは自分の事を化け物、寄生虫と言って元からのボッチ体質が悪化して教室に行くのを怖がってるのよ

女子の制服やジャージを着て過ごす八重さんに学校に未練がないわけではない

いえむしろ通いたいからこそ大人しく保健室で女子が小学校から習ってきた保健体育の保健の授業を保健室で受けこの部室で一人こつこつと自習を続けるのよ？」

そう言っつ溜め息を吐き

「今回みたいに怒りが恐怖心を押さえている時は良いけど普段はネガティブ思考の持ち主だから余計にね…」

そう言っつ話を締めくくる雪乃に

「なら簡単じゃん、あーしと姫菜、結衣に戸塚、アンタだつて八重に気があるんだろ？ それに戸部の奴も八重が気に入ったみたいだから教室内はこの五人で守つてやりや良いんじゃないの？」
そう言われて

「うん、多分初恋： 一目惚れなんだって思うよ」
戸塚がそう言い

「うん、でもあたし八重ちゃんに嫌われてるみたいなどこあるから：」

そうそう寂しそうに笑う結衣に雪乃が

「それについては私はそのわけを聞いてるから教えてあげるわ
由比ヶ浜さん、八重さんは貴女の大きすぎるそれが嫌いと言うか憎
いかとか羨ましいのよ」

そう言つて雪乃が指差した場所を診た戸塚は顔を真っ赤にしてす
ぐに顔をそらし、ガン見した材木座は海老名と三浦の二人にど突かれ
それを見ていたら

「材木ざまあつ！」

間違いなくそう言ったのは想像に難くない事だ

こうしてアタシは週明けから比企谷八重として学校に通うことになつた

初めての大型連休… 前半

① 甘酸っぱい思い出って美味しいの？

テニス対決のあとずっと眠保健室り続けていて最終下校時間近くに目を覚ましたアタシは平塚先生に送ってもらい帰宅

珍しく早く帰ってた両親に事情を話してくれたのは良いんだけど寿司だお赤飯だと騒ぐは戸塚に嫉妬した親父が騒いで母ちゃんに説教されてるはで…

巻き決まれた平塚先生に申し訳ないと思ってたをだけど…

すっかり意気投合して三人で飲んでるからアタシから言う事は何も無い…

と、ゆうよりこの寿司サビヌキじゃないじゃん？ よくわからないけどアタシのお祝いの料理のはずなのになんでアタシの食べられないモノ注文するわけ？

マジ信じられん

あ、寿司にワサビ入ってるのに気付いた母ちゃんにど突かれてるよ、親父ざまあつ！

ピッチを見るとかなりの数のメッセージ主に由比ヶ浜が来ていてお礼のメッセージを送ったけど材木つ、テメエにメアドを教えた覚えはねえからアタシのメアドは消せっ！

そう言いたかったけどアイツはああ見えて戸塚の友達らしいから言っても無駄っぽいからやめる代わりにメールでも塩対応、つか返事もらえるだけでも有り難いとおもえ

連休前半初日

「最近のお姉ちゃんは全く落ち着きがありませんでしたからこんなときくらいは大人しくゆっくりと寝てなさいっ！」

と、叱られてしまい時々小町の宿題に関する質問に答えながらのん

びりと過ごすことにしたけど自分の体について説明される事になり聞くことした

これが話に聞いていた月よりの使者なんだって事は理解はできたけどこの痛みが毎月あるのか…

と、そう思ったらうんざりだと思ったし…あと、月に代わってお仕事置きされてるのはアタシじゃん？

と、自分でも理解できないことで悩んでるアタシはアホに違いない

連休二日目

昨日一日勉強してないから図書館に行ったら戸塚と雪乃に結衣がいて四人で勉強したと言うよりは雪乃先生にアタシ等三人の勉強を見てもらってたって感じなんだけど…

結衣、アタタ今度の中間マジヤバくない？ 夏休みあるよね？

そう心配になるレベルなんだよね… イヤ、マジに

だから部活に頑張ってる戸塚はアタシが結構みてたな

勉強が一区切りついたところで図書館を出て遅めのランチ

連休後半と一緒にテニスしたいって話になり一緒にスポーツ洋品

店に行つて練習用のボールを買い

お揃いのヘアバンドとリストバンドを買ったら雪乃に

「八重さんさんに戸塚くん、リストバンドは四人お揃いの物にしましょう」

と、言われ結衣には

「ねえねえ八重ちゃん、ヘアバンドの洗い替え用に奉仕部三人お揃いのタオル地のサンバイザー買おうよ？」

そう言われて照れ笑いしながら買ったんだ

三連休三日目

今日はお昼過ぎに迎えにきた結衣と出掛けた先はカラオケで雪乃とナゼか葉山グループがいて困惑してたら

「八重、学校で困った事あったら遠慮しないであーしにいえしつ！

それとあーしはアンタの事八重って呼ぶから八重もあーしの事を優美子と呼べしっ！」

そう言われて驚いてると

「平塚先生風に言えば昨日の敵は今日の友よ、八重さん」と、雪乃に言われ

「そうだね、スポーツでぶつかりあった二人が友情を高め合うのはいかにも平塚先生の好みそうな展開だよ愚腐腐腐腐……」

あ、あたしの事も姫菜で良いからね、八重ちゃん」

「なら俺も隼人と呼んでくれよ、八重」

「なら俺も戸部で良いわー、よろしくなあ八重ちゃんっ♪」

「俺等も呼び捨てで良いからな」

と、姫菜や男子達にもそんな風に言われたけどはつきり言って状況についていけない

そう思ってたなら

「本当は金曜日に連絡があったから昨日でもよかったんだけど……あつ、やつと彼も来たようね？」

そう言われて遅れて入ってきた人物は戸塚で戸塚が来ると雪乃がずれて顔を赤くした戸塚がアタシの隣に腰掛けると

「八重から歌えしっ！」

そう言われて改めて考えたらレパートリーってプリキユアとか除いたらみんな八のキーじゃんっ！

しかもほとんどアニソンだして思ったらフツと閃いて

じゃあちよつと古いけど倉木麻衣のウインタベルをで

そうリクエストすると材木座が興奮しコナン繋がりで高山南さんの曲をリクエストしてきやがったからなんで戸塚より先にお前のリクエストに応えなきやいけないんだよっ！

そう言いたかったけど戸塚のリクエストでもあるらしかつたのでどうせなら戸塚に言っただけで欲しかったんだけどな

そう思ってたなら由比ヶ浜が

「今のは厨二が悪いっ、彩ちゃん好きそうなの知ってるなら彩ちゃんに言わせなきや

そしたら八重ちゃんだつて喜んでリクエストに応えてると思うよ？ その証拠にほら…」

「そう言つて皆の視線を集めたアタシの顔は真つ赤だったに違いない

まるで長湯してのぼせたように顔が熱くて仕方ないんだからさ」

由比ヶ浜がハニトー愛好会なるものを立ち上げたいと言つてるけどモノの見事にスルーされてるが同情はしない

アタシもわりと好きな方だけど家で出そうものなら大バッシング間違い無しだからだ

勿論皆嫌いじゃ無いけど親父は血圧…つまり健康上の問題で母ちゃんと小町はプロポーションを気にするからでアタシから言わせてもらや二人ならハニトーの一枚くらいに神経を尖らせなくても良いじゃんつて思うよ？

うん、朝のハニトー一枚を気にするなら母ちゃんは酒、小町は勉強しながらつまみ摘まんでるで大量のスナック菓子をセーブしなよ？

「なんなら低カロリーの手作りおやつを冷蔵庫にストックしとくよ？」

アタシ的にはそちらをの方をお勧めするんですがね？

初めての大型連休… 初めての仲間と一緒に…

まあハニトー愛好会うんぬはさておきアタシも甘いものが食べた気分だったから

「あんさ〜っ、結衣… アタシも甘いものが食べたい気分だから違う種類ハニトー頼んで半分子しよ〜よ？」

そうアタシが言ったら

「そーゆー話なら僕も仲間に入れてほしいな、八重ちゃん… 良いでしょ？ 由比ヶ浜さんも」

そう戸塚が言うと

「なら最後の一人はあーしがいただきだねっ♪」

そう言ってニンマリ笑う三浦と悔しさを隠さない雪乃に溜め息を吐いた結衣が

「ゆきのん… なんならアタシの分半分子にして雪乃んはフライドポテトでも頼む？」

そう言った結衣がいつもと違って見えちよつとだけたのもしくみえたが物言いたげな隼人の視線を無視してたら

「仕方無いなあ八重ちゃんは戸塚くんとラブラブしちゃってもらい優美子は隼人君でアタシが空いた枠に収まるよ」

そう言われて肩を落とす材木座と熱視線を姫菜に向ける戸部だけが無視されてる

しかもその無視があからさまだからさすがの隼人と結衣すら糸口を見いだせないしアタシ、雪乃、優美子はまだ口を挟むべきでないと判断して様子を見守ることにした

勿論、アタシと戸塚はお互いに顔を真っ赤にして真っ赤にしてあーんをしあつてたら写メられてた、しつかりとな

しかも結衣↓小町で流れその後忘れた頃にアタシより一足先に彩加のお母さんと知り合った小町から戸塚のお母さんに渡り…

戸塚は勿論初対面のアタシもかなり弄られるなんてそんな未来いはまだ知らない事だったけど

ちよいとお待ちよ小町ちゃんやい、何でお姉ちゃんが知らなかった戸塚のお母上を知ってる上にメアドまで知ってるんだい？

：我が妹ながら末恐ろしい人脈とコミュ力の高さだ：そう思うのも未だ先の話だ

後半は材木座のリクエストでプリキュアを何曲か唄って不本意ながらアタシと材木座だけが盛り上がったた

結衣や優美子から『今時の唄も歌ったら』と言われたけど正直興味ないから

「戸塚がアタシに唄ってほしい曲があったら頑張って覚えるんだけど？」

そうアタシは戸塚に言ったのに

「俺もリクエストして言いかない？」

そう隼人が言い出すと結衣まで

「八重ちゃんの声っていわゆるアニメ声でスツゴく可愛いからあたし達も何か頼んでおこうよ？」

と、言い出し優美子も

「ならあーしらも八重に歌わせる曲考えるからお前らも考えろしっ！」

そう残った男子達にも言ったけどそんな宿題みんな迷惑だよ？

つか材木は黙ってるっ！

勿論そんなことは彩加の前では言わないよ、材木の事を友達って言う彩加の前では意味無く罵倒はしないくらいの気遣いはするよ、ホントだよ？ヤエモウソツカナイ

そんなことをわーわー言ってる内に店を出る時間になりサイズで晩ご飯食べてこつて事になり

アタシはサンドイッチに後の女子はパスタで彩加はハンバーグステーキに残りはステーキだって…

え？ミラノドリアじゃないのかって？

そんなのカラオケでジュース飲みすぎて無理に決まってるじゃん

? なのに多少の量の違いで雪乃のと優美子が

「もう少し食べなさいっ! (ろしっ!)」

つてうるさく言うなか隼人が

「まあまあ二人とも落ち着いて」

アタシの隣ハンバーグステーキを食べていた戸塚が

「八重ちゃん、あーん…」

つて言われて口をあけたら

「んっ!？」

(戸塚…ここ、アタシ等以外の人も居るんですがね?)

唾然としてるアタシに

「量の調節難しいけどこれなら大丈夫だよな?」

そう聞かれたけどハンバーグステーキが未だ口に入ってるアタシは頷くしかできないけど

(いつもの天使の笑顔なのに戸塚恐るべし…)

そう思ってたなら

「なんだ、アンタ以外にちゃんとと言えるじゃん?」

「そうね、貴方なら子供みたいな屁理屈捏ねる我が儘な八重を安心して任せられそうね」

つて雪乃に優美子… アンタ等はアタシの母ちゃんかよ? 何だよ材木と隼人の羨ましそうな顔は?

ハンバーグステーキ食いたかったら自分も頼べばよかったんだろうがよ?

そう思ってたならみんなに溜め息吐かれた… 解せぬ

「八重さん、諸々の手続きと大学病院の… 主治医の葉山先生の口添えもあって明日からクラス復帰できますからそのつもりでいなさい」

そういきなり言われたアタシが言葉を失つてると

「もつと僕を頼ってよ?頼りないかもしれないけど八重ちゃんの力になりたいんだからさ…」

そう言つてアタシの手を取る彩加に

「教室に居る時はあーしに頼れし、あーしのお気に入りの八重に

ちよつかいだすヤツは許しちやおかないから安心しろしっ！」

「八重ちゃん、八重ちゃんアタシも頼ってよ？席も隣で同じ奉仕部の仲間じゃん まあハニトー愛好会うんぬはさておきアタシも甘いものが食べたい気分だったから

「あんさ〜っ、結衣…アタシも甘いものが食べたい気分だから違う種類ハニトー頼んで半分しよ〜よ？」

そうアタシが言ったら

「そーゆー話なら僕も仲間に入れてほしいな、八重ちゃん…良いでしょ？由比ヶ浜さんも」

そう戸塚が言うと

「なら最後の一人はあーしがいただきだねっ♪」

そう言つてニンマリ笑う三浦と悔しさを隠さない雪乃に溜め息を吐いた結衣が

「雪乃ん…ならアタシの半分分子にして雪乃んはフライドポテトでも頼む？」

そう言つた結衣がいつもと違って見えちよつとだけたのもしくみえたが物言いたげな隼人の視線を無視してたら

「仕方無いなあ八重ちゃんは戸塚くんとラブラブしちゃってもらい優美子は隼人君でアタシが空いた枠に収まるよ」

そう言われて肩を落とす材木座と熱視線を姫菜に向ける戸部だけが無視されてる

しかもその無視があからさまだからさすがの隼人と結衣すら糸口を見いだせないしアタシ、雪乃、優美子はまだ口を挟むべきでないと判断して様子を見守ることにした

勿論、アタシと戸塚はお互いに顔を真っ赤にして真っ赤にしてあーんをしあつてたら写メられてた、すっかりとな

しかも結衣↓小町で流れその後忘れた頃にアタシより一足先に彩加のお母さんと知り合つた小町から戸塚のお母さんに渡り…

戸塚は勿論初対面のアタシもかなり弄られるなんてそんな未来いはまだ知らない事だったけど

ちよいとお待ちよ小町ちゃんやい、何でお姉ちゃんが知らなかった

戸塚のお母上を知ってる上にメアドまで知ってるんだい？

：我が妹ながら末恐ろしい人脈とコミュ力の高さだ：そう思うのも未だ先の話だ

後半は材木座のリクエストでプリキュアを何曲か唄って不本意ながらアタシと材木座だけが盛り上がった

結衣や優美子から『今時の唄も歌ったら』と言われたけど正直興味ないから

「戸塚がアタシに唄ってほしい曲があつたら頑張つて覚えるんだけど？」

そうアタシは戸塚に言ったのに

「俺もリクエストして言いかない？」

そう隼人が言い出すと結衣まで

「八重ちゃんの声っていわゆるアニメ声でスツゴく可愛いからあたし達も何か頼んでおこうよ？」

と、言い出し優美子も

「ならあーしらも八重に歌わせる曲考えるからお前らも考えろしっ！」

そう残った男子達にも言ったけどそんな宿題みんな迷惑だよ？

つか材木は黙ってるっ！

勿論そんなことは彩加の前では言わないよ、材木の事を友達って言う彩加の前では意味無く罵倒はしないくらいの気遣いはするよ、ホントだよ？ヤエモウソツカナイ

そんなことをわーわー言ってる内に店を出る時間になりサイズで晩ご飯食べてこつて事になり

アタシはサンドイッチに後の女子はパスタで彩加はハンバーグステーキに残りはステーキだつて：

え？ミラノドリアじゃないのかつて？

そんなのカラオケでジュース飲みすぎて無理に決まってるじゃん？
なのに多少の量の違いで雪乃のと優美子が

「もう少し食べなさいっ！(ろしっ!)」

つてうるさく言うな隼人が

「まあまあ二人とも落ち着いて」

アタシの隣ハンバーグステーキを食べていた戸塚が

「八重ちゃん、あーん…」

つて言われて口をあけたら

「んっ!」

(戸塚…ここ、アタシ等以外の人も居るんですがね?)

啞然としてるアタシに

「量の調節難しいけどこれなら大丈夫だよね?」

そう聞かれたけどハンバーグステーキが未だ口に入ってるアタシ

は頷くしかできないけど

(いつもの天使の笑顔なのに戸塚恐るべし…)

そう思ってたなら

「なんだ、アンタ以外にちゃんとと言えるじゃん?」

「そうね、貴方なら子供みたいな屁理屈捏ねる我が儘な八重を安心

して任せられそうね」

つて優美子に雪乃、アンタ等アタシの母ちゃんか?何だよ材木と隼

人の羨ましそうな顔は?

ハンバーグステーキ食いたかったら自分も頼べばよかったんだ

ろうがよ?

そう思ってたならみんなに溜め息吐かれた…解せぬ

「八重さん、諸々の手続きと大学病院の…主治医の葉山先生の口

添えもあつて明日からクラス復帰できますからそのつもりでいなさ

い」

そういきなり言われたアタシが言葉を失つてると

「もつと僕を頼つてよ? 頼りないかもしれないけど八重ちゃん

の力になりたいんだからさ…」

そう言つてアタシの手を取る彩加に

「教室に居る時はあーしに頼れし、あーしのお気に入りの八重に

ちよつかいだすヤツは許しちやおかないから安心しろしっ!」

「八重ちゃん、八重ちゃんアタシも頼つてよ？ 席も隣で同じ奉仕部の仲間じゃん？」

「あたしにも頼つて欲しいな、八重さんとは色々話が合いそうだしね？ 愚腐腐腐腐腐腐」

（え、海老名さん… 気のせいじゃないと思うんですけど笑い声が怖いんですけど？）

「勿論貴女を守るのは平塚先生からの依頼であり貴女のお友だち一号の特権よ」

そう女子四人も言ってくれ

「君が公表する決意をし母さんと父さんから話も聞いてるし俺も君の力になりたいから遠慮無く頼ってくれよ？」

（うん、知ってたよ…なんとなくだけとお前が葉山先生の息子さんなんだろうってことくらいね

まあ、そんな事なんかアタシには関係ない話だからだからなんなのさ？ って話何だけどね）

そうボンヤリと考えながら隼人の顔を見ているアタシだった

初めての大型連休… 連休の谷間

二―F 比企谷八重

三連休に体を休め鋭気を養えたと思うから火曜日から学校に行く
んだけどかなり不安

正直気が重い

金曜のお礼に焼いたクッキーを持って保健室に寄りその後生徒指
導室に行き平塚先生と校長室に挨拶に

大学病院からの協力要請と言う大人の事情もありアタシは晴れて
女子生徒として通えるようになったらしい

でもそんなの建前だ… 実際には… え？ あれ？ 由比ヶ浜と三
浦、海老名はまだしも何で男子四人が？

あ、戸塚が笑いかけてくれた…アタシは幸せだ
そう思ってたなら

「金曜のテニス部の件は知ってる者も居ると思うがその話の噂の主
であまり大きな声では言えんが比企谷八幡と言う男子生徒がTS化
した女子だ

難しいとは思うが仲良くしてやってくれ、席は…」

「隣に入れ替わるだけだからあたしと八重ちゃんの席を替えて彩
ちゃんの隣にしてあげてください、なれるまでは色々不安だろうか
らっ！」

そう言ってくれたけど

「イヤイヤ、由比ヶ浜の気遣いは嬉しいけど戸塚の迷惑考えよう
よ？」

あたしと戸塚は釣り合わないしアタシなんかそんな不遜なこと
… 「八重ちゃんの事を迷惑だなんて思って無いよ？」

逆に八重ちゃんにそんな風に思われてる事の方が寂しいんだから
ね？
」

そんな事を言われてしまったアタシには黙り混む以外の選択肢は

なかった

まあ何にしろ二―Fを仕切る女王様がアタシの擁護派を宣言したのとテニスコートの一件が尾ひれ背ヒレが付いて結構有名人になって居たこともある

そんな訳だからアタシは自分の不安が馬鹿馬鹿しく思えた

お昼になりお弁当は戸塚と共に葉山グループと食べることに
なり集まっていると教室内がどよめいた

アタシを心配して雪乃も顔を出したのだ

勿論雪乃も合流したけど仲と言うか相性の悪いと噂される雪乃と
優美子が仲良くお弁当食べているのでクラスだけじゃなく噂を聞い
た他のクラスの生徒達まで驚いている

食事の後はいつもの様にテニスコートに向かう戸塚について二人
でコートにむかう

今日は金曜の事もあり私はアドバイスだけにして戸塚はループス
イングでボールコントロールを意識して壁打ちをするように言った
んだ

時おりアドバイスを交え終わった後には特製ドリンクのハチミツ
レモンを薄めたものを手渡しタオルで汗を吹き教室に戻ろうとして
ビックリした

「え〜と… 何でみんながここに居るのかな？」

「そんなの戸塚君と八重ちゃんが居るからに決まっているべ？」

「そうだね、八重は気付いてないだろうけど色目使ってる野郎共が
結構いたからね」

そう苛立たしそうに言う優美子に何故か苦笑いの隼人だけどアタ
シ的にはあまり釈然とはしないけど心配してくれてるのは確かだし
：

そう思ってお礼を言うことにした

「うん、心配してくれて有難う」

つとね…

放課後隼人達も部活が無いから遊びに行こうと差誘われたけど

「連休中は遊びたいから今日明日くらいはしっかりと勉強しときたい」

そう言うのと

「あーっ、そうだね…あーしもあんまし人の事は言えた義理じやないけど結衣と隼人以外の男子三人はやつといた方が良いから一緒に勉強会するしっ！」

そう優美子が言うと言われた四人はゲンナリしたけど

「せっかくの五連休をしっかりと楽しむのなら八重の言う通りに今日明日くらいは勉強しておいてもバチは当たらないと思うよ？」

そう隼人が言うのと

「そうね、それに普段使用してる部室が使えないからサイズ辺りですることになるから少なくとも一緒に出掛ける事にはなるんじゃないか？」

そう雪乃のに言われて

「あー、うん…それなら気分も変わるかな？いつも部室でやるの違っ！」

そう結衣が言うと言われ溜め息を吐いた雪乃に

「勉強してるのは八重さんだけでしよう？まあ私は八重さんの質問に答えることで結構復習になってるところはありますけど貴女は携帯弄ってお茶を飲みながらお菓子をつまんでるだけでしょ？」

そう話すと驚いた優美子が

「な、ナニその美味しそうな部活は？」

そう驚きの声を上げると

「たいした意味はないわ、依頼がない時は基本的に待機だからそれぞれに好きに過ごしてるだけで私は基本読書」

由比ヶ浜さんは携帯弄りと時々雑誌を読んで八重さんは授業を受けてないのの気にせずと勉強してるは

因みに茶葉は私が市販のスナック菓子類は由比ヶ浜さん、八重さんは手作りのお菓子をそれぞれに持ちより楽しんでるから部費の悪用ではなくてよ？」

そう言うのと

「八重ちゃんの手作りのお菓子、クッキーやスコーンすんごく美味しいんだよっ♪」

そう嬉しそうに言うのを聞いて

「え？クッキーも焼けるん？」

そう優美子が言う

戸塚君、今年のバレンタインは楽しみにしてなさい

今チョコレートケーキを目標に日々頑張ってるそうよ」

そんな事を雪乃に言われて

「き、キモくて悪かったな…アタシだってこー見えても悩んでるんだからな？」

アタシなんか誰かを好きになつたりしていいのか？

そんな事四六時中考えてたし未だにアタシなんか戸塚の事好きになつていいのか？

戸塚に好きになつてもらつても良いのかつてそんな事ばかり考えてたら不安で仕方ないんだよ

だから…だからなにか集中できることをして考えないようにしなきゃ不安でたまらないんだからな」

そう言つてうつ向くアタシの頭を撫でながら彩加が

「そんな事無いよ？僕は八重ちゃんの事…好きだしそれを誰かに許してもらふ必要なんて…あ、でも八重八重ちゃんのお父さんとお母さんだけはわかつてほしいかな？」

そう言われて苦笑いしながら

「ソイツは微妙だな…うちのアホ親父もはつきり言つたら

『どこの誰が来ようとも娘は絶対にやらんっ！』

つて公言してるヤツだからな…

が、母ちゃんに気に入られたら…戸塚なら気に入ると思うがしたら母ちゃんが親父とオハナシしてくれるから哀れな親父の意見は圧殺される…妻と娘に弱い男だからな」

そう言つて苦笑いするアタシだった

初めての大型連休…… ガハマさんよ、勉強しろよ？

せ

その後皆でサイゼに行き、ドリンクバーを頼み勉強を始めたんだけとやっぱり結衣に勉強を教えている雪乃はアタマイタポーズをとっている

因みに席の配列は奥のベンチシートに雪乃、結衣、彩加、アタシ、優美子、姫菜

その向かいには雪乃は結衣にマンツーマン状態なので遠慮してアタシの前には大岡と大和で優美子達の前には隼人と戸部

アタシ等は頑張つて二時間くらい勉強して… あ、あれ？ 今気が付いたんだけどアタシつては自分の勉強全然進んでないじゃん？

うん、隼人も苦笑いを浮かべてるし雪乃なんかぐったりして疲れきった表情してるよ

うん、時折聞こえてきた結衣とのやり取り… たまに通りかかる店員のお姉さんや他の客が引き笑いしてたし…

アタシ等の制服見て結衣を信じられないものを見るような目を一瞬向けたが優美子に睨まれ退散してたからな…

その後小町も塾だから適当に食べて来るって言ってたからアタシもここで食べてくことにしてアタシはミートソースポロネーゼ

雪乃はフレッシュトマトのスパゲッティを頼む事にした
アタシと雪乃はリア充みたく料理を分け合う習慣はないんだから

な

え？ 昨日やってたろって？ バツカ昨日は甘いハニトー食べたい気分だったからハニトー以外は食べてないぞ？

だから今日はミートソースポロネーゼの気分なんだよ

それにアタシは誰が何頼むかわからないのもやなんだからな？

そしたら案の定、戸部のおたんちゃんが頼んだのはチヨリソーに大岡は辛味チキンでアタシには無理だからね？

隼人はグリーンサラダに大和はグリルポテトを二つで優美子はプ

チフオカツチャを二つに姫菜は熟成ミラノサラミ

で、親切で勧めてくれるのはありがたいんだけど仕方無い

「アタシ、基本的にはあまり好き嫌いはあまり言わない方なんですけど辛いのに弱くて妹にも

『お姉ちゃんは見えた目通りにお子様嗜好でお子様舌なのですよね、炭酸飲めないけど』

そう言っただけで笑われてるんだよね」

そう言ったら

「あはは、こーゆーのもギャップ萌なのかな？ 辛口毒舌の八重ちゃんがからいの苦手ってさ」

そんな事結衣に言われて

「頼い、余計なお世話だ…」

そう結衣には一応、言い返したけどいつものテンポと歯切れの良さを見る影もなかったしあまり言いたくなかった弱点をさらしてしまったアタシはかなりいじけていた

そのせいで重要な事を見落としてしまったのが、後々悔やむことになるけど今のアタシには知るはずの無いことだ

それでも、呆れられはしたけど優美子がもう少して良いからな大きくなれるよう食事をもっと食べる用にしろしっ！

そう言われてフオカツチャを食べるように言われ食べ過ぎた夜になっっちゃったんだよね

翌日は都合が悪い優美子もっとも勉強をすべき由比ヶ浜は敵前逃亡をはかり、姫菜は材木参加なのと結衣と優美子が不参加のため不参加

加
ついでに戸部も姫菜が不参加を聞いて不参加で今日の参加者はアタシ、雪乃に彩加、隼人、材木、大岡、大和

さすがに三日連続は…と言うことになり今日は図書館へ

布陣は二人掛けの席で彩加と雪乃六人掛けの席にアタシと隼人が隣り合わせて向かいに材木、大岡、大和の順に座り

三人はアタシと隼人の空いてる方に聞くことに決めただけであらかじめ

「はつきり言ったら理数系は苦手意識が強いからできれば隼人聞いてほしいのとアタシも隼人に聞いても良いか？」

そう聞いたらなぜか嬉しそうな隼人が

「勿論遠慮しないで聞いてくれ」

そう言ってくれ安心したが

「……」

彩加と雪乃が不機嫌そうにアタシを見ているのには全く気付けなかった

一人で三人を見ていた昨日と違い互いそれなりに勉強が進んだアタシと隼人

言つちや悪いが結衣に教えなくて済んだ雪乃は結構捗り、彩加もアタシよりずっと優秀な教師に習ったからはかどったはず

ただ：アタシが隼人に教えてもらってる時にアタシに近寄り手元を覗き込んでるのを他のみんなが悔しそうに見ているのは全く気付かなかった

さすがに今日はこのメンツで食へに行くのもなんなので解散となり小町に電話したら

『今日は早めに帰るからビールのツマミになりそうなもの用意してくれと言われましたからお姉ちゃんが何か買って来てくれると助かります小町は、刺身を解凍しておきますから』
そう言われて

「わかったよ、ケンタッキーで適当に買ってくる」

そう小町に伝えて帰ることにしたんだけど玄関先で鉢合わせ親父を見てアタシは青ざめた

「おお、八重か…小町にも言ったが部下達をつれてきたからよろしく頼む」

つて小町ちゃん、お姉ちゃん聞いてないよ？

ああ、そんな事を言ってる場合じゃない… 餃子やいて玉子焼き焼いて冷飯がかなりあったはずだからキムチチャーハンで良いか？

あー、取り敢えずの小町の分取っておきチキンと味噌ピーを出さして… あ、かまぼこあるから板わさにしてわ出して…と

ソーセイジあるな、炒めて出してジャガイモチンしてジャガバタを出してそれからそれから…

冷凍のハウレン草とコーンに刻んだベーコンをバターで炒めて

あー、アタマイタ… アタシが酒のつまみなんか知るかよ

あー、キユウリの浅漬けがあつたから鮭の切り身も焼けば良いか？

はあ、面倒臭い… 今日はカップヌードルにしとこ

え？水割り飲むの？ ハイハイ、氷とミネラルウォーター出します

全く…水割り作って柿の種探してたらカップヌードル冷めちやつ

たじゃん…

あとは生ハムにちくわにキュウリやチーズを詰めまして…っと

せ冷凍のししやもをオーブンで焼いて解凍した 『小町の好物

の』 マグロの短冊をスライスして…

え、小町の好物なのに良いのかって？

んなもん、伝達事項をチャンと伝えない小町が悪い

親父が人を連れてくるの知ってりやそれなりの準備つか買い物し

たんだからな

「お父さん、お母さん、明日も早いからもう寝ますね

それと必要なら皆さんの分も朝食用意しときますけど？」

「はい、わかりました… 友達とテニスです、はいお休みなさい

」

そう言っつて部屋に戻ると寝間着に着替えて寝ることにしました

初めての大型連休：母ちゃんと彩加と奉仕部の二人と

① 母ちゃんと…

後半初日

(うわっ、まだ飲んでたのかよ?)

カチャカチャ音をさせつつ洗い物を下げてる母ちゃんを見て

「まだ飲んでるの?」

その声を掛け洗い物を下げるのを手伝うと

「さすがにもう寝てるよ私は洗い物を片付けてから一眠りするつもりだけどそう言うアンタも連休中くらいゆっくりすりや良いのに
さ

で、テニスするってデートなのかい?」

そう聞かれたアタシは面倒臭いから

「ちげーよ、確かに気になるヤツも一緒だけど雪乃ともう一人部活一緒に女子の合わせて四人

もつとも… 見た目なら女子… 美少女四人って間違われて声を掛けてくるアホどもも居るんだろだろうけどね」

アタシがそう言って彩加、雪乃、結衣とそれぞれのツーショット写真を撮ると

「この銀髪の子が、アンタの気になってる男の子かい? たしに、パツと見た感じは普通に美少女としか見えないね…」

そう言われて

「まあね、アタシも観察して気付いたんだからさ

でも、結構男らしいところもあってテニスも真剣に取り組んでるんだよね」

そうアタシが言うと

「ふーん、アンタも女の子の顔ができるようになったんだね…

その子のお陰かい? 良いことだよ」

そう笑いながら言われて唇を尖らせてたら真面目な顔になり

「この先アンタがどう変わっていくかなんて医者先生にもわからないことが私にわかるわけないけどね

それでも私達夫婦にとっちゃ八幡も八重も可愛い子供であることに違いはないのだけは忘れるんじゃないよ、良いね？」

そう言ってもらい

「有難う… そう言ってくれて嬉しい…」

アタシは炊事の支度をする手を休めることなくそう答えた

握り終えたおにぎりの内10個をと凍らせた凍らせてない麦茶500ccペットボトルを二本ずつにマッカン四本、はちみつレモン水（自家製）は二本のストローホッパーに詰めてアタシと彩加の分

リュックにはラケットにボールとテニスシューズに着替えにスポーツタオルとサンバイザー

タオルハンカチにポケットティッシュと制汗剤にUVカット、ファーストエイドキットとリップステイクの入ったポーチを入れるとそれを背負い

「お母さんって今日、明日は準夜勤だよな？ 今夜の晩ご飯用のお弁当、何か用意しとこうか？」

そうアタシが聞くと

「そーだね… なら、夕べはちよいと飲み過ぎちまったからアツサリした物を適当に頼むよ」

そう答えてくれたから

「リョーカイ、お仕事頑張って」

そう言つてストローホッパー二本を肩に掛けてからクーラバッグ

「それじゃ行つてきます」

「車と変な男にや気を付けるんだよ、良いね？ アンタは頭悪くないのに妙に抜けたところがあるから小町と違った心配があるんだからさ」

そう言われて

「ナニ、それじゃアタシの事をアホ可愛いとでもゆーの？」
そう言つてアタシが頬を膨らませると

「なんだ、違ふと言ひ張れるとでも言うかい？」
や

「だけど昔つからゆーけど女は少し抜けてるくらいが可愛いげがあつて良いつて言うからさ」

「まあ、とにかくアンタや小町は私似で可愛いのは間違いないんだから要心するに越した事は無いんだからね？」

心配そうに言われたから

「うん、それは雪乃にもよく言われてるから気を付けるよ」

アタシがそう答えたら

「そーだね、アンタは良い友達に出会えたよ」

と、比企谷八重として始めて聞く言葉を耳にしてくすぐったい嬉しさが込み上げてきた

(うん、八には申し訳ないけど明後日の家族旅行…楽しみだな)

② 彩加と二人

総合公園に着くと彩加も既に来ててストレッチをしてたからアタシもカーデイガンを脱いで早速ストレッチを初めてコートの使用時間になったらすぐ始められるように準備した

特別スゴい、つて訳でもないアタシのサーブが優美子を翻弄したのを見ていた彩加がサーブの練習に力を入れているのを見て

「彩加、隼人のヤツが彩加のサーブが鋭くなったのに気付いて驚いてたの… 気付いてた？」

「そうアタシに言われて初めて気付いたらしく」

「そう言われてみたら二球目から構えが変わっていたけどそう言うわけだったんだね」

「そう答えたから」

「わずか数日でそれなりの成長を果たせたんだからもう少しこのまま続けて成長具合を見て次の段階への移行を考えよう」

そう言ってからブツブツ言いながらアタシはサーブは打たずにボールを擦るように当てていると不思議に思った彩加が

「八重ちゃんはさつきからブツブツ言いながら何してるの？」
そう聞いてきたから

「多分、遅くても夏までには優美子と再戦するだろうけど彩加以上にパワー、スタミナに難のあるアタシが本気の…」

しかもそんな時にはきっちり鍛え直してきてるから地力も劣るアタシがどうしたら対抗できるのかを考えてるんだよね…」

そう答えながら呟き続けるアタシだった

高さや球速の問題から丁度良い位置を割り出してそこからサーブを打つアタシ

要するにアレだ、単純にスピードガンの球速だけじゃソフトボールのピッチャーのスゴさはわからないし語れないってところで

隼人の背だってアタシからみたら十分高いからアタシと隼人のサーブの打点の高低差と球速の差は共に何ともならないからなね、普通にやったらさ

だから体感速度が男子高校生の全国クラスの球速に感じる位置からのサーブを返してもらっている

打ち下ろされる球の角度も考慮して雪乃に計算してもらった位置なんだけどね

これは隼人との対戦で気付いた事の内のひとつで対戦相手は当然ながら彩加より背が高いんだからそういった設定も考慮しないとな…

その練習で汗を流していると結衣と雪乃も到着してウォーミングアップ中

で、なんでお前がいるんだよ？ 材木… まあ、彩加が誘ったんだろうけど… 友達だからな

結衣と雪乃の視線から隠れるようにして来やがったが一緒の空間にいるのにナニやってんだよ？ 全く…

結衣と雪乃、そして材木が現れる頃には三面在るコート他の二面

も使用者が現れたんだが一番奥をアタシ達のグループが使いその隣は大学生っぽいグループで：

その隣に居るのが： 葉山グループ&三浦グループ？結衣ナンだが： 気にするな、気にしたら：

って、ナ・ン・デ・お前らが居るんだよっ!?

そう叫びたい、叫びだしそうな自分をアタシの方が間違っているとも言うのかよ？

もつとも雪乃に睨まれている隼人のヤツは材木程じゃないがその視線を大和を盾にして隠れている

ギブスで固められている右手右足が痛々しいが同情する気はないし痛きや家で寝てるよなっ!?! と、しか思わない、つかその姿でないうろうろしてンだよ？ お前はよ？

材木と言い、隼人と言い： お前ら一体ナンな訳？ 全くよ

優美子から聞いた話によると、右腕は亀裂骨折2カ所に右足重症の捻挫らしく： 完治までに一ヶ月じゃ利かないそうだが同情はしないと、葉山先生にも言われたそうだ

優美子の提案により一面を使いアタシは初心者で結衣と姫菜、材木と戸部に教えることになり残りのメンバーで彩加の特訓に付き合うつもりらしい

取り敢えず結衣は姫菜と、材木は戸部とラリーの記録作りに挑戦させている

はつきり言ってこの四人の中には本気でテニスに取り組むヤツは一人もいないだろうからそれならそれで端から楽しめるテニスを教えてた方が良く

だからこの四人が慣れてきたら結衣？姫菜？材木？戸部？結衣？結衣って感じで四人でラリーをやらせようと思っている

卓球のラリーもそうだけど、長く続けば続くほど楽しいからな強くなりたくなかったら？

身体能力的にはつきり言って、戸部以外は基礎体力作りからだけにやるならそこらになるんだけどね

逆に戸部は、『サッカー部から転向する気か？』と、言わざ

るを得ないがそれならそれで彩加は喜ぶんだらうけどそこまでのつもりはないだろうからその時の問題、その時に考えれば良い

つか、戸部がそう思うかもわからないのにそんな心配しても仕方無い

そう思いながら四人のラリーを見守っていた

初めての大型連休…乱入者達

② 仮面の女

アタシ達の練習が終わりを迎える頃、雪乃によく似た人が現れていきなりアタシに抱き付いてきた

「え、あ、ナニ、アンタダレ？」

焦るアタシをその人から引き剥がして

「いきなり現れてこんな真似して… 一体何のつもりなのかしら？ 姉さん…」

そう言つてその相手を睨み付ける雪乃にその人は

「雪乃ちゃんがいけないのよ？ いつまで待ってもお姉ちゃんに八重ちゃんを紹介してくれないからお姉ちゃんの方から会いに来ちゃったっ？」

八重ちゃん、私は雪ノ下陽乃… でも、八重ちゃんは私の事をお姉ちゃんと呼んでね」

と、その謎のテンションと理解不能な言動に眉を潜めていると

「ほら、いきなり変なことを言われて八重さんが戸惑っているじゃないの…」

取り敢えず汗をかいてる人達は汗を流してくると良いわ」

そう言われて、雪乃と隼人以外がシャワーを浴びる事にしてシャワールームに向かうことにしたけどなぜか姫菜だけ手招きされて呼ばれてるんだけど嫌な予感しかない

お洒落とかに関して、とにかくぼらなアタシの髪を甲斐甲斐しく乾かしてくれる優美子は口煩く小言を言ってる割りには嬉しそうに見えるのはなぜだ？

シャワールームで汗を洗い流したアタシ達だけ…

「はあ？ ナンですか？ それ…」

そう言わざるを得ないその服はとあるソシヤゲーで主人公が着ていた水色のエプロンドレスに純白のハイヒールブーツ

オプションにホルスターも付いてるってナンなのこのムダに精巧なオプシヨナルパーツは？

「陽乃さんって人から預かったんだよっ♪」

そう嬉しそうにゆー姫菜だけこのコーデは在る意味洒落にならないのだけど？

だってなあ〜っ： 美少女と心が入れ替わった主人公が着てる服をTSのアタシに着せるとか一体どんな神経してるの？

優美子はその意味知らないみたいだから単純に可愛いつて思ってるみたいなんだけど姫菜はこのネタ知ってそうな： てかもしかし腐……？

「ホレ、鏡観てみ？」

優美子にそう言われて目を開けて鏡をみると飴色の長い髪の毛の少女が目をぱちくりさせながらこつちを見ていたけど瞳の色がな…

簡単に言えば右目はブルーアイズホワイトドラゴンのブルーアイに左目は深紅の瞳： レッドアイズブラックドラゴンのレッドアイになってるんだけどナンで？

ナンかアタシって訳わからんキャラまっしぐらナンですけど？

もちろん長い髪の毛を編んで三つ編みカチューシャにしてくれた

優美子、乙

ただなあ〜っ： ナンでこうなったんだっ！

ってそう思うとげんなりしながらシャワールームを出たアタシを見て皆が固まった、陽乃さん以外がな

おまけに、コスプレのせいで変に人目を引いてるから視線がマジうざい

取り敢えずアタシ達は用意した朝食

アタシがおにぎりに雪乃は和惣菜、結衣はサラダとデザートに彩加は洋食のおかず

そう思いながら並べていると確か都築さんって言ったか？ 雪ノ下家の執事をしてる人が部下らしい人をつれてスーパ一の惣菜らしい物を持って現れ

テーブルに並べ始めるのを見て感嘆の溜め息を吐く結衣と材木に
「あははははっ…」と、苦笑いを浮かべる彩加とこめかみを押
さえる雪乃に冷めた目でそれを視るアタシ

「いただきます」

『いただきます』

陽乃さんが雪乃に何か言わせる暇を与えずに音頭を取って食事が
始まった

結果オーライ？ ちよつと多いかな？ そう思いながら持つて来
たおにぎりは炊飯器エビピラフのおにぎりと解凍した白いご飯に青
菜を混ぜ込んだご飯をベースに鮭、オカカ、梅干しを具に握ったおに
ぎりが20個

雪乃はだし巻き玉子に塩鮭を焼いたもの、ほうれん草の白和え

彩加はミートボール、唐揚げ、エビフライ

結衣はポテサラ、スパサラ、はふミックスフルーツのヨーグルト和
え

陽乃さんが用意させたものはピザ、サンドイッチ、フライドチキン
にフライドポテト、生春巻き、ローストビーフと言ったところか？

たっぷり身体を動かした後だけに隼人以外の男子の食欲はスゴク
料理はみるみると減っていき良い笑顔で喜んでくれている

飲み物はアタシが用意した麦茶を凍らせたのとマツカン以外は炭
酸がメインだから麦茶なくなったらナンか買いに行った方が良いの
かも？

食後のマツカンを飲みながら対優美子の作戦を練っていると

「八重ちゃん、お姉ちゃんこの後ちよつと用事があるからもう帰
るね

それと今日の洗濯物はお姉ちゃんが洗濯しておくし八重ちゃんが
用意しておいた服は雪乃ちゃんに預けていつでもお泊まりできるよ
うにしておくね」

そう言われて

「……………」

雪乃のお姉さんの耳元に囁くと一瞬驚いたがすぐに笑顔を取り戻し

「!？」

驚きの表情を浮かべる雪に笑顔を向けると

「うん、思ってた通りにやっぱり面白い娘だよ、八重ちゃんはっ♪
今度お姉ちゃんとも遊びにいこうねっ♪」

そう言っつて洗濯物と空のクーラーバッグに、空のペットボトルを都築さんに持たせ去っつていく陽乃後ろ姿を見送っつていたけど

「どうやら隼人はあの娘に気があるみたいだけどむりたね、隼人の器に収まりきる子じゃないんだよねえくっ…」

少なくとも現状の隼人のままなら、私も雪乃ちゃんも反対するしナニよりあの娘の視線は全く隼人の事を見てないっつて事だよね…

これから色々忙しくなりそうだけどそれ以上に面白い事になりそうだよ

都築さんが運転する車で、陽乃さんがそう呟いている事を知らない私は雪乃

「雪乃のお姉さんっつてスゴいのな…」

嵐が去るように去った陽乃さんを見送ったアタシがそう呟くと

「ええ、頭脳明晰容姿端麗でおまけにスポーツまでこなせるんだから…」

悔しげに言う雪乃にアタシは

「違うよ、そんな事なら雪乃を見てたら大体想像できるよ

アタシが言いたいのはあの人っつて何枚の仮面を被っつてるのかな？っつて思っつたんだよね…」

アタシがそう言っつたら

「もしかしてさっき姉さんの顔色が一瞬変わったのは…」

驚きの表情の雪乃がそう聞いて来たから

「ん、仮面を外した貴女に会っつてみたいっつて言っただけ」

そう事も無げに言うアタシを見て

「怖いもの知らずと言うか…姉さんが気に入っつて大人しく引き下

がるわけだわ…

でもね、八重さん…厄介な人に目をつけられたのに違いはないのだからその覚悟は必要よ？」

ええ、本当に厄介な人に目を付けられたわよ？ 八重さん

あの人が目をつけたって事は早かれ遅かれ父さんと母さんの目にも止まる…

貴女の周りはいよいよ騒がしくなるわよ？ 覚悟しておきなさい

…

アタシの知らないところで回り始めた運命の歯車はどんな糸を紡ぐのだろうか？

初めての大型連休…皆で動物園

③ 皆で動物園

ゲートを潜るやいなや駆け出そうとするアタシの肩を掴み

「戸塚君、手を離れたら風船みたいに何処かに飛んでいってしま
う八重さんの手をしっかりと握っておきなさい」

そう言いながらアタシの右手を掴み左手を握るように示唆すると

「あーっ、雪ノ下さんずるいつ！ あーしだって八重と手を繋ぎ
たいんだけどおっつ？」

そう優美子に言われた雪乃は

「できればこの小さな手を離したくは無いのだけど八重さんが心
配なのは三浦さん… 貴女も同じなのだから適当なタイミングで交
代しましょう」

そう言っつ溜め息を吐くと

「そんならあたしだって八重ちゃんと手を繋ぎたいよ？ あたし
も一人っ子だから弟か妹がほしいって思ってたもんっ！」

「なら俺も…」「却下っ！」「な、なんで？」

と、とりつくしまもなく雪乃と優美子の二人に否決された隼人、乙
別にお前と手を繋ぎたいとか思わんし材木、脂汗でネトネトのお前
と手を繋ぐのはそれ以上にイヤなんだからな？ そんな目でアタシ
を見てもムダだと知れ

初めて生で見る動物達に変なテンションのアタシはシロクマを見
ながらアタシは

「戸塚、アタシ一度で良いからしろくまカフェ行っつみたいなあ
っつ…」

とか、ライオン見ながら

「ある意味ライオンっつて八の理想像なんかもね…」
そう言っつてみたり虎を見ては

「よく酔っぱらいの事を大虎ってゆーけど平塚先生は泣き上戸だったよ？」

と、ひたすらアホな発言を繰り返すアタシに呆れた雪乃が

「そろそろお昼も兼ねて休憩しましょう、アホの子にこれ以上アホな発言をさせないためにも……」

雪乃にアホの子呼びわりされ

（天下のガハマさんこと由比ガ浜結衣を差し置いて何でアタシがアホの子なんだよ？）

陽乃さんが用意してくれ持たせて（当然持つのは男子）くれた行楽弁当を広げてランチタイム

飲み物は男子三人：もちろん材木、戸部、隼人の三人に買いにいかせてな

正方形のテーブルアタシを起点にするなら左隣、すなわち1時に彩加、2時に優美子、3時に隼人、4時に材木でアタシの向かいの席は荷物置きになり8時に戸部、9時に姫菜、10時にガハマさん、11時に雪乃と言った配置になっている

作る方にはわりかし自信有るのに、食べる方：つまりテーブルマナーがかなりイタイアタシは今、彩加に口の回りを拭いてもらってる始末だ：だから姫菜と結衣は生暖かい目で見ないのっ！

そうでなくてもマジに情けないんだからさおまけに周囲の視線は

『仲の良い姉妹だね』

そう言ってるのがまるわかりなんだからな

午後一は彩加お薦めの動物ふれあい広場で動物達と触れ合うことにしたんだけどシャッター音がウザい

写真ばっか撮ってないで動物と触れ合えよっ！

そう思ってたけど、それがまさかアリスコーデでウサギと戯れるアタシを撮っていたなんて夢にも思わなかった……

材木がハンディカムなのはもちろん、雪乃迄が一眼レフを用意してる

その後、みんなでソフトクリームを食べながらのんびりしてたんだ

けどとにかくアクビが止まらない

「あら、随分と眠たそうね： そんなに今日が楽しみで眠れなかったのかしら？」

そう言われて

「それは否定しない、八の記憶にはあつてもアタシ自身は初めての動物園： しかも、この四人で来るんだからな： まあ、色々予定は変わっちゃまったけど楽しみにするのは当然だ

だか： 寝不足の原因は他に有って、夕べ親父が部下を連れてきてな： ある程度の時間までつまみ作りにつき合っけて起きてたんだよ：」

そう言つてアタシの記憶は途切れた

彩加の膝を借りて一時間ほど寝ていたらしい：

眠気覚ましに顔を洗いアタシの焼いたクツキーを食べながらみんなもひと休み

最後に売店近くに設置してあるプリクラで思い出を形にして

お土産を買いにより、皆でお揃いのふーた君ストラップを買い小町にはサブレを買つて

後、ウサギ柄のスポーツタオル（彩加にプレゼント）とウサギのイラストがプリントされたストローホッパーを自分用に買ったんだ

そして家の前まで送つてくれた彩加にスポーツタオルを渡すと、驚いたけど彩加もウサギのチャームのついたヘアピンををプレゼントしてくれた：うん、アタシは幸福者だ

手を振りながらながら去つて行く戸塚を見えなくなるまで見送り家に入ろうとしたけど小町は留守らしく鍵を開けて入る

それからテニスコートで着替えた物も合わせて洗濯機を回し小町のサブレをテーブルに置き晩ご飯の支度

以前、まとめ焼きしておいたハンバーグを煮込みハンバーグにして付け合わせの温野菜サラダにコンソメスープ

今夜は二人とも帰らないから二人きりで過ごす夜

小町はサブレを食べながらテレビを見てアタシはクツキーを焼い

てから宿題を片付けて今夜は早めに寝ることにした

初めての大型連休：葉山隼人がフットサルに怪我で不参加なのは自業自得である

① 戸部とフットサル

今日もは小町朝ごはんとお弁当だけ作ればよいのでその分勉強に充てた

母ちゃんの昼飯は夕べのアタシ等が食べたおかずか冷蔵庫に入ってるからな

早朝テニスをしてからファミレスでだらだら過ごして早目のお昼を食べて彩加はテニススクールに行き：

アタシは優美子達を待ち隼人と戸部のフットサルに付き合うんだけど彩加が店を出た途端にこの有り様だ：

「ねえねえ、お友だちそれともお姉ちゃんかな？ 帰っちゃったよね？ 良かったら相席して良いかな？」

「良かったらこの後、俺らとカラオケかゲーセンでも行かね？」と、盛りのついたオスイヌみたく鼻息荒くすり寄ってきやんのな、マジキモいんですけど？

「んな暇ない、時期にダチが迎えに来るから合流して一緒にフットサルする予定だ

そして待ってる間は参考書を読んでいたからできれば静かにしてほしいんだが？」

アタシにそう軽くあしらわれ顔を赤くして睨んでるがはつきり言ったら怖くないから済まして参考書をよ見続けていると

「なあおい、この女が読んでる参考書って大学受験の参考書じゃねえの？ 俺の兄貴が持つてるのと同じなんだけど？」

そう、二人がひそひそ話してる後ろから
「それ、雪ノ下さんお勧めの参考書だろ？」

そう聞いてくる声が出たけど声の主はわかっているから

「まあね保健室登校の経験してアタシが目指すべきものは何なのかっ！　って考えたんだよね…　具体的にはまだナニも決まってるけど福祉の仕事についてみようかな？　ともさ」

「ってそう雪乃に話したら、国公立の福祉大学か福祉学部のある大学目指したらどうかしら？　って言われたんだよね…」

アタシがそう答えると

「確かにその方が卒業後の選択肢の幅もも広がるだろうからね（多分その時期が来たら私と一緒にT大目指しましょうと言う気だろうね）」

※ 実在しない学部ですけど有ると言う設定でご理解ください
そう隼人も答えてくれたが

「で、この子らは知り合い？」

そう聞いてきたから

「知らんけど彩加の妹と勘違いしてるっぽいから中学生と勘違いされたっぽいんだよね

マジに泣きそーだわ、昨日も動物園で小学1〜2年生くらいの子にあの子とか言われてるしね」

そう言っつて溜め息を吐いてたら優美子に睨まれた二人はスゴスゴと退散していき

「取り敢えず座ってランチ注文したら？　皆、お昼未だなんだろう？」

そう言っつたらアタシの左隣に結衣、右隣に優美子にその隣に姫菜向かいの男子はまたしても結衣の前は戸部でアタシの前に隼人、その隣が大和で更にその隣が大岡となり四者それぞれの表情を浮かべてる

因みに隼人が陽乃さんから預かったアタシの特製ジャージはイナヅマジヤパンの10番で早速着替えたのな

食事の後、隼人達がよく使ってると言うフットサルのコートに案内されるとサッカー部のメンツも7〜8人ほど居て一緒に向かった

みんなでウォーミングアップしているとサッカー部のGKとGK

やってもらおう大和以外でチーム分け

最初のチーム分けはアタシ、大岡にサッカー部のGKとDFとMF
Fって紹介された三人に対するは戸部に大和(GK)にサッカー部の
三人

アタシのプレイスタイルは走り回ってガンガンシュートを放つと
言うよりは野良猫がするると駆け回るように自由気ままで気まぐれ
にパスをだしシュート決める

ナニより切り返しの早さと一瞬の飛び出しが最大の武器

身体が小さく鋭いその切り返しから一瞬姿を消すアタシを人はい
つの間にか a mirage cat や stray cat
とか alley cat と呼ぶようになった…

そう… そこまでは未だ、ナンとか妥協できるから良いんだがな…
やいっ！こら、戸部っ！ ダレが残像拳の使い手なんだよ？ て
めっ、カメハメ波でぶっ飛ばすぞっ！

まあ、確かに戸部みたく豪快なシュートは打てないけど巧みなフェ
イントを駆使して相手の裏をかきシュート決めるアタシは泥棒猫で
蜃気楼の猫なのかもね？

でもさ、ステルス機能に次いで a mirage って八やアタ
シの存在感って一体…
マジに泣けてくるわ

そうこうしてたらアタシ達のコート周りにすごいギャラリーが集
まっちゃって…

その上にあの人… 雪ノ下陽乃が現れアタシ等のチームに入ると
言い出した

そのせいで対戦申し込みとかスゴい事になってきたらしいんです
けど？

まあそれは隼人と姫菜に優美子が対応してるんだけどね

第二チームは未々終わらないからアタシ大岡が引っ込みサッカー
部の二人が交代で入ったんだ

コートを見ながら時おり姫菜がコートを見てたら怪しげなオーラを放ちながら興奮してる

やっぱり腐海の住人みたいな気がするんだけど…

第二チームの第二試合ゲームは社会人のチームと対戦することになりアタシ、陽乃さん、大岡が in サッカー部員三人が out でゲーム開始

うん、陽乃さんのゲームメイクスゴくて例えるならそうまるで神のタクト…

相手チームの動きまで、フィールド上の全てを把握してるんだよなだからアタシもあのセリフを又言う

「こんな事も有ろうかとおっ♪」

そう言つて小さく蹴り上げたボールに向かって飛び込み月面宙返りを決め右足の踵を思いきり叩き落としコート…キーパーの足元に叩き付けると一瞬の判断ミスが命取り

バウンドの方向を見誤りボールはキーパーの脇をすり抜けてネットを揺らしたんだよね

アタシの必殺シュート swung axe の完成の瞬間だ

試合が終わり握手を交わすアタシは結構疲れて無理って感じ時間的にも無理だけどね

アタシはお手洗いでお着替えしてみんなも着替えを終えてエネルギー補給

みんなでアタシが用意したクッキーと結衣の用意したお菓子を摘まみながら反省会

自慢じゃないけどアタシの頭は素通りだけどな

ポーッと聞き流しながらマツカンをちびちび飲んでたら中学生らしき男の子達がやつて来て

「なあ、お前さあ…今度いつくんだよ？」

そう聞かれたから

「未定、アタシ一人じゃ来ないし他の連中も連休明けたらいいよいいインターハイに…ア、一人だけ甲子園がいるけどまあそれに向

けて早々ここに来る機会も無いだろうしな」

そう答えたら

「何でだよ一人でくりや良いじゃねえかよ？」

そう言われたけど

「アタシはボーイフレンドのテニスの特訓に付き合ってた忙しいんだよ」

そう答えを返すと

「お前、男居るの？」

「居るよ」

あつさり答えを返すと

「まさかあの金髪野郎か？」

恨みのこもった目で隼人を睨んでるから

「それは勘弁してくれと答えるぞ、アイツと付き合ったら漏れなくアイツのファンの女共の怨念まで付いてくるからな、マジ勘弁だ」

そう言ったら

「まあな、アイツの女になるヤツは大変だろうな…で、お前どこ中？」

そう聞かれたから

「悪いがこう見えてもアタシは総武高の二年生だ」

そーアタシが無い胸張って答えたら

「どー見てもそれはないっ！」

そう言われて軽くシヨック受けましたがな… うん、この扱い慣れたくないねって思ってたなら

「うん、八重ちゃんはお前達の2ーFのクラスメイトだよ？」

結衣がそう答えると姫菜と優美子も頷いたからやっと思つたが中学生達は結局今日のところはアタシのメアドを聞いて引き下がりましたが面倒臭いな… としか感じなかったが陽乃さんに思いきり笑われていた

因みにいつの間で作ったのか知らないけどアタシのホームページアクセスアドレスを教えていたからアタシもアクセスしてみた

そしたらアルバムには、昨日のテニスウエアとアリスコーデに今日のテニスウエアと、今着ているジャージの画像が最新の画像として掲載されていたんだけど問題はそのアクセス数で既に四桁を越えている

マジっすか？

「これからどんどん更新するから、楽しみにしてなよねっ♪」

そう言っただけで問題は陽乃さんだけだナゼ陽乃さんが約束するんですか？ 解せぬ

帰りにスーパーに寄り今夜のご飯と明日の朝と昼のお弁当用の買い物しないとな

そう思っただけで陽乃さんがカートを押しているんですけどしかもアタシの間き間違いないやなきや明日からの旅行に同行するって…

支払いを済ませ家に帰ると親父もその後すぐに帰ってきたから

お父さくんっ、先に風呂入ってなよっ… その間に晩ご飯の支度してるからさあーっ！

そー言っただけで焼きと鰹の叩きにワカメの味噌汁に手抜きのはじきの煮しめ… と、言うメニューで出しいつもとは違う四人での夕食なんだと親父と小町はナニも言わない

いつものタコキムチ (タコ嫌いの母ちゃん居ない時限定) でビールを飲んでる

ん、なんか知らなかったのアタシだけってマジ？

まあそんな事はどうでも良いか？

そう思いながら明日の朝飯とお弁当に親父と母ちゃんの… 特に母ちゃんは仮眠から覚めたら飲むだろうからなつまみも用意しとかない… そう思っただけで支度をしてるところだ

初めての大型連休…出発進行

① 家族旅行に go

アタシはいつものように早起きして朝食用のお握りとお昼ご飯のお弁当を用意している

小町はギリギリまで寝てるだろうし… あ、陽乃さんが起きてきた親父は寝ぼけ眼で運転されちゃ怖いからそれより早く起きてもらうが取り敢えず飯の支度を手伝ってくれる陽乃さん

なので当初の予定じゃちらし寿司の素を使っただけの手抜きメニューがグレードアップ

チルド室の短冊をスライスしてちらし寿司の上にお刺身を乗せて海鮮ちらし寿司になりましたあゝ

小町風に表現するならどんどんパフパフ♪ だったっけ？

おかすは味つきのメンチカツ、唐揚げ、コロツケ、揚げ餃子で、因みに冷食じゃなくアタシが揚げたのを冷凍保存したもの

母ちゃんは用意してある荷物を親父使って車に積み込ませて職場前で拾い軽く食べてもらってから着くまで寝てもらおう予定

だから、アタシがナビゲーター兼親父の世話係り

第一クーラーボックスに缶ビール兼親父の世話係り
トル二本と親父と母ちゃんのつまみになりそうな物

第二クーラーボックスにはお弁当とデザートに冷やしておいた方が美味しいおやつ

アタシのクーラーバッグには500cc凍らせた麦茶にウーロン茶、アタシのマツカンが各四本ずつ

午後紅茶のストレートにミルクティーとレモンティー各二本が入ってるし他には親父達のつまみになる乾きものやアタシ等のお菓子もちらん入ってる

そしてアタシの着替えは陽乃さんが用意した某ゲームのヒロイン

が来ていた羽織袴にブーツ：

もちろんこれもコスプレ写真館を飾るんだけど夕べの晩御飯に今朝の朝御飯とお弁当が MY cooking ってタイトルのアルバムに収録されてるんですけど？

それに後ひとつは動画館でアリスコーデのアタシがウサギと戯れる動画が流れてるらしい

荷物を詰め込み出発進行

途中母ちゃんの職場前で母ちゃんを拾い高速に乗り入れ最初の休憩を兼ねて朝ごはんを食べるためパーキングエリアに寄る

おにぎりとだし巻き玉子をかじりながらビールを飲む母ちゃん

おにぎりを食べながらお茶を飲むアタシ達の家族旅行はようやく始まったのかもしれない

出発前にアタシと小町に陽乃さんはコンビニでソフトクリームを買い車内で食べながら過ごし親父には出発前に用意したコーヒーを飲んでもらい未ダステンレスボトルに入っている

親父には特別にアタシが最近愛用し始めたストローホッパーにはちみつレモン水を入れて飲ませてやろう：帰ったらよく洗おう

途中のパーキングエリアでもう一度休憩だけど母ちゃんは目覚めない

親父は無糖ブラックのホット、アタシはマツカンホットにたい焼きで小町はたい焼きアイスってまたアイスかよ？と後で飲むミルクココアのアイス

で、母ちゃん用にはアイスのブラックコーヒーを買いアタシのクーラーバッグにしまうことにした

高速を降りて新緑が生い茂る山奥へと進むと谷川沿いにある無料パーキング発見しやっとな母ちゃんも目を覚ましたからそこでお昼ご飯になり

谷川に沿って気持ちの良い風を受けながら食べるお弁当は美味しい

皆それぞれに満腹になったようで寛いでるから母ちゃんには二度目の休憩のときに買ったコーヒを渡してのんでもらってる

ここから目的地まで一時間もかからないそうだからチエツクインには未だ早いからこの近くにあるマス釣り場に行きたいと親父がリクエスト

それ以外には特に見るべき観光スポット(古刹や知る人ぞ知るなどの隠れた名所はあるにはあるそんだそうですが…)

隠れすぎて慣れない人には中々たどり着けないので一般的にながイドブツクには載ってません)

は見当たらないので立ち寄ることになったんだよね

えっ、アタシ? うん、ちよつと興味あるからやってみたい: かな

釣竿: 大きいな、これでマスが掛かったらちちゃんと寄せられるんだろうか? かなり無理な気がするな

母ちゃんはアユの甘露煮をツマミにビールを飲みながらで小町はと言えば今度はかき氷食べてるけどいい加減にしとかないとお腹壊すぞ?

なんとか餌を放り込み: え、ぐぐつと竿が重くなって: なんだろ? この不思議な感覚は: 自分の体がまるで自分のものじゃないみたいな:

気が付いたらマスを釣り上げていたんだよね

「持ち帰るなら持ち帰り料を払えばエラや内蔵処理するが?」

そう聞かれて返事に困っているとあんた等か今夜泊まるのはこの先の○○温泉だろ?

あそこならこいつを持って見せりや晩飯の時に一緒に焼いてだしてくれぞ?

その話を聞いた母ちゃんがOKを出し処理してもらいアタシは再挑戦

しばらくしたらすぐに掛かって二匹目ゲットして結局アタシは60分で12匹で陽乃さんが8匹に親父は残念ながら3匹に終り小町に鼻で笑われたぞ? しつかりしなよ…

因みに陽乃の依頼受けた小町はカメラマンとなって動画の撮影に写メりまくりで陽乃が立ち上げたアタシのコスプレブログに送信

因みに最近はログホラのオンラインにハマっているらしくアタシも誘われてやっているんだはが：

中でもお気に入りナンがアカツキで、アタシのハンネも『 飴色の髪のアカツキ 』になっているのに相応しいくらいに主に彼女のコスプレをさせられる事になるんだよな… ってアンタの事、梅子って呼ぶぞ？ 陽乃さん

因みに、今回着替えのコーデに雨傘の代わりに日傘を持たされているんだが… 羽織袴を着せられているので行きも帰りも羽織袴なんだよな…

時間一杯釣りを楽しんでから売店で親父は自分用にイワナの骨酒用の干物で母ちゃんはマスの薫製にアタシはなぜか置いてあったキャビアの瓶詰めを雪ノ下家に買うことに…

その他に親父は会社用にはアユの甘露煮をいくつか買い、アタシも喜ぶかはわからないけど平塚先生と鵜飼先生に買った

それから目的地に向けて出発し到着したときは既に三時を回りチエツクイン可能な時間帯になってたから母ちゃんが手続き中

(んゝっ…やっぱり全部で23匹は多すぎるよね？)

そう思っただけでたら

「 あゝっ、比企谷課長おゝっ、どおくもでえゝすっ ♪ 」

そんな結衣を連想させるアホっぽい愛挨拶するのが居る会社だったのかよ？ そう考えるとちよつとシヨックなアタシか振り向くと

わりかしイケメンっぽい五人の男の人と結衣と似た雰囲気の子の人が三人居て親父に挨拶してる

うん、三日前に見た人は一人もいないな… ってそう思ってたなら

「 おう、残りの二組はお前等のグループだったのか？ 」

もしお前らが嫌じゃなきゃ俺の家族と一緒に晩飯食わねえか？

ちよつとマス釣り場でマスを釣り過ぎちまっただけな 」

そう親父が声を掛けると

「 お父さん、見栄はよくないよ？ お父さんが釣ったの他のより小さい三匹で後は全部お姉ちゃん達が釣ったんじゃない？ 」

そう小町に言われて焦る親父だけでも良いアタシは出され
たお茶を静かに啜ってた

初めての大型連休… 湯上がりの一時

② 湯上がりの水分補給になっちゃんを飲むアタシらは間違つてないはずだ

アタシも小町もぼーっとしてベンチに座ってるが土産物の絞り染めの浴衣を着ているアタシと小町はかなり注目を集めているけど既に集中力が欠けてきているアタシは苦にしない

と、言うかその状況に気付いてない

仕事の早い陽乃さんは既に浴衣の関係者にアタシのホームページ（って、よく考えたらアタシは編集にノータッチなだけど？）を見てもらい貴社の浴衣を着た姿をホームページに乗せたいんですけど宜しいでしょうか？」

そう言つて交渉して許可を貰ったらしく、早速載せているのだが結構反響があつて問い合わせが既に数件入っているらしい

母ちゃんが有料のマッサージチェアに座つて骨休めをしている

今の時間は午後4時30分で晩ご飯は6時からか…ホント中途半端な時間だな…部屋で参考書でも見てたいな

つか、ここ煩いんだけど？

溜め息を吐いてなっちゃんを飲み干すアタシだけど小町はC.C. Lemonを飲んでる

親父達が風呂場で何してたかは知らないけどやつとでできやがった

母ちゃんのマッサージも終りお姉さん達もマリカのキリが良いみたいでこつち来た

未だ一時間ちよつとあるけどナニもする気はない

「お姉ちゃん、旅の思い出に家族でプリクラするのです」

そう小町に言われて溜め息を吐きつつ

「ダブルピースとか恥ずかしいポーズしないからね？そーゆー派手なの苦手なんだからさ」

一枚目は前列にアタシと小町がならんで：「んんっ！」小町がいきなりほっぺをくっつけてきたからめっちゃ驚いて声無き声をあげちゃったよ

二枚目、センターにアタシと親父アタシの隣には小町で親父の隣は母ちゃん

三枚目アタシと小町のポジションオンチェンジで小町のご機嫌はあまりよろしくない

ラストは親父と母ちゃんがセンターで親父の隣はアタシに母ちゃんの隣は小町撮影が終り小町と母ちゃんが二人で落書きしてる

仕上がったみたい：うくん、これって誰にも見せられないな：特に戸塚にはな

母ちゃん：あんた、いったい何やってんのさ？

取り敢えず未だ時間はあるからお土産見に行こう

って訳で売店来た：けど思い付かないから三人とも温泉まんじゅうにしよう

姫菜に優美子には二人で温泉まんじゅう大きい箱でいっか？

隼人達はクツキー、大きい箱な

でも、自分用のお土産がなかなか決まらないな：

ナニ買おうか？

へーっ、あんまり知られてないけどラベンダーのお花畑があるんだなあー：

そう思いながらアタシがぼーっとしてたら小町と母ちゃんが来て

「ほうほうラベンダー畑ですか：」

「ふーん：面白そうだね、行ってみるかい？」

二人がそう言っつてニヤニヤ笑ってるけどアタシは気付かないで考え込んでたら

「別に今から富良野連れてけとか言うんじゃないしふだんワガママ言わないあんたが可愛く『行きたいの』っていや連れてっくれるさっ♪」

そう言われて観光案内用のパンフレットを一枚もらっていくこと

にしたんだ

結局温泉まんじゅうはアタシは保留になり何も買わずに売店を後
にすることになったが母ちゃんはご近所さんに何箱か買ったみたい
だった

取り敢えず親父に『連れてって』ってオネガイする事を決意して部
屋に戻ることにした

そして晩ご飯…とゆーか宴会？

この町はチョウザメの温泉養殖が始まった時にロシア料理を学び
始めた人達がいてこの旅館の板長さんもその一人で、本格的なコース
料理はもちろんボルシチを単品で頼めるしピロシキも売店で…し
かもタイミングが良ければ揚げたてが買えるんだって？

さすが安定のコミュカを誇る小町ちゃんはすぐに皆さんと打ち解
けたけどアタシには絶対無理だ

だからアタシは一人、会話の邪魔にならないようにだけ気を付けて
ご飯を食べてたら三人の中じゃ一番小柄な人が話し掛けてきた

「なんで八重ちゃんは何も話さないのかな？」

って余計なお世話な事をね

「……」

何も言わずに黙ってご飯を食べ続けるアタシに変わって

「その娘はコミュ症だね… あまり会話が得意じゃなくて、特に慣
れない人の前だと貝のように口を閉ざしちゃうんだよ

そのお陰で色々誤解されやすいんだけどね…」

そう母ちゃんが答えると

「ふーん、可愛いのもつたいない話ですね？」

「……」

(ナニがもつたいないのかよくわからん)

そう思いながら次々に消費されてくビールを見ながら

「ビールもう残り少ないよ？ ウィスキー開ける？」

アタシがそう母ちゃんに小声で聞いたら

「そうだね、用意しておくれ…」

母ちゃんがそう言つて頷いたから

「お父さん、そろそろウイスキーに切り替える？ ビール残り少ないよ？」

そうアタシが言つたら

「あー、なら麦茶で割つてくれ」

だつてさ、だからアタシは溜め息を溢して麦茶割りを作り

「はいっ…」

そう言つて渡すと

「八重、私も頼むよ」

そう母ちゃんにそう言われて

「ストレートティーとレモンティーが一本ずつにミルクティーが二本あるしティーバッグも有るから温かいのもだせるけど？」

アタシがそう言つたら

「なら、ストレートティーで頼むよ」

そう言われて紅茶割りを作つてると

「あー…八重ちゃん、あたしはミルクティー」

「私はホットでミルクティー」

「私はレモンティー」

と、お姉さん達もリクエストして用意してたらビールを飲み干した男性陣もそれぞれにリクエストしたので紅茶はなくなりウイスキーもヤバイことになってきた

だからアタシはその事を母ちゃんに告げると親父の財布から一万円札円札を抜き取り

「八重、小町、ちよつと買い出しにいくから荷物持ちに付き合いな」

そう言われて溜め息を吐くアタシ達が部屋を出るとあからさまにやな顔をしてる小町だつたけど

カクテルやらウイスキーやらを買い物籠に入れながら

「八重、つまみは未だあるのかい？」

そう聞いてきたから

「有るも何も未だ手付かずじゃん？」
そう答えたら

「なら良いあとソフトドリンクとあんたらと陽乃ちゃんのアイスを適当に見繕って買終りだよ、見てきな」

そう言われ顔を見合わせてから

「はいっ！」

と、答えると小町はハーケンドッツのバニラにアタシは雪見大福で陽乃さんにはジャンボもなかをそれぞれに選んで籠に入れた

部屋に戻ると一応布団は敷いてあつたけどね

アタシと小町がアイスを食べてたら親父が欲しがり仕方無くアタシの雪見大福を一個、泣く泣く渡したら

「明日の休憩はサ店でも入ってパフェでも食うか？」

そう親父がそう言ったらさすが小町、素早い変わり身で

「お父さん、あーん」

そう言って食べさせて自分の分も確保したし

「おじ様どうぞっ♪」

そう言つて半分に割つてその半分を親父に渡しているのを見ていた、女性陣が一番後輩の男子社員にパシらせてた

その後いつまで続いたかわからない宴会は、真空パックの馬刺になりぶしをスライスして切れてるチーズに柿の種わさび味を出した辺りで記憶が途切れている

アタシのマツカン以外は用意した物はなくなり買い足したのもも烏龍茶とコーラにカクテル数本残っただけだった

こうして比企谷家の温泉旅行一日目はぶじ？に幕を閉じたのだった

海老名姫菜のバーズデー

「八重、ちょっと待つしつ!」

優美子にその声をかけられたアタシが振り向くと険しい表情の優美子が

「結衣に話しは聞いてないの?」

今日は姫菜の誕生日だからあーし、八重、結衣の三人がお泊まりしてパジャマパーティーするって

だからからお泊まりセットもって集合、もちろん拒否権はないから覚悟しておけしつ! って伝えるように言ったはずなんだけどおっつ?」

そう言われてアタシは微笑みを浮かべて

「もちろん初耳だよおっつ!でも優美子、重大な問題があるけどアタシは姫菜の家知らないんだけど?」

それに夕方まで紗希ん家居るからパジャマ取りに行く暇無いんだけど?」

そうアタシが言うのと優美子に睨まれごめんと手を合わせる結衣は汚名返上とばかりに

「八重ちゃんと紗希ちゃんの家は両方とも知ってるからあたしに任せて八重ちゃんの妹の小町ちゃんに頼んで用意してもらおうからさ!」

そう結衣が言ったので

「ならお泊まりセットは小町に用意させとくから川崎家に来なよ?」

アタシはそう言って小町に電話してその事を伝えた

いつものようにけーちゃんのお迎えに行きけーちゃん

と蒼空とおやつを食べて一緒に過ごし…

小町と紗希と大志の分も晩ご飯を用意して蒼空とけーちゃんに晩ご飯を食べさせて三人の帰りを待ち

「悪い、小町今日泊まりだ…大志も小町を送ってやって…」ナニ言ってるんだい?今日は両親帰ってこないんだろ?家に泊まらせるからた

まにはあたしに頼りな」

そう言われて

「あー、うん…ありがとう、よろしく頼む…大志もな」

アタシはそう言つて迎えに来た結衣と姫菜の家に向かった薄い本を勧められて困つたがそれ以上に

「なあ、パジャマパーティーってナニすんだ？」

アタシは友達ん家泊めてもらったことないから知らんのだけど？」
そう言つたら不憫な子を見る目で見られた…ナゼだ？

まあ、それはおいといてやはり貢物はアタシ…アタシと彩加の話を聞きたかつたらしい

なんつってもコイバナ嫌いな女子はあんま居ないだろうからな？

「取り敢えず家は母ちゃんに会つてもらつたしアタシは彩加のご両親に会わせてもらつてるしお母さんには彩加好みの料理や味付け習つてる」

そう答えたら

「まあ、真剣な付き合いならそれも大切なんだろうけど…」

八重ちゃん達、キスとか未だしてないのかなあ〜？つて思ったんだけどどうかな？」

そう聞かれて

「無いぞ？それ以前に彩加は純情だしアタシは未だに彩加との距離感わからなくて悩んでるんだからな？」

そう答えたら

「八重ちゃんだけじゃなく比企谷君の記憶にも？」

そう姫菜に聞かれて

「無いぞ？八は友達いなかったからな、いじめるヤツはいてもさ」

まあそんなことはおいといて未だに手が触れ合つただけでも顔を真っ赤にしてる彩加とキスなんて未々先なんじゃないの？」

そう言つて彩加との進行状況の話を打ち切つた

その後三人にも聞いたけど姫菜と結衣は

「今のところそんな気になる相手は居ない居ない」

だつてさ…戸部乙

それで優美子は

「気になるヤツは居るんだけどどうも片思いつぼくて…」

そう寂しそうに言う優美子を見ながら

（隼人めえ…オマエ何やってんの？バカじゃね？バカだろ）

そう他人事のように思つてた

後はクラス内の恋愛模様の話しになつたけどそれには興味ないつか彩加とグループのメンバー以外あんまし接触ないから知らんだけど？

そんな話をしてる内に大あくびのアタシは真つ先に寝落ちた

早朝目を覚ますと姫菜も起きてて

「普通つてなんだろうね？」

そう聞いてきたから

「アタシ等を否定するもの、アタシと言う存在自体が異常でイレギユラーなんだからな…」

だからアタシに普通を求めるなど言いたい…あたしにそれを求めたら存在を消さなきゃいけないんだからな…」

アタシがそう言う

「そうだね、八重ちゃんの悩みに比べたらあたたしの悩みなんか「それ、時分で言つてどーすんの？」

ぶつちやけ他人にとつちや人の悩みなんかどーでも良いんだよ？

それでも姫菜が悩むって事はそれが姫菜にとっては大事なことなんだつてアタシは思う」

アタシがそう話すと

「そつか…八重ちゃんにはそう感じるんだね…」

吐き出すように言う姫菜に

「まああれだ、コミュニケーション低いのがアタシなりには一緒に悩むことくらいはできるから答えを充てにしないで愚痴りなよ？

時間があるときならいつでも聞くからさ」

そう気楽に言う

「うん、そーだね…話し聞いてもらっただけでちよつと気楽になつ

たよ」

「そう言われたから

「当たり前だろ？ちよこちよこつと話し聞いただけで悩み解決できるんならアタシは今日からカウンセラーになる」

「そう言つて小さく笑い

「取り敢えずそろそろ適当な時間だから夕べ泊めてもらったお礼に朝ご飯の支度を手伝おうつて思うんだ…」

「そう言つて朝食の支度の手伝いとパーティーの支度を手伝いをした

「因みに今日のアタシは陽乃さんが特別注文して用意した雪ノ下家のメイドさん達が着てるメイド服一式

「もちろんパーティーのサポート役を務めるからだ

「姫菜が喜んでくれると良いな…」

「そう呟いて料理を手伝い続けた…」

初めての大型連休… コスプレ少女とラベンダー畑

③ ラベンダー畑

いつもと変わらない時間に目覚めるアタシは顔を洗ってからマツカンを飲んで目を覚ます

それから小町と母ちゃんが起きる五時半前まで問題集に取り組みアタシの次に目を覚ました陽乃さんに習いながら勉強を続け起きた二人と一緒に四人で朝風呂に

陽乃さんはタベの内に早朝他のお客さんが居ないなら撮影してホームページに載せて良いって話がついてるから早速撮影開始

その間母ちゃんはゆつくりのんびり入浴しアルコールを抜いていた

七時前に小町に叩き…イヤ、蹴り起こされた親父さまあ…とモニングビユツフエ

途中眠そうな顔で起きてきた親父の部下の人達と合流していつもとは違う賑やかな朝食

今日の予定を聞かれて

「お父さん、アタシ…ラベンダー畑に見に行きたいの、良いでしょ？」

親父の袖を掴み涙目の上で使いで一発OK

「そうゆうー訳でラベンダー畑に行くことになった」

((((())) (())) (())) (())) (())) (()))

部下の人にまでそう思われた親父、アホ過ぎるだろ？

皆さんもそのつもりだったらしく一緒に行くことに

今日は新作のアキツキ雨に濡れてコーデのせいかな普段より注目を集めてるし親父がはしゃいで写真撮りまくり

(親父… 小町と母ちゃん引いてるし部下の方達は皆さん苦笑いしてるよ？)

そう思ってたなら陽乃さんもだけど結構な人達がラベンダーをバツグにアタシの写真を撮っていた

ラベンダーのアイスを食べお土産に雪乃にはハーブティーの詰め合わせと由依にはラベンダーのクッキーで戸塚にはマカロン

優美子と姫菜に隼人のグループにはラベンダークッキーと温泉まんじゅうを買うことにしたんだ

で、肝心？ の自分用はラベンダーのエッセンスとアロマキャンドルを買いましたよ

うん、いつ使おうか？

何だかんだでお昼近くまですごし早めのランチ

お奨めメニューに母ちゃんも生ビールを頼みますよ

楽しいランチタイムも終りいよいよアタシ達も帰る時間になり車内では補充した乾き物を摘まみながらタバコの残り物のカクテルを飲む母ちゃんとポテトチップス摘まみながらコーラを飲む小町

アタシは最後の一缶のマツカンをチビチビ飲んでいる

途中のサーブエリアで小町はチョコパフェにアタシはフルーツパフェに陽乃さんはヨーグルトパフェ

親父がねだってくるから渋々一口ずつ食べさせる

高速を降りてすぐにあるファミレスで晩ご飯、もう結構遅いから

無事に家に帰り着いて荷物を片付けてたら驚いた

親父が母ちゃん、アタシ、小町に陽乃さんとと紙袋を渡すからなんだろう？ そう思ってた見たらラベンダー絞りのワンピース、七分袖

アタシと小町は頬に母ちゃんは口にキスした感謝の気持ちをを表した

うん、最初に袖を通すのは彩加とのデートに決まりだ、異論は認めん

ある程度片付きコーヒを淹れて飲みながらアタシと小町はメールをチェックしたらスゴいことに

どうせ入らないからと昨日着いてから切ったのを忘れて切ったままにしてたらメールの山

特に酷いのが結衣からスパムでドンだけ送ってきたの？ って感じ

まず彩加に無事帰宅を知らせそれから結衣と雪乃に送信し最後に結衣以外の隼人のグループに送信した

しばらくラインで話した後に一抜けで早く寝る事にしたんだ
明日もまたテニスしてその後デートっぽい事するからな、オヤス
ミ…彩加

初めての大型連休…彩加と初デート!?

① 連休最終日

普通に朝から出勤の親父に朝飯と弁当を用意し見送り夜勤の母ちゃんと小町の朝ご飯と昼ご飯用の弁当を作り

彩加に渡すお土産におにぎり、お弁当にお茶とはちみつレモンを忘れずに持って出掛けた

練習の前にお土産のマカロンを渡してから練習スタート

一時間程サーブとレシーブの練習をして、休憩を挟み一時間弱ずつ打ち合いをして終盤に対優美子用に検討中の戦術考案に付き合っ貰ったんだけど…

取り敢えず、理屈的にはゴルフのエクスペディションバックスピン並のバックスピンロブ?に各種スピンを十二分に間かせたロブなを打てないかなって思ってるんだよね…

それを色々試してから、アタシ達の連休中の練習を終了したんだ今日はファッションは雪乃に買ってもらったサマードレスの上カーデイガンを羽織ってるし編み上げのサンダルを履いてる

遅い朝食を食べ今日の目的地のララポにgo
特に目的はないけどファッションに疎いアタシはとにかく戸塚の好みを知りたいから一緒に見て回りたいだけだから

好みのタイプは総じて清楚系?らしくそんな感じの服を薦めてくれた

何軒か廻ってお弁当タイム

二人で無料休憩コーナーに行きお弁当とお茶を出して食べ始める
この連休中にわかったのはどうやら彩加は甘い卵焼きが好きらしい

香辛料も平気で結構辛いのも平気らしくチゲ鍋とか誘われたらどうしようとか気の早い心配しとりますがそんな時はマジどうしょ?

結構肉食系だけど基本好き嫌いはないらしい

でも、やつぱり和食が好きみたい…まあ、今現在わかってるのはそんなところかな？

デザートに柏餅を出して食べて一休みしてたらみたくもないヤツが現れた…材木だ

どうやらテイクアウトの弁当を買ったは良いが席が見付からず彷徨っているらしい

彩加は未だ気付いてないけど友達（材木は彩加の友達認定を受けてるらしい）大事っ♪ ↑って材木相手だと妖怪ウオッチのノリで良いと思うアタシは間違ってるはず？

だから気付いたら呼ぶのは間違いないだろうから誠に遺憾ながら声を掛ける…の前に

「戸塚、材木が席見付からずにうろうろしてるけど呼ぶか？」
そう確認したら

「えっ、材木座君が？うん、呼んであげよっ♪」
そう、思いきり良い笑顔で言ってくれるからやつぱりな… そう思
いながら

「材木、席空いてるからこつちにこーいっ！」
って、呼んだら気付かなかったヤツまで寄ってきやがった… 隼人
だ

「おう、これはこれは八重殿… 忝ないな」
そう言ってアタシの正面に座ると

「やあ、戸塚と八重も来てたんだね？ 俺も相席させてもらっても
良いかな？」

そう彩加に聞くとお人好しの彩加が二つ返事で

「うん、もちろん良いよっ♪ 僕達友達でしょ？」
と、良い笑顔で答え隼人も笑顔で

「助かった、感謝するよ」

そう言っ席についてて始めたけど二人とも飲み物を用意し忘れたらしいから溜め息を吐いて未だ口をつけてない麦茶をクーラーバッグから出して

「麦茶でよけりゃのむか？」

「そう言つて差し出すと」

「済まぬ八重殿、感謝する」

「ああ、ありがとう… 助かるよ」

「そう二人の個性を感じさせる謝意の言葉を述べた

アタシが麦茶に彩加ははちみつレモン水を飲みながら見てたらがつ喰らう材木はともかく隼人も結構早い

少なくともアタシの感覚ではあつという間に食べ終わつてお茶も空になり

「どうかかな？ 席に誘つてもらつたしお茶のお礼もあるから何か冷たいものでもおごるよ？」

「そう言われて

「いや、そんな気は使わなくても良い」

アタシが慌ててゆーと

「大丈夫だ、俺達（我等）がそうしたいんだからそうさせてくれ」

そのウザさに思わず消えろと言いたいが言つたら戸塚が悲しむからな…

「そう思つて

「アイスで良いからな？」

「そう言つたにも関わらず二人に連れられていった先のカフェで出されたのカップルシートに座らされてカップル専用のアイスパフェ

はつきり今のところあまり挑戦者は居ないそうでクリアした人達も居ないそうだと

（当たり前前だろ？ こんなばかでかいアイスパフェ… アタシと彩加じゃ真夏だつて食いきれるわけねえだろうがよっ！）

「そうアタシが思つてたら

「ああ、大丈夫、これ元々四人で挑戦する量だから

四人中にカップルがいれば良いし八重のハンディだからさ」

「そう言われて彩加が興味津々で見てるから諦めた

「では第一の関門はカップルのお二人にお約束的なあーんをお互いにし合つてください、証拠写真を撮りますからね」

そう言われて要求通りに実行した、お互いに真っ赤になりながら材木がスゴい勢いで掻き込み隼人も結構なスピードで食べアタシと彩加はアイスを堪能してる

周囲が哑然とするなかアタシ達は結構余裕でクリアし代金無料でララポで使える商品券、一万円分を記念品として貰った

なんかよくわからない展開になりアタシと彩加は二人に連れられてスポーツ用品店に行つてテニスウェアとフットサルようにジェフ市原のジャージと予備のソックスを二枚買つてくれた

ありがたくはあるけど正直貰つて良いのかわからないと言うかあまりよくない予感がするんだけど…

そしたら戸塚が

「ダメだよ、八重ちゃん… 人の親切はもつと素直に受け取らなきゃね？」

そう言われて一理あるけどコイツらナニが目的かは知らんけど下心がプンプン臭うんだよな

そう思うから苦笑いで返すしかなく二人謝意を述べありがたく受けと

「フットサルは大会終わるまではいかないがたまにはそれ着サツカーに顔を出してくれないかな？」

フットサルを一緒にやった部員達は歓迎するし八重のボールタッチの柔らかさは目を見張るものがあるからね」

そう言われて溜め息を吐いたアタシは

「その辺りは奉仕部の部長様と相談するから暫く待つて欲しい」

そう答えるのにとどめた

その後二人の邪魔によりデートつて雰囲気はすっかりなくなり家に帰つてから

「もしかしてデートかもしれないって浮かれてたのアタシだけだったのか？」

その眩きがアタシの連休を締める言葉となった

熱に浮かれた彩加のバースデー

涙のバースデー

今日は戸塚の十七回目の誕生日

ここ2〜3日ぎくしゃくしてる戸塚の為に頑張つてタルトを焼いたしプレゼントも用意してあるのに体は動かない

なんだろう… 視界がぼやける

体がますます重いしなんか寒いな

朝ご飯、食べて学校行なきや… 食欲無いけど

ブーツとして働かない頭で何とか登校したけど雨足の強い雨の中、長距離歩いたアタシはずぶ濡れで教室の中を水浸しにしている…

そもそも自分の体が濡れていることは勿論、震えていることにすら気付かなくてたまたま早く来た彩加が倒れているアタシに気付きびしょ濡れのアタシを保健室に連れて行ってくれた

原因不明の高熱を出して、こんこんと眠るアタシだけど熱は一向に下がる気配がなくついに救急車で搬送される事になった

元々、低体温のアタシが40℃を越えついに42℃に達しているのに息ひとつ乱れることなく穏やかな寝息を立てて寝ているアタシ

ただ時折涙を流し

「彩加ごめん… ごめん、彩加…」

そう呟いてたそうだ

アタシの状態は原因は勿論不明で主治医の葉山先生にすらTSの影響だろうとしか言い様がなかったらしい

強いて面会謝絶にする必要もないのは感染症の疑いはなく水分補給、栄養補給のための点滴以外は特に何かしてるわけでもないし目覚める気配もない

だから見舞いの客がアタシを疲れさせる心配もない

眠り続ける私の枕元に今、奉仕部の二人と彩加、葉山グループのメンバーから隼人と優美子に平塚先生が来てくれているらしい

そう、アタシはきつと夢を見ていたに違いない
裸のアタシと八は宙に浮いて病室内を見ていた

―初めましてとでも言うべきか?―

そう面倒くさそうに言う八に

―アタシ的には今更って気もするけどこうして話すのは初めてだから初めまして… なんだろうな… ―

そう溜め息混じりに言う

―まあそうなるわな ―

そう言われて取り敢えず謝ろうとしたら

―謝るな、俺がボツチに耐えられたのは俺が一人じゃない、いつも知らない誰かが傍に居てくれる

お前の存在にはずっと小さい頃から気付いていた

空想でも妄想でもない誰か (お前) がいてくれるって思えたから寂しくなかったんだしそもそもお前の責任じゃねえだろ?

こーなったのはよ

それにお前のお陰で楽しせてもらってるんだから俺が文句言ったらバチが当たるしな

だからお互い変な気遣いは無しでこれからも小町の事を頼むし応援するから戸塚とも仲良くしろよなっ♪ ―

そう言つて八はアタシの前から姿を消したけどアタシの長い夢が終わった訳じゃなかった

五日間眠りっぱなしだったけど目を覚ますと熱もあつという間に平熱に下がり体力、筋力、体重に食欲が落ちた以外は大した影響はない (自己診断) からさっさと退院したかったのに身体がアタシの言う事を聞いてくれなかった

起き上がる事すらできないアタシは都合二週間の入院を余儀なくされたから

医師や看護師に大人しくしてないと入院が長引く、そう言われても今すぐ退院したいアタシは全く聞く耳を持ち合わせていなくて…

ベッドから抜け出そうとしては何度でも床に落ちているのに全く懲

りてない

それを見兼ねた雪乃が彩加にそう話すと

「僕の誕生日に熱を出した事に罪悪感を感じてるから早く退院したいって焦ってるんだと思う…」

教えてくれてありがとう、雪ノ下さん… 明日今の八重ちゃんが大人しく療養生活を送ってくれるもを持つてくるから…」

そう言われて厳しい表情のまま

「ええ、わかったわ… 八重さんにちゃんと渡してもらいます」
そう言つて頷き合う二人だった

そのノートを手渡されたアタシが泣きながら抱き締めていたのは熱の余波だろうか？ 所々記憶が曖昧なアタシが知らない話だ

いずれにしてもそのノートを読みふけるアタシがベッドから抜け出ようとするのをやめ食事にも手を出すようになり周囲をホツとさせたのだけは間違いなかった

天使達と…

川崎沙希、ご乱心？ 取り敢えず大志、お前は小町に
近寄るなっ！

中間テスト一週間前

テスト期間とと言うこともありアタシ達はサイズでテスト勉強

勿論メンバーは彩加、アタシ、雪乃に結衣なんだけど彩加、雪乃と
一応入れてやるの結衣の三人が固まっているアタシ等のテーブルに
モーション掛けてくる奴が多くて困る

アタシか？アタシは彩加に色目使ってくるヤローの威嚇に忙しい
から構わないでほしい

そんなアタシに苦笑いの彩加が

「僕、飲み物のお代わり取ってくるけど八重ちゃんも何か飲む？

」

そう聞かれたけど飢えた獣が棲みし魔境に彩加を一人でいかせる
なんてできるかっ！

そう判断したアタシは

「その彩加の優しさは好きだけど雪乃と結衣はお代わり要る」

そう聞いたら

「ローズマリーをお願いしますわ」

「あたしはミルクティーを頼んで良いかな？」

そう言われて

「遠慮するな、ないもの頼まれたら困るがアタシが聞いたんだか
らな

ローズマリーとミルクティーだな？了解だ

と、言う訳だから一緒に行こう彩加」

別テーブルで男と二人きりで居ることに気付いたアタシは飲み物

を一旦テーブルにおいてから

「小町、この油虫はなんだ？」

まるでニャースのように爪を光らせるアタシはニャース Ⅱ 猫に反応した雪乃に連行され頭を撫でくり回されてる… 不幸だ

「って八重ちゃん、気持ち良さげに半目になってるから全然説得力ないと言うか彩ちゃんが拗ねてるんだけどな…」

結衣にそう言われて我に返ったアタシはかなり引いた目で見てる小町と油虫が側に居る事に気付いたが

「比企谷さんの妹さん？」

そう言われてカチンっ！ と、来たアタシが

「誰が妹さんだ、日本にはスキップ制はないから小町の妹が高校に行ける訳ねえだろうがっ！」

そう言つてやったらアタシと雪乃、結衣が着ているのが総武の制服であることに気付いて

「もしかして比企谷さんのお姉さんですか？」

そう聞かれたアタシは

「そーでえーすっ♪ 小さな体に大きな態度の比企谷八重どえーすっ、お前とは仲良くする気は微塵も無いのでよろしくされなくてもいいのでえーっ」

と、どこぞの白夜叉の口調を真似て言つてやったら

「お姉さんも銀〇みてるんすか？」

そんな事を言いやがるから

「ジミー君はちよつとうつとーしいんで黙つてもらえますうゝっ？」

と、切り返したら

「よろず屋っすね？ 比企谷さんの言つてた奉仕部って総武のよろず屋なんっすね？」

そう言つて興奮する油虫だけど今居る面子にはアタシ以外には通じないから

「つまりお前は奉仕部になんか頼みたいことがあるって訳だな？」

そうシリアスモードで聞いているのに

「大志君、大志君の話の前にちよつと良いかな？ お姉ちゃん」
そう黒笑みを浮かべる小町にビビった油虫が黙って何度も頷くと

「お姉ちゃん、小町につまらない見栄を張りましたね？」

確か奉仕部の女子二人と彼氏の四人で勉強するって言ってたよね
？」

「そう言われたから

「そうだぞ、この方がアタシとクラス公認カップルの戸塚彩加だぞ？」

「そう紹介したら話流れで小町の誤解に気付いた戸塚が

「うん、僕は戸塚彩加、クラスメイトで八重とお付き合ひさせてもらってる男子です」

「そう自己紹介してくれたから嬉しい何の

「八重さん、嬉しいのはわかるけどそのニヤケ顔をなんとかなさ
いっ！」

「って言われたがなんともなるわけないとそう思ってたら

「すいません、戸塚さんの事は姉からよく聞いてましたし毎朝乙女の顔でお弁当を作るのも見てまして羨ましい上に出不精で面倒臭
がりが土日笑顔で外出

しかも制服以外のスカートを絶対に履きたがらなつたお姉ちゃん
がスカートを手

「小町ちゃん、小町ちゃんや… どっちにしたら戸塚は喜んでく
れるかな？」

「なんて乙女チックな発言する日が来ようとは… って言って驚い
たお母さんも一度戸塚さんにお会いしたいって言ってましたから是非
とも近いうちにお越し下さい

「はい、大志君の相談どうぞ」
「そう言われた油虫が

「あ… 俺、川崎大志って言って比企谷さんとは同じ塾に通つて
ます」

「そう名乗つたからアタシも一応

「比企谷八重、小さくても小町のお姉ちゃんです。総武高の二年生です。まず今の会話でわかると思うが、アタシの彼氏でカツコワイイ戸塚彩加だ。」

で、この人は雪ノ下雪乃…我等が奉仕部の部長様でもう一人のこれが由比ヶ浜結衣、闇の使徒…地獄の練炭術師

一応奉仕部の部員だがアタシの敵だ。」

そう紹介したら頬を膨らませて真つ赤になった結衣が「ニヤヤ抗議してるが小町も同意見らしく由比ヶ浜の体の一部を睨み付けている。」

「まともな紹介をされたくばそう振る舞えっ！」

と、しか思わないから無視して

「所詮高校生に過ぎないアタシ等には限界があるのを承知の上なら話を聞くから言ってみろ、少なくとも相談できる大人が居ないんだろ？」

そう言つて大志とか言う油虫の話を聞くことにした

「俺には皆さんと同じ総武の二年の姉が居るんつけど春からなんと言いますか不良化してまして夜帰りが遅いんつすよ。」

と、大志が言つと

「戸塚さんは安心してください、うちのお姉ちゃんは夜弱いから夜遊びなんか出来ませんから。」

その分朝はあきれるくらい早いですけどね？」

そう舌を出して笑う小町だけど彩加が喜ぶ理由がわからないけど

「これこれ小町ちゃんや… それ、今は関係ないからね？」

それに戸塚、今のアタシの生活サイクル変わらないとアタシの門限自主規制は七時だよ？」

それからご飯食べてお風呂入つてたりしたらあつという間に九時になつてアタシの寝る時間だから夕方のデート無理はなんだからね？」

そう言つたらがつくり肩を落とす彩加だけど夜が弱い事実に変わりはない

「ねえねえ、大志君つて言つたっけ？お姉さんつてもしかして川

崎沙希さんの事かな？」

話を再開すべく口を開いたのは由比ヶ浜で

「はい、そうですね。でももしかして姉の事をご存知なんですか？」
そう大志に聞かれると今度は彩加が

「うん、知ってるよ。僕と八重ちゃんに由比ヶ浜さんはクラスメイトだからねの」

そう言われて

「え、ホントか？」なんすか？」

そうアタシと大志が揃って驚きの声をあげると

「な、なんで八重ちゃんまで驚くの？」

そーゆーお前も驚いてるじゃん

「元々人の名前や顔を覚えるの苦手なんだよっ！
そんな事より遅いってドンくらい遅いんだよ？」

そう脱線しかけた話を軌道修正

「最初は12時位だったんすけど今は5時位っす
それにエンゼルなんたらってなんかヤバそうな所から電話があつたりとかしてますから余計に心配で…」

未だ小さい弟と妹が姉の不在を不安がって…」

「それ朝帰りじゃん、つかアタシが起きる時間より遅いじゃんかっ!？」

そう言って驚いたら

「ゆきのん、今の話… 突っ込みどころ満載過ぎてどこから突っ込んだらいいのわからないよ…」

そうぼやく結衣に

「大丈夫よ、由比ヶ浜さん… 私にもついていけないのだから無理しないで良いのだから… ほら、戸塚君や小町さんだって苦笑いしてるんだから仕方のないことなのよ？」

そんな事言ってるから

「イヤイヤ、アタシの早起きは社会的にも比企谷家的にも問題ないぞ？」

朝早く仕事に行く両親に朝御飯と弁当の用意してるから感謝され

てるし空いた時間に自習してるから静かな朝の時間を有効活用してるからね？」

そう説明したら

「そうね、だから貴女のお弁当は手の込んだものが多いのね？毎日四人分作ってるはずなのについて思ってたけど…」

一人納得して頷いてる雪乃は気にしないことにして

「妹さんいくつだ？」

そうアタシが聞いたなら

「今年年長つす」

そう返ってきた答えを聞いて

「うちも共稼ぎで両親が帰って来ない日もざらで小町が寂しがってたからな

今日のお迎えは誰が行くんだ？」

考え込みながら大志に聞くと

「今日は塾がある日なんで姉が迎えに行つて妹が寝てから家を抜け出すと思いますけど？」

と、言う答えを聞いて

「わかった、アタシもついてくからお前が行くつてメールしとけ期間は未確定、少なくともこの件のケリが着くまでは今日この後一緒に行って大志に保育園の先生に紹介してもらつたら以降はアタシが迎えして川崎家の晩ご飯を用意する

大志、誠に遺憾だが今日塾から帰るときに小町と一緒に帰つてこい二人の晩ご飯作つて待つてるからな

それと済まない、彩加： 暫くは会える時間が激減する」

そう言つて頭を下げると

「気にしないで、そりゃ一緒に過ごす時間が減るのは寂しいけど今の話を聞いてアタシには関係ないからね？」

そう突き放す人だつたらもつと悲しいよ？

だからそんな事気にするより僕に手伝えることが有つたら言つてよ？八重ちゃんに頼つてもらえないことの方がもつと辛いんだから

さ」

そんな事言ってくれちゃったりするもんだから暫く二人して小町
と結衣に散々弄られましたとも

こうしてアタシ達はサキサキの変に関わることになり早速妹に会
うことになった

川崎沙希、ご乱心？ 幼い二人の為に

② けーちゃん

大志がけーちゃんを出迎える間アタシは嘘の経緯を話し… 勿論大志と口裏を合わせてある

アタシの身分証を手渡してこの先お迎えに来ることがある事を告げアタシを認識してもらった

彩加と結衣が川崎沙希が遅刻が続いていると言ってたからやはり体がきついのだろう… 何をしているのか知らんけど…

え？ クラスメイトが遅刻してることくらい気づけて？

バツカだなあーっ、彩加を愛でながら授業受けねばならないならないアタシにはそれ以外の事はどーでも良いんだよっ！

そーゆー訳で今アタシは大志に荷物持ちをやらせてスーパーでお買い物

買い物中、やはり小さい子はお菓子を欲しがるけど

「今日初めて会ったから信じられないかもだけどアタシはお菓子作りに結構自信あるからけーちゃんが良い子にしてくれたら今日のおやつにホットケーキ焼いちゃうんだけどなあ〜っ♪」

そう言ったら我が儘言わなくなって大人しくなり買い物もスムーズに済んだ

因みに晩ご飯のメニューはオムライスにベーコンと春野菜のスープにして食べてもらう事にした

川崎家に到着すると弟の蒼空はすでに帰宅していて大志にけーちゃんの着替えをさせてる間に小さめのホットケーキを何枚か焼き小町の分も大志に持たせ

「これでもお腹入れといて勉強頑張んなっ！」

そう言つて大志を送り出した

笑顔でホットケーキを頬張るけーちゃんと蒼空を見ながらこの二人を置いて出掛けるなんて余程の事情があるんだろうな…

つかただの夜遊びならマジぶち切れるからな、川崎沙希めっ！
そう思っていた

おやつの後、けーちゃんとお絵描きしながら蒼空の宿題を見て時を
すごし二人がテレビを見ている間に晩ご飯の支度をして三人での晩
ご飯

そして二人を入れるため三人での入浴なんだけど正直戸惑った
例え幼児であろうとも未々他人体を見られることにアタシは慣れ
てないのだから

そしてひとつだけハッキリした事がある

それは川崎沙希が大いなる夢と希望の持ち主であることが判明し
たのと悪気の無い天使達の残酷さを思い知らされた事を

小町ちゃんや： お姉ちゃん泣いても良いよね？

やがて大志が小町を連れて川崎家に帰ってくる頃には蒼空とけー
ちゃんがうとうとし始めたから大志に見させて大志と小町の晩ご飯
の支度

支度を終えて食べさせてる間寝てる二人を見守りながら大志に風
呂に入らせてすべてが終わった後アタシと小町は家に帰った

二人が遅い日で良かった： 未だ帰って無かったから眠気が限界
のアタシはなんとか着替えた折れ込むように眠りに落ちアタシの怒
濤の半日は終わった

翌朝眠気覚ましにシャワーを浴びいつものように朝食の支度とお
弁当に川崎家での着替えを用意して早目に学校に到着し義務じやな
いが雪乃に報告してから教室に向かった

翌朝眠気覚ましにシャワーを浴びいつものように朝食の支度とお
弁当に川崎家での着替えを用意して早目に学校に到着し義務じやな
いが雪乃に報告してから教室に向かった

お昼休み

「今日はどうしても彩加と二人だけでお弁当を食べたい」

そう言ったら優美子はアタシの言葉から何かを感じとり不満を口
にする結衣に向かつて

「ちよつとは気を使えしっ！」

そう言つて緩いチョップを結衣にかまして注意してくれたからお札を言つて二人で教室を抜け出した

いつものように彩加がお弁当を食べながら出来映えを誉めてくれる

見た目に比べやはりスポーツマンの彩加はアタシよりは食べ終えるのが早くアタシが差し出す未だ熱いお茶を啜りながら

「何か話したいことがあるから二人だけになりたかつたんだよね？ 話してみて」

そう言つてくれたからアタシも安心して

「昨日川崎家に行つて感じたのは教室で見る川崎のイメージとは違つて優しいお姉ちゃんだつてこと…」

まあ：大志は下の二人に比べたら年もいつてるから厳しくも接してるけど基本シスコんでブラコン： ファミコンかな？ って」

彩加が黙つて頷くから

「そんな川崎が幼い二人を置いて夜遊びしてるとは思わないし思いたくはない、でもそうすると…」

「川崎さんが隠れて深夜にバイトしてる可能性が高い：だよね？」

そう言つてくれたからアタシも頷いて

「そう、でもあくまでも推測に過ぎないしその場合ナゼお金が必要なのかもわからない以上簡単に批難否定をしても良いのかアタシもわからない：でも…」

「その場合弟の大志君が知らないつてことは年齢を偽つて働いてることになるよね？ この場合」

そう指摘する彩加に

「そう、これはかなりデリケートで当初思つてた以上に大事な話みたいなんだよね…」

年齢を偽つて深夜に働いてるのバレたら雇い主にだつて迷惑掛けるし何より学校にバレたら…」

「無期停学か退学の可能性が高いね…」
そう指摘する彩加の言葉に頷いて

「二人には申し訳ないけど事実関係がもう少しはつきりするまで伏せておく、特に結衣にはね

でないと雪乃は頭ごなしに正論を吐き結衣は事情を聞きもせず感情だけで川崎を批難して騒ぎを大きくしかねない

その結果、川崎がどうなるうとも責任とれないくせにね

だから雪乃にはくれぐれも感情に呑み込まれずに冷静に対処してくればアタシを救ってくれたみたいに打開策を見つけてくれるんじゃないのかな？」

アタシは期待を込めそう彩加に話したら

「僕も大志君の依頼に拘ったらなにも解決できないばかりか余計に拗れそうな気がするから八重ちゃんは若い二人を見て考えてあげて、僕も応援するからね」

戸塚の優しい言葉で癒された気分のアタシだった

川崎沙希、ご乱心？ アカツキニヤン参上、誰得？
雪乃得

② 雪乃は猫を追い掛ける

放課後になり雪乃達の川崎沙希更正計画を聞いてがっかりしたア
タシは

「大志、アタシは予定通りにけーちゃんのお迎えに行くから任せ
なよ

けーちゃんと蒼空にクッキー焼いてきてるしね

じゃあ雪乃と結衣は後の事よろしく、小町は今日も大志と来なよ
？」

そう言っただけけーちゃんのお迎えに向かう事にしたんだ

だってね： 勝手に不良化してる、って決めつけて問題の根本見な
いで解決できるわけ無いでしょ？

川崎沙希もボツチなんだから、簡単に心を開くわけ無いっしょ？

うん、ボツチであることと大きなアレのせいで無意識のうちに視界
から外してたのが全く認識してなかった理由

ボツチ不干涉で八の敵に回る可能性がないから警戒してなかった
のだ

今日の晩ご飯はハンバーグだけですが川崎沙希、けーちゃんや蒼
空に食育を実践してるのな

小町が文句たらたら野菜ハンバーグをきれいに食べてくれた上
に笑顔で「美味しいっ♪」って言ってくれたんだからアタシ
だってうれしいね

そして翌日になり、昨日の雪乃達の作戦もあつてアタシの意図にナ
ニやら勘づいた沙希が「今日はあたしがお迎えに行く』と、言
い張り

「八重殿、ご報告いたしたきことが：「ウザいっ！簡潔に言え

」

「そう言い捨てられ落ち込む材木座に

「 厨二、なんかわかったん？」

結衣がその声を掛けると

「 ウム、八重殿に頼まれた深夜営業してなおかつエンジェルが名前の付く店を検索した結果この二軒だけと判明、所在地も確認済みだ」

「 そう言つて渡されたメモを受け取り

「 報酬の一部だ、受けとれ」

「 そう言つて渡した包みを見て顔をひきつらせる材木座に

「 心配するな、それはアタシが焼いたココアクッキーだからしかと味わえ」

「 そう言つてやつたら涙を流しながら食べる姿に訳のわからない大志と小町が首を捻り、雪乃は白い目で材木座を睨み… 結衣は笑顔がひきつってる

クツキーを食べ終えた材木座が落ち着くのを待ち

「 取り敢えず材木に案内させこのエンジェルってメイド喫茶から探りに行くつもりだけど皆はどうする？」

「 そう聞くと

「 勿論そんなかわいさなところに八重さんを材木君と二人きりでいかせり訳にはいかないわ」

「 アタシもゆきのんに賛成」

「 材木？ 厨二？ 「 丸太でも角材でも… ベニヤ板でも好きに呼べば良い」 じゃあ厨二先輩、私も一緒に行きます」

「 材木先輩、よろしくお願いします」

「 と、誰一人マトモに名前を呼んでくれない現実にOrzの材木座に唯一

「 材木座君、時間が勿体ないからそろそろ案内してもらえるかな？」

「 そう、ちゃんと名前を呼んだ彩加だけどフォローは一切しなかった雑居ビル二階に在るそのお店は、結構賑わつて席に案内されたア

タシは案内してくれたメイドさんに

「アイステイヤーと猫耳カチューシャ体験コース、勿論尻に眼鏡付で」

と、言うとき彩加が

「えーつと… 言ってる意味が全くわからないんだけどな？ 八重ちゃん、僕にちゃんとわかるように説明してくれると助かるんだけどね」

彩加に怖い笑顔で言われて、やっと気付いたおバカなアタシは腸が煮えくり返っていたけど… 今、ここで暴れるのは野暮だから材木座への仕置きは又いつかと言う事にして

「カワイイメイドさんの格好したら戸塚が喜んでくるかなって思ってる… ダメかな？」

ってお願いしたらメイドさんが

「当店自慢のメニューで体験された女性のお客様はドリンクサーブスなど色々な得点があるんですよ

皆さんみたいなレベルの高い美少女の方達には是非とも体験していただきたいです」

そんな事を言われて興味津々の由比ヶ浜が

「ゆきのおん、八重ちゃんもやるみたいだしアタシ達も一緒にやろうよおっつ♪」

と、場所柄もわきまえずいつものユリユリしくジャレ合う二人はかなり注目を集めている

「あ、小町は中学生だからダメで彩加もちよつと…」

アタシがそーゆーと

「さすがにボクはちよつとね…」

そう言っって苦笑いする彩加に

「お客様も似合い」「彩加はアタシの彼氏だもん」「え、彼氏？」

そう言われて驚いてアタシと彩加の顔を見比べるメイドさんに

「ごめんなさい… 僕、僕男の子です」

そう言っって申し訳なさそうに生徒手帳を見せる彩加と見せられた

メイドさんの驚いた顔は見物だった

さすがに猫耳カチューシャに尻尾、眼鏡付は調子に乗りすぎたらしくあちこちのテーブルから声を掛けられ彩加が頬を膨らませて抗議してる

　　どうやら激おこの様だ、激オコポン丸らしい

その混乱をうまく利用した雪乃がスタッフルームで川崎沙希が在籍してないのを確認したそうその後暴走した

猫耳カチューシャのアタシをメイド姿の雪乃が追い掛け回すからもう店内はフラッシュの嵐

店長さんもだけどお客さんの中にもアタシのホームページの閲覧者： フォロワーも居たみたいでその人が

　　ー 飴色の髪のアカツキ、angel Filler に降臨、純白の髪に猫耳カチューシャが萌えてマジにヤバイー

　　って眩いちゃったからアタシのホームページも有り難くも嬉しくないんだけど小町が店長の許可を得てアップしちやってくれてるからアクセス数がスゴい：

　　もちろん、追い掛けっこや捕まったアタシが雪乃に撫でくり回されてる様子は材木座が撮影して陽乃さんに送られ夜には動画も公開されるのだが

　　まあ、そんなわけでアタシ達の来店中は注文がじゃんじゃんは入り厨房は大パニック

　　帰るときにはかなり店長さんの引き留め工作を受けたけど今日はこの後エンジェルラダーにも行かなきゃいけないので今日のところは断った

川崎沙希、ご乱心？ エンジェルラダーの攻防

③ 二人のために

戸塚に頼んで大志と小町を家に帰らせたアタシ達は天使の階子と書いてエンジェルラダーと読むそうだがその店の入り口近くにいるいわゆるドレスコードの店であるためアタシ親父がイタズラ半分に買ったチャイナドレスに結衣がお揃いのお団子へアーにしてくれた

この格好見せたら彩加は何て言ってくれるかな？ そう思ってた

「八重ちゃん、似合ってるよ」

雪乃と結衣は雪乃が葉山に持たせたドレスに着替えての最終確認だ

あ、材木座？やだよ、材木座にエスコート頼むなんてさ

そもそもアイツ自身こんなリア充の巣窟みたいなとこに来たがるわけないでしょ？

それにアイツには別口の用を頼んであるから例の物を集めて回ってる頃だろうから良いんだよ

バランス的には隼人が雪乃と結衣をエスコートした方が良いんだろうけど頑なに雪乃が嫌だと言うので雪乃を先頭に右から結衣↓葉山↓アタシと並んで入店

それなのにさ、アタシが隼人の腕を取る時の雪乃の悔しそうな顔はね… ホント、素直に隼人の腕を取れば良かったのに…

「シンデレラタイムはもうすぐ終わりを告げる時間よ、帰りましょうか？ 川崎沙希さん」

そう雪乃に告げられアタシ達を見た川崎沙希が

「雪ノ下、葉山に由比ヶ浜…に、優男… か、どうやらバレちまつたようだね？」

どうやら全く悪びれるそぶり見せる気もない様子に眉を潜める雪乃だけど

「川崎沙希、アタシもいるよ？ 小さいから見えないなんてゆーなよ？ 言ったらマジでなくからな？」

アタシが涙目で言うよ

「何言ってるんだか… その優男より圧倒的な存在感だしといてよくゆーよ

やっぱりアンタだっつかいけーちゃんのゆーやえちゃんっていうのはさ…」

そう言われて

「まーね、でもわかってるよね？ 自分でもヤバイ事してる自覚はあるよね？」

「……………」

「無言は肯定と解釈するけど？」
だんまりを決め込む川崎に

「何の為にお金が必要かは知らないけど…」

「川崎、注文良いか？ 一応客としてきてるんだからなんか頼むのが筋だよな？」

そうアタシが声を掛けると、ため息混じりに

「ああ、そうしてくれると助かるよ… あたしの立場上ね」

そう呟き自分が話してるのを遮られた雪乃が睨んでるけどはつきり言う

アタシ等はここに何をしに来たんだとな

アタシ等はトンファーを持った風紀委員長じゃないんだからいきなり噛みつくなよな？

「アタシはマッカン」

そうオーダーするといつものアタマイタのポーズの雪乃に苦笑いする結衣と葉山に

「アンタねえ… まあ有るんだけどね、従業員の休憩用に置いてあるんだよ」

川崎がそう答えると

「有るんだ…」

「それはそれである意味スゴいな…」

そう感心する結衣と隼人の二人だった

そんなアタシ等三人に呆れた雪乃に

「バカな事を言つて無いで貴女もシャーリーテンプルにしておきなさい」

「シャーリーテンプルか… 悪くはないな… だが断る、アタシは炭酸が苦手だ

千葉のソウルドリンクマツカンが在るのにナゼ苦手なものを頼まねばならん？」

そう言い返すと

「あー、そう言えば八重ちゃんドリンクバーでも炭酸飲まないよね？」

「確かに… お姉ちゃんは口が悪いけど実はお子様舌なのです、と小町さんも言つてたわね…」

そう言つてアタシを見て笑つたのを見て感情が静まりホツとしてマツカンをだしてもらつたが

「マツカンがカクテルグラスで出されるのは不思議な気もするが今度プライベートでカルーアミルク風にして飲んでみるか？」

お嬢さんのお陰で面白いネタに気付いた、感謝してるよ」

そう言つて川崎にチーフと呼ばれる人は再び離れていった

「で、やっぱり金がいるんだろ？」

そう切り出すアタシに

「ああ、そうだよ…悪いかい？」

そう言つて睨まれたが

「それについてはノーコメント、少なくともお前の事情を把握してる訳じゃないアタシはアンタと同じ視点に立てるとは思つてないんでね」

アタシがそう答えると今度は結衣が

「バイトなら夕方でも割りの良いのは探せば…」

「夕方と深夜じゃその良さのレベルが違うんだよ、それに夕方は妹のお迎えや妹達に飯も食わせなきゃいけないから暇じゃ無いんだよ、アンタ等と違って」

そんなアタシ等三人に呆れた雪乃が

「バカな事を言っただけで貴女もシャーリーテンプルにしておきなさい」

「シャーリーテンプルか…悪くはないな…だが断る、アタシは炭酸が苦手だ」

千葉のソウルドリンクマツカンが在るのにナゼ苦手なものを頼まねばならん?」

そう言い返すと

「そう言えば八重ちゃんドリンクバーでも炭酸飲まないよね?」

「確かに…お姉ちゃんは口が悪いけど実はお子様舌なのです、と小町さんも言っただわね…」

そう言っただアタシを見て笑ったのを見て感情が静まりホツとしてマツカンをだしてもらったが

「マツカンがカクテルグラスで出されるのは不思議な気もするが今度プライベートでカルーアミルク風にして飲んでみるか?」

お嬢さんのお陰で面白いネタに気付いた、感謝してるよ」

そう言っただ川崎にチーフと呼ばれる人は再び離れていった

「で、やっぱり金があるんだろ?」

そう切り出すアタシに

「ああ、そうだよ…悪いかい?」

そう言っただ睨まれたが

「それについてはノーコメント、少なくともお前の事情を把握してる訳じゃないアタシはアンタと同じ視点に立てるとは思ってないんでね」

アタシがそう答えると今度は結衣が

「バイトなら夕方でも割りの良いのは探せば…」

「夕方と深夜じゃその良さのレベルが違うんだよ、それに夕方は

妹のお迎えや妹達に飯も食わせなきやいけないから暇じゃ無いんだよ、アンタ等と違ってね」

そうあっさり返されて言葉につまる結衣を見て

「だとしても貴女が年令を偽って…」雪乃、アタシ等は十二しに來てる？

アタシ等は川崎の罪の断罪をしに來たのか？ 違うだろ？

アタシ等は川崎の事を心配する大志の為に真相究明に來たはずだ、目的を誤るなっ！」

そう言つて暴走し掛けた雪乃に歯止めを掛けると

「そうか、大志の奴が… 昨日立て続けに起きた変なこともアンタ等絡みかい？」

そう言われて

「あー、それについては雪乃達には悪いが立案からしてノータッチだし計画聞いて絶対失敗すると思つてけーちゃんのお迎えに行つたからアタシは知らん」

そうアタシに言われて呆れたと言いたげな表情を浮かべたが改めて雪乃を見て

「雪ノ下雪乃、たしかアンタの親父さんは県会議員で建設会社の社長だったね？」

ならそんなアンタにや金に困るような生活なんて想像もつかないんだろ？

アタシが金を必要とするのは動かしようの無い事実なんだよ、そのアタシにバイトするなと言うのならアンタがその金を何とかしてくれるのかい？

無理だろ？ 漫画じゃないんだから子供に札束単位で小遣いくれる親なんか早々いるもんじゃないし親が金もつたつてアンタが自由に使える額は限りがあるはずじゃないのかい？」

そう言い放つ川崎の言葉に言い返せない雪乃が悔しげに顔を歪めてると

「今は雪乃んの実家の事は関係」由比ヶ浜は少し黙つてろつ！ アタシ等が先に川崎家の事情に口出ししといて川崎が雪ノ下

家の事を口出ししたからってどの口で文句言ってる 「…」 ア
タシは黙つてろつ！ と、そう言ったはずだ

それ以上川崎を感情だけで批難すると言うのならお前との付き合い
いも今夜この場限りだと思え

隼人、すまない由比ヶ浜を連れ出してくれ（フオロー頼む）

そう最後の一言を隼人にだけ聞こえる小声で頼むアタシと事情は
わからずとも状況判断… 結衣を落ち着かせるを選択した隼人が連
れ出してくれた

川崎沙希、ご乱心？ 交錯する思いと姉弟の和解

「川崎、済まなかったな…やはり感情的になりやすい由比ヶ浜は連れて来るべきじゃなかった

悪気は無いから許してやってほしい、とは言わないが悪気が無いのだけはわかってほしい

で、雪乃はどうする？頭冷えた？冷静に話せないなら席はずして

雪乃が今どう考えてるか知らないけど、はつきり言って川崎の今後の人生に関わるとこまで踏み込んだきながら無責任なきれいな事しか言わないならここは手を引いてもらうしかないんだけど？」

そうアタシに言われて溜め息を吐き

「わかったわ、どうやら貴女はもう打開策を見付けてるみたいね？ なら私は貴女の判断に委ねましょう」

そう言われて

「そう、有難う… 取り敢えず交渉材料は今手元に無いから明日… もう今日か…

仕事終わったらすぐそばのマック来て、そこでこちらの交換条件を提示するから考えてほしい… 蒼空とけーちゃん為にさ」

アタシにそう言われて

「アンタ、見かけによらず随分とズルい奴だったんだね…」

そう呟くのを聞いて気色ばむ雪乃を制し

「守りたい者の為なら手段は… 犯罪にならない範囲でなら選ばない、なんでもありだ

でも、今回のアンタがアウトなのはわかるだろ？

…マックで待ってるからさ」

そう言って会計を済ませ店のまえで隼人と由比が浜待っていたから二人に

「アタシは近くに在るマックで軽く食べといて材木座に頼んだもの受けとる為待ち合わせしてるけど二人はどうする？

なんなら隼人は二人送ってくれても良いんだけど… ひっ」

「それは材木(座)君と二人つきりで合うと言うことかしら(かい)?」

そう迫力在る顔で迫られ

「二人つきりって… 店内なんだから他に客もいるんだし… 何よりあの材木相手にそれはちよつと…」

二人の迫力に後ずさるアタシに結衣ではなく由比ヶ浜と呼ばれたのか相当にショックだったらしい結衣が

「ねえ八重ちゃん、アタシは帰らなきゃダメ？」

そう思い詰めた顔で聞いてくる由比ヶ浜に

「まあね…」

アタシにそう言われて項垂れる由比ヶ浜とこの先の言葉を予測している二人かにやにや笑っている

「結衣のお母さんだって心配してるし、アタシだって小町が心配してるんだから結衣だけに帰れっ! て、言うのは自分に跳ね返ってくるブーメランだと思うよ？」

だから、アタシはどうしたいのか希望を聞いたんだからね

まあ、結衣や隼人なら今からカラオケもアリなんだろうけどアタシは無理… マジにそろそろ限界だからマツクで軽く食べて仮眠とりたい」

そう言ってアクビするアタシを見ながら溜め息を吐き

「ほら葉山君、八重さんが今にも寝てしまいそうだからマツクまでおぶって行きなさい

私達も少し休みたいのだから早くなさいね」

そんな雪乃の言葉を遠くに聞きながらアタシは意識を手放した

⑤ 沙希と大志

「カフェオレで良いかしら?」

目を覚ましたアタシに気付いて水を差し出しながら聞いてきた雪乃に

「うん、頼む」

少し寝足りないアタシが寝惚け気味にゆーと

「お水飲んだら顔を洗ってらっしやい目が覚めるわ」

そう言われて又ひとつ欠伸をしてから

「ん〜っ…」

と、答え飲み終えたグラスをテーブルに置きふらふらと洗面所に向かうことにした

顔を洗い席に戻るとようやく存在を認識した材木座と川崎沙希が到着したところで

「ご苦労だった、材木… 川崎もお疲れさん」

その声を掛けると眉を潜めた川崎が

「皮肉かい？」

そう聞いてきたから

「あの店はまだ早い、割りが良いなら大学生になるまで待てよ？」

ってそう思ってるだけだしお前が働いてきた事実にお疲れ様を言えないほど嫌ってる訳じゃない

で、言い訳を聞くから言え… アタシはおおよそのアタリをつけた

上での提案だが心配してたアイツにちゃんと話してやれ」

遅れてきた大志と小町に気付いた川崎が

「大志、アンタこんな時間にナニやってんだいつ!？」

「それ、姉ちゃんがゆーのかよ？朝帰り繰り返してた姉ちゃんがさっ！」

間髪入れずに言い返された川崎がアタシを睨んで

「比企谷、大志を巻き込むなんて「違うよ、姉ちゃんっ!」比

企谷さんのお姉さんと奉仕部の皆さんは俺が頼んだんだから俺の方が巻き込んだんだよっ!」

そう大志に言われて唇を噛み締める川崎に

「取り敢えず川崎に小町と大志も座れよ… 悪いが三人にリクエ
ストを聞いて飲み物を頼んできてくれ
代金はチケットで良いだろ？」

そう言っから

「結衣と隼人に聞くが最近クラスで変わったことはなんかあったか？」

そう聞いたら二人とも迷わずアタシを指差しやがった

『人を指差しちゃダメって母ちゃんに習わなかったのかよ？』

そう思ったが思っただけにとどめ

「うっせ、アタシの事は今さらだからほっとけ

まあそんな事は材木よりどうでもいいから… つまりアタシが聞きたいのは教室内に川崎が今の行動をとる理由はないわけだな？」

そう聞いたら

「まあそう言う話しなら特に見当たらない… になるのかな？」

「

「八重ちゃん…彩ちゃん好きなのは良いんだけどもう少し他の人に目を向けようよ？」

彩ちゃんにも注意されてるでしょ？」

等と言われる始末だから

「だから、それはいつか別の機会にしろっ！ 全く… さつきから話がちつとも進まんだろうがっ！」

あー、濟まん大志… 話がだいぶそれだが川崎家で最近変わったことはなんかあったか？」

そう大志に問い掛けると

「俺が塾に通うことになったくらいっすけどそれがなにか？」

そう逆に聞き返されたが

「アタシ等も来年受験、アタシは夏期講習から予備校に通うつもりだけど皆はどうすんの？」

結衣は大学行く気なら今からでも頑張らないと結構ヤバイんじゃないの？」

アタシの言葉に川崎が微かに反応したのを見てやはりと思ったが今は触れずに様子を見ることにして

「そうだね、どうせ行くならよりレベルの高い学府で学びたいからね」

と、葉山が答えれば

「国立大目指すからには必須でしょうね？」

まだアタシの意図に気づけない雪乃は疑問系で答え

「『大学進学なら行く』」

は結衣と材木の答えで未だ進路を考えてないらしい

「予備校… 行きたいんだろ？ でも共稼ぎでかつかつならそう簡単に頼めんわな

ただでさえ大志の塾代で出費がかさんでるんだろ？」

アタシの指摘にうつ向く川崎に

「そうなのか？ 姉ちゃん、だったらなんでっ！」

「だからアンタは知らなくても良いって言ったんだよっ！」
大志に向かってそう言い捨てる川崎に

「あの… あたしから一言、言わせてもらいますけど… 今ここにいらっしやる皆さんはお姉ちゃんが抱えてる病気の事はもちろんご存じなんですよね？」

だからわかってくれるって思うんですけど、お姉ちゃんって面白かったり楽しかった事しか話してくれないんですよ

まあ以前の、何も話してくれなかった頃よりはずっとましですけどあたしだってお姉ちゃんの事心配してるんだって…

その辺りの事を少しはわかってもらえると下の子として嬉しいかな？ って思うんだけど…」

そう言って苦笑いをアタシに向ける小町と

「俺も大体そんな感じっす、姉ちゃんが俺を心配してくれるのは嬉しいっすけど俺だっただ姉ちゃんか心配なんすからね？」

そう二人から言われ

「『濟まんな（ないね）』」

そう言って頭を下げるアタシと川崎だったが

「八重殿？」

そう材木座に声を掛けられ

「ああ、そうだったな… で、やっとここからが本題なんだが川崎、スカラシップって知ってるか？」

「スカラシップ？」

と、とんちんかんなことを言う結衣に

「結衣、川崎はうちの親父と違って薄毛で悩んでないからな？ スカラシップだ

勿論、アタシも申請して上手くいったらその浮いた分で小町の卒業と合格祝いの家族旅行を頼むつもりだ

正直、動機は不純だが自分の学力の目安になるしそうなれば川崎、勉強頑張るしかないだろ？ スカラシップからはずされないようにな

「そう言つてニヤリと笑うアタシはさらに

「確かに川崎がゆるい通りに未だガキのアタシ等に金は何とかしてやれない

でも、焼け石に水かもだけど夕方や土日のバイトなら大志が居るし大志に塾のある日はアタシも手伝う」

「そうアタシが言う」と

「あゝつ、そーゆるい事ならあたしだつて小さい子好きだし家に遊びに来てくれたらママも喜ぶと思うから任せるし」

「そう得意気に言うのを聞いて

「と、ゆるい事だ… 元ボツチのアタシが偉そうなことゆるいようだがアタシを、そしてせめて今ここに居る奴等にだけでも頼ってみろよ？」

「お姉ちゃん、戸塚さんもでしょ？」

「そう小町にチャチャを入れられて

「その案は却下だ、川崎… 覚えてもらいたいのが彩加に甘えて良いのはアタシだけだと言う事をなっ！」

と、凜々しく？ 宣言したらドン引きする小町と川崎姉弟

「八重ちゃん彩ちゃん好きすぎだしい」

と、言つて呆れる結衣といつものアタマイタポーズの雪乃にナゼか齒軋りする隼人に涙する材木座

アタシ、なんか変なこと言つたか？

「そう思つて首をコテンと倒すアタシだった

その後引き継ぎなどを済ませ円満に店を辞めるまでは毎日アタシがけーちちゃんのお迎えをしてサポートし、この難局を無事に乗り越えることができた

幕間く 沙希と始めるアルバイト

今日は沙希と一緒に例のメイド喫茶『angel』の面接に来ているっても沙希には体験コースを経験してもらいアタシは履歴書渡したら早速く働いてくれって…

まあ、良いんだけどな…

ホームページの都合上アタシの店内でのニックネームは「アカツキにゃん」って名札に書かれている

色々決まりは有るけど、基本は女の子を守る為のモノで… お客に教えて良いのはお店で用意したアカウンターのメアド… 若しくはYahoo等のメアドで本アドはNG

もちろん電話番号なんか絶対にダメ

まあ、店のホームページ内には客とメイドのコミュニケーションのチャットも有るんだから

「まずは仲良くなるまではそこから始めなさい、信頼関係を作りなさい」

が、店の方針らしい

まあ、アタシの場合は既にコスプレイヤーとして知る人ぞ知って感じでそこそこの知名度があるらしく…あの日以来アタシの入店待望論がチャットで盛り上がっていたらしい

それから沙希には「ツンデレ路線目指せば良いから無理して客に媚びなくても良いからね、どんなタイプにデレるかは知らないけどつんの方は得意でしょ？」

と、キャラ設定迄決まっちゃたよ

なぜかお店制服に着替えたら髪が白くなり、更に多分小町に聞いたんだらうな… 陽乃さんが居て店長さんに挨拶している

会話の感じからすると恐らくネット上では結構やり取りしていたみたいですぐに打ち解けている二人

まあ、そういつたところはアタシや雪乃には絶対に真似できない事だらうな…

別に真似したいとも思わんから、どうでも良い事なんだが
いずれにしても、店内はアタシ入社を知って大騒ぎ

沙希もツンデレキャラと認識されたらしく、客の目から見ても妹扱
いのアタシはけーちゃんと同じ扱っぽくデレる対象らしいのでア
タシ等の様子を見て萌えるヤツもいるらしい

お試しの沙希は既に帰っていてアタシもそろそろ営業時間が終わ
りバイトの勤務時間も終わりを迎える

都合良く、親父と母ちゃんは帰らない日だから都築さんが小町を迎
えにいつてくれているので店が終わったら三人で食事に行く話しに
なっているが：

どうやらドレスコードのあるところらしく制服をしまわれ用意され
たのは羽織袴神宮寺さくらバージョンで店の近くに居た客に見られ
て大騒ぎになったんだがな： まあ今更だ、気にすまい

あたしがこの衣裳を用意したんじゃないからな、アタシは悪くない
そう、アタシのせいじゃないからアタシは知らない

都築さんが運転する車が到着して、車内には小町と雪乃に： 雪乃
と陽乃さんのお母さん、即ち雪ノ下夫人が居てアタシの思考は固まっ
た

回らないお寿司やさんに行き、五人で食事することになったんだけ
ど： 何で座布団じゃなく雪ノ下夫人の膝に座っているんだ？ 解
せぬ

おまけに

けーちゃんだってもうお食事エプロンは卒業してるぞ？

…………… うん、とつてもいい笑顔だっ…………… アンな顔されたらた
抗議できねえじゃんか？

そう思いながら内心溜め息が止められないアタシは間違ってない、
よな？

食事の後雪ノ下家にお邪魔してお泊まりらしい

もう十二分に遅い時間だからアタシに用意された寝巻きに着替え
るが…………… 着物ドレス風の浴衣、だな？

で、皆さん何でアタシの写真撮ってるんですかね？ 全く理解に苦しむんですけども：

まあ、陽乃さんはホームページにアップするんだらうけどね
きつとこの内装はティールームとゆー部屋に違いない、知らんけど
な

都築さんが淹れてくれたカモミールはホツとする味でアタシは
スーッと眠りに落ちて後の事は知らない：

とても穏やかな朝を迎えて、朝から雪乃が淹れてくれた紅茶を飲み
ながら雪乃と勉強するアタシ

その二人の姿をみながら微笑む雪ノ下夫妻と陽乃さんにそれを更
に後ろから涙を流して見ている都築さんの苦労の跡が偲ばれる気が
した

都築さん、乙

そして今日から新しい生活が始まる川崎沙希、頑張れよっ！ 蒼空
とけーちゃん、ついでに大志の勉強はアタシに任せろっ！

後は小町が大志見習って勉強頑張ってくれりやお姉ちゃんナニも
言うことないんだけとね？ 小町ちゃんや

静かで穏やかな食卓

小町以外はこの静けさを楽しむ朝食

老執事の都築さんが待ち望んでいた家族団らんの食事の風景：
家族以外が若干二名混ざっているけどな

そして、雪ノ下夫妻と陽乃さん達に見送られ都築さんの運転する車
で登校する雪乃とアタシに小町

リムジンで送ってもらった小町が、友達に囲まれているがアタシと
違ってたいた問題じゃないだろう？ コミュ力がアタシとは違う
んだからな

逆に、アタシの方は雪乃と一緒にだから結衣が騒いだくらいで後は実
家を嫌う雪乃がタベは実家泊まりだったらしいと気付いた隼人が驚
きを： アタシと雪乃の目には隠せてなかった

ひとつの運命の歯車が回転の変更： それによる影響は、世界を変

える程ではないけど少なくともアタシ達の世界は色々と変わり始め
ているのだけは間違いない

職場体験保育園編… アタシが知りたい職場？

① 職場見学第三の席を狙え、葉山王国崩壊の危機？

大志の依頼を無事に解消できたあの日以来

月曜日、沙希メイド喫茶でバイトをしてけーちゃんのお迎えはアタシが担当、買い物して夕食の支度をして二人と食事を食べ大志と小町の帰りを待ち

塾から帰ってきた二人に食事をとらせ食事の後はその日の授業の復習をしながら小町と大志の勉強を沙希の帰宅まで見る

そして沙希の帰宅少し前にメールをもらいおかずを温め直して帰宅をち帰宅をもってアタシと小町も帰宅

火曜日、アタシは奉仕部、沙希はバイトでけーちゃんのお迎えは大志でおやつは手作りクッキーを前の日においておく

部活を二人より一足先に上がり買い物して夕食の支度をしに川崎家に行き以下は月曜と同じ

水曜日、大志が塾、沙希バイトで月曜と同じ

木曜日、アタシはメイド喫茶でバイト、沙希はお休み

金曜日、大志が塾、沙希バイトで月曜と同じ

土曜日、アタシ早出（開店前にクッキー等を焼くため）の為
早目にお店に向かう、沙希、ランチ前出勤で小町と大志の二人に蒼空とけーちゃんを託して店に向かう

帰りに買い物していき夕食の支度をして夕食の支度

四人の昼食は出勤前の沙希がお弁当としと用意する

日曜日、彩加と早朝テニスの練習の後川崎家に行き交代で沙希バイトに出勤

まあ、これが夏休み前までのアタシと沙希の予定だ

最近原因不明の寝不足に悩まれているアタシは今日もなんとか一日を乗りきり勉強疲れを癒す癒すお茶の一時に…

(うん、今日も依頼はなく平和な奉仕部だ…)

慌ただしい毎日を過ごす私が紅茶をすすりながらそう思っていたら

「八重ちゃんって又平塚先生に叱られてたけど今度はなにしたんだし?」

いきなりそんな失礼なことを聞かれたアタシはムツとして

「又ってなんだよ又って?それじゃまるつきりアタシがまるつきりの問題児みたいに関こえるじゃん?」

別に叱られてた訳じゃなくってちよつとした見解の相違つてヤツでアタシの職場訪問の希望先がどうやらお気に召さなかったらしい」

そう遺憾そう答えるアタシに

「因みに八重さんは希望先をなんて書いたのかしら?」

そう聞かれたアタシは

「別に難しい所を書いたわけじゃなく

第一希望、雪乃の部屋もしくは雪ノ下家

第二希望、戸塚の実家

第三希望、学校の保健室

と、書いたただけだ」

そんな事をどや顔で答えるアタシに

「八重さん、貴女ね…一体何を考えてるのかしら?」

そういつものようにアタマイタのポーズを決めて聞いてくる雪乃に

「そんなこと言ったんだ…だから平塚先生が号泣しながら進路指導室から走り去ったんだね?」

結衣の話を聞いていた溜め息を吐いた雪乃にも

「八の専業主夫の夢、アタシの希望の専業主婦…可愛いって言ってもらえるお嫁さんになるためなんだがな?」

一人暮らしで家事万端をこなす雪乃を見習うのは意義は大いにあるし、こんな事言ったら雪ノ下家には申し訳ないけど花嫁修行にお手伝いさんとして雇ってもらおうのもありかも?って思っただけだ

まあ後者は門戸はかなり狭いだろうけどね

戸塚家は：アタシの希望する永久就職先だっ！」

そう言ったら引き笑いした結衣が

「あ、あははははっ…そりゃ平塚先生も泣くよ…進路指導室から号泣しながら出てきた先生が泣きながら爆走してどっか行っちゃうの無理無いかも？」

そう言つて苦笑いするしかない結衣と

「平塚先生の受けたダメージは計り知れない物があつたね：まあ、さすがに同情はしないけど」

そう訳のわからない事を言われてしまったアタシが首をコテンと倒し頭の上に大量の？ 発生させながら

「何だかんだで結衣や優美子を始め 2ーFの 皆が受け入れてくれてたけどやっぱし最初に雪乃、平塚先生、養護の鵜飼先生の三人がアタシを受け入れてくれたからアタシは今もこうして学校に居られる

そうでなきや間違いなく引きこもつて言う自信はあるから希望する進路として養護の先生もありかな？ っと思つたんだよ…」

そう答えるアタシに

「そう、②と私の部屋はともかく①と③は理にかなつてるけど残念ながら認められそうにない見学先ね」

そう雪乃が話すと扉が開き

「ならうちの母さんの勤める大学病院で看護師なんか体験してみてはどうかかな？」

養護の教諭ならそちらの方の経験も有つた方が良いだろうし進路のルート選択肢にも関わつてくる話になるだろうからね

あの病院なら君も顔見知りが結構いるから安心じゃないのかな？

—
そう葉山が提案するといつの間にかあらわれたのかよくわからな
い大岡に大和も加えた面々が白衣を着たアタシを思い浮かべる中

あの病院の女性看護師の可愛い制服を着た彩加とアタシが微笑みを交わしながら仕事をする姿まで想像できてしまつておもわずにへ

らしくと笑ってたら

「全く… 自分の彼氏の女装姿を思い浮かべて笑ってる人がありますか？」

そう注意を受けたアタシは

「心配するな、ちゃんとここに居るんだからな？ アタシは悪くない、可愛すぎる戸塚の可愛さが故の過ちだっ！」 ふんす！

『ポコッ！』

「あだっ」

「みなさい、自分の罪を告白してるじゃないの？」

と、雪乃の鋭い指摘と雪乃曰く八重お仕置き棒で頭を叩かれたアタシが涙目で

「だからってそんなポンポン叩かなくなたっていいじゃんか？ 結衣みたくなったらどうすんだよ？」

そう抗議したけど結衣聞き逃したのか何も言わず雪乃はスルーして

「ところで、貴方達は三人揃って何の用かしら？」

そう言われた三人は互いに顔を見合わせ

「大岡と大和は何しにきたのかな？」

「そう言う隼人と大和こそどうしたんだよ？」

「いや、俺はちよつと気になるとゆうーか知りたい事があつてだな？」

そう言ってるのを聞き流してお茶を淹れクッキーを添えて三人に配った

「雪乃ほどは美味しく出せてないが飲んでくれ」

そう言つて配られた紅茶を受けとる三人を見ながら

「雪乃と結衣はお代わりどうする？」

そう聞いたら

「そうね、来客も有つたのだからお願いするわ」

「あたしもあたしも、雪乃んが淹れる紅茶ってスゴく美味しいけどその雪乃んに習ってる八重ちゃんもスゴく美味しいんだよっ♪」

と、言うから

「当たり前だ、バカタレ… 雪乃先生にレッスンを受けてるんだ

ぞ？それくらいできなくてどうするんだ？

それになんと言つても様式美も重要な要素なんだよ、ボスが依頼人から依頼内容を聞きアシスタントがボスと依頼人にお茶をお出しすると言う暗黙のルールがな」

そう聞く人によつてはどうでも良いことをさも重要な真理を語るが如くに語るアタシだった：雪乃は呆れていたがな

そうアタシが由比ヶ浜に講釈を垂れながら三人に紅茶を出すアタシに見惚れる三人に呆れながら

「要するに三人は公認カップルの戸塚君と同じ班になる八重さんが最後の一人に誰を選ぶか知りたいしあわよくば自分がその席に座りたくて抜け駆けしたつもりが皆居たと：そう言う訳ね？」

そう言つてアタマイタポーズを取る雪乃とそう言われて互いの顔を見合わせる三人に

「どうやら凶星だったようね？」

そう言つて嘲笑う雪乃に開き直つた葉山は

「まあ、バレてしまったんなら今更誤魔化しても仕方無い：雪ノ下さんに言われた通り八重と一緒に職場見学に行きたいんだ、だから俺を同じ班に入れてもらえないかな？」

そう言われて驚いたアタシは

「皆には悪いが三人目には沙希を誘うつもりだし彩加の許可も取つてあるから女子三人で行くつもりだ」

アタシがそう言つたら

「何で貴女は自分の彼氏を女子扱いするのかしら？」

そうアタマイタのポーズで言う雪乃に

「仕方無いだろ？アタシ等がデートしてると仲良し姉妹扱いで二人揃つてナンパされるんだからな

それに隼人にはわからないだろうけどこう言う班決めはボツチには拷問なんだよ、だからアタシはボツチを誘う」

沙希の問題が解決したからと言つて本人が望まない限りボツチの体質が変わるわけ無いからそう答えるアタシに

「だが俺達も四人、一人溢れてしまふんだが：」

そう情けない声で言われて溜め息吐いてから

「そんなの皆の葉山君の隼人なら適当な二人選んで

『俺達は四人同じ職場に行きたいから協力してくれないか?』

そんな風に誘や余程行きたいところがあるヤツでなきや断らない
んじゃね?」

そうアタシが言ったら

「そんな簡単な事なのか?」

そう聞き返して来るから

「隼人には簡単な事だけどアタシ等ボツチはそんな事できないか
ら最後に残った班に行くってのがお約束なまである

だからアイツを誘ってさっさと決めてやればWinWinだろ?

」

そうアタシは笑っていった

職場体験保育園編… 何処のリアルオママゴト好きの園児だよ？

② けーちゃんの元へ

隼人達に話を聞かれた翌日アタシは沙希に

「職場見学一緒に行かないか」

と、声を掛けると「けーちゃんの保育園に付き合ってくれませんか良いよ」

との答えに

「なんと素晴らしいっ！ それを最初から書いてたら彩加に注意される事も平塚先生を泣きながら爆走させる事も雪乃に呆れられることもなかったじゃん？」

うん、あそこなら先生も何人かは顔見知りだし園児もけーちゃんを通して何人かは顔見知りだからねはボッチのアタシにも優しい職場だ

彩加燃それで良いか？」

そうアタシが聞いたら

「保育園には僕も興味有るしやつと八重ちゃんがちゃんとした希望先を考えてくれたから嬉しいんだからね？」

そう言われて

「アンタ… 中間試験学年総合八位なのにアホなの

そう言われて彩加が

「アホというか抜けてると言うか… そこが可愛くも有るんだけどね？」

その彩加の言葉に

「なんだい、結局ノロケかい…」

と、呆れられた彩加だけど

「けどそこが魅力のはアタシも認めるよあの雪ノ下や三浦に放つ

ておけないと思わせる危うさ…

それは男子達の保護欲をそそり惹き付けてやまないしあのさばさばした性格のアイツの事をなかなかいないんじゃないの?」

そう沙希に言われた彩加は

「そうだね、どうも葉山君まで八重ちゃんを虎視眈々と狙ってるみたいなんだよね?」

そう言っつて苦笑いを浮かべると

「それ、本人は全く気付いてないんだろ? と、ゆーか本人は全く興味無いつて感じすらするよ…」

そんな二人の会話が耳に入らないくらいに集中してシュシュ作りをするアタシだけど沙希の指導のお陰でかなりハマってる

勿論その被害は半端なく拡散中だ

アタシのお弁当箱袋はミニー柄の生地使用で彩加のお弁当箱袋はミツキー柄を作ったのに苦笑いされお蔵入り

雪乃にはパンさん柄の、優美子にはおしやま猫キャットメリーの柄のシュシュを贈ったら引き笑いされ大事にしまっておくと言われそれ以降見たこと無い

そんな訳なので以降人に贈るのを諦めて自分用のをひっそりこっそり隠れて作ってる

夏までに浴衣作りたいから…花火大会、浴衣着て彩加と見たいから… うん、頑張るよ… はあ… テンション上がらない

裁縫道具と二人分のお弁当箱を片して教室に戻り午後の授業が始まりやがて放課後になり今日は部活の日…

と、言っても特に依頼もないからアタシは問題集と格闘中いつものようにクツキーをつまみながら三人でお茶を飲んでると

「八重ちゃん、八重ちゃん、アタシ等も沙希ちゃんの妹さんの保育園に行くねっ♪」

そう言われたけどテンション駄々下がりのアタシには何も言う事はなく

「そーなんだ… ははは」

と、乾いた笑い声をあげるだけだった

③ やって来ました保育園

部活が終わり戸塚を待つ私はとても可愛い女の子…………… 我ながらキモいからこの手の冗談は封印すべきだね

うん、でもJKらしくは見えるかな？

誰がJCだよ？ はっ倒すぞっ!?

……………はあ、あほくさ…………… アタシは誰と口喧嘩してるんだろうか？

あ、テニス部の仲間と一緒にか… 仕方無いよな…

「彩加… 部外者は遠慮するよ… また明日…」

ここ一番で発揮するアタシの逃げ足で脱兎の如くその場を逃走を図りとぼとぼ歩く帰り道…

小町の前ではいつものように振る舞わなきやね…

そう思うと余計に気が重い

最近体が重い（体重は減ってる）は気持ちは晴れない…憂鬱だ…

職場見学初日、呆れたことに集まった班は戸塚班、班員はアタシと沙希に三浦班で班員は姫菜と結衣はわかるんだけどさ…

戸部班、班員は大岡に大和に葉山班葉山班の班員は佐東に鈴置っておまえらなにしにきたの？

自己紹介が始まり沙希はけーちゃんの美人のお姉さんにアタシも何度もお迎えに来てるから可愛い？お姉ちゃんの扱いで彩加はいわなくてわかるよな？

サーちゃん先生、ヤエちゃん先生、にサイちゃん先生

優美子達はゆみこ先生にひめ先生とゆい先生で葉山だけお兄さん先生で後は君付けだ

で、まずは顔合わせをかねたお遊びなのに葉山以外の男子はなにしくて良いのかわからずに立ち尽くしているから

「しょうがないな…」
と、呟いて

「先生…………… 一部、ボール遊びに切り替えても良いですか？」

けーちゃんのクラスの前先生に許可を取り園児用のサッカーボールを戸部にパスを渡しながら

「ほれっ！ 受け取れっ、戸部っ…トランプからのリフティン
グっ！」

日頃鍛えてるテクニックを今、披露しなくていつするんだよ？」
そう言ってやったら、やっと理解して華麗なるテクニックを披露し
たら男の子を中心に戸部を見る目が変わった

今度は大和の番で

「このお兄ちゃんはおアタシ等の学校の野球部でエースで四番の
カッコいい人なんだぞ？」

キャッチボールとか習いたい子はこのお兄ちゃんとこ集まれっ！

「そう言ったら、キャッチボールしてるのを何度か見たことのある子
達が集まり今度は大岡を呼び寄せ

「このお兄ちゃんはラグビー、ゲンゴロウ丸のラグビーをやつて
るからスツゴク力持ちなんだぞおーっ… ほれ、大岡こーゆー風に鵜
で曲げて力入れて踏ん張れ」

そう言っつて曲げた腕にぶら下がって見せ

「なっ、すっげーだろっ！」

そう言っつてアタシが離れたら大岡の腕にぶら下がると園児達が群
がり最後に佐東と鈴置は

「軽音部のアンタ等の持ち歌にここに居る子達と一緒に歌える曲
無いの？」

歌い始めたら先生たちだつてフォローできるんだからしっかりし
なよ？」

そう指示を出して

「全く世話の焼ける男子達だよ、先生達に笑われてるじゃんっ！
」

憤慨しながらそう言っつて再びあや取りのグループに戻ったんだ
皆で食べる楽しい給食の時間になりアタシと沙希は一才児の見守り
に姫菜と優美子は二歳児の見守りをしながらで後のメンバーは普通
に幼児達と楽しく食事した

乳児クラスの四人はそのままお昼寝の誘導し彩加、隼人、結衣は幼児クラスのお昼寝する子の睡眠誘導

残りの四人はお昼寝しない子達とえほんを見て過ごす事に

その後園長先生が申し訳無きそうにちよつと今年は色々立て込んで明日のお誕生日会の準備が：

そう申し訳無きそうに言つて来たので園の事情を知るアタシと沙希は互いに顔を見合わせ

「遠慮しないで手伝わせてください、職場見学と言うだけじゃなくけーちゃんのお世話になつてる園、お友だちの皆の力になりたいんです」

「何かよくわからないけどあーしらだつて昔は幼稚園なり保育に通つてて園のお誕生会がどんなに楽しみにしてたかまでは忘れちゃいないから手伝うしかないでしょ？」

「僕はそれほどけーちゃんとはそれほど親しくはないけど八重ちゃんが手伝うなら僕もその力になりたいです」

「皆仲良くですね？」

「せっかく行事に参加できるなら子供達に楽しんでもらわなきゃだよね？」

「普通は行事に重ならないはずが運良く参加できる訳だしね」

と、優美子、彩加、隼人、結衣、姫菜の順に賛同の声をあげて本来は休憩の時間に花飾りや切り絵等の工作を頑張りましたさ

お昼寝の後のおやつの時間になり給食と同じ割り振りで助手として入るアタシ達

そしてお迎えの時間まで外遊びと中遊びに別れアタシは教室で中遊びだ

こればかりは例え彩加に呼ばれても譲れないアイデンティティーだが隼人何でお前が教室内ないにいる？

まあ良いだろう、アタシの一人遊びマスターの実力の前にひれ伏すがよいわ

つて思つてたんだけどやはり慣れてるわけないから目を覆いたくなる不器用さに思わず手をとつて

「ことうやるんだゾツ！」
って教えてたら

「何で八重ちゃんが葉山くんの手を取って折り紙を教えているのか知りたいなあ〜っ？」

そう黒笑みを浮かべる彩加に言われて滝の汗を流しながら言い訳考えてたらどこぞのリアルおままごと好きな園児みたく

「修羅場よ、修羅場、一人の男を巡って二人の女が醜い争いを繰り広げてるわよっ！」

（人の不幸は蜜の味って… アンタら、噂好きの主婦かよ？）
そう思ってたなら

「違うよ、サイちゃんとヤエちゃんは痴話ゲンカしてるって

フーフゲンカは犬さんも食べないから放って置けば良いからって
サーちゃんも言ってたよ？」

ってサーちゃん、アンタけーちゃんいったいなに教えてるのさ？

そんなことをしてる内に帰る時間に川崎はけーちゃん同伴でサイ
ゼて反省会…

もとい、園児に修羅場とか痴話ゲンカとか言われたアタシ、彩加、隼
人の三人は優美子からお説教中

何か疲れる職場見学初日でした

職場体験保育園編… この思い出がいつか…

職場見学二日目、今日は園のお誕生日会

朝の会の後、遊戯室に移動して会が始まりアタシ達はそれぞれに
お誕生月の園児を座らせてますがアタシも彩加の膝に座りたい…

勿論、そんな事言おうものならまた今日も優美子のお説教間違いな
しだから言わないけどさ

お誕生日ソングのリードボーカルは佐東と鈴置が指名され熱唱中

大岡に戸部、大和は体操のお兄さんで佐東と鈴置は歌のお兄さんみ
たいな感じで慕われている

女子（彩加を含む）はアタシ以外は優しいお姉さん？ で
アタシは身から出た錆とはいえ元気なお姉ちゃんだ…

見た目的や昨日男子達を仕切ったのが原因らしいけど解せぬ…

アタシは姫菜同様に正統派では無いのは認めるが歴とした文学少
女のつもりなんだが…

お誕生会の後はお絵描きなんだけどアタシがプリキュアの絵を描
いて女の子達にウケてるのを見て露骨に悔しそうな顔をしてる

それが面白くてついつい量産してただけどそれが後々に厄介事
を招き寄せるのはまた別の話し

え、絵が得意なのかって？

まあそうとも言えるけど少なくとも美術で点数もらえる絵を描け
る自信はないし描く気もない

八と入れ替わりで夜を過ごしてた時のアタシは勉強をする、本を読
む、ゲームする、ネットをロムる、アニメやラノベのキャラのイラス
トを描く

とか、とにかく一人で静かに出きることで夜を過ごす日々を暮らし
てればそこそこは描けるようになったのも特別な話じゃない

まあ、その当たりのアタシの個人的な事情とかは園児達には関係無
く園児達にはスゴく上手に描けている絵が嬉しいのに何ら変わりは

ない

そんな感じだからオリジナルのキャラを描いたりする気もないしそんなセンスなんかあるとも思わないからイラストを仕事にする気もない

やれても精々漫画家のアシスタント： もちろんベタ塗りやスクリーントーン貼りとかかな？

それにアタシの場合書き慣れた絵を描き写してるだけだから描いたことのない構図は手本を見てならなんとか描き移せる

だけど口頭であんな構図とかこんなポーズとらせて、何て言われても無理だしそもそも滅多に人前では描かない

と、言うかラノベのキャラはともかく学校でプリキュアの需要あるとは思えないし材木座には絶対教えないから今までこの特技を知っているのは家族以外は沙希だけ

けーちゃんと遊んでる時にはプリキュア、蒼空からはヒーロー戦隊と仮面ライダーやウルトラマンをお願いされてるからなんだよね

勿論描いた絵はお誕生月の子優先にリクエストを聞いてプレゼントしたよ

給食の時間とお昼寝誘導も昨日と同じ割り振りで別れおやつ後にいよいよお別れの時がきた

結構別れを惜しんでくれてるのが嬉しかったな： まあアタシは沙希の代わりにこれからもけーちゃんのお迎えに来ることもあるからお別れじゃないんだけどな

色々あつた職場見学だったけど書き上げたばかりのレポートをカバンにしまいアタシはホッと一息吐くのだった

誕生日

ガハマさんのバースデー… 引かれ合う三人

① 雪乃は重度の方向音痴だった

大志の依頼以降社蓄街道まっしぐらなアタシはよくよく考えるまでもなく休みがない

そんなある土曜日の事… この日は沙希が休みでバイトの後がフリーになったアタシは小町と東京ワンにゃんショーに行くべくバイトを昼過ぎまでにして現在待ち合わせ場所にいる

すると見慣れた人物が一人パンフレットを片手にぶつぶつ言いながら歩いているのが見えたが如何せん待ち合わせの時間が近い今の場を離れるのは具合が悪い…

そう考えてたら小町に気付けずにびっくり

「お姉ちゃん、何やら難しい顔をしていますけどどうしましたか？」
「そうよそ行きの口調で話しかけられ

「あそこに居るのは雪乃だよな？ さっきからあの辺りをうろうろしてるのが気になってたから声かけてきても良いか？」

アタシがそう言うと

「それならアタシも行きますよ、小町が来るまでは我慢して待っていたのでしょ？」

「そう言われて凶星なアタシが苦笑いすると

「それならレッツゴーです」

「そう元気よく言っただけで雪乃に話し掛けに行つた

「うす」

アタシがそう声をかけると

「全くもう少しきちんと挨拶しなさいっ！ と、いつも口を酸っぱくして言ってるでしょうに…」

「そう言われたから

「それならあの頭が痛くなるような結衣の挨拶を何とかしてくれ
少なくともアタシ達にまであれを言わせようとするのは諦めて欲
しい」

そう言ったら

「え〜っ、なんですか？結衣さんのやつハローっ♪可愛いじゃないの、お姉ちゃん」

そう小町に言われたアタシは

「純真な彩加がつられていつてるがこれに関しては譲れない線だ
アタシはこれ以上アホのレッテルを張られるのは勘弁だからな」
そう言つて嫌な顔をする

「全く…お姉ちゃんは可愛いげがなく困りますね…」

「って、なんでアタシが悪いみたいなの流れになっちゃってるの？
理不尽だ」

「そう言えば雪乃は探し物？十分位前からこの辺りをうろうろし
てたよね？」

そう当たり障りのない聞き方をしたら

「ええ、心配してくれて有難う、何とか見付かったわ」

と、何事もなかったように振る舞ってるけどね…

「そっか、ならアタシ等もワンにゃんシヨ〜に来たから雪乃が嫌
じやなきや一緒に回らないか？」

アタシのその誘いに一瞬安堵の表情を浮かべ

「そうね、せっかくここで出合えたのですもの…無下にお断りす
るのも野暮ね？」

そう言つたかと思つたらアタシの左手を握り右手を小町が握つて
る

「え〜っところこの構図だとアタシが末妹みたく見えるんですけど？
」

そうアタシが唇をとがらせ抗議すると

「お姉ちゃんが無意識にしているその子供っぽい仕草を何とかしな
きゃ見た目通りにしか見られないよっ…」

そう小町に言われ

「そうね、気を引くものに吸い寄せられて暴走する貴女は困った
ちやんだったけど可愛かったわよ？」

「そう言われ何て返せば良いのか迷っていたら

「パパ、あの子良いなあー、優しいお姉ちゃん達と一緒に来てる
ねっ♪」

そう少女が言うとその子の父親らしき男が

「そうだね、三人仲良く手を繋いでたのしそだね」

その悪意なき言葉に落ち込んだアタシは雪乃と小町の二人に大人
しく連行された

② ワンにゃんシヨ

「そう言えば貴女達もよく来てたのかしら？」

雪乃にそう聞かれたアタシは

「いや、アタシは始めてだ… 八と小町は毎年来てたがな… カ
マクラと出会ったのもワンにゃんシヨだったしな」

アタシの言葉に少し寂しそうに笑う小町

「ペンギン… か、ラテン語で肥満を意味するんだよな…」

アタシがボソツと呟くと

「お姉ちゃん、せっかくのシリアスモードが台無しだよ？」

そう言って呆れる小町だが

（ どうにもならない事を悩んでも仕方ねえんだぞ？小町… 俺が
… 俺達が元の俺に戻ることはないしそれを望むことは八重を
否定することなんだからな… ）

そんなアタシのモノではない思考… 心の声に気をとられていた
ら

「全く… 八重さん、貴女と言う人は空気を読まないわね？」

そんな事を言われて

「空気を読めない貴女には言われたくないよ…」
そう思ったアタシだった

アタシが適当に猫を構うなか一心不乱に猫と戯れる雪乃
それを見てたら

(焦る必要はねえし誰かと自分を比較する必要もない)
再び声が聞こえてきたから周囲を見回しただけど当然該当者は見当
たらない

「……………?、?、?」

無言で周囲を見回し首をコテンと倒すのを不審そうに見ていた小
町が

「お姉ちゃん、あたしは六時にアマゾンの荷物が届きますから先
に帰るのです」

敬礼をしながらそんな変な口調で言う小町に

「晩ご飯はどうするの?」

そうアタシが聞いたたら

「冷凍庫の作りおき解凍したら結構なんでもあるからそれ食べて
おくからあたしの事は心配しなくても良いからね?」

そんな事を言われて

「ん、あまり遅くならないようにするから気を付けて帰りなよ」
取り敢えず心の中にわき起こった疑問は横においてそう言つて小
町を見送つた

それから暫くして猫を堪能したらしい雪乃が

「もうすぐ由比ヶ浜さんの誕生日らしいのよ… だから私達もプ
レゼントでもって思ったのだけど…」

そう言われて驚いたアタシは

「誕生日って友達もプレゼントを贈るものなか?」

そう雪乃に聞いたたら

「八重さん、それはなんの冗談のつもりなのかしら?」

そう言つて冷ややかな目でアタシを見る雪乃に

「そうなんだ、知らなかったな… そんな事すらアタシは知らな
かったんだよね… 八にはプレゼントを贈る相手も送ってくれる相
手も居なかつたんだよな…」

そもそも誕生日自体教えてもらえてないし誰も覚えてないんだろ

うからな…」

そう最後の一文は口の中だけで呟き

「だから友達へのプレゼントって何を送ったらいいんだよ？ アタシなんにも知らないぞ？ その手の常識なんてモノはな」

そう投げやりに言う

「それなら二人で一緒に買いにいかないこと？」

そう言われて黙って頷き買い物に行くことにした

「なあ、こういった場合ってなんかタブーとかってあるのか？」

邪気のないアタシの問い掛けに

「特なにか決まっているわけではないけど八重さんの場合だと料理が趣味だからと言ってスパイスセットを貰ってもあまり喜べないのではないかしら？」

そう言われて

「ああ、確かに… 鷹の爪や胡椒は自分が食べる分以外は普通に使うから要らない訳じゃないけど… うん、確かに貰って微妙だよね」

② ワンにゃんショー

「そう言えば貴女達もよく来てたのかしら？」

雪乃にそう聞かれたアタシは

「いや、アタシは始めてだ… 八と小町は毎年来てたがな… カマクラと出会ったのもワンにゃんショーだったしな」

アタシの言葉に少し寂しそうに笑う小町

「ペンギン…か、ラテン語で肥満を意味するんだよな…」

アタシがボソツと呟くと

「お姉ちゃん、せっかくのシリアスモードが台無しだよ？」

そう言つて呆れる小町だが

(どうにもならない事を悩んでも仕方ねえんだぞ？ 小町…俺が…俺達が元の俺に戻ることはないしそれを望むつてことは八重を否定することなんだからな…)

そんなアタシのモノではない思考…心の声に気をとられていたら

「全く…八重さん、貴女と言う人は空気を読まないわね？」
そんな事を言われて

「空気を読めない貴女には言われたくないよ…」
そう思ったアタシだった

アタシが適当に猫を構うなか一心不乱に猫と戯れる雪乃
それを見てたら

(焦る必要はねえし誰かと自分を比較する必要もない)

再び声が聞こえてきたから周囲を見回しただけど当然該当者は見当たらない

「…：…？、？、？？」

無言で周囲を見回し首をコテンと倒すのを不審そうに見ていた小町が

「お姉ちゃん、あたしは六時にアマゾンの荷物が届きますから先に帰るのです」

敬礼をしながらそんな変な口調で言う小町に

「晩ご飯はどうするの？」

そうアタシが聞いたら

「冷凍庫の作りおき解凍したら結構なんでもあるからそれ食べておくからあたしの事は心配しなくても良いからね？」

そんな事を言われて

「ん、あまり遅くならないようにするから気を付けて帰りなよ」

取り敢えず心の中にわき起こった疑問は横においてそう言って小町を見送った

それから暫くして猫を堪能したらしい雪乃が

「もうすぐ由比ヶ浜さんの誕生日らしいのよ…だから私達もプレゼントでもって思ったのだけど…」

そう言われて驚いたアタシは

「誕生日って友達もプレゼントを贈るものなか？」

そう雪乃に聞いたら

「八重さん、それはなんの冗談のつもりなのかしら？」

そう言って冷ややかな目でアタシを見る雪乃に

「そうなんだ、知らなかったな…そんな事すらもね…八にはプレゼントを贈る相手も送ってくれる相手も居なかったんだよね…」

「そもそも誕生日自体教えてもらえてないし誰も覚えてないんだろうからな…」

「そう最後の一文は口の中だけで呟き」

「だから友達へのプレゼントって何を送ったらいいんだよ？アタシなんにも知らないぞ？その手の常識なんてモノはな」

「そう投げやりに言う」と

「それなら二人で一緒に買いにいかないこと？」

「そう言われて黙って領き買い物に行くことにした」

「なあ、こういうった場合ってなんかタブーとかってあるのか？」

「邪気のないアタシの問い掛けに」

「特になにか決まっているわけではないけど八重さんの場合だと料理が趣味だからと言ってスパイスセットを貰ってもあまり喜べないのではないかしら？」

「そう言われて」

「ああ、確かに…鷹の爪や胡椒は自分が食べる分以外は普通を使うから要らない訳じゃないけど…うん、確かに貰って微妙だよね」

ガハマさんのバースデー… 私の為に一日空けてくれないかな？

③ ネコ派の雪乃は犬が苦手

気のせいかな？ 遠くから犬の哭声が聞こえてきてアタシ達に近付いてきてるような…

雪乃の顔が青ざめ震えてる…

犬、苦手なのかな？ 雪乃… えっ？

お腹に軽い衝撃が走り驚いてその衝撃の元を見たら

「ミニチュアダックスフント？」

そう思ったら飼い主らしき女の子の声でした

「す、すみません… リードを離しちゃって… え、八重ちゃん

と雪乃ん？」

そう呟く結衣に

「 氣い付けろよ？ でなきやどんな事故に遭うのか知れたもんじやないからな 」

犬の頭を撫でながらそう言う

「 あ、うん… 二人で来てたんだ… あたしは何も聞いてないのに… 」

そう呟く結衣に

「 そりやそうだろ？ アタシは沙希が急にバイト休んで家に居るからポツカリ空いた今日、小町とわんにゃんショーに来てたし雪乃は一人で結衣も今あった 」

ここにそんな事情を知らん彩加が来たら

『 やっぱり奉仕部の三人って仲良いよねっ♪ 』
「 ってゆるぞ？ 」

そうアタシに言われ苦笑いしながら

「 確かに彩ちゃんの言いそうなことだし端から見たらそう見える 」

んだね… ところで今は何してたの？」
そう聞かれたから

「少し前まで、本屋で雪乃に参考書の相談してたんだよ… 進路希望を国公立大学も視野に入れようかって迷ってるからな？」

雪乃にはまだそこまでは話してないけど、結衣があまり突っ込んでこないだろう話題だからそう振ってみたら案の定

「あははははっ、八重ちゃん… もうそんなことを考えてるんだ？ 早いね…」

なんて呑気な事を言うから

「早いヤツはそれこそ物心つく頃から考えてる… 身近なところじゃ隼人

アイツの希望は知らないけど周囲は弁護士か医者のだっちかを期待してるんじゃないの？」

そうアタシが言うと

「あゝっ… うん、隼人君はずっと前から考えてたんだよね…」
そう話題がそれでホツとして

「そんな事を話しながら小腹が空いたな… あっ、カマクラの工サってあんま残ってないよな？」

そんな事を思い出して買いに来てたわけ」

そう言つて買つてきたばかりのキャットフードを見せ

「で、結衣の方はどうしたの？」
そう話し掛けると

「あたしはサブレ… その子の名前なんだけどトリミングが終わる頃だからお迎えに来てたんだよ」

そんな事を話してる時だった

「八重ちゃん、ガハマちゃん、ひやつはろーっ！」
そう叫びながらアタシに抱き付いてきた陽乃さん

（貴女の夢と希望がまったアレに埋もれて息がつまりそうなんですか？）

そう思つてたら雪乃が引き揚げてくれたから

「うん、その夢と希望がまった大いなるそれがアタシの天敵で

あるの改めて認識したよ……」

「そう言つて真つ赤な顔でゼーゼー言つてる涙目のアタシは悪くないよな？」

「あらあら、お姉ちゃんつて貴女になにかしちやつたのかしら？」
「そう言われたけどその言葉はアタシの耳には届かないけど仕方無いよな？」

悪気なくてもマジ窒息するつて思ったんだからさ」

「そんなアタシを見ながら仕方無い…… そんな表情を浮かべた雪乃がアタシの耳元で

「 そんなに睨んでも貴女のは大きくならないわよ？」

「 そう言われて溜め息を吐き

「 あゝつ、悪い……持病が出たみたいだな？ 色々お世話になつて感謝してます」

「 そう尋常に挨拶すると

「 ちゃんとお礼が言えて偉いわね？ そんな貴女にご褒美よっ♪」

「 そう言つて棒着きキャンデーを一袋くれたから結衣と食べてる

「 そんなアタシの頭を撫でるその人に向かい雪乃は

「 そんな事より今度はいったいなんの用なのかしら？」

「 そう苛立ち気味に言う雪乃に

「 イヤだなくつ、雪乃ちゃん…… もうすぐ私のアレだつて知ってるクセに？ だから八重ちゃんのスケジュールを押さえに来たに決まつてるじゃないの？」

「 そう言われた雪乃が苛立ち紛れに叫ぼうとするのを

「 雪乃、これでも舐めて落ち着いて…… でなきや勝てる戦も勝てないよ？」

「 そう言つてにかつ、と笑うと

「 口の中に物を入れて話をするのは行儀悪いつて言ってるはずよ？」

「 そう言つて溜め息を吐く雪乃は大きく息を吐いて

「 仕方無いわ、八重さん…… 来月の七日も予定を空けて欲しいの

「ただよろしいかしら？」

「そう雪乃に言われて

「あゝつ、バイトは休んでもいいんだけど夕方は川崎家の七夕に誘われてるんだけど？」

「遅くとも暗くなる前には行きたいからそれまでで良いんだけど

さ

「アタシがそう答えると

「だそうよ？後は姉さんが妥協できるかできないかなのだけと？」

「

「そう雪乃に言われた雪乃の姉さんは

「じゃその分早い方は平気なのかな？」

「んゝつ… あんま早すぎても困るかな？ 多分親父と母ちゃん

は普通に仕事だろーから朝ご飯用意してお弁当渡したいし妹の朝ご飯と昼ご飯も用意しておきたいから六時前はちよつとね…」

「難しい顔をしてそうアタシが答えると

「あははははつ、まさかそんな早くないよ？ と、言うか八重ちゃ

ん何時起き？」

「そう聞かれて

「四時だけど変？」

「そう聞いたら

「いや、全然変じゃないから安心してよつ、じゃあ七時に八重ちゃん家に迎えに行くから用意しといてよ？」

「ん、じゃあお姉ちゃん用事済んだし満足できたからもう帰るねっ♪

「八重ちゃんも当日楽しみにしてるからねっ♪」

「そう言われて

「ご期待に応えられたら良いですけどね」

「そう言つて去つていく陽乃さんを見送るアタシ達だった

「あゝつ、そう言えば八重ちゃんに頼まれてたお店の名刺のデザイン考えてきたんだけどどうかな？」

「そう言われて

「ん、見せてみて…」

そう言って受け取り眺めてみて

「うん、さっすが結衣っ！期待以上だよっ♪ アタシじゃこんな可愛いくデザインするの無理、お礼に今度なんかおごるよっ♪」
そう言って笑ってるのを見て溜め息を吐いてる雪乃の事は気付いてない

日曜日は川崎家で蒼空とけーちゃんを過ごして大志にも勉強を教えた

そして結衣の誕生日当日、お昼は結衣のママに話して結衣のお弁当を作らせてもらい食べてもらった

事情を話して小町と大志に蒼空とけーちゃんを連れてきてもらい事情を知らない結衣の為に雪乃のケーキが焼き上げてアタシはあまり好きじゃないサプライズパーティー

アタシからのプレゼントはサブレの首輪…

「って結衣、それサブレのだからね？」

自分の首に巻こうとする結衣にビックリしたアタシがそう言っただけ

「そ、それくらい知ってるしっ！」

普通に考えて人間の首に収まるサイズじゃないよね？小型犬用なんだからさ

それとミトンにクッキー

雪乃はエプロンとミサングで

「途切れない友情を願いたいわ…」

と、そう言って

「そしてこれは八重さんのよ」

差し出されたそれを受け取り紙袋から出すと中から出てきたのはパステルオレンジのカジュアルな感じのエプロン

「あ、ありがとう…アタシまで…」

そうお礼を言うアタシ達

みんなで一緒にケーキを食べます小町と大志が塾に行きアタシも

一足先に蒼空とけーちちゃんを連れて帰ることにしたんだ

こうしてアタシと雪乃の秘密のミッションは無事成功に終わったんだ？

困みに、今日雪乃から貰ったエプロンは川崎家で使っている

陽ノン聖誕祭：… コスプレ好きは陽乃さんだけじゃなかった

① 彦星不在の織姫様の憂鬱

現在アタシ達は川崎家に居る

陽乃さんが蒼空とけーちゃんがみてくれているのを見ながらそろそろ帰ってくる小町と大志の晩ご飯の支度を始めている

え、ナンで陽乃さんが川崎家に居るのかって？

明日は陽乃さんの誕生日で小町に手を回した陽乃さんが親父と母ちゃんから今夜の外泊許可を取り付け

その結果： 小町と二人、今夜は雪ノ下家に泊まりに行くから沙希が帰ってきたら都築さんのお迎えで雪ノ下家に向かうからだ

小町と大志が帰ってきてご飯を食べさせてから二人の： 主に大志の質問を聞く

川崎家に来るようにになり何だかんだで大志の勉強を見ているのだ

沙希が帰ってくる時間が近付き沙希のご飯を支度しているうちに沙希が帰ってきた

それにもない沙希の顔を見た蒼空とけーちゃんが安心してうとうとし始めるからアタシと小町

：今日は陽乃さんが二人を寝かしつけ二人の眠るのを確認してから帰る支度をし今夜は雪の下家に向かうんだが…

「あ〜っ … 都築さん、今まで小さい子の相手してたからこんな格好してるんですけどやっぱ不味いですよね？」

そう聞いてみたら

「お姉ちゃん… それ気にするのって、今さらだからね？」
呆れてそう言う小町に

「大丈夫でございませよ、小町様… もしご心配でしたら旦那様

と奥様にお会いになる前にお着替えいただければよろしいかと存じますので」

そう言われてホツとして雪ノ下家に向かった

雪ノ下家に着くと早速都築さん案内でツインの客間に案内してもらい早速着替える事に…と思ったら陽乃さんから待ったが掛かり

「メイド服が趣味の八重ちゃんはこれを着てっ♪」

そう言われて差し出されて受け取って鏡の前で胸に当ててみて

「いや、別に趣味って…ぶっ！ な、なんっすか！ これっ、エバの綾波バージョンっ!？」

そう言って叫ぶと

「うん、うん、良いね、良いねっ♪ せっかくなんだから着て見せてよっ♪」

そう言われて着る事にした…

え、なんでっ？ メイド服ならバイトで散々着てるんだから今さらじゃん？ 別にコスプレクライじゃないし

そんな訳で早速着替える事にして小町も陽乃さんが用意してくれた清楚なイブニングドレスに着替えた

着替え終えたアタシ達は陽乃さんと一緒に雪ノ下は家の当主と奥方様との謁見に向かうんだけど…

都築さん… もしかして笑い、堪えてませんか？ ひよつとしなくてもこのネタご存知だとか言うんじゃ… すいません、どうやら知ってますね

「陽乃、アスカ・ラングレイアスカ・ラングレイバージョンを頼んで良いかね？」

「それなら私はマドマギでお願いしますね」
「…」
「ってナニ？ 状況が見えませんか現実をみたくありません…」

何故ゆえ開襟シャツの紳士とサマードレスの淑女がコスプレ話で盛り上がってるの？

頭の中で？ を涌かせたアタシが悩んでたら

「今時の仮装パーティーって結構コスプレパーティーだったりするのよ？」

そう言って笑う陽乃さん

「はあ、そんなものなんですか…」

そう言って脱力するアタシだった

その後アタシがメイド喫茶でバイトしてるって話になり

「常勤押さえてクラスメイトの川崎ちゃんって子と使命数N〇.

1、2を占めてるんだよね

出勤数の違いで川崎ちゃんに一位をを譲ってるけど凄い人気よっ

♪

「そう言って笑ってる陽乃さん

そしてそんな陽乃さんを見て

「いかがでしょうか？ 陽乃様、八重様にアルバイトの時のノリ

でお茶をお出し頂くというのは」

そう言われたアタシがはぁっつと溜め息を吐き

「ハーブティーと明日蒼空とけーちゃんにお土産にする予定の

クッキーがありますけどどうしましょうか？」

その後アタシがメイド喫茶でバイトしてるって話になり

「常勤押さえてクラスメイトの川崎ちゃんって子と使命数N〇.

1、2を占めてるんだよね

出勤数の違いで川崎ちゃんに一位をを譲ってるけど凄い人気よっ

♪

「そう言って笑ってる陽乃さん

そしてそんな陽乃さんを見て

「いかがでしょうか？ 陽乃様、八重様にアルバイトの時のノリでお

茶をお出し頂くというのは？」

そう言われたアタシがはぁっつと溜め息を吐き

「ハーブティーと明日蒼空とけーちゃんにお土産にする予定のクッ

キーがありますけどどうしましょうか？」

そう聞くと

「お茶は雪乃ちゃん仕込みでバイト先でもお客様に好評だしクッキーも…当然八重ちゃんの手作りのなんだよね？」

そう聞かれたアタシが頷くのを見て

「雪乃ちゃんのお墨付きだし何より誤魔化しの効かない素直な幼児が美味しそうに食べてたからね、期待して良いよ」

そう陽乃さんが言うと

「ほうそれは楽しみだね、でも良いのかい？その二人の分を出してしまっても」

そう聞かれたから

「二人には明日特に七夕に因んだ訳じゃないですけど金平糖を買ってはいかがでしょうかから平気です」

そう答えると笑いながらなら

「そう言う話なのならば陽乃はバームクーヘンを持っていつてもらいなさい」

そう言われて陽乃さんも楽しそうに笑いながら

「あの幼い兄妹も可愛い子達だからね」

県会議員雪ノ下夏彦には専属執事が五人ついているが執事と言うのなばかりでようは住み込みの秘書だ

同じ理由でメイドも二人ついているが当然秘書で皆それぞれの経歴を持っている

雪ノ下昭乃には専属の執事が二名で、こちらはどちらかと言えばSPとしてついでおり両目共元自衛官

専属のメイドは五名いてこちらは完全に昭乃の秘書

しかし秘書と言っても昭乃に同行したり名代として現場に出向いているためデスクの前でふんぞり返っているだけの重役達よりも現場の信頼は厚い

その結果元メイド達皆は営業所や支社の重いポストに就いている為女子の新入社員には憧れのポストである

そして未だ学生である陽乃さんの専属の執事は都築さんとメイド

さんは夏川さんと言う人が就いている

後はや雪ノ下家に支えているメイドさんが数名と言ったところだろう

翌朝いつものように家事のないアタシ静かに自習していた陽乃さんも起きてきて教えてくれている

六時になり寝ぼけ眼の小町をおこし連れ陽乃さんとお出掛け

ファミレスで朝食を取り暇潰しに稲毛神社参拝（神様ごめんなさい）

梅雨は未だ明けてないハズにも関わらず空はよく晴れわたり真夏の熱い陽射し：でも、セミの鳴き声以外はしない境内を三人で歩き歩き参拝した

その後ららぽに行きオープンカフェで開店の時間待ちの為待ち遠しいです？

まずアタシは今制作中の浴衣用の帯と完成予定図にある下駄と雪駄を買いに行く予定

ついで小町は今年の夏はスミゾーにハマるのですそう言いながら家電コーナーに行き物色中のついでにアタシも手動式のかき氷機を買う

川崎家のが壊れちゃってるからな

でも、知ってるかこのかき氷器の使い道な：例えば親父の為にアライを作るとしよう

その際の冷水の氷は細かければ細かいほどより素早く熱を奪ってくれるそうで腕の良い職人は氷を包丁で削るらしいけどアタシにそんな腕はない

だからかき氷器の出番な訳だし同様に冷しやぶのアラ熱取りにも役に立つしけーちゃんみたいな小さい小さい子の居る川崎家の場合急な発熱に際しては氷のうに

花火をしたら有ってはいけないこととだけ絶対無いとは言えない火傷

その際の対処に用意できたら良いと思うのだが？

陽乃さんはなぜかアタシの水着買ったがり意味がわからないまあ、一枚も持ってないから買っておくに越したことはないんだけど…

さっつかー、テニス、野球、ラグビーとみんな順調に勝ち上がり結構応援要請を受けてるから忙しいと言えれば忙しいのだ

そして最後に金平糖を買い雪ノ下に戻り再び綾波バージョンのメイド服に着替えたアタシとサマードレスの小町

陽乃さんのバースデーランチパーティーが始まった

アタシは陽乃さんの後ろに、小町は隣に控えそれぞれ邪魔にならないよう立ち位置に気を配った

途中、雪乃と隼人と顔を合わせたけど二言三言言葉を交わしたけりなだけでアタシを見て苦笑いの雪乃と

「キモい目で見てるんじゃないよっ！」

そう言いたくなる視線の隼人の二人

接客業で磨いた笑顔でメイド役をこなし？アタシと小町は退席し川崎家に向かう時間…

うん、着替えの時間すっかり忘れてましたよ…

この格好で過ごすのかアタシ達は…

え？小町は何も困らないって？そりやそうだろうね、小町は普通のサマードレスだもんね

それに比べアタシはコスプレメイド服なんだから沙希の小言を思い切りもらいそうなんだよね…

お土産のバームクーヘンと陽乃さんの短冊を預り都築さんの運転で川崎家に向かうアタシと小町

日が沈みきる前に何とか川崎家に到着し荷物を下ろしてもらい沙希にバームクーヘンと金平糖を預けると蒼空とけーちゃんに事情を話して笹飾りに短冊を飾る

あまり上手とは言えないけどアタシの吹くハーモニカに合わせてみんなで歌う七夕さま

童心に帰る小町に大志…そして結衣…

訂正、結衣は大きな子供だったな

その様子を見ながら笑みのこぼれる沙希と彩加にハーモニカの演

奏でいっぱいいっぱいのアタシはそんな余裕無いけどね

あーっ、そう言えば蒼空とけーちゃん浴衣姿を送ってほしいって陽乃さんに頼まれてたっけ

八のスマホで撮って送信…っつと

お、喜んでる喜んでる

え？今度二人を連れて雪ノ下家に遊びに来て欲しいって？

いや、それはアタシが勝手に答える訳にはいかないでしょ？

そう思っつて沙希にメールを見せると

「都合が合えば良いんじゃないのかい？」

との事なのでそう返信すると

ーおっ、理解が早くて良いね？ー

と、返信が来てるけどアンタが主役のパーティー中にナニやってんだよ？

そう思いながら一旦メールは中止…あ、でもその前に沙希の七夕料理の写メをソ・ウ・シ・ンっ♪っつと

そしてその二枚の写メがこの後の沙希の運命に多大な影響を与える事になるなんて夢にも思いもしなかった

比企谷八重のHAPPY BIRTHDAY（八幡
BIRTHDAY, SSS

八重バースデー

朝から暑いよ…おまけに彩加まで意味無く気合い入れまくってる
しっつたいなんなのさ？

彩加は練習ないし留美は川崎家に行くって連絡を最後に音信不通
だし

そして何より朝の練習を終えたアタシを更衣室で待ち構えてた陽
乃さんが謎で彩加の朝の練習に付き合った後はノースリーブに短パ
ンが定番のアタシ

そんなアタシがなぜか淡いピンの…しかもミニのワンピースを着てい
るのはなぜなんだろう？

「あ…彩加っ！MARCH、やってるよ？」

そう言っつて駆け出そうとしたけど迷子防止に手を捕まれているア
タシには無理な話で

「さ、彩加あ…っ…」

と、思わずこぼすと

「そんなに慌てないの、八重ちゃんはもつと落ち着かなきゃね？」

そう言われて落ち込むアタシの肩を抱きこの夏10cm以上背が伸
びた彩加がアタシの頭を撫でながら

「慌てないで、のんびり行こうよ…その、八重…」

最近アタシの事を呼び捨てにするようになり始めた彩加がアタシ
の反応を伺いながらそう言ってきたから

「別に呼び捨てでも良いんだぞ？彩加の自信の現れだと思わん
から逆に早くそれに馴れるよ？」

そうアタシが言う嬉しそうに笑う彩加が

「うん、僕ももう少し堂々と胸を張ってそう呼べるようになりたい
ね」

そんなとりとめもないやり取りをしてたらアタシのPHSが震えて着信を知らせてきたから

(誰だろ?)

そう思つてモニタを確認してから電源を落として専用のポーチにしまつと

「出なくても良かったのそう聞いてきたから」

そう聞いてきたから

「彩加が気にしなくても大丈夫、親父(非通知)だから間違いなんじゃないの？」

又掛かつてきたら鬱陶しいから電源を落としといたから問題なし」

そう言つてシカトを決め込むことにしてそう言つてMARCHの散策を再開したんだ

今まではあまり気にしなかった小さな商店街だけど一風変わったお店が何軒かありシャレた惣菜なんかも美味しそう

オムライスの専門店があつ、沙希と来て研究したら蒼空とけーちゃんにも食べてもらおう

そう思つてみていた

沖縄料理や食材雑貨を取り扱う店

「お昼はここでソーキそばにしよーか？」

そんなことを笑つて話していたら半べその親父が現れて

「や、八重えつ…ナゼ電話にでないんだあつ…」

そう言つて泣き付いてきたから

「あつ、ゴメンねえつ…電池切れちやてるんたよねえつ♪」

そう言つててへぺろをして見せたら簡単に騙されてますよ…うん、チヨロい

その後アタシと彩加の二人は親父に付き合う事になり連れていかれた先はデーキャンプ場でアタシが到着したら一斉に声を上げました

「お誕生日おめでとう」

つてね

その後暑さに弱いアタシに構わずに皆が盛り上がっているのは

どうにも解せないアタシだったあ

ギザギザハートの子守唄〜葉山隼人誕生日SS

俺の名は葉山隼人

親父は有名弁護士でお袋は大学病院の助教授

その二人の間に生まれてきた俺がアホなわけはなく頭脳明晰眉目麗媚と言われていた俺

いわゆる石女、だったらしい…え、俺？この流れでわからんの？

愛人に生ませた子に決まってるだろ？

親父だって直系のお袋に比べりゃ薄いが葉山の地を引いてるんだからな？

つまり体裁さえ整ってりゃ良いって言う葉山の名前が嫌いだった

全てが嫌いだった

この世界で受け入れてもそう思えた

比企谷八乙女（八幡ニヨタですが出番は有りません）、アイツと出会うまでは

不器用なアイツはいつも泣いていた

と、言っても実際に泣いてる訳じゃなく常にアイツは血を流していた

文字通りにケンカ三昧のアイツのは身体は生傷が耐えない

絆創膏の無い素顔をもう何年も見たことがない

あちこちにアザを作り苦笑いを浮かべている顔しか見なくなったのはいつからだろうか？

別に悪いことをしてる訳じゃないけどケンカっぱやい八乙女は教師から成績の良い不良…そう言う扱いされてる

何て下らない大人達なんだろう？

俺はアイツ等の事をを恩師と呼ぶ日は未来永劫無いだろう…と、そう思った

幼馴染みであまり女を意識したこと無いヤツ

小学校じゃいつも男子に混じってにまじって野球やサッカーやつてたからな

そう、その頃は割りと身長はあるほうだったのに六年の夏が終わる頃になると八乙女の背の成長はピタリと止まり縦の成長から方向性を変えていて：

俺は否応なしにオンナを意識させられたけど八乙女は八乙女だった

その身体の変化に戸惑い殊更無理してそれまでと変わらない振り舞いをし続けようとしたけどそんなのは無理な話で諦めたアイツは中学に入り俺とは距離をおき始めた

そんな八乙女にとっては

幸か不幸か三年間一度も同じクラスになることはなかったからその話を聞いたのはその数日前

八乙女は高校進学しないで中学を卒業したらとある旧家にいかされ16才の誕生日を待ってその家の誰かに嫁がされるって事を知ったのは卒業式間近の事

いや、それでも俺はなにも知らなかった

八乙女がそれを言われたのは小学校卒業式の翌日で八乙女が俺と距離をおき始めたのもちようどその頃

相手は葉山の家とも所縁が深い家なだけに俺を巻き込みたくなかったんだろうが寂しかった

俺達親友じゃないの： そう心の中で叫びかけて笑ってしまった俺もいつのまにか八乙女を親友としては見ていなかった事実に気づいてしまった

いつからだろうか？俺はアイツを女の子としてみていて、自分の側に居てくれる事を望んでいた事を

だから俺は八乙女を呼び出し

「家出しよう」

と、言つてその手を握り駅に向かつた

結果は八乙女の親父さんに捕まつて思いつきりぶん殴られた

そしてその数日後仲の良かったダチが先輩のバイクにニケツしてて事故つて死んだのを知つた

卒業式当日：その二人の座るはずの空席が悲しかった

総武高の愉快な仲間達
戦うっ！ 男達はっ♪

① アタシですら苦情をいーたくなるレベルの臭いなんだよ、お前らっ！

「大岡、戸部、大和…お前ら三人つてさ、マジに物凄く汗臭いんだぞ？ 全く… 少しは自覚して気を使ってくれよなっ！」

教室にいるのはお前らだけじゃないんだからな？」

そうハッキリと言葉に出したのはアタシだけなんだけど優美子だって顔がひきつってるし姫菜と結衣もフォローの言葉が見付からないから

「これでも喰らいやがれえーっ！」

と、三人に向けてファブリースを照射してから

「隼人みたく香水とかまでは香水が苦手なアタシは言わんけど制汗剤くらい使えよな？」

思わずそう叫んだアタシは間違ってない証拠に女子はみんな拍手した

そう、これに関してはアンチ八重筆頭のサガミンですらアタシを支持しているんだから三人がいかに汗くさいかってことの現れだろう

「んで、大和んとは二回戦どうなったん？」

と、一回戦をすでにコールドで勝ち上がってる野球部の状況を聞いたら

「七回コールドで勝った」

そう答えたから

「おっつ… すげーじゃん、このまま勢い乗って甲子園まで行っちゃおう？ 行っちゃおうの？」

アタシもどごぞのヒロインの真似して 「八重を甲子園に連れて

いって」 って言っちゃったりしてな

隼人、プロ野球のチケット買うなよ？ そーゆー意味なら千葉ロッテマリンスタジアムがあるんだからわざわざ兵庫県まで行く理由がわからんからな」

そう馬鹿話を交えて言ったら

「 ああ、もちろん狙ってるさ… 甲子園、先輩達の悲願でもあるからな

だけど… そうだな、それなら甲子園開催は夏休み期間中だからもし甲子園行きの切符を手に入れたら臨時のマネージャーをやってくれないか？」

そう言っただけか遠くを見ていた大和がアタシを見てそう言ったから

「 そうだな、頑張つてアタシを甲子園に連れて行って見せろよ？

それと、これ… まあ、そのお… なんだな？ お疲れさまって奴だから食ってくれよ？ 遠慮は要らんからさ… アタシが作ったヤツで申し訳無いんだけどな」

そう言っただけじゃ食べきれなさそうなサイズのドカベンを渡すと

目をしばたかせ

「 貰って良いのか？」

そう聞いてくるから

「 まあ、高校生のアタシにゃこんくらいしか思い浮かばなかったからな… でも、お前に頑張れってメールを送りたい気持ちに嘘はないからな… 次も頑張れよ」

そう言っただけで苦笑いを浮かべると

「 スツゲー羨ましいじゃん、大和っ♪ 料理上手で有名な八重ちゃんの手作り弁当が頑張れって応援のメール代わりならかなりの奴が欲しいんじゃないの？」

と、無責任に言っちゃたよ… アタシ知らんからな？ この先の嫌な予感しかないこの展開をアタシには何もできんつかしたくねえ展開が見えてるんだけど…

彩加の笑顔が怖い、あとアタシを睨む彩加の黒笑みが怖い： 大事な事だから二度言いました

お昼休みに一緒にお弁当を食べるアタシ達だけど大和が旨そうに食べてくれるのを見てホッとしてると

「ナ、ナニ： 何なの？」

大岡、戸部、隼人はもちろん姫菜と結衣に優美子までアタシを見てるからそう聞いたら

「連休の時食べた八重ちゃん味の付きご飯のおにぎり思い出しちゃって大和君が羨ましいなあ〜って思っちゃっただけだよ」

そう答えると

「でも、彼氏の戸塚君はそのお弁当を毎日作ってきてもらってるべ？戸塚君、マジ幸せもんだわあ〜っ♪っべえ〜、まじやつべえ〜っしょ〜っ♪」

戸部がそう言って喧しいくらい： いや、優美子に叱られた

「戸部騒ぎすぎ、ちよつとは静にしろしっ！ それと結衣、アンタは誕生日に作ってもらったじゃん？」

って戸部叱られ結衣は突っ込み入れられてたね

② 後方支援部隊の奉仕部

奉仕部にもその手伝いの要請が来たらしいがアタシは忙しいから手伝わず結衣と雪乃がメインで事に当たっている

更には野球部にも女子のマネージャーも入ったからアタシがマネージャーやるって話は立ち消えになりアタシ自身もでしゃばらずに彩加に集中する事にした

毎試合応援に行きベストフォー入りの団体戦

男子シングルスも、順調に勝ち進んでいるのでこちらもかなりの注目度を浴びている

ただしこちらはアタシと彩加が二人三脚で頑張ってきてるのは有名な話だから変にちよつかい掛けてくるヤツはなかった

この頃になるとある人に内職を紹介してもらったとかで平日の出勤数を減らしたのでアタシも川崎家訪問が減った

なので月曜日は女子マネ居ないラグビー部の大会が終わるまでヘルプで入ることにして…

水曜日はこの頃知り知りあつた柳楽君と言う男子生徒実家の柳楽流薙刀術の道場に通い始めたんだよね

そしてベストエイト入りを掛けた五回戦は強豪習志野高校との試合は白熱の投手戦らしく延長かと思われた九回裏

相手ピッチャーの失投を逃さずに捉えたセンターの長原先輩が三塁打

続くセカンドの仁科って言ったかな？がスクイズを決めて決勝点になり勝ち抜きとなった

その翌登校日に弁当を渡すとその事を話して

「二人にも順番で劳いの弁当を作ってやってももらえないだろうか

？」

そう頼まれて

「あーっ、作るのは構わんがアタシは二人の所属クラス知らんぞ

？」

そう答えると

「二人には俺が渡すから大丈夫だ」

そう受け合ってくれたから

「ン…リョーカイした、因みに好き嫌いはナンかアンの？」

そうアタシが質問したら

「極端に甘くなきや特に好き嫌いはない」

と、の事だから

「そっか… なら明日明後日で大和に渡しや良いんだな？」

そう確認を取ったら

「ああ、それでお願いしたい」

そう言つて頭を下げるから

「あーっ、そんな事気にするよっか次も頑張ってくれりや良いん

だからな？ その為のアタシなりの応援ナンだからさっ♪」
そう答えてこの話題が終わったと言わんばかりに授業の支度をす
るアタシだった

えーつと： 誰だっけ？ まあ、細かい事はどーでも良いや：大和
に頼まれたお弁当喜んでもらえたらしく

「お陰で他の連中も八重の手作り弁当を目指して燃えてチームの
士気が上がってる」

そんな事ゆーから

「んな、大袈裟な事を： が、喜んでくれたんなら何よりだ」
アタシが苦笑いでそう言う

「八重ちゃんのお弁当美味しいんだからもっと自信持とうよ？」
」

そう彩加に言われたんだけどはつきり言って自信をもつてどこを
目指せば良いのかよくわからんのだけど：

中途半端な自信はすぐに自惚れに変わるんだから始末に悪いだけ
だ

ましてや、自我の安定しないアタシは調子に乗らないと言い切る自
信ナンか微塵もないんだからな：マジ気を付けないとヤバイ

だから、その彩加の言葉にはあまり同意しかねるアタシには

「善処する…」

と、しか言えなかった

守るべきっ！ 女達に？

③ 後日談

サッカー部、テニス部、野球部、ラグビー部が合同で残念会を開催するからゲストに呼ばれたが正式な部員でないことを理由に断ったんだが：

特にサッカー部に対してはなにもしてないから尚更断ろうとしたのに彩加というは(サッカーの女子マネの中ではただ一人親しくして後輩)を抱き込んで断れなくしやがった

一学期最後の日である終業式の日にはそれは開催される事になり招待を受けるのはやはり断った

「妥協点はスタッフ、あくまでも裏方として会のサポートなら手伝うのは吝かじゃないけどな？」

それが嫌なら今後運動部とは一切関わらんし、当日隼人のファンに絡まれたらソイツ等は全員完膚なきまで叩き潰す、それこそトラウマになるレベルでな」

黒笑みを浮かべそう言つて会の参加は頑なに断つたんだがな…

個人名は強いて出さんが一部にアタシを毛嫌つているのがいるし葉山ファンⅡアンチ八重派、つまり嫌われてるんだからな…

アタシの場合、女子は敵味方をはつきり別れているんだよな… 敵の少ない結衣と違ってな

だからそんなアタシは、隼人のゆるみな仲良くなんぞはつきり言つて嘲笑うしかないんだがな

アタシにはとてもじゃないけど無理だし、そんな訳のわからんモノの為に自分を殺す気はない

従つて、隼人同じ道を歩むことだけはないアタシの運命は隼人とは決して交わる事はない

アタシの行き方とアイツのことなかれ主義は互いに相容れないモノだからな

だから、そんなアタシのとストレスにしかなら様な所にナニが悲しゅうていかなアカンのだよ？

彩加は未だ二年だから未々先の目標がありアタシはブレインとしてこれからも見守るつもりだが：

申し訳ないけど先輩部員の方達とは特別接点があったわけじゃないから部外者のアタシが顔を出す

んな凶々しい真似はしたくない… 彩加の恥になるんだからな、そう言う振る舞いは

まあ、雪乃というは、それに姫菜理解はしかねるけど結衣は全く理解できないというかする気無いね、やっぱりアホだわ

全体の空気は読むけど個人の気持ちには目を向けない結衣は、アタシの気持ちには目を向けないで自分のワガママだけを一方的に人に押しつけるくせにな

アタシの存在自体が気に入らないんだからな、ソイツ等にとってはアタシは招かざる客なんだよ

優美子にはそんなの蹴散らせとか面倒臭い事を言われけどそんな面倒な事はする気は毛頭無い：

もちろん、降り掛かる火の粉は振り払うみたく襲ってくる敵に容赦はないけどわざわざ敵陣に乗り込む趣味はない

アタシの縄張りから出無きや良いだけだし別に引つ張り出されても出たくないばかりかはつきり言って迷惑なだけ

そもそも他人の縄張りを我が物顔で振る舞えるバカ達とアタシのソリが合うわけ無いんだよね

まあ、そんな一連の騒ぎの中材木のヤツが奉仕部を変なことに巻き込みやがったがそれについてはまた別の機会に話すことにする

各々の部は紅白戦などの引退試合をして最後の別れを惜しみつつ新体制の発表を行った

部長、副部長が指名されレギュラー候補の名が上げられ一喜一憂した

サッカー部は隼人が部長、戸部が副部長でテニス部は彩加、野球部は大和、ラグビー部は大岡が部長に指名された

そしているはも一学期でサッカー部を退部すると言い出しアタシの手を取り

「 そう言う訳なので新学期になったら奉仕部に入りますからご指導の程よろしくお願いいたします」

あ、因みに両部の顧問の先生及び部長には相談して決まった事なので変更はありません」

そう言われて

「 シン…、わかった… ならこれからもよろしく頼むなっ♪ アタシがちやんと名覚えてるただ一人の後輩のいろは」

そう言ってアタシの小さな手を握るその手を握り返した

戦う、女達はっ！

最近気になっていいることがあるんだけど…いや、実際はもっと前から気になっていた… どうやらアタシ中で八が目を覚ましたらしい事に

夜毎マツカンが一本ずつ減っていて問題集の進み具合が加速している事実

未だ解いてないはずの問題にデジャブみたいなのを感じたり読んでないのにネットニュースの内容を知っていたりする…

つまり、アタシ達の関係性が逆転してしまっているのだ

以前は八がメインキャラで、アタシはサブキャラだったのがアタシの方がメインキャラになってしまっってひさし貸して母屋取られるみたいない感じじゃね？

略奪者はアタシの方なんだけどさ

それで、最近寝る前に八のスマホにメールを送ってるんだけど未だ返事は一度も来ない

こればかりは気長に待つしかない… と、そう思う

以前の様な気だるさが無い、って事はたぶんもう八の姿には戻れないんじゃないかって事なのかも知れないのだからな

それと最近筋肉がついたわけでも無いに明らかに筋力が上がってきたのも気になり始めている

例えば50m走なんかだと、以前は20mを越えろとがくっ失速してたのが30mまでは頑張ってる… タイムは聞くな

一桁だった握力も、右14kgの左17kgにまで伸びているし31cmだった垂直跳びは49cmと大幅に延びたけどバスケのジャンプポールは身長が身長だけにな…

ゴールリングが遠いぜ… (涙)

テニスのシングルスの子選が始まり… 団体戦シングルスBでの活躍でそれなりに注目を集め、警戒もされるようになった彩加

それでも、上位陣の壁は厚くて固く確実にパワーアップを果たして

るけど端から見てるアタシにもその差が見てとれるんだよね…

出会ったばかりの頃より背も少し…5cmは伸びているし筋力の着いてきた彩加のパワー、スタミナ、瞬発力、集中力、ボールコントロールのいずれもがグレードアップを果たしているのにそれでも埋まらない差があるんだよね…

勿論、上位陣との戦いは彩加の経験値を飛躍的に上げてくれさらにレベルアップしていった

だからアタシは、彩加の熱いを夏の強烈な日差しと猛烈な暑さとゆー難敵と戦いながら熱い応援を日々送り続けたよ

その結果が、惜しくも決勝進出ならず… 団体戦に引き続き果たしたベストフオー入り

もちろん、本人は悔し涙をにじませてたけどみんな感動してたよアタシもこの結果に満足しないでさらに上を目指して欲しいけど戦いを終えた今は少し休んでほしいしお疲れ様って素直にそう言いたいだけだ

こうして、彩加の二年の夏の大会はこうして静かに幕を閉じた

因みに、サッカー部と野球部は共に残念ながら決勝戦敗退、ラグビー部は惜しくも決勝戦進出ならずで男達の熱く短い夏は終わりを告げるのだったのだった

もしも総武高野球部が甲子園に行つたなら

「ああ、良いぜつ！ 甲子園の切符を手に入れたら臨時のマナー
ジャー引き受けてもよっ♪」

その軽い調子で言った一言が間違いの元だったが後の祭りであ
シは今、西宮にいる

総武高野球部の宿が西宮市内のホテルだからだ

練習を終えた選手達の練習用のユニフォームを洗い終えた今、それ
等を干しているところだが 『なんでこうなった？』

今更だから口にごそ出さんが、そう言いたい気持ちで一杯だ

『なんでこうなった？』

大事なことから二度言いたい

「しかし… 運が良いのか悪いのか？ 大和、大丈夫なのか？ 選
手宣誓… アタシは見てるだけでも胃に穴が開きそうな気すらして
るのによ？」

しかも開会式直後の試合とかマジかよ？ って言いたいぞ…」
って口に出して言ってるけどな

そして、いよいよ明日がその開会式なんだが… 心配はしていない
ぞ？ 人の心配する前にアタシの方こそ熱中症で倒れやせんかの心
配する必要がある気がしまくりなんだからな…

うん、マジ洒落にならんわ

一回戦、初出場高対決はまさかまさかのプレイボールホームランが
決勝点になり初出場、初勝利は良いんだがナンだよ？

ちよつと活躍したからって、掌返してちやほやしゃがってな

もつとも、アタシが好きなのは菜加だけで大和は親しい仲間の一人
としか思つてない…

そうゆうー目では見てないから特に変わるはずもないがな

二回戦、古豪との対決は大技小技を巧みに繰り出してくる相手に苦
しみながらもナンとか接戦を征して勝ち進み

三回戦、100マイルの男と呼ばれる豪腕投手を擁し、優勝候補と

呼び声高い強豪もテニスのサーブで球速に目を慣らしたうちには全くついていけない世界じゃない

優勝候補の一角崩しベスト16入りを果たし大和も一気にプロの注目を集める選手に仲間入りしたがアタシの対応は変わらない

あくまでも優美子のグループ仲間の一人だ

準々決勝、vs 西東京代表青銅高戦ってマジかよ？ 野球に詳しくねえアタシでも知ってる強豪高じゃねえかよ？

1対3： 善戦虚しく青銅の主砲御幸一也の一振りの前に撃沈：敗戦により総武高野球部の今年の夏は終わりを告げアタシのマネージャーライフも終わりの時を迎えた

：さすが名門高、パネエ強さだ： 悔しいけど三点で押さえた大和を誉めても良いくらいだつ、つか

「二年の先輩にやわりいが青銅も御幸や倉持も春にやいねえんだから春にリベンジしろっ！

負けちまった今はもうどうしようもないんだから取り敢えずおもいつきし泣いて良いから： んで、おもいつきし泣いたらいつまでも引きずらねえで吹っ切ってリベンジだ

今度は、選抜で青銅に勝って悔し泣きさせてやれよ、大和っ！

先輩達も、今はアタシの小さい胸で良けりや貸しますから今は思いつきり泣いて： おもいつきし泣いたら後は大和達に託してください、八強、四強、決勝進出： 更に上を目指して」

って選手達にハッパ掛けてたらそれマスコミに聞かれてテレビにも流れてただけだ

「あの娘にああしてハッパ掛けられてるのは野球部だけじゃないし、野球に詳しくない私に代わりユニークな練習方法を編み出して個々のレベルアップに貢献してくれたのも彼女なんですよね？」

そうやって優しい眼差しでアタシ等を見てから

「そんな彼女の周りには自然に人が集まりその仲間達の協力ですれまで野球部だけじゃできない事

特に成績に難の有る子等に対する試験対策は本当に助かりました

からね」

部長先生が話をそれで締め括ると青銅から煩いのがきた

「御幸一也ともっチー先輩がいなきや勝てるよーな口振りだな？
」

ニヤリと笑ってアタシを見るから

「御幸一也さんのあの一振りがなきや試合の流れは変わってたはずだから、もしかしたらって可能性はあるったんだから… 春までに力をつけろって話だ

それに漠然とベストエイト入りを謳い文句にするよかでつけえ強敵の青銅打倒の方がわかりやすい目標だろうが？」

「そう言って笑い返すと

「お互い、ヤロー共の尻を叩いて春に再会しよーぜっ♪ オメー、気に入ったから後でメアド交換しようなっ！」

「そう言われたから学生証からヤエにやんの名刺を渡して

「アタシの営業用名刺とメアドだから一旦それに送ってくれたら本アドで返す」

「そう沢村と話してたら大和のヤツが

「おい、今の聞いていたか？ 八重が甲子園が終わってもマネージャー、続けてくれるそうぞっ！」

「って叫ぶのを聞いて沢村の勢いにつられてマネージャーを続ける発言したことに気付いたあたしは

「あっ…」

「つと一旦声を出したけど

「でもまあ、乗り掛かった船だから… 戦艦大和みたく沈むなよ？ 大和主将っ♪」

「良い音させて大和の背中を叩いたアタシはとても良い笑顔だったらしいが… 彩加になんて説明（言い訳）しようか？」

余談じゃあるが青銅のマネージャーの沢村とは仲良くなり、メアドの交換も沢村からのメールがきて無事完了、メル友になり他のマネージャー達にもラインの仲間に入れてもらい

マネージャーの役割とか色々教えてもらうことになるのは又別の話だ

身から出た錆とゆーか自分の発言でマネージャー続ける以上半端はしたくないからな

その代わり沢村の勉強を通信教育で手伝ってるがな

沢村： 夏休みの宿題終わってるのか？

さあ、お前達の罪を数えろ

① 雪乃に水と頭痛薬を

今日は雨が降っているのでテニス部もお休みだから奉仕部の部室で一緒に勉強してる

まあアタシはいつもの事だが彩加も部活で遅れがちな勉強を取り戻そうと懸命なのに結衣：

やる気無いなら優美子達とカラオケ行きやよかったじゃん？

「彩加、依頼が来たらごめんだけけど今日の練習無いから部室で一緒に勉強する？」

そう誘ったら

「わからないところは教えてくれると助かるな…」

そんな話してたんだから勉強一色のこの空気は当然だけど

「結衣：夏休み要らんのか？補習で夏休みがつぶれても知らないからな」

無慈悲だがそうならない為雪乃が勉強教えてくれてるのに本人がヤル気無いんじゃない

「優美子達とのテニス旅行も結衣だけ補習で不参加か：残念だけど補習じゃ仕方ないよな？」

そう棒読みでアタシが言う

「そうね、補習サボって進級できなくなったら一緒に卒業できなくなったら寂しいですよものね」

と、棒読みで雪乃が返すと

「何かあたしの補習決定してるみたいに聞こえるんだけど？」
等と他人事みたく言うから

「中間テストが赤点とスレスレばかりだったのはダレっ！」
ステレオ放送で警告するアタシと雪乃

「この夏はアタシには特別なんだよ？アタシはこの比企谷八重として初めて過ごす夏を彩加と目一杯楽しみたい

一緒に勉強したりテニスしたり花火見たりしたいよ

けどな、結衣：その周りには優美子達や川崎、もちろん蒼空やけーちゃんも一緒な

そして何よりも雪乃や結衣と笑って過ごしたいんだよっ、その中に彩加も加えた四人でさっ！」

アタシがそう叫ぶと

「そうね、八重さんと今は亡き比企谷君の誕生日も補習で不参加なんて事態にはなあってほしくないわね？」

そう言つて雪乃に手を取られた結衣が瞳を潤ませ

「雪乃ん、八重ちゃんそんなに：あたし頑張つて勉強するよ、あたし一人だけ補習で皆と遊べないなんてやだもんっ！」

そう結衣も叫んだから

「よし、言質は取つた：プロフエッサー雪乃、あとはよろしくお願ひします」

そう言つて恭しく頭を下げるとニツと笑つて

「ええ、由比ヶ浜さんは私に任せなさい：間違つても赤点なんか取らせないわ」

と、言われて青い顔をした結衣が

「補習以前にあたし：ちゃんと夏休み迎えられるのかな？」

そう呟く結衣だったけど

「結局のところは結衣が頑張らなきゃ某乙女ゲームのバットエンドになるんだよね…」

無事にハッピーエンドを迎えないとヒロインは補習で夏休みを過ごすつて結衣の有り得る未来像がさ：見えちゃうんだよねえっ…」

そう言つて肩を竦めると彩加も

「由比ヶ浜さん：期末テスト：クリアできたら良いね」

そう彩加も呟いたがホントその通りだと思ふよ…

その後、クッキーをつまみながら紅茶で休憩したけど

「あれ？なんで？なんで八重ちゃんのクッキーが市販されてるの？」

そう言つて騒ぐ結衣を見て例の如くアタマイタポーズの雪乃

「違うよ、由比ヶ浜さん、袋が百円ショップも売ってるし、シー

ラーって道具があれば密閉も出きるからみんな八重ちゃんによる手作り、手作業なんだよ?」

そう彩加に説明され

「ほえーっ」

と、ムンクの叫びのような声をあげる結衣に

「コンプレックスの塊のアタシは人の何倍も努力しても同じ土俵に立ってると言える自信すらない」

そうボソボソと言い勉強を再開した

雲の色が黒みを帯びてきて

「少し早いけど又誰かさんが濡れて帰って風でも引かれたら家族の方に申し訳ないから今日は終わりにして帰りましょう」

「う〜っ…」

雪乃の言葉に返す言葉もないアタシが不承不承頷くと材木座の気配に気付き

「雪乃、材木の気配がする…」

そう伝えると

「話は明日にしてもらいましょうと、言うよりこの時間帯、既に暗くなってきているのに普段女子しか居ない奉仕部に相談に来ること自体が不謹慎だわ」

雪乃のがそう言い結衣も曖昧な笑みを浮かべながら

「厨二だからね」

「アタシはむしろ、この鬱陶しい梅雨明けまで待たせても良いままでさえまでさえある」

どうせ『原稿読んでくれ』なんだろうけどこの雨の中持ち帰れと言われたら間違いなくその場で破り捨てる自信がある」

アタシがそう言うのと彩加だけが苦笑いしていた

「材木、今何時だと思ってる?この天気で暗くなってきたから奉仕部はその活動を終了し戸締まりして帰るところだ

依頼があるなら明日のもっと早い時間に来い」

そう言ったら

「ウム、それは済まぬことをした…」
そう言つて立ち去るとアタシ等も戸締まりをして解散となった

その翌日アタシに言われた通りに放課後すぐに奉仕部に訪れた材木は

「我のフライドを完全に踏みにじられた上に決闘を申し込まれた
だが我は孤高の剣豪ゆえ背を預け闘う盟友を持たぬ

済まぬが八重殿：我とタッグバトルを受けてもらう訳にはいくまいか？」

そのぎっくり過ぎる依頼に

「原因と相手が誰でバトル方法を聞かずにそんなの受けれるかよつ、もつと具体的に説明しろつ、バカたれがつ！」

アタシにそう言われた材木が言いにくそうに

「我がゲーム仲間にゲームのシナリオライターになる夢を熱く語っていたら遊戯部なる聞き覚えのない部の一年坊主に「材木、なんで一個しか違わんのに坊主呼ばわりなんだ？」

お前は一年の時そう言われて腹は立たなかつたのかよ？」

アタシがそう言うと

「二年の二人組嘲笑われ屈辱を受け不快極まりない上に我の原稿を嘲笑い更には原稿用紙を足蹴にしよつた」

そう説明され

(こいつにも原因はあるんだろうけどちよつと調子に乗りすぎだな)

そう考えてから

「つまり敵は遊戯部の一年生…で、対戦方法は？」

そう材木に聞いたら

「ウム、互いに提示したゲームで戦うだが我は未だにも思い付かんし彼奴らがどんなゲームを思い付くのもわからぬ」

そう言われて

「はあゝつ、使えん奴だな？で、勝負は明日の放課後で良いんだな？」

「こっちのゲーム及び交渉はアタシに一任で良いな？嫌ならこの依頼は受けん

それと今からけーちゃんのお迎えだから今日のところはこれで帰れ」

そう言っつて結衣と雪乃の二人の迷惑にならないように追い出した
そして翌日の勝負の日、遊戯部の部室にて…

「ゲーム内容及びはアタシが決めても良いんだな？

ならロシアンルーレットだ」

そう言っつて八個の一口サイズのチョコ見せて

「この中にデスソースを練り込んだチョコ二個、ポイズンクッキングをコーティングしたチョコ三個にセーフのチョコが三個ある

だが、ポイズンクッキングを食べれば間違いなく戦闘不能だから一回戦でパートナーが戦闘不能の場合パートナーの分も食べる

ルールは至って簡単だろ？ならお前達から取り材木アタシの順で取り一斉に実食、さあ取れ」

そう言っつて一回戦、順番に取り実食、秦野と材木はデスソース、相模ポイズンクッキングで撃沈でアタシだけセーフ

二回戦、秦野一個目はセーフだけど二個目材木と共にポイズンクッキングの餌食となり撃沈…

「アホ共が…」

そう言い捨てメモを残し遊戯部の部室を後にするアタシ達だった

「アホ共は放っておいて良いからさ、多分一時間もすりや目を覚ますんじゃない？

んじゃ、アタシはバイト行くから二人は部室に戻って良いよ」

そう言っつてバイトに向かうことにした

遊戯部との対戦後あのポイズンクッキングの製造元が結衣だと知った遊戯部の二人と材木が結衣と遭遇した時の反応ときたらもう…

それはそれで笑えたがその事は一旦棚に置き

「お前ら調子乗りすぎな、材木がどんながカスだろうが縦社会においては一箇上の先輩なんだよ…不条理でもな

だから最低限の敬意だけは払えよ？じゃないと逆にお前らの男を下げるぞ？」

それと材木が調子乗ってウザい時はアタシに言えばアタシが材木をシバクから遠慮無く言っつてこい、いつでまた地獄見せてやるからよっ♪」

そう言っつて黒笑みを浮かべるアタシを見て遊戯部の二人は理解した

(こいつ、なんかしでかしてこの先輩怒らせた結果がああポイズンクツキングなのな)

そう思っつて材木を見ると脂汗を流し青い顔をする姿を見て

(あ、こいつやっばアホだわ)

そう二人は確信したが

(アホすぎて関わりたくねえから鬱陶しい時は八重先輩にいや良いか)

そう納得をして

「はい、その際は遠慮無く先輩に言いに行きますよ」

そう言っつて両者に和解させた…一応な？

「あ、それと材木のアホのせいでお前らにも迷惑掛けたからアタシが働いてる店で飲み物一杯奢るから一度覗いてくれ」

そう言っつて『ヤエにゃん』と、書かれた営業用の名刺を渡してからけーちゃんのお迎えに向かった

梅雨は未だ明けてない頃の事だった

小中学校もサマータイムに入り授業も午前中で終わり蒼空と大志と一緒に過ごす時間が増えてきている

もう二人とも本当の弟の様に感じてきているアタシガイル

もうすぐ夏休みが始まるんだな…そう感じていた

「誰だよ？大志が兄貴の間違いじゃないのか？」

って言ったヤツ、それ冗談になつてないから二度とゆるんじやねつ
！
アタシと沙希もそろそろ真剣に検討していた予備校をどこにする
か結論を出すべき時が近付いてきているのを誤魔化すことはできな
い相談だった

蒼空の勉強を見させつつ勉強する小町と大志におやつを出してか
らけーちゃんのお迎えにいく

そんな一連の流れものもすっかり慣れた今はなんの違和感もない
し園児達とも顔見知りだしな

帰りに買い物を買ませ早めの晩ご飯

アタシと沙希で夏の計画を話し合いた結果月、水、金の昼間沙希
はバイトでアタシは夕方予備校に行き火、木、土は沙希が夕方予備校
に行き木、土の昼間はアタシがバイトで土日は沙希はバイトすること
にした

取り敢えず夏休みにある程度稼いで貯めておくことにしたんだよ
ね

秋になったらどのみち土日以外は減らさざるを得ないんだからさ、
沙希のバイト

愛する男達へ？

サッカー部の引退試合の紅白戦は戸部が大暴れして盛り上がったらしい

失敗を恐れずに新必殺技のドライブシュートをバンバンを放つたらしく終了後の顔はスツキリしていたらしいからな

野球部の試合は、総武の二枚看板が試合を盛り上げたらしいなしラグビー部も強化合宿に向けて弾みのつく引退試合だったそうだ

そして、今日のアタシは彩加の視線を避けてテニス部の引退試合を隠れてみてる

ウソ吐きました：ただ単に身体が小さいので埋もれて隠れてみる様に見えるだけで隠れるようにはしてる

紫外線には意外と弱いからな

よく面の皮は厚いとか言われてるアタシだが肌は実にデリケートなんだぞ？

何せアタシの肌はけーちゃんとかタメはってるからな、肌の生目の細かさは

なもんで化粧品売りの店員もビックリって感じで驚かれてるんだからな

テニス部の部員じゃないから一般のギャラリーに混じってのコート外から見学すべきだからな、彩加には見に行けないってウソ言っただ断った

うん、やっぱり部外者なんだからその判断は間違ってるハズだし間違ってもコート内での見学なんて事態は回避したい、目立ちたくないんだからさ

それにやっぱ部外者がこんな時にコートに立ち入るのは良くないし間違ってるからな…

男子シングルスベスト4の彩加の実力は、既に前部長のそれを大きく上回っていて前部長をストレートで下した彩加

サーブ & ボレーを鮮やかに決め必殺のハンマースローイング
ショットを炸裂させていた

彩加に続き、前副部長に辛勝した新副部長

そして、3年最強コンビに善戦した二年コンビ

盛り上がるコートに背を向けそつとその場を離れていった：う
ん、アタシは部外者にすぎないんだからな：取り敢えずコンビにで
も行こう：暑いからガリガリ君でも食べなきゃ耐えられない

それを食い終えてからけーちゃんのお迎えにいったアタシは帰り
にけーちゃんを連れて夕飯のお買い物

メニューはけーちゃんのリクエストに答え下ろしハンバーグと枝
豆サラダに付け合わせのハッシュドポテトにコーンスープ

元気な蒼空とけーちゃんの食欲は夏の暑さに負けることなくご飯
をおかわりしてくれました

翌日、彩加にはこつてり油を絞られたけどね、しっかりバレてたか
ら：こそこそと隠れるようにして見てたのをさ

しかも、四面楚歌で彩加に沙希、雪乃と優美子の四人に取り囲まれ
てだからマジ死んだ

ヤイ、こら結衣っ！ナニを他人のフリしてるんだよ？隼人、苦笑い
してないで助けるよ：あ、材木：目も合わさず逃げやがった：
くそーっ、次会ったとき覚えてやがれよ？材木のヤツがあくつ：

アタシの虚しい心の叫びが響いた夏の午後だった

何を賭けるのか？

彩加と、雪乃達に説教を食らう… そんなアタシにやっとな救いの手が現れた

「支度も済んだみたいだからフットサルを始めたいからそろそろ八重を解放してほしいんだがな？先輩達もお待ちかねなんだが…」
隼人が四人にそう声を掛けるとタイミングよくフットサル仲間の部員達がむかえにきてくれた

チーム編成が決まり、それぞれのコートに散り試合開始

最初うちこそは、思いきり冷ややかな目でアタシを見ていた女子マネ以下隼人のファン達も試合が始まるとアタシの華麗なる足技に魅了された

男子達みたいな素早いパス回しや豪快なシュートは放さないけど猫のようにしなやかに歩き回り美味しいところでゴールに絡み

一瞬の早業の切り返しで姿を消すアタシについてこれない男子達を尻目にシュートを華麗に決めるアタシの美技に魅了された女子は少くない

あれから更に磨きの掛かっていたアタシのミラーージュキャットは、素早い切り返しを繰り返すと完全にコートから消えていたと言われ始めている

一試合をこなした選手に女子マネや隼人のファン達がタオルとスपोर्टドリンク渡してくれ、もちろんアタシに渡してくれたのはいろは

「戸部先輩に聞いてましたけど、八重先輩って本当にスゴいんですねっ！」

そんな事を言って興奮している

グラウンドを包む空気がビミョーに変わり始めていたけど試合に集中しながら見てるアタシにはどうでもよかった

二試合目、初めて隼人とチームを組んだけどさすがゲームの組み立てが上手くアタシの現在地に気を配っているらしく、巧みなパスを送ってくるから面白いけどようにゴールが決まる

結果10ー2

アタシはダブルハットトリックを決め2アシストで隼人が2ゴールに8アシストと全得点に絡んでいる

ただ気になるのが試合中アタシの記憶の空白の時間帯：終了して前部長とジャージを交換：

アンダーウェア着てるのに雪乃に頭をど突かれ意識を取り戻すまでの10分位の記憶が全く無いんだよね

どうやらこの時お久しぶりいっ♪ のファイヤートルネードを炸裂させて大いに盛り上げたらしいんですけど記憶にございません

それについては、そうただひとつの可能性があるとすれば意識の跳んだアタシに変わって八が頑張ってくれてたんじゃないのだろうかかってこと

二試合を派手にこなしたアタシに対する女子達の視線は一部の根強いアンチを除いてまるでなしこJAPANの戦士を見る目になっていた

第三試合はナゼかキーパーを希望したアタシが魅せたのは

『ゴッドハンドっ！』

で、物の見事に零封に押さえ込み大活躍したんだがマジンザハンドも使える気がする：

でもまあ：これについてはタネを明かすと八の魂、精神、霊体？が、よくわからないけどまるでスタンドのような存在になってアタシの側にいる

そして、三試合目が終わる頃には身体能力も標準的な男子高校生のそれを取り戻した結果： これまでの少食が嘘みたいに食べるようになり背が延びるのを期待するんだがこの時のアタシはそんな事気付付きもしなかったんだけどね

そして比企谷八重ファンクラブが発足した瞬間でもあるんだがナ

ゼカ姫菜がフットサルコートのに着ていたイナヅマジヤパンの
ジャージを着たアタシの写真を売っていた

因みに結衣はアタシのホームページのアクセス用アドレスをプリ
ントしたアカツキにやんの公式ファンクラブの案内用紙を配ってい
た

何を残すのか？

フットサルでの活躍により微妙な空気が広がる中で迎えた終業式の日

式も無事に終わり、いよいよサッカー、テニス、野球、ラグビーの四部活合同のお疲れさん会が始まった

もちろんアタシはいろはと裏方に徹している等と力まなくてもはつきり言つて仕事できる人材が居ないんだよね

こんな状態で、いろはが抜けた後の新学期を一体どうすんだらうか？ サッカー部…

まあ、そんなこたあ部外者のアタシが気にすべき問題じゃないんがな…そんなアタシにやナンの関係も無い問題はさ

強いてゆーなら親衛隊を野放しにしていた隼人の責任なんだからな？

デイキャンプ場のBBQコーナーを借りての焼き肉パーティー

因みに制服に焼き肉の臭いが移るのが嫌なアタシ達は各々に臭いが染み付いても平気な服

アタシの場合蒼空とけーちゃんと過ごす時の服の内一枚で汚れが目立たないドット柄のワンピースをきている

三台のコンロにはアタシというはに雪乃が着いて焼き続けているが代われると、言うより任せられる者が居ないから仕方無い

日射しにコンロの放射熱で大量の発汗中の三人に結衣がアイスを配ってくれてそれを食べたアタシ達は生き返った心地がした、いやマジでね

笑えるのが隼人のファンクラブの面々で焼けた肉を甲斐甲斐しく隼人の更に乗せ焦げた肉は戸部の皿に乗せている

え、肉食わないのか？ って… そんなもんだ分食いたくねえよ？

つか、挽き肉かハム、ソーセージなんかの加工品なら妥協できるがマジ当分食いたくねえよ

はあ…ようやくクイツらの胃袋も満たされできて落ち着いてきたみたいで…

（ 焼くペースもようやく落ち着いてきたな… ）

そう思いながらアタシは野菜を摘まんでいる

大志と小町が蒼空とけーちゃんを連れて顔を出してきたんだ、沙希はバイトだからな

職場見学でけーちゃんと会ったことのあるメンバーが喜んで迎えたし遊んでもくれて、焼き肉も進めてくれたお陰で大分片付いたし小町が差し入れてくれたマツカン…生き返るな

ああ、もちろん大志と小町にも焼き肉を進めてくれたよ？

自分の担当するコンロの後片付けを終えたアタシは蒼空とけーちゃんを呼び寄せると

「 わりいな、先に帰っちまってよ… 」

そう言っているはと雪乃に頭を下げると

「 仕方無いわ、あの二人をこの暑い中いつまでも外に居させるわけにはいかないんだもの 」

「 ですね、それに八重先輩も未だ今からあの子達の食事ともしかしたらお風呂にま入れなきやいけなないんじゃないんですか？ 」

そう二人に言われたから

「 まあな、川崎家とアタシ達の分の食事… 」

沙希が帰るのが遅いから二人を待たせるわけにいかんからアタシが入れている 」

そう答えると

「 その部分だけ聞いてたらサキサキと八重ちゃんって夫婦みたいだよな？ 」

ってそんな事を姫菜に言われて笑われちゃったよ

四部の新部長と引退した三年に声を掛けてから二人の手を取り

「 さてと、川崎家に向かうとしますか… みんな、お疲れさんっ！ 」

そう呟いて蒼空とけーちゃんの手を引いて川崎家に向かうアタシだった…

外伝的な話です 流し素麺

① けーちゃんの為に

陽乃さんの誕生日の次の火曜日、奉仕部の部室を訪ねてきた陽乃さんが

「雪乃ちゃん、お父さんとお母さんからの依頼、蒼空君とけーちゃん
の二人を招いて流し素麺パーティーを開きたいから手伝って欲しい
んだって」

部室に入ると同時にそう言われて例のアタマイタのポーズの雪乃
は

「何をいきなり言っているのかしら… 全く、姉さんときたら…
」

そう呟くと

「そう言いつつ、蒼空君とけーちゃんの二人に会うのが目的なん
だよねうちのお父さんとお母さんの本当の目的はねえ」

そう言つて苦笑いを浮かべる陽乃さんにアタマイタポーズのまま
固まっている雪乃だった

② 召喚魔法で呼び出せ

魔法が使えるわけじゃないが、どう見ても男手が必要なこのミッション
に際し… アタシ達は大会で忙しそうな彩加や葉山グループには頼
らず

材木、佐東、鈴置、柳楽君に女子だけどこかで見たよなマッチョ
ガールな一年生でコスプレイヤーのアタシのファンの花見川咲良

奉仕部の入部希望者で正直言つてこの面子の中じゃ一番便りにな

る子だ

ネットで作り方を検索して材料の買い出しに行き

わいわい賑やかな工作タイム

柳楽君と材木座が凶面を引きそれは得意らしい

製作中はアタシと雪乃がおにぎりやお茶、クッキーなどを用意して
頑張ってもらい

完成後にアタシが働くお店のドリンクチケットを進呈した

そして流し素麺実施の当日、参加者が思い思いに料理や飲み物を持
ち寄り、メインのソーメンもお中元の頂き物が結構集まり…

調理担当はボランティアスタッフ… アタシに雪乃と花見川の三
人で賄い男子達は水と共に素麺を流す役を交代で担当

最初の予定では、あくまでも雪ノ下家のホームパーティーの予定
だったらしいんだけどもはやイベント規模になってしまった流し
素麺

ナンでこうなった？ ってそう思ってたんだけど蒼空とけーちや
んの笑顔を見てたらどうでもよくなつたし雪ノ下夫妻も苦笑いして
る…

つかもう、ここまできたら笑うしかないだろ？ ってレベルで人が
集まっている

アタシ達には用意できないアルコールの類いは飲む人が各々に持
ち寄り

「益々けーちゃんたちからはなれてくな…」

そうつぶやいたがそれでも息子の居ない雪ノ下夫妻は蒼空を、娘の
居ない葉山先生夫妻はけーちゃんを猫可愛がりして沙希に溜め息を
吐かせ娘と息子達に苦笑いをさせていた

好評の内に幕を閉じた流し素麺だったけど余程嬉しかったのか、翌
日からけーちゃんが保育園でしゃべりまくった結果

沙希を通じて、父母の会から親睦会に使いたいからと貸し出しの打
診があり別に断る理由無いから了承指したらそれを皮切りに

うちの親父の会社の納涼慰安会に、町内会の集まりと次から次に貸し出し要請が来てその対応に追われている奉仕部

もちろん無料に決まってるし、それも喜ばれる一因で総武高のイメージアップにもなっていたのでその好評さを見た学校側から

『材料費を部費で落としてよいから二号機、三号機を作成してみたらどうか？』と言われて再び製作スタッフを召集して作成したので順番待ちの期間が短くなったのは言うまでもないだろう

女子会く比企谷八重と愉快的仲間達のパジャマパーティーその①由比ヶ浜家

時は梅雨入り間近の蒸し暑い頃、そんなある日の放課後の奉仕部部屋にて：

ユキノン 読書、ヤエ勉強、ガハマさんとユミコファッション雑誌を見ている、ヒナは……執筆中（内容は言わずと知れた……）と、いった感じの場面設定です

因みにGW以降、奉仕部の部室は三浦グループの溜まり場でもあると言う設定でユミコとヒナは準部員です

因みにこの設定でルートを作った場合、奉仕部に戸部の依頼は来ません：

そんな感じでお話始めます

その① 何食べたい？

ガハマさん：皆、今夜のパジャマパーティー何食べたい？

ユミコ：あーしは、ここ数日蒸し暑いからさっぱりしたものが食べたいしいっ！

ヒナ：アタシもそれに賛成だな、後……、手軽に食べられる物が良いかな？

と、ユミコとヒナが言えば

ヤエ：あまり辛く無いのと結衣が手を加えてない料理

ユキノン：そうね、由比ガ浜さんのお母様が作ったお料理か……

買ってきたお総菜で良いわ「命が惜しいからダークマターは要らねえよっ！」 要らないわっ！」

ガハマさん：えーっ、アタシだって少しは……

ヤエ：少しはなんだ？ 自分で味見してるようには見えんか

ら…… 親父さん元気？ 生きてる？ 親父さんが身体壊す前に自分で味見することを覚えような？

ユキノン：少なくとも味音痴ではないのだから自分で食べて美味

しいと思えるものを出すべきよ？

泣きそうなガハマさんを見た三浦優美子が

ユミコ …あんさー、さつきから聞いてりや二人とも結衣にきつくね？

そんなに結衣って料理下手なわけ？

ヤエ …クッキー焼いて木炭が出来上がるのは料理が下手とかゆるレベルじゃねえよ

ユキノン …出されたモノを見て生命の危機をおぼえるのだからもはや料理が下手とか言う次元の話ではないはね…

ヒナ …私もちよつと結衣の料理はパス… かな？ 調理実習

の実績見てるだけに… なんだけどね？ 結衣とは同じ班だから…

そう言い難そうに言うヒナ

重苦しい雰囲気の部屋でした

その② スーパーにて

ヤエ、ユキノンとガハマさん、ユミコ、ヒナと別れて買い物中

三浦グループの三人は中々意見がまとまらないようで何やらもめていますが…

ユキノン ……………

ヤエ …まあ、ユミコもなんとなくわかってきたんじゃねえの？ もうしばらくよくよーすみてそれでもからのままなら菓子と飲み物頼みや良い

因みにヤエが押すカートのかごの中身はサンドイッチバラエティパック、サラダの詰め合わせパック、寿司盛り合わせ4〜5人前用が入ってます

ユミコ …頭痛い… あれでも、手加減してたのがよくわかったし… あーし達はお菓子と飲み物用意するから後は任せ良いん？

疲れきった表情の三浦優美子を見て溜め息を吐いたのを見て

ユキノン …三浦さん、貴女のリクエストに応えてサラスパの詰め合わせに海老名さんのリクエストのサンドイッチにお寿司の盛り合

わけを用意しましたから後はお肉を少し揃えようかと思つてます

唐揚げとかローストビーフなんかを：

ヤエ　　：菓子食つても足りなきや後はデリバリー頼むかコンビニ走るのもありだからアンマ買いすぎて持つていくの大変つて事態は避けたいからな

そう苦笑いするヤエでした

その③　由比ヶ浜家のダイニングにて：　ガハママが入室しました？

つてチャットルームではありませんね、失礼致しました

女子会と言えばメインはコイバナだけどメンバー中で明確に男子と付き合っているのはヤエだけ：

アタシから見ても奥手の彩加にそんな事を期待するのはムダ

あの日だつてさ、結局：　二人っきりの初デートだっ♪　つて浮かれてたのはアタシだけだったみたいだったから家に帰ってからかなりへこんだんだよ？

いつもアタシを優先しろとは言わんけど優先してほしいとき位はさ：

そう言つて溜め息を吐くヤエに同情的な目を向け

ユミコ　　：隼人と：

ガハマさん：厨二だね？　ヤエちゃん

その二人の名前を聞いてアタマイタのポーズの雪ノ下雪乃

ユキノン　　：全く：　厄介な人達に好かれたモノね？

そう言つて呆れているとユミコが

ユミコ　　：その問題の日に一体何があつたん？　あーし等に言つてみ？

そう言われて、テニスの練習の後からの事を話すとガハママさんも

身を乗り出して

ガハママ　：ヤエちゃんの言う通りで仕事の大切さはわかるけど、本当に大切な時位は家族を優先してくれてもバチは当たらないわよねえ

うちのパパは旅行代理店の企画部に居るんだけど仕事優先の人にファミリーパックのプランニングなんかできるわけないわよねえ
〜っ♪

たまたま持ち帰ってた企画書見て笑ってら後日ボツになったみたいで落ち込んでたわよ？

と、黒笑みが怖いガハマママさんでした

最近料理にハマっていると言うガハマさんが皆にマイブームを聞きました

ヤエ　　：薙刀だね、うんっ！　凜々しい女、目指したい、ってそう思って道場通い始めたよ♪

目指せ神崎風塵流って感じかな？

ヒナ　　：ヤエちゃん、そんな事を言ってるからざざむし君が言い寄ってくるんだよ？

そう冷静に突っ込みを入れる海老名さんと

ユキノン　：ええ、小町さんも『お姉ちゃんは厨二先輩の事を厨二だってバカにしてますけどお姉ちゃん自身もしっかりぶり返してるんですよね…』　そう言っつ溜め息を吐いていたわよ？

ガハマさん：おまけにコスプレキャラが定着しつつあるもんね？ヤエちゃんっつばさ

そう言っつ苦笑いするガハマさんに

「言い訳させてもらうんならあれはアタシが自分の意思で始めた訳じゃないからな？」

発端は陽乃さんがどっから仕入れてくるの知らないけどアタシに着せる為に用意したコスプレ衣装ナンだからな？」

そう言っつ溜め息を吐くヤエでした

職場体験は親父の会社NGESで

① 無理を道理に変える技

親父の働く会社は東電の子会社で太陽光発電及び充電池、太陽光給湯器、オール電化：システムキッチンのデザインも含む

つまりはアタシの苦手な理工系の会社だからアタシの選ぶはずない会社だし何よりトップシークレット塊みたいな会社だから職場体験等受け入れない企業でもあるんですけど

アタシは新技術に興味ないと言うよりそんな企業に働く父を持ちながらビデオデッキの予約も小町任せの器械音痴なアタシの理解を越えるのは間違いなく

アタシのお目当ては社員食堂でオール電化のシステムキッチンの開発にも絡むため料理はかなりの本格派なんだけど社員と取引先の人間のみを提供される為

それか余計に人々の好奇心をくすぐるのだけど、社屋が色々重要機密の塊であるがゆえにどうしても入場制限が必要なんだよね

だから彩加と沙希を選んだし二人も乗り気と言うか沙希の気合いの入りようがスゴい

ナンでも一部の人達からは千葉のタニタ食堂と呼ばれているそうで沙希も憧れていたそう

「企業秘密の関係上関係者以外は立ち入れないから入りたくても入れなかったんだよねえっつ

雪ノ下が相当悔しがってたって噂を聞いてるよ……」
そう言つて苦笑いしていた

② 川崎沙希の疑問

「以前から思っていたんですけど幼児向けのメニューはないのでしょうか？」

と、言う川崎沙希の質問に対して暫く考え込んでから

「社員食堂には必要性を感じない：が、電気調理器の紹介レシピには必要なメニューだね？」

そう言つて、料理人と居合わせた開発研究部門の責任者（親父）に営業部の部長さん（そう紹介された人で親父の同期なんだつて）に振ると

「そうだな、そろそろバリエーションを増やしても良い頃かもな
：
」

と、親父が言えば

「そうだな、介護食なんかの質問も見受けられるようになってきたから検討課題に上げるタイミングを見ていたんだが…

そちらのお嬢さんがせっかく声を上げてくれたんだから私はそれに乗つかることにするよ」

離乳食と幼児食及び介護食のメニュー開発とレシピの提供を提案する」

そう言つて口火を切つた当の沙希自身もビックリの展開に親父が

「だが、そのメニュー開発に関する予備知識を集めるだけじゃ実際に食べる」親父、沙希さえ良けりゃけーちゃんにモニターになつてもらいや良いと思うし蒼空だつて未だ一年だからそう大差はないはずだが沙紀はどう思う？」

アタシは二人に全く同じメニューを出してたぞ？」

そう言つて沙希の返事を待つと親父達も身を乗り出して沙希の答えを待つと

「え、まあ言い出しつぺはアタシだしどんな料理に仕上がるのか興味あるから二人にも食べさせてみたい気はする」

そう答えたから

「食育を実践してる沙希は適任かもな、料理に詳しくそんな料理長さんもそつち方面の知識はあまりなからう？」

そう言って笑うと営業部長さんが
「それは良い、レシピだけではなく調理の手順とを詳しく提示で
きたら良い宣伝材料になる」

女子会く比企谷八重と愉快的仲間達のパジャマパーティーその①由比ヶ浜家後編

その⑤ ヤエのパジャマは和装です

その後パジャマ？ 着替えた一同： ヤエはガハママに手伝ってもらって着付けした寝巻きですが

布団を敷いた客間で、寝そべりながら始まる第二ラウンドは男子達に対する苦情から始まりました

ヤエ 隼人がアタシの弁当を物欲しそうに見るのは勘弁してほしいし葉山先生に失礼だ

そうヤエが言う

ガハママ ．それを言ったら私もヤエちゃんのご両親が： 特別にお母様が羨ましいいわ、娘にキッチンを任せられるんですもの

そう言って苦笑いするガハママさんに呆れて溜め息を吐くガハママさんでしたが

ヤエ ．イヤイヤ、アタシなんか未々沙希や雪乃の二人に比べたら： 実際二人には色々教わっているしな？

そう言って照れ隠しするヤエに

ユミコ ．それをヤエに言われたら、あーし等なんかもつとダメだからヤエにはもっと自信持つてもらわないとだし

ヒナ ．そうだよ？ あたしもそんなに下手じゃないとは思いますがどね：

そう言ってヤエを見るヒナに

ユキノン ．ヤエさんがスゴい所は基礎をしっかりと学んでいるところと暇さえ有れば自作のレシピ帳を見て手順を頭に叩き込んでいるからで一度に何品もの料理を作れるし微妙に味付けも変えられる：

お弁当が良い例で戸塚家の味付けの戸塚君用と比企谷家の味付けのご両親に両者の味を融合して自分の味を模索した試作品の三種類を用意してますからね

それを朝食を作りながら毎朝こなしてますから、得られる経験値は半端なモノではないわ

そう言つてガハマさんを見たユキノンは

ユキノン　：　だからね、由比ヶ浜さん、以前貴女言つた才能がないと言ふはやはり違うと思うの…

まずは相手に『美味しいっ！』言つてもらえる料理を作る事

それには『これを入れたら美味しくなるはず』等と言うナンの根拠もない決めつけは止めなさい

そして、用語を正しく理解なさい…特に少々と一ツマミを混同すると仕上がりが全く違つてしまう事にもなりかねませんからね？

時に冒険も必要でしょうけど…三浦さん、テニス初心者にいきなりスピナーブから教える指導者は居ますか？

ユミコ　：　そんな指導者はまず居ないよ…テニスに限らず基礎を教えない指導者はいないはず

あーし、スキーにはたまに行くんだけど最初に教えられたのは上手な転びかただったし

ガハマさん：え？　滑り方じゃないの？
わ

そう言つて驚くガハマさんに

ユキノン　：　スキーは止まるのが難しいから止まれなくなった初心者には転んで止まる所から教えるのよ、由比ヶ浜さん

似たような感じだと柔道も投げ技ではなく受け身から習いますからね、怪我をしないためにね

そう言つてガハママさんが淹れてくれたお茶で一息吐いたユキノンは

その為には自分が好きだからと言う理由で何にでもモモ缶を入れるのは止しなさい

どんな物にでもそれを苦手にする人は居ますしモモはアレルギー食材なのよ？

好き嫌いだけの問題ではないのだから自分一人の好みを押し付け

るのはよくないわ

このお寿司だつてそう、ワサビがダメなヤエさんの為にワサビ抜きを選んであるんですからね？

食材同士の相性も有りますからアレンジする場合は必ず試作品の試食をなささい

そうでなければ改善もできないばかりかやがて貴女の料理を怖がって食べてくれる人がいなくなりますよ？

少なくとも自分で試食を繰り返し試行錯誤を重ねないと人に食べさせられる味には仕上がらないわ

そう言つて今度はヤエを見て

ユキノノ　：おまけに今は川崎さんが変わつて幼い二人や大志君、中三男子と言うこれ又異なる要素を持つ人物の食事を川崎家の味付けを身に付けながら作れる器用さ

これは多分、プロの人でもそうそう真似られない事だと思つたわね

一般的なプロの調理人は、味付けにブレがない代わりに客に合わせて味付けを変えたりはしないわね

自分の：　お店の味に自信を持っていて、お客はその味を求めていくのだから変える必要がないとも言えるわね

そんなユキノノの言葉を夢うつつに一足先に聞きながら夢の世界の住人となつた八重でした

エピローグ

ヤエ　　：おはようございます

そう八重に挨拶され（ああ、これが朝娘がキッチンに立っている風景なのね？）　そう思うとやはりヤエの母親が羨ましいガハママさん

ガハママ　：おはよう、ヤエちゃん

そう返事を返して、その後二人で朝食とお弁当の支度をしましたが
：　改めて娘の料理を何とかしようと思つたガハママさんでした

そして、その日の女性陣と戸塚の弁当が、全員一緒であることに気付いた男子達がその訳を聞いたら

「夕べうちで女子会やってね、朝うちのママとヤエちゃん皆の朝ご飯とお弁当を作ってくれたからなんだよ」

って： ガハママさん、ガハマさんが朝キッチンに立っている風景は遠そうですね？

比企谷八重のハッピーバースデー？

八重バースデー

朝から暑いよ…おまけに彩加まで意味無く気合い入れまくってるし、いったいなんなのさ？

彩加は練習ないし留美は川崎家に行くって連絡を最後に音信不通だし

そして何より朝の練習を終えたアタシを更衣室で待ち構えてた陽乃さんが謎で彩加の朝の練習に付き合った後はノースリーブに短パンが定番のアタシ

そんなアタシがなぜか淡いピンの…しかもミニのワンピースを着ているのはなぜなんだろう？

「あ…彩加っ！MARCHE、やってるよ？」

そう言っただけで駆け出そうとしたけど迷子防止に手を捕まれているアタシには無理な話で

「さ、彩加あ〜っ…」

と、思わずこぼすと

「そんなに慌てないの、八重ちゃんももっと落ち着かなきゃね？」

そう言われて落ち込むアタシの肩を抱きこの夏10cm以上背が伸びた彩加がアタシの頭を撫でながら

「慌てないで、のんびり行こうよ…その、八重…」

最近アタシの事を呼び捨てにするようになり始めた彩加がアタシの反応を伺いながらそう言ってきたから

「別に呼び捨てでも良いんだぞ？彩加の自信の現れだと思わんから逆に早くそれに馴れろよ？」

そうアタシが言う嬉しそうに笑う彩加が

「うん、僕ももう少し堂々と胸を張ってそう呼べるようになりたいね」

そんなとりとめもないやり取りをしてたらアタシのPHSが震えて着信を知らせてきたから

(誰だろ?)

そう思つてモニタを確認してから電源を落として専用のポーチにしよう

「出なくても良かったのそう聞いてきたから」

そう聞いてきたから

「彩加が気にしなくても大丈夫、親父(非通知)だから間違いないんじゃないの?」

又掛かってきたら鬱陶しいから電源を落とすといたから問題なし」
そう言つてシカトを決め込むことにしてそう言つてMARCH
の散策を再開したんだ

今まではあまり気にしなかった小さな商店街だけど一風変わった
お店が何軒もありシャレた惣菜なんかも美味しそう

オムライスの専門店かあゝつ、沙希と来て研究したら蒼空とけー
ちゃんにも食べてもらおう

そう思つてみていた

沖縄料理や食材雑貨を取り扱う店

「お昼はここでソーキそばにしよーか?」

そんなことを笑つて話していたら半べその親父が現れて

「や、八重えゝつ…ナゼ電話にでないんだあゝつ…」

そう言つて泣き付いてきたから

「あゝつ、ゴメンねえゝつ…電池切れちやてるんたよねえつ♪」

そう言つてへペろをして見せたら簡単に騙されてますよ…うん、

チヨロい

その後アタシと彩加の二人は親父に付き合う事になり連れていか
れた先はデーキャンプ場でアタシが到着したら一斉に声を上げまし
た

「お誕生日おめでとう」
つてね

その後暑さに弱いアタシに構わずに皆が盛り上がっているのには
どうにも解せないアタシだった

再編中

① 一色いろはの依頼

サッカー部のインターハイ出場の知らせを聞いたアタシが呟いた一言でその後には

「はあ、気が重い」

そう呟くのも無理もなく

『インターハイ出場の場合あたし一人じゃ間に合いませんからマネージャーの仕事手伝って下さい』

そういろはに頼まれたアタシは

『はつきり言って親衛隊が鬱陶しいから仕事できんのは仕方無いにしても…』

隼人見て食っちゃベツテルヤツラはマネージャーでいる意味無いからソイツラを隼人が切るなら手伝っても良い』

そう言っただけでやらなかったら、話を聞いていたかは知らんが

『八重、それは本気で言っているのかい？』

そう隼人が聞いてきたから

『当たり前だこんな事冗談で言えるか？』

それに将来就職した時にあんな調子で会社クビにならんと思うか？

それにお前らは大学のサークルみたく女子にちやほやされたりいぢやいぢやしたくて部活してるのか？』

そう言っただけでやらなかったら

『そんなつもりは無いって言っても説得力無いからな？』

まあお前もパーソナルスペースを大切に作るヤツだからいぢやいぢやはないと思うが

ちやほやされるのを当然と受け止め仕事しないマネージャーの皺寄せを唯一仕事してるいろはに押し付けてるんだからな？ それわかっているのか？

自分達が仕事しないからいろはの仕事手伝ってるアタシをにらんでくるヤツラなんだぞ？ どこに弁解の余地があるんだ…』

そう言っつてやれやれと首を降つてやり

『少なくとも、アイツラの尻拭いをするためにマネージャーの仕事を手伝うのは不愉快だ』

なんなら雪乃と二人でアイツラ仕事のできるマネージャになるように教育してやろうか？

それなら奉仕部の理念にも叶うから喜んでその依頼引き受けるんだがな？ 雪乃』

そう言っつて隼人が入って来た入り口と別の入口に立つ雪乃にそう声を掛けると

『そうね、まさしく魚を与えるのではなく魚捕り方を教えるのですもの、その依頼引き受けるわ』

そう、良い笑顔で言う雪乃を見てニヤリと笑うあたし達を見ながら（こ、こわっ… このお二人を敵に回さなくてホントに良かったですよ…）

そう思っつて胸を撫で下ろすいろはに笑いかけながら

『アタシはどっちでも良いんだぞ？ 可愛い後輩、いろはの負担が減りやそれで良いんだからな？』

それと親衛隊、孤立してるからな？ お前が放置してたから長子のつてたせいで他のファンクラブの連中の反感買ってるからな？』

そう言っつて鼻で笑うと

『それも俺の責任なのか？』

と、相変わらずふざけた返事の隼人に

『グラウンドからファンクラブの連中閉め出したらどう？』

そう言っつてやると

『それは問題ないだろう？』

そう答えるから

『お前、それ本気で言ってるの？ いろは、グラウンドの様子はどうか？ なんか変わったか？』

『余計に空気が悪くなりましたね… あの人達は葉山先輩の周り』

を独占したくて他の人達を閉め出しただけみたいですから締め出された人達からしたら：』

『アタシはいろはその答えに頷いてお前以外の部員にや良い迷惑なんじゃねえの？』

居ても煩いだけで役に立たなかつたのが締め出されて怨霊化してるんだからな？』

他の生徒も近寄らねえんじやねえの？ 最近顔出してねえから知らんけどな 』

そうアタシが言ったら

『元々あまり顔を出すタイプじゃないみたいですけど： 最近ますます寄り付かなくなりましたよ？ 顧問の先生 』

アタシの問い掛けに、呆れ気味にいろはがそう答えると焦った隼人が

『さ、最近、ナニかとお忙しいらしいからな 』

そんな言い訳にもならん言い訳を口にする呆れた隼人に

『ナンでお前が顧問の言い訳してるんだよ？ 本当はわかってるんだから、いい加減現実から目をそらしてるんじやねえよっ！』

お前がアタシの提案を飲めないならサッカー部とは距離をおかせてもらうからな、インハイ終わったらフットサルには付き合おうがサッカーはちよつと遠慮させてもらう 』

そう言っているいろはの要請は保留にして貰った

② 葉山隼人の決断

（形は違ってもあの時と同じだな： 雪乃ちゃんと他の子達のことちちらを取るか？）

今回はマネージャーしてくれてるいろはをとるか俺の取り巻きをとるか：）

私達の未来予想図アタシとアナタそしていつかきつと

② けーちゃんの元へ

隼人達に話を聞かれた翌日アタシは沙希に

「職場見学一緒に行かないか」

と、声を掛けると「けーちゃんの保育園に付き合ってくれませんか良いよ」

との答えに

「なんと素晴らしいっ！それを最初から書いてたら彩加に注意される事も平塚先生を泣きながら爆走させる事も雪乃に呆れられることもなかったじゃん？」

うん、あそこなら先生も何人かは顔見知りだし園児もけーちゃんを通して何人かは顔見知りだからねはボツチのアタシにも優しい職場だ

彩加燃それで良いか？」

そうアタシが聞いたなら

「保育園には僕も興味有るしやっつと八重ちゃんがちゃんとした希望先を考えてくれたから嬉しいんだからね？」

そう言われて

「アンタ… 中間試験学年総合八位なのにアホなの

そう言われて彩加が

「アホというか抜けてると言うか…そこが可愛くも有るんだけどね？」

その彩加の言葉に

「なんない、結局ノロケかい…」
と、呆れられた彩加だけど

「けどそこが魅力のはアタシも認めるよあの雪ノ下や三浦に放っておけないと思わせる危うさ…」

それは男子達の保護欲をそそり惹き付けてやまないしあのさばさばした性格のアイツの事をなかなかいいんじゃないの？」

そう沙希に言われた彩加は

「そうだね、どうも葉山君まで八重ちゃんを虎視眈々と狙ってるみたいなんだよね？」

そう言って苦笑いを浮かべると

「それ、本人は全く気付いてないんだろ？ と、ゆーか本人は全く興味無いつて感じすらするよ…」

そんな二人の会話が耳に入らないくらいに集中してシユシユ作りをするアタシだけど沙希の指導のお陰でかなりハマってる

勿論その被害は半端なく拡散中だ

アタシのお弁当箱袋はミニー柄の生地使用で彩加のお弁当箱袋はミツキー柄を作ったのに苦笑いされお蔵入り

雪乃にはパンさん柄の、優美子にはおしやま猫キャットメリーの柄のシユシユを贈ったら引き笑いされ大事にしまっておくと言われそれ以降見たこと無い

そんな訳なので以降人に贈るのを諦めて自分用のをひっそりこっそり隠れて作ってる

夏までに浴衣作りたいから…花火大会、浴衣着て彩加と見たいから…
うん、頑張るよ… はあ… テンション上がらない

裁縫道具と二人分のお弁当箱を片して教室に戻り午後授業が始まりやがて放課後になり今日は部活の日…

と、言っても特に依頼もないからアタシは問題集と格闘中

いつものようにクツキーをつまみながら三人でお茶を飲んでると

「八重ちゃん、八重ちゃん、アタシ等も沙希ちゃんの妹さんの保育園に行くねっ♪」

そう言われたけどテンション駄々下がりのアタシには何も言う事

はなく

「そーなんだ… ははは」

と、乾いた笑い声をあげるだけだった

③ やって来ました保育園

部活が終わり戸塚を待つ私はとても可愛い女の子…………… 我ながらキモいからこの手の冗談は封印すべきだね

うん、でもJKらしくは見えるかな？

誰がJCだよ？ はっ倒すぞっ!?

……はあ、あほくさ…… アタシは誰と口喧嘩してるんだろうか？
あ、テニス部の仲間と一緒に…… 仕方無いよな……

「彩加…… 部外者は遠慮するよ…… また明日……」

ここ一番で発揮するアタシの逃げ足で脱兎の如くその場を逃走を
図りとぼとぼ歩く帰り道……

小町の前ではいつものように振る舞わなきゃね……

そう思うと余計に気が重い

最近体が重い（体重は減ってる）は気持ちは晴れない……憂鬱だ……

職場見学初日、呆れたことに集まった班は戸塚班、班員はアタシと
沙希に三浦班で班員は姫菜と結衣はわかるんだけどさ……

戸部班、班員は大岡に大和に葉山班葉山班の班員は佐東に鈴置って
おまえらなにしにきたの？

自己紹介が始まり沙希はけーちゃんの美人のお姉さんにアタシも
何度もお迎えに来てるから可愛い？お姉ちゃんの扱いで彩加はいわ
なくてわかるよな？

サーちゃん先生、ヤエちゃん先生、にサイちゃん先生

優美子達はゆみこ先生にひめ先生とゆい先生で葉山だけお兄さん
先生で後は君付けだ

で、まずは顔合わせをかねたお遊びなのに葉山以外の男子はなに
して良いのかわからずに立ち尽くしているから

「しよぅがないな……」

と、呟いて

「先生…… 一部、ボール遊びに切り替えても良いですか？」
けーちゃんのクラスの先生に許可を取り園児用のサッカーボールを戸部にパスを渡ししながら

「ほれっ！ 受け取れっ、戸部っ…トラップからのリフティングっ！」

日頃鍛えてるテクニクを今、披露しなくていつするんだよ？」
そう言ってやったら、やっと理解して華麗なるテクニクを披露したら男の子を中心に戸部を見る目が変わった

今度は大和の番で

「このお兄ちゃんはアタシ等の学校の野球部でエースで四番のカッコいい人なんだぞ？」

「キャッチボールとか習いたい子はこのお兄ちゃんどこ集まれっ！」

そう言ったら、キャッチボールしてるのを何度か見たことのある子達が集まり今度は大岡を呼び寄せ

「このお兄ちゃんはラグビー、ゲンゴロウ丸のラグビーをやってるからスツゴク力持ちなんだぞおーっ… ほれ、大岡こーゆー風に鵜で曲げて力入れて踏ん張れ！」

そう言って曲げた腕にぶら下がって見せ

「なっ、すっげーだろっ！」

そう言ってアタシが離れたら大岡の腕にぶら下がると園児達が群がり最後に佐東と鈴置は

「軽音部のアンタ等の持ち歌にここに居る子達と一緒に歌える曲無いの？」

歌い始めたら先生たちだつてフォローできるんだからしつかりしなよ？」

「そう指示を出して

「全く世話の焼ける男子達だよ、先生達に笑われてるじゃんっ！」

「憤慨しながらそう言って再びあや取りのグループに戻ったんだ

アタシ達の未来予想図？男子達は全くだらしない

③やって来ました保育園

部活が終わり戸塚を待つ私はとても可愛い女の子……………我ながらキモいからこの手の冗談は封印すべきだね

うん、でもJKらしくは見えるかな？

誰がJCだよ？はっ倒すぞっ!?

……………はあ、あほくさ……………アタシは誰と口喧嘩してるんだろうか？

あ、テニス部の仲間と一緒にか？仕方無いよな……

「彩加……部外者は遠慮するよ……また明日……」

ここ一番で発揮するアタシの逃げ足で脱兎の如くその場を逃走を囮りとぼとぼ歩く帰り道……

小町の前ではいつものように振る舞わなきゃね……

そう思うと余計に気が重い

最近体が重い（体重は減ってる）は気持ちは晴れない……憂鬱だ……

職場見学初日、呆れたことに集まった班は戸塚班、班員はアタシと沙希に三浦班で班員は姫菜と結衣はわかるんだけどさ……

戸部班、班員は大岡に大和に葉山班葉山班の班員は佐東に鈴置っておまえらなににきたの？

自己紹介が始まり沙希はけーちゃんの美人のお姉さんにアタシも何度もお迎えに来てるから可愛い？お姉ちゃんの扱いで彩加はいわなくてわかるよな？

サーちゃん先生、ヤエちゃん先生、にサイちゃん先生

優美子達はゆみこ先生にひめ先生とゆい先生で葉山だけお兄さん先生で後は君付けだ

で、まずは顔合わせをかねたお遊びなのに葉山以外の男子はなにしているのかかわからずに立ち尽くしているから

「しようがないな……」

と、呟いて

「先生、ボール遊びに切り替えても良いですか？」

けーちゃんのクラスの先生に許可を取り園児用のサッカーボールを戸部にパスを渡しながら

「ほれ、戸部っ……トラップからリフティングっ！」

日頃鍛えてるテクニックを今しなくていつ披露するんだよ？」

そう言っただけならやっとならやっとならと理解して華麗なるテクニックを披露したら男の子を中心に戸部を見る目が変わった

今度は大和の番で

「このお兄ちゃんはアタシ等の学校の野球部でエースで四番のカッコいい人なんだぞ？」

キャッチボールとか習いたい子はこのお兄ちゃんとか集まれっ！」
そう言っただけならキャッチボールしてるのを何度か見たことのある子供が集まり今度は大岡を呼び寄せ

「このお兄ちゃんはラグビー、ゲンゴロウ丸のラグビーやってるからスツゴク力持ちなんだぞおっつ、ほれ、大岡こーゆー風に鵜で曲げて力入れて踏ん張れ」

そう言っただけ腕にぶら下がって見せ

「なっ、すっげーだろっ！」

そう言っただけアタシが離れたら大岡の腕にぶら下がると園児達が群がり最後に佐東と鈴置は

「軽音部のアンタ等の持ち歌にここに居る子供達と一緒に歌える曲無いの？」

歌い始めたら先生たちだっただけフォローできるんだからしつかりしなよ？」

そう指示を出して

「全く世話の焼ける男子達だよ、先生達に笑われてるじゃんっ！」
憤慨しながらそう言っただけ再びあや取りのグループに戻ったんだ

アタシ達の未来予想図？予定は未定

皆で食べる楽しい給食の時間になりアタシと沙希は一才児の見守りに姫菜と優美子は二歳児の見守りをしながら後のメンバーは普通に幼児達と楽しく食事した

乳児クラスのお昼寝する子の睡眠誘導
児クラスのお昼寝する子の睡眠誘導

残りの四人はお昼寝しない子達とえほんを見て過ごす事に

その後園長先生が申し訳無さそうにちよつと今年は色々立て込んで明日のお誕生日会の準備が：

そう申し訳無さそうに言っただけで園の事情を知るアタシと沙希は互いに顔を見合わせ

「遠慮しないで手伝わせてください、職場見学と言うだけじゃなくけーちゃんのお世話になってる園、お友だちの皆の力になりたいんです」

「何かよくわからないけどあーしらだって昔は幼稚園なり保育に通ってて園のお誕生会がどんなに楽しみにしてたかまでは忘れちゃいないから手伝うしかないでしょ？」

「僕はそれほどこーちゃんとはそれほど親しくはないけど八重ちゃんの手伝うなら僕もその力になりたいです」

「皆仲良くですね？」

「せっかく行事に参加できるなら子供達に楽しんでもらわなきゃだよね？」

「普通は行事に重ならないはずが運良く参加できる訳だしね」

と、優美子、彩加、隼人、結衣、姫菜の順に賛同の声をあげて本来は休憩の時間に花飾りや切り絵等の仕事を頑張りましたよ

お昼寝の後のおやつの時間になり給食と同じ割り振りで助手として入るアタシ達

そしてお迎えの時間まで外遊びと中遊びに別れアタシは教室で中遊びだ

こればかりは例え彩加に呼ばれても譲れないアイデンティ

ティーだが隼人何でお前が教室内ないにいる？

まあ良いだろう、アタシの一人遊びマスターの実力の前にひれ伏すがよいわ

って思ってたんだけどやはり慣れてるわけないから目を覆いたくなる不器用さに思わず手をとって

「こうやるんだゾツ！」

って教えてたら

「何で八重ちゃんが葉山くんの手を取って折り紙を教えているのかわりたいなあ〜っ？」

そう黒笑みを浮かべる彩加に言われて滝の汗を流しながら言い訳考えてたらどこぞのリアルおままごと好きな園児みたく

「修羅場よ、修羅場、一人の男を巡って二人の女が醜い争いを繰り広げてるわよっ！」

（人の不幸は蜜の味ってアンタら噂好きの主婦かよ？）

そう思ってたなら

「違うよ、サイちゃんとヤエちゃんは痴話ゲンカしてるって

フーフゲンカは犬さんも食べないから放って置けば良いからって

サーちゃんも言ってたよ？」

ってサーちゃん、アンタケーちゃんいったいなに教えてるのさ？

そんなことをしてる内に帰る時間に川崎はケーちゃん同伴でサイゼで反省会…

もとい園児に修羅場とか痴話ゲンカとか言われたアタシ、彩加、隼人の三人は優美子からお説教中

何か疲れる職場見学初日でした

アタシ達の未来予想図お誕生日会

職場見学二日目、今日は園のお誕生日会

朝の会の後、遊戯室に移動して会が始まりアタシ達はそれぞれにお誕生月の園児を座らせてますがアタシも彩加の膝に座りたい…

勿論、そんな事言おうものならまた今日も優美子のお説教間違いなしだから言わないけどさ

お誕生日ソングのリードボーカルは佐東と鈴置が指名され熱唱中

大岡に戸部、大和は体操のお兄さんで佐東と鈴置は歌のお兄さんみたいな感じで慕われている

女子（彩加を含む）はアタシ以外は優しいお姉さん？でアタシは身から出た錆とはいえ元気なお姉ちゃんだ…

見た目的や昨日男子達を仕切ってたのが原因らしいけど解せぬ…

アタシは姫菜同様に正統派では無いのは認めるが歴とした文学少女のつもりなんだが…

お誕生会の後はお絵描きなんだけどアタシがプリキュアの絵を描いて女の子達にウケてるのを見て露骨に悔しそうな顔をしてる

それが面白くてついつい量産してただけどそれが後々に厄介事を招き寄せるのはまた別の話し

え、絵が得意なのかって？

まあそうとも言えるけど少なくとも美術で点数もらえる絵を描ける自信はないし描く気もない

八と入れ替わりで夜を過ごしてた時のアタシは勉強をする、本を読む、ゲームする、ネットをロムる、アニメやラノベのキャラのイラストを描く

とか、とにかく一人で静かに出きることで夜を過ごす日々を暮らしてればそこそこは描けるようになったのも特別な話じゃない

まあ、その当たりのアタシの個人的な事情とかは園児達には関係無く園児達にはスゴく上手に描けている絵が嬉しいのに何ら変わりはない

そんな感じだからオリジナルのキャラを描いたりする気もないし

そんなセンスなんかあるとも思わないからイラストを仕事にする気もない

やれても精々漫画家のアシスタント： もちろんベタ塗りやスクリーントーン貼りとかかな？

それにアタシの場合書き慣れた絵を描き写してるだけだから描いたことのない構図は手本を見てならなんとか描き移せる

だけど口頭であんな構図とかこんなポーズとらせて何て言われても無理だから滅多に人前では描かない

と、言うかラノベのキャラはともかく学校でプリキュアの需要あるとは思えないし材木座には絶対教えないから今までこの特技を知っているのは家族以外は沙希だけ

けーちゃんとは遊んでる時にはプリキュア、蒼空からはヒーロー戦隊と仮面ライダーやウルトラマンをお願いされてるからなんだよね

勿論描いた絵はお誕生月の子優先にリクエストを聞いてプレゼントしたよ

給食の時間とお昼寝誘導も昨日と同じ割り振りで別れおやつ後にいよいよお別れの時がきた

結構別れを惜しんでくれるのが嬉しかったな： まあアタシは沙希の代わりにこれからもけーちゃんのお迎えに来ることもあるからお別れじゃないんだけどな

色々あったけど職場見学だったけど書き上げたばかりのレポートをカバンにしまいアタシはホッと一息吐くのだった

結衣の誕生日と魔王降臨

① 雪乃は方向音痴だった

大志の依頼以降社蓄街道まっしぐらなアタシはよくよく考えるまでもなく休みがない

そんなある土曜日のこと… この日は沙希が休みでバイトの後がフリーになったアタシは小町と東京ワンにゃんショーに行くべくバイトを昼過ぎまでにして現在待ち合わせ場所にいる

すると見慣れた人物が一人パンフレットを片手にぶつぶつ言いながら歩いているのが見えたが如何せん待ち合わせの時間が近い今の場を離れるのは具合が悪い…

そう考えてたら小町に気付けずにびっくり

「お姉ちゃん、何やら難しい顔をしていますけどどうしましたか？」
「そうよそ行きの口調で話しかけられ

「あそこに居るのは雪乃だよな？ さっきからあの辺りをうろろしてるのが気になってたから声かけてきても良いか？」

アタシがそう言うと

「それならアタシも行きますよ、小町が来るまでは我慢して待っていたのでしょ？」

「そう言われて凶星なアタシが苦笑いすると

「それならレッツゴーです」

「そう元氣よく言つて雪乃に話し掛けに行つた

「うす」

アタシがそう声をかけると

「全くもう少しきちんとして挨拶しなさいと言つてるでしょうに…」

「そう言われたから

「それならあの頭が痛くなるような結衣の挨拶を何とかしてくれ
少なくともアタシ達にまであれを言わせようとするのは諦めて欲

しい」

そう言ったら

「え〜っ、なんでですか？結衣さんのやつハローっ♪可愛いじゃないの、お姉ちゃん」

そう小町に言われたアタシは

「純真な彩加がづられていつてるがこれに関しては譲れない線だアタシはこれ以上アホのレッテルを張られるのは勘弁だからな」
そう言つて嫌な顔をする

「全く…お姉ちゃんは可愛いげがなく困りますね…」
つて、なんでアタシが悪いみたいなの流れになっちゃってるの？理不尽だ

「そう言えば雪乃は探し物？十分位前からこの辺りをうろろしてたよね？」

そう当たり障りのない聞き方をしたら

「ええ、心配してくれて有難う、何とか見付かったわ」と、何事もなかったように振る舞ってるけどね…

「そっか、ならアタシ等もワンにゃんショーに来たから雪乃が嫌じゃなきゃ一緒に回らないか？」

アタシのその誘いに一瞬安堵の表情を浮かべ

「そうね、せっかくここで出合えたのですもの…無下にお断りするのも野暮ね？」

そう言つたかと思つたらアタシの左手を握り右手を小町が握ってる

「え〜っところこの構図だとアタシが末妹みたく見えるんですけど？」

「そうアタシが唇をとがらせ抗議すると

「お姉ちゃんが無意識にしてるその子供っぽい仕草を何とかしなきゃ見た目通りにしか見られないよっ…」

そう小町に言われ

「そうね、気を引くものに吸い寄せられて暴走する貴女は困ったちゃんだったけど可愛かったわよ？」

「そう言われ何て返せば良いのか迷っていたら

「パパ、あの子良いなあー、優しいお姉ちゃん達と一緒に来てるねっ♪」

そう少女が言うとその子の父親らしき男が

「そうだね、三人仲良く手を繋いでたのしそうだね」

その悪意なき言葉に落ち込んだアタシは雪乃と小町の二人に大人しく連行された

② ワンにやんショー

「そう言えば貴女達もよく来てたのかしら？」

雪乃にそう聞かれたアタシは

「いや、アタシは始めてだ…八と小町は毎年来てたがな…カマクラと出会ったのもワンにやんショーだったしな」

アタシの言葉に少し寂しそうに笑う小町

「ペンギン…か、ラテン語で肥満を意味するんだよな…」

アタシがボソツと呟くと

「お姉ちゃん、せっかくのシリアスモードが台無しだよ？」

そう言って呆れる小町だが

(どうにもならない事を悩んでも仕方ねえんだぞ？小町…俺が…俺達が元の俺に戻ることはないしそれを望むことは八重を否定することなんだからな…)

そんなアタシのモノではない思考…心の声に気をとられていた

「全く…八重さん、貴女と言う人は空気を読まないわね？」

そんな事を言われて

「空気を読めない貴女には言われたくないよ…」

そう思ったアタシだった

アタシが適当に猫を構うなか一心不乱に猫と戯れる雪乃
それを見てたら

(焦る必要はねえし誰かと自分を比較する必要もない)

再び声が聞こえてきたから周囲を見回しただけど当然該当者は見当たらない

「……………？、？、？」

無言で周囲を見回し首をコテンと倒すのを不審そうに見ていた小町が

「お姉ちゃん、あたしは六時にアマゾンの荷物が届きますから先に帰るのです」

敬礼をしながらそんな変な口調で言う小町に

「晩ご飯はどうするの？」

そうアタシが聞いたなら

「冷凍庫の作りおき解凍したら結構なんでもあるからそれ食べておくからあたしの事は心配しなくても良いからね？」

そんな事を言われて

「ん、あまり遅くならないようにするから気を付けて帰りなよ」
取り敢えず心の中にわき起こった疑問は横においてそう言って小町を見送った

それから暫くして猫を堪能したらしい雪乃が

「もうすぐ由比ヶ浜さんの誕生日らしいのよ…だから私達もプレゼントでもって思ったのだけど…」

そう言われて驚いたアタシは

「誕生日って友達もプレゼントを贈るものなか？」

そう雪乃に聞いたなら

「八重さん、それはなんの冗談のつもりなのかしら？」

そう言って冷ややかな目でアタシを見る雪乃に

「そうなんだ、知らなかったな… そんな事すらもアタシはね… 八にはプレゼントを贈る相手も送ってくれる相手も居なかったんだよな…」

そもそも誕生日自体教えてもらえてないし誰も覚えてないんだろ
うからな…」

そう最後の一文は口の中だけで呟き

「だから友達へのプレゼントって何を送ったらいいんだよ？アタ

シなんにも知らないぞ？その手の常識なんてモノはな」

そう投げやりに言う

「それなら二人で一緒に買いにいかないこと？」

そう言われて黙って頷き買い物に行くことにした

「なあ、こういった場合ってなんかタブーとかってあるのか？」

邪気のないアタシの問い掛けに

「特になにか決まっているわけではないけど八重さんの場合だと料理が趣味だからと言ってスパイスセットを貰ってもあまり喜べないのではないかしら？」

そう言われて

「ああ、確かに… 鷹の爪や胡椒は自分が食べる分以外は普通に使うから要らない訳じゃないけど… うん、確かに貰って微妙だよね

」

結衣のハッピーバースデー、東京ワンにやんショー

② ワンにやんショー

「そう言えば貴女達もよく来てたのかしら？」

雪乃にそう聞かれたアタシは

「いや、アタシは始めてだ…八と小町は毎年来てたがな…カマクラと出会ったのもワンにやんショーだったしな」

アタシの言葉に少し寂しそうに笑う小町

「ペンギン…か、ラテン語で肥満を意味するんだよな…」

アタシがボソツと呟くと

「お姉ちゃん、せっかくのシリアスムードが台無しだよ？」

そう言つて呆れる小町だが

(どうにもならない事を悩んでも仕方ねえんだぞ？小町…俺が…俺達が元の俺に戻ることはないしそれを望むつてことは八重を否定することなんだから…)

そんなアタシのモノではない思考…心の声に気をとられていたら

「全く…八重さん、貴女と言う人は空気を読まないわね？」

そんな事を言われて

「空気を読めない貴女には言われたくないよ…」

そう思ったアタシだった

アタシが適当に猫を構うなか一、心不乱に猫と戯れる雪乃

それを見てたら

(焦る必要はねえし誰かと自分を比較する必要もない)

再び声が聞こえてきたから周囲を見回しただけで当然該当者は見当たらない

「……う、？、？」

無言で周囲を見回し首をコテンと倒すのを不審そうに見ていた小

町が

「お姉ちゃん、あたしは六時にアマゾンの荷物が届きますから先に帰るのです」

敬礼をしながらそんな変な口調で言う小町に

「晩ご飯はどうするの?」

そうアタシが聞いたら

「冷凍庫の作りおき解凍したら結構なんでもあるからそれ食べておくからあたしの事は心配しなくても良いからね?」

そんな事を言われて

「ん、あまり遅くならないようにするから気を付けて帰りなよ」

取り敢えず心の中にわき起こった疑問は横においてそう言って小町を見送った

それから暫くして猫を堪能したらしい雪乃が

「もうすぐ由比ヶ浜さんの誕生日らしいのよ…だから私達もプレゼントでもって思ったのだけど…」

そう言われて驚いたアタシは

「誕生日って友達もプレゼントを贈るものなか?」

そう雪乃に聞いたら

「八重さん、それはなんの冗談のつもりなのかしら?」

そう言つて冷ややかな目でアタシを見る雪乃に

「そうなんだ、知らなかったな…そんな事すらもね…八にはプレゼントを贈る相手も送ってくれる相手も居なかったんだよな…」

そもそも誕生日自体教えてもらえてないし誰も覚えてないんだろうからな…」

そう最後の一文は口の中だけで呟き

「だから友達へのプレゼントって何を送ったらいいんだよ?アタシなんにも知らないぞ?その手の常識なんてモノはな」

そう投げやりに言うと

「それなら二人で一緒に買いにいかないこと?」

そう言われて黙って頷き買い物に行くことにした

「なあ、こういった場合ってなんかタブーとかってあるのか?」

邪気のないアタシの問い掛けに

「特なにか決まっているわけではないけど八重さんの場合だと料理が趣味だからと言ってスパイスセットを貰ってもあまり喜べないの

ではないかしら？」

そう言われて

「ああ、確かに…鷹の爪や胡椒は自分が食べる分以外は普通を使うから要らない訳じゃないけど…うん、確かに貰って微妙だよね」

結衣のハッピーバースデー、プレゼントは内緒でな

③ 彼を知り己を知れば百戦危うからず… 何か違うよね？

(うくん… 結衣っていったいナニが好きでナニを贈ったら喜ぶんだろ？)

そう改めて考えてたんだけど結衣が好きそうなものっておしゃれ雑貨とカラオケにハニトーくらいしか思い浮かばんぞ… マジで

改めお互いなんも知らないんだなって感じた

参考書か？ 料理のレシピ集か？

ファッションに関して全然わからんし結衣の方が詳しいからな下手なもんは贈らん方がいい、恥をかく

そう思ってたらさっぱり浮かばんマジでどうしょ？

そう思ってたら

「 そう言えば由比ヶ浜さんは小型犬を飼ってるっていつてたわね… 」

そう言われて

(そーいや一年前の事故は飼い犬のリードが壊れていぬが飛び出したんだっけ？)

そんな誰得な豆知識を思い出して

「 あくつ、なら首輪でも買うかな？ 雪乃は決まったの？ 」
そう聞いたなら

「 ええ、色々考えてみたのだけどエプロンにしようかって思うのよ

良かったら八重さんの意見も聞きたいのだけどいいかしら？ 」
そう雪乃に言われたから

「 あくつ、アタシの意見が参考になるならな 」
そう言って雪乃と二人キッチン用品の店に行くことにした

(エプロンかぁー、アタシのもそろそろ買い換え時かな)

って考えながら見てる

家で使ってるのは雪乃が買ってくれたまだ新しいパンさんエプロンだけど川崎家においてあるのはその前から使ってたヤツだからな…正直などこいい加減くたびれてる

そう思ってたら

「これなんか由比ヶ浜さんに似合うんじゃないのかしら？」

そう言って雪乃が見せてくれたのは黒のどちらかと言えば結衣より雪乃に似合いそうなの…

「結衣にはどっちかつと雪乃の手元にあるピンクの生地でフリルたっぷり、リボンたっぷりのがフワツとした感じのが良いんじゃないの？」

スタイリッシュで機能的なそれはどっちかってゆーと雪乃向きだっと思ってけどな？」

感じたことを素直に伝えるとアタシの答えに満足したらしい雪乃がエプロンをもって会計に行った

アタシはその間に

「カマクラのエサあまり残ってなかったよね？いつものヤツ買っていくから」

そうメール送ったら

「じゃあマタタビもお願い」

との返事だから

「了解」

と、返し終わると

「あら、いったい誰にメールをしてたのかしら？」
そう聞かれたから

「小町、ペットショップで思い出したんだよ…そーいやカマクラのエサってあんま残ってなかったはずだよなあ〜っ？ってさ

だから念の爲って思っ着小町に確認とってみうたわけ」

アタシがそう言うと

「カマクラさん…」

雪乃の眩きが聞こえたけど気かなかった事にして小型犬用の首輪

を探しカマクラのエサを買いフードコートに行つて休憩することになつた

仕方無いわ、八重さん…来月の七日も予定を空けて欲しいのだけだよろしいかしら？」

そう雪乃に言われて

「あゝっ、バイトは休んでもいいんだけど夕方は川崎家の七夕に誘われてるんだけど？」

遅くとも暗くなる前には行きたいからそれまでで良いならだけとさ」

アタシがそう答えると

「だそうよ？後は姉さんが妥協できるかできないかなのだけと？」

そう雪乃に言われた雪乃の姉さんは

「じゃその分早い方は平気なのかな？」

「んゝっ…あんま早すぎても困るかな？多分親父と母ちゃんは普通に仕事だろーから朝ご飯用意してお弁当渡したいし妹の朝ご飯と昼ご飯も用意しておきたいから六時前はちよつとね…」

難しい顔をしてそうアタシが答えると

「あははははっ、まさかそんな早くないよ？と、言うか八重ちゃん何時起き？」

そう聞かれて

「四時だけど変？」

そう聞いたら

「いや、全然変じゃないから安心してよっ、じゃあ七時に八重ちゃん家に迎えに行くから用意しといてよ？」

ん、じゃあお姉ちゃん用事済んだし満足できたからもう帰るねっ♪

八重ちゃんも当日楽しみにしてるからねっ♪

そう言われて

「……………」

雪乃のお姉さんの耳元に囁くと一瞬驚いたがすぐに笑顔を取り戻し

「もう一人の子も雪乃ちゃんと仲良くしてあげてよっ♪」

そう言つてその人は去つていきアタシがその後ろ姿を見送りながら

「雪乃のお姉さんつてスゴいのな…」

アタシがそう呟くと

「ええ、頭脳明晰容姿端麗でおまけにスポーツまでこなせるんだから…」

悔しげに言う雪乃にアタシは

「違うよ、そんな事なら雪乃を見てたら大体想像できるよ

アタシが言いたいのはあの人つて何枚の仮面を被ってるのかな？つて思つたんだよね…」

アタシがそう言つたら

「もしかしてさつき姉さんの顔色が一瞬変わったのは…」

驚きの表情の雪乃がそう聞いて来たから

「ん、仮面を外した貴女に会つてみたいって言つただけ」

そう事も無げに言うアタシを見て

「怖いもの知らずと言うか…姉さんが気に入って大人しく引き下がるわけだわ…」

でもね、八重さん…厄介な人に目をつけられたのに違いはないのだからその覚悟は必要よ？」

ええ、本当に厄介な人に目を付けられたわよ？八重さん

あの人が目をつけたつて事は早かれ遅かれ父さんと母さんの目にも止まる…

貴女の周りはいよいよ騒がしくなるわよ？覚悟しておきなさい…

「あゝつ、そう言えば八重ちゃんに頼まれてたお店の名刺のデザイン考えてきたんだけどどうかな？」

そう言われて

「ん、見せてみて…」

そう言つて受け取り眺めてみて

「うん、期待以上だよっ！アタシじゃこんな可愛いのも無理、お礼に今度なんかおごるよっ♪」

そう言つて笑つてるのを見て溜め息を吐いてる雪乃の事は気付いてない

日曜日は川崎家で蒼空とけーちゃんを過ごして大志にも勉強を教え

た
そして結衣の誕生日当日お昼は結衣のママに話して結衣のお弁当を作らせてもらい食べてもらった

事情を話して小町と大志に蒼空とけーちゃんを連れてきてもらい事情を知らない結衣に雪乃のケーキが焼き上がりアタシはあまり好きじゃないサプライズパーティー

アタシからのプレゼントはサブレの首輪…

「つて結衣、それサブレのだからね？」

自分の首に巻こうとする結衣にビックリしたアタシがそう言つたら

「そ、それくらい知ってるしっ！」

普通に考えて人間の首に収まるサイズじゃないよね？小型犬用なんだからさ

それとミトンにクッキー

雪乃はエプロンとミサンガで

「途切れない友情を願いたいわ…」

と、そう言つて

「そしてこれは八重さんのよ」

差し出されたそれを受け取り紙袋から出すと中から出てきたのはパステルオレンジのカジュアルな感じのエプロン

「あ、ありがとう…アタシまで…」

そうお礼を言うアタシ達

みんなで一緒にケーキを食べます小町と大志が塾に行きアタシも一足先に蒼空とけーちゃんを連れて帰ることにしたんだ

こうしてアタシと雪乃の秘密のミッションは無事成功に終わったんだ？

結衣のハッピーバースデー、サブレと魔王

気のせいかな？遠くから犬の哭声が聞こえてきてアタシ達に近付いてきてるような…

雪乃の顔が青ざめ震えてる…

犬、苦手なのかな？雪乃…えっ？

お腹に軽い衝撃が走り驚いてその衝撃の元を見たら

「ミニチュアダックスフント？」

そう思ってたら飼い主らしき女の子の声がした

「す、すみません…リードを離しちゃって…え、八重ちゃんと雪乃ん？」

そう呟く結衣に

「氣い付けろよ？でなきゃどんな事故に遭うのか知れたもんじやないからな」

犬の頭を撫でながらそう言うと

「あ、うん…二人で来てたんだ…あたしは何も聞いてないのに…」

そう呟く結衣に

「そりゃそうだろう？アタシは小町と来てたし雪乃は一人で結衣も今あつた

ここにそんな事情を知らん彩加が来たらやっぱり

『奉仕部の三人って仲良いねっ♪』

ってゆーぞ？」

アタシにそう言われ苦笑いしながら

「確かに彩ちゃんの言いそうなことだし端から見たらそう見えるんだね…

ところで今は何してたの？」

そう聞かれたから

「少し前まで本屋で雪乃に参考書の相談してたんだよ、進路希望を国公立大学も視野に入れようかって迷ってるからな？」

雪乃にはまだそこまでは話してないけど結衣があまり突っ込んで

こない話題だからそう振ってみたら案の定

「あははははっ、八重ちゃん：もうそんなことを考えてるんだ？早いね：」

なんて呑気な事を言うから

「早いヤツはそれこそ物心つく頃から考えてる：身近なところじゃ隼人

アイツの希望は知らないけど周囲は弁護士か医者のごっちかを期待すんじゃないの？」

そうアタシが言うと

「あゝっ：うん、隼人君はずっと前から考えてたんだよね：」

そう話題がそれでホツとして

「そんな事を話しながら小腹が空いたな：あつ、カマクラの工サつてあんま残つてないよな？」

そんな事を思い出して買いに来てたわけ

そう言つて買ってきたばかりのキャットフードを見せ

「で、結衣の方はどうしたの？」

そう話し掛けると

「あたしはサブレ：その子の名前なんだけどトリミングが終わる頃だからお迎えに来てたんたよ」

そんな事を話してる時だったなんとも形容しがたい気配とともに

「ふうん：貴女達が奉仕部の二人なんだ？」

そう知らない声がして

「ね、姉さん：」

そんな戸惑うような雪乃の声を聞いて顔をあげると雪乃によく似たセミロングの美少女？が居てその人の身体の一部を睨み付けてる

「あらあら、お姉さんて貴女になにかしちやったのかしら？」

そう言われたけどその言葉はアタシの耳には届かない

仕方無い：そんな表情を浮かべた雪乃がアタシの耳元で

「そんなに睨んでも貴女のは大きくならないわよ？」

そう言われて溜め息を吐き

「あゝっ、悪い：持病が出たみたいだな？えゝつと雪乃のお姉さん

ですね？その節は大変お世話になりました感謝してます」

そう尋常に挨拶すると

「ちゃんとお礼が言えて偉いわね？そんな貴女にご褒美よっ♪」

そう言っつて棒着きキャンデーを一袋くれたから結衣と食べてる

そんなアタシの頭を撫でるその人に向かい雪乃は

「そんな事より今度はいったいなんの用なのかしら？」

そう苛立ち気味に言う雪乃に

「雪乃ちゃんがいつまでたつても八重ちゃんに会わせてくれないから決まってるじゃないの？」

そう言われた雪乃が苛立ち紛れに叫ぼうとするのを

「雪乃、これでも舐めて落ち着いて…でなきや勝てる戦も勝てない

よ？」

そう言っつてにかっ、と笑うと

「口の中に物を入れて話をするのは行儀悪いって言っつてるはずよ？」

そう言っつて溜め息を吐く雪乃

結衣のハッピーバースデー、予約入りました

仕方無いわ、八重さん…来月の七日も予定を空けて欲しいのだけだよろしいかしら?」

そう雪乃に言われて

「あゝっ、バイトは休んでもいいんだけど夕方は川崎家の七夕に誘われてるんだけど?」

遅くとも暗くなる前には行きたいからそれまでで良いならだけどさ」

アタシがそう答えると

「だそうよ?後は姉さんが妥協できるかできないかなのだけと?」

そう雪乃に言われた雪乃の姉さんは

「じゃその分早い方は平気なのかな?」

「んゝっ…あんま早すぎても困るかな?多分親父と母ちゃんは普通に仕事だろーから朝ご飯用意してお弁当渡したいし妹の朝ご飯と昼ご飯も用意しておきたいから六時前はちよつとね…」

難しい顔をしてそうアタシが答えると

「あははははっ、まさかそんな早くないよ?と、言うか八重ちゃん何時起き?」

そう聞かれて

「四時だけど変?」

そう聞いたら

「いや、全然変じゃないから安心してよっ、じゃあ七時に八重ちゃん家に迎えにいくから用意しといてよ?」

ん、じゃあお姉ちゃん用事済んだし満足できたからもう帰るねっ♪

八重ちゃんも当日楽しみにしてるからねっ♪」

そう言われて

「……………」

雪乃のお姉さんの耳元に囁くと一瞬驚いたがすぐに笑顔を取り戻し

「もう一人の子も雪乃ちゃんと仲良くしてあげてよっ♪」

そう言つてその人は去つていきアタシがその後ろ姿を見送りながら

「雪乃のお姉さんってスゴいのな…」

アタシがそう呟くと

「ええ、頭脳明晰容姿端麗でおまけにスポーツまでこなせるんだから…」

悔しげに言う雪乃にアタシは

「違うよ、そんな事なら雪乃を見てたら大体想像できるよ

アタシが言いたいのはあの人って何枚の仮面を被つてるのかな？つて思つたんだよね…」

アタシがそう言つたら

「もしかしてさつき姉さんの顔色が一瞬変わったのは…」

驚きの表情の雪乃がそう聞いて来たから

「ん、仮面を外した貴女に会つてみたいって言つただけ」

そう事も無げに言うアタシを見て

「怖いもの知らずと言うか…姉さんが気に入って大人しく引き下がるわけだわ…」

でもね、八重さん…厄介な人に目をつけられたのに違いはないのだからその覚悟は必要よ？」

ええ、本当に厄介な人に目を付けられたわよ？八重さん

あの人が目をつけたつて事は早かれ遅かれ父さんと母さんの目にも止まる…

貴女の周りはいよいよ騒がしくなるわよ？覚悟しておきなさい…

「あくつ、そう言えば八重ちゃんに頼まれてたお店の名刺のデザイン考えてきたんだけどどうかな？」

そう言われて

「ん、見せてみて…」

そう言つて受け取り眺めてみて

「うん、期待以上だよっ！アタシじゃこんな可愛いのも無理、お礼に今度なんかおごるよっ♪」

そう言つて笑つてるのを見て溜め息を吐いてる雪乃の事は気付い

てない

日曜日は川崎家で蒼空とけーちゃんを過ごし大志にも勉強を教え
た

そして結衣の誕生日当日お昼は結衣のママに話して結衣のお弁当
を作らせてもらい食べてもらった

事情を話して小町と大志に蒼空とけーちゃんを連れてきてもらい
事情を知らない結衣に雪乃のケーキが焼き上がりアタシはあまり好
きじゃないサプライズパーティー

アタシからのプレゼントはサブレの首輪…

「って結衣、それサブレのだからね？」

自分の首に巻こうとする結衣にビックリしたアタシがそう言った
ら

「そ、それくらい知ってるしっ！」

普通に考えて人間の首に収まるサイズじゃないよね？小型犬用な
んだからさ

それとミトンにクッキー

雪乃はエプロンとミサンガで

「途切れない友情を願いたいわ…」

と、そう言つて

「そしてこれは八重さんのよ」

差し出されたそれを受け取り紙袋から出すと中から出てきたのは
パステルオレンジのカジュアルな感じのエプロン

「あ、ありがとう…アタシまで…」

そうお礼を言うアタシ達

みんなと一緒にケーキを食べます小町と大志が塾に行きアタシも
一足先に蒼空とけーちゃんを連れて帰ることにしたんだ

こうしてアタシと雪乃の秘密のミッションは無事成功に終わった
んだ？

陽乃さんの聖誕祭前日

① 彦星不在の織姫様

現在アタシ達は川崎家に居る

陽乃さんが蒼空とけーちゃんがみてくれているのを見ながらそろそろ帰ってくる小町と大志の晩ご飯の支度を始めている

え、ナンで陽乃さんが川崎家に居るのかつて？

明日は陽乃さんの誕生日で小町に手を回した陽乃さんが親父と母ちゃんから今夜の外泊許可を取り付け

その結果

小町と二人、泊まりに行くから沙希が帰ってきたら雪ノ下家のお迎えで雪ノ下家に向かうからだ

小町と大志が帰ってきてご飯を食べさせてから二人の…主に大志の質問を聞く

川崎家に来るようになり何だかんだで大志の勉強を見ているのだ

沙希が帰ってくる時間が近付き沙希のご飯を支度しているうちに沙希が帰ってきた

それにもない沙希の顔を見た蒼空とけーちゃんが安心してうとうとし始めるからアタシ小町

…今日は陽乃さんが二人を寝かしつけ二人の眠るのを確認してから帰る支度をし今夜は雪の下家に向かうんだが…

「あ…都築さん、今まで小さい子の相手してたからこんな格好してるんですけどやっぱ不味いですよね？」

そう聞いてみたら

「お姉ちゃん…それ気にするのって、今さらだからね？」

呆れてそう言う小町に

「大丈夫でございませよ、小町様…もしご心配でしたら旦那様と奥様にお会いになる前にお着替えいただければよろしいかと存じます

ので」

そう言われてホツとして雪ノ下家に向かった

雪ノ下家に着くと早速都築さん案内でツインの客間に案内してもらい早速着替える事に…と思ったら陽乃さんから待ったが掛かり

「メイド服が趣味の八重ちゃんはこのを着てっ♪」

そう言われて差し出されて受け取って鏡の前で胸に当ててみて

「いや、別に趣味って…ぶっ！な、なんっすか！これっ、エバの綾波バージョンっ!？」

そう言つて叫ぶと

「うん、うん、良いね、良いねっ♪せっかくなんだから着て見せてよっ♪」

そう言われて着る事にした…

え、なんでつて？メイド服ならバイトで散々着てるんだから今さらじゃん？別にコスプレクライじゃないし

そんな訳で早速着替える事にして小町も陽乃さんが用意してくれた清楚なイブニングドレスに着替えた

着替え終えたアタシ達は陽乃さんと一緒に雪ノ下は家の当主と奥方様との謁見に向かうんだけど…

都築さん…もしかして笑い、堪えてませんか？ひよっとしなくてもこのネタご存知だとか言うんじゃない？…すいません、どうやら知ってそうですね

「陽乃、アスカ・ラングレイアスカ・ラングレイバージョンを頼んで良いかね？」

「それなら私はマドマギでお願いしますね」

つてナニ？状況が見えませんか現実をみたくありません…

何故ゆえ開襟シャツの紳士とサマードレスの淑女がコスプレ話で盛り上がってるの？

頭の中で？を涌かせたアタシが悩んでたら

「今時の仮装パーティーって結構コスプレパーティーなのよ？」

そう言って笑う陽乃さん

「はあ、そんなものなんですか…」
そう言って脱力するアタシだった

テニス対決番外編

（潰す、裸の王様を潰してやるっ！）

ドリルが勝手にしろって言ったからアタシのサーブからゲームを始める事にしてアタシがトスをあげた瞬間啞然とする戸塚と雪乃：

そしてかなり遅れて結衣がそれに気が付いたのはアタシのサーブが葉山のテニスウエアを切り裂いた後で

「ちっ、ちよつと切りすぎたせいでかえって浅かったな： アタシのブーメラン（※ スネイクではありません）」

そう呟くのアタシを見ながら

「あ、あの： 比企谷さんってもしかしてサウスポーだったの？」

「そう戸塚に聞かれたアタシは

「ん：： そうだけと言ってたか？ まあそんな大した事じゃないから気にしなくても良いだろう

それよりさっさと殺っちまわないと貴重な練習時間が減っちゃうからな」

次のサーブは三浦優美子だけど楽々と、しかも三浦逆サイドに打ち返すとナンとか反応して打ち返そうとラケット出したけどアタシのスピンを効かせた打球は逆に葉山隼人のラケットを弾き返して浮き玉を戸塚がボレーを決めて後がない葉山隼人と三浦優美子

アタシの放ったサーブをなんとかラケットで捉え十字ブロックして打ち返さしたけど続くアタシのスマッシュは葉山隼人の足元に落ちジャックナイフの様に鋭く跳ね上がった打球は情け容赦なく葉山の下顎を捉えると葉山の身体を宙に舞わせギャラリーの内の何人かは | jetっ！ | の効果音を見て葉山隼人は走馬灯を見た

既にガットがズタズタの葉山隼人とプライドがズタズタの三浦優美子に地獄を見せるための溜めのシーンが入り：

| ギャラクティカマグナムっ！ |

マンガならさしずめバコーンっ！ と、ド派手な見開きページになっ
ていることだろう必殺スマッシュを決めると三下のように派手に
吹き飛ばされる葉山隼人と拳圧と闘気にビビってお尻の下に水溜
まりを作った三浦優美子

そして： 既にズタボロ状態の葉山隼人が放ったサーブをアタシ
が二人にとどめをさすべく放たれたスパーブローっ！ って、ブ
ローって言っちゃってるよ…

そのアタシのパッシングショットとか弾き返して代わりに本
人も保護柵を越えてコートの外にフェードアウトしたけどな…

因みにアタシの打球をラケットかま捉えた瞬間、そのボールを中心
に葉山隼人の身体が一回転したのはナイシヨの話な

既に戦意喪失の三浦優美子は為す術も無くアタシ達の勝利に終わ
り権威失墜の葉山隼人と特に三浦優美子はカースト底辺へと一気に
滑り落ち、有る意味彼女の高校生活は終わった言えるだろう

「へ、へくしょんっ！」

その存在をすっかり忘れ去られた葉山隼人は昼休みからコートの
外で意識を失って倒れていたが探してくれる者は一人もなく

外気の冷たさで目を覚ました時には辺りは既に真っ暗で有るにも
関わらず、彼を探す者はやはり一人もなかった

アタシが連休明けから復学し入れ替わりに三浦優美子が保健室登
校になり後釜に座ろうとサガミンだったっけか？

三浦優美子の格下がアタシに突っかかっってきたんだが自滅して学
校に来てない

まあ、アタシには関係ない話だけどな

口は災いの元

「ああ、良いぜっ！ 甲子園の切符を手に入れたら臨時のマナー
ジャー引き受けてもよっ♪」

その軽い調子で言った一言が間違いの元だったが後の祭りであ
シは今西宮にいる

総武高野球部の宿が西宮市内のホテルだからだ

練習を終えた選手達の練習用のユニフォームを洗い終えた今、それ
等を干しているところだが 『なんでこうなった？』

今更だから口にごそ出さんが、そう言いたい気持ちで一杯だ

『なんでこうなった？』

大事なことから二度言いたい

「しかし… 運が良いのか悪いのか？ 大和、大丈夫なのか？ 選
手宣誓… アタシは見てるだけでも胃に穴が開きそうな気すらして
るのによ？」

しかも開会式直後の試合とかマジかよ？ って言いたいぞ…」
って口に出して言ってるけどな

そして、いよいよ明日がその開会式なんだが… 心配はしていない
ぞ？ 人の心配する前にアタシの方こそ熱中症で倒れやせんかの心
配する必要がある気がしっくりなんだからな…

うん、マジ洒落にならんわ

一回戦、初出場高対決はまさかまさかのプレイボールホームランが
決勝点になり初出場、初勝利は良いんだがナンだよ？

ちよつと活躍したからって、掌返してちやほやしやがってな

もつとも、アタシが好きなのは菜加だけで大和は親しい仲間の一人
としか思ってない…

そうゆうー目では見てないから特に変わるはずもないがな

二回戦、古豪との対決は大技小技を巧みに繰り出してくる相手に苦
しみながらもナンとか接戦を征して勝ち進み

三回戦、100マイルの男と呼ばれる豪腕投手を擁し、優勝候補と

呼び声高い強豪もテニスのサーブで球速に目を慣らしたうちには全くついていけない世界じゃない

優勝候補の一角崩しベスト16入りを果たし大和も一気にプロの注目を集める選手に仲間入りしたがアタシの対応は変わらない

あくまでも優美子のグループ仲間の一人だ

準々決勝、vs 西東京代表青銅高戦ってマジかよ？ 野球に詳しくねえアタシでも知ってる強豪高じゃねえかよ？

1対3： 善戦虚しく青銅の主砲御幸一也の一振りの前に撃沈：敗戦により総武高野球部の今年の夏は終わりを告げアタシのマネージャーライフも終わりの時を迎えた

：さすが名門高、パネエ強さだ： 悔しいけど三点で押さえた大和を誉めても良いくらいだっ、つか

「二年の先輩にやわりいが青銅も御幸や倉持も春にやいねえんだから春にリベンジしろっ！

負けちまった今はもうどうしようもないんだから取り敢えずおもいつきし泣いて良いから： んで、おもいつきし泣いたらいつまでも引きずらねえで吹っ切ってリベンジだ

今度は、選抜で青銅に勝って悔し泣きさせてやれよ、大和っ！

先輩達も、今はアタシの小さい胸で良けりや貸しますから今は思いつきり泣いて： おもいつきし泣いたら後は大和達に託してください、八強、四強、決勝進出： 更に上を目指せて」

って選手達にハツパ掛けてたらそれマスコミに聞かれてテレビにも流れてただけど

「あの娘にああしてハツパ掛けられてるのは野球部だけじゃないし、野球に詳しくない私に代わりユニークな練習方法を編み出して個々のレベルアップに貢献してくれたのも彼女なんですよね？」

そうやって優しい眼差しでアタシ等を見てから

「そんな彼女の周りには自然に人が集まりその仲間達の協力ですれまで野球部だけじゃできない事

特に成績に難の有る子等に対する試験対策は本当に助かりました

からね」

部長先生が話をそれで締め括ると青銅から煩いのがきた

「御幸一也ともっチー先輩がいなきや勝てるよーな口振りだな？
」

ニヤリと笑ってアタシを見るから

「御幸一也さんのあの一振りがなきや試合の流れは変わってたはずだから、もしかしたらって可能性はあるっただから… 春までに力をつけろって話だ

それに漠然とベストエイト入りを謳い文句にするよかでつけえ強敵の青銅打倒の方がわかりやすい目標だろうが？」

「そう言って笑い返すと

「お互い、ヤロー共の尻を叩いて春に再会しよーぜっ♪ オメー、気に入ったから後でメアド交換しようなっ！」

そう言われたから学生証からヤエにやんの名刺を渡して

「アタシの営業用名刺とメアドだから一旦それに送ってくれたら本アドで返す」

そう沢村と話してたら大和のヤツが

「おい、今の聞いていたか？ 八重が甲子園が終わってもマネージャー、続けてくれるそうぞっ！」

って叫ぶのを聞いて沢村の勢いにつられてマネージャーを続ける発言したことに気付いたあたしは

「あっ…」

つと一旦声を出したけど

「でもまあ、乗り掛かった船だから… 戦艦大和みたく沈むなよ？ 大和主将っ♪」

良い音させて大和の背中を叩いたアタシはとても良い笑顔だったらしいが… 彩加になんて説明（言い訳）しようか？

余談じゃあるが青銅のマネージャーの沢村とは仲良くなり、メアドの交換も沢村からのメールがきて無事完了、メル友になり他のマネージャー達にもラインの仲間に入れてもらい

マネージャーの役割とか色々教えてもらうことになるのは又別の話だ

身から出た錆とゆーか自分の発言でマネージャー続ける以上半端はしたくないからな

その代わり沢村の勉強を通信教育で手伝ってるがな

沢村： 夏休みの宿題終わってるのか？

八重1／2

① やはり雪ノ下雪乃が方向音痴なのは間違っていない

夏休みに奉仕部？彩加、優美子、姫菜、葉山グループで行った秘湯巡りツアー

それがすべての始まりだった

方向音痴な雪乃のプランニングで中国旅行に行ったのが間違이었다

美味しかった北京ダック、雪乃が見立ててくれたチャイナドレス、壮観だった万里の長城…

それで帰れば良かったとゆうより帰りたかった

迷子とゆうか遭難したアタシ達が帰国したのは夏休み終了間際でアタシと雪乃に隼人以外…

彩加は少し残ってただけで、それ以外のメンバーの宿題が手付かずの状態で地獄を見た

なんとか間に合わせたけどね

② 猫の手も借りたい川崎沙希に…

「八重、手を貸しとくれっ！」

そうやって水をぶっ掛けられたアタシはけーちゃんのお迎えに同行（猫用のゲージに入れられて）して川崎家で蒼空とけーちゃん達のおもちや扱いを受けているんだがどーすんだよ？これ…

あのアニメと違って2〜3日お湯を被っても元に戻らないんだぞ？

③ 猫とパンダとアヒルに子豚が授業を受けている風景はシニールすぎるが彩加の女子制服を着るのは間違っていない

アタシは雪乃に拉致されて2-Jの教室に居るんだけど誰も突っ込まないどころか雪乃の膝に乗るアタシを触りにくる

因みに雪乃の男子化は誰も気付いていない

2-Fはカオスで野郎共は美少女の彩加を取り囲み女子達はパンダとなったガハマさんを遠巻きにみて子豚になった隼人を冷ややかな目でみているが：

ベイベー煩かった戸部がアヒルになってもガーがー煩いだけなので皆の反応は薄かった：

「戸部、ガーガー泣くな五月蠅いから」

どうなる2-J、どうする総武高？

ただ、これだけははつきりと言いたい

『キヤットフードは食いたくねえっ！』

猫の姿の今は喋れんけどな

なので、今日のアタシのお弁当は煮干しである

④ 奉仕部

猫にパンダに子豚にアヒルとこの姿のままでは帰れないし部活に出れない女体化している彩加の五人は奉仕部で迎えを待っているが

：

どうでも良いけど勉強しろよ？ ガハマさん

戸部、学年が別れても仲間だからな？ 隼人、食われるなよ？

え？ アタシはスタンド（幽波紋）化した八幡がノート取るから試験も任せるつもりだから大丈夫だぞ？

でも、なんかザフルのイギーみたいな気がしてちよつと嫌かも？

でも、マツカン味のコーヒーガムは食べてみたい気もする

っていつの間に来たの？陽乃さん、いくら教えても今の戸部はアフレックとは言わないからね？

ってかなんの意味があるのそれ？

彩加を自宅に送りパンダのガハマさん、アタシ雪ノ下家でお泊まりで戸部は隼人の家に泊まるんだが：明日の朝、元の姿に戻っていることを祈ろう

テツナのバスケット

① 八重とテツナ

球技大会にバスケットを押し付けられたけど、誰も練習には付き合ってくれないから一人壁に向かってパスの練習とフリースロー用のゴールに向かって投げていた

「クソツツ…なんでアタシがこんな目に遭わなきゃいけないんだよ?」

クラスの女子バスケットチームが嫌がらせでアタシを巻き込んだくせに練習は完全にハブられ…

誰かバスケットを教えてくんねーかなと思って来たストバスもチビすけのアタシの相手をしてくれるヤツは誰一人居ない

仕方無いから見よう見まねでやってるけど、ムカついた状態でやったって練習に身が入らないしそもそもアタシにはバスケットは大きすぎる…

「?、どうしたテツナ?」

赤い髪の青年にそう言われてほっそりとした白い指で指し示す青い髪の女性が

「あの小学生の女の子が気になりました…」

少し離れたところでストバスが賑わってるのに何でそちらに行かないのか思ったのですが…

思案顔でそう答えると然程ズレているとも思えない眼鏡を直しながら

「そんなものはあの子が小さいから指導しようと言う気の無いヤツが仲間に入れる訳ないのだよ」

見たところ全くの初心者のようだしね」
そう眼鏡の青年に言われて

「そうですか…何やら訳有りて泣きながらぶつぶつと呟きなが

ら繰り返してますからこのまま放っておいたらあの娘はバスケが嫌いになりそうで……」

そう悲しそうにテツナと呼ばれた青い髪の女性が言う

「全く…… テツナは物好きと言うかお人好しだな…… どうした慎太郎まで黙り込んでしまった……」

と、赤い髪の青年が怪訝そうに言う

「いや、あの女の子をどこかで見たことがあるような気がしてないのだよ」

そう話すのを聞いた茶髪の青年が

「あーっ、俺もどっかで見たことあるっす」

そう話して居ると彼等の目の前で女の子の髪は深紅に染まり急に彼女から繰り出されるパスが鋭さを増し全く届かなかったフリースローが届くようになり始め

「比企谷八重っ！」

二人が思わず声を上げると赤い髪の青年も眉ねを寄せて

「フム、比企谷八重…… その名前なら僕も最近聞いた覚えがあるな……」

赤い髪の青年がそう答えると

「赤司が耳にしてもなんの不思議もないのだよ…… 何せあの子比企谷八重、本名比企谷八幡と言う男子高校生がTSにより少女化した医学界も注目している少女なのだよ」

と、眼鏡の青年が言えば

「俺はさつき見たように興奮したり入浴や洗髪で温度が加わると髪の色が変わる不思議な女の子の話聞いたンすけど実際にその子をお目にかかれるとは思ってなかったっすけどあんな小さい子だったのはさすがに知らなかったっすよ」

そう言つて驚く茶髪の青年を無視して

「ち、ちよつと待って下さい緑間くん…… 僕の聞き違いでなければ男子高校生がと聞こえたのですがそれはつまりあの子は高校生なんですか？」

そう聞かれた緑間くんと呼ばれた青年は

「そうなのだよ、あの子は見た目は小学生の女の子ではあっても千葉県立総武高校に通う女子高生なのだよ」

「比企谷八重……テニスの腕はかなり達者だと雪ノ下陽乃が自慢気に話していたのを適当に聞き流していたのだがまさか直接関わる事になるとはね……話し次第ではテツナが見てあげなさい」と、言われて

「俺もすごく気になるんだけど?」

二人がそう声を揃えて言うので

「テツナは護身用にイグナイトとイグナイトパスを指導しなさいあの身体ではヤバイのに目を付けられでもしたら目も当てられない事になるだろうからね

後はフットサルで君の得意技のミスディレクトに近い技を使ったらしいからそのスタイルをもみてあげるといい」

そう言っつてその女の子……つまり比企谷八重であるアタシそっち除けで話しは進んでいたらしい

「涼太はフリースローを見た感じではスリーポイントはお前と同じタイプになるから見てあげなさい

ただし、モデルにスカウトするつもりなら雪ノ下陽乃に聞いてからにする事をしなければあの女と必ず揉めるからな?」

僕のこの警告を無視した場合は僕は一切関知しない

慎太郎も雪ノ下陽乃と彼女の主治医の葉山女教授の許可を得ることが僕からの条件だよ……無理もない話だけどかなり不安定な精神状態に有るらしいのだからね

慎太郎はパスカットと、ドリブルを見てあげれば良いよ、体力にかなり難があるらしいけどテニスとフットサルを器用にこなす才能はかなり面白い素材だから鍛えたらぜひともストバスを一緒にしてみたいものだよ

特にテツナと組ませたら対戦相手の顔は見物だとだと思っよう?

何しろ対戦相手が時々一人になるんだからね、これは相当な見物だと思っよう」

赤司と呼ばれてた青年は陽乃さんと同種族だと思わせる笑みを浮

かべていた

「君、ちよつと良いかな？」

知らない人に声を掛けられたアタシは当然相手を警戒しながらチラツと青い髪の女の人と赤い髪のにノツポ二人がアタシを見ていたから

「ハイハイ、アタシみたいなチビすけは邪魔なんですよ？ アタシみたいなチビはバスケやっちゃいけないって言いたいんだよね？

あんたらもさ…

アタシだってわかってるけど不戦敗は… ナニもしないで諦める諦めるのは嫌なんだよっ！」

そう叫ぶアタシに

「僕達にその訳を話してもらえますか？」

そう優しく聞いてきたから改めて四人の顔を見て

「え、あれ… キセリヨ？ と赤い髪に緑に青ってカラーズ？」

そうアタシが口走ると

「え、もしかしなくても俺の知ってくれてるの？」

そうキセリヨ？聞いてきたから

「あーっ、わりい…アタシが知ってる訳じゃないんだわ、アタシはファッション興味ないし本来は面倒臭がりでこんな秘密の特訓とかするようなキャラじゃ無いしバスケに限らずインドア派でスポーツ関係はあんまし詳しくねえんだわ

根は引きこもり系、土日は家に引きこもり誰とも関わりたく無い人間だからな

ただ、キセリヨはアタシの妹がファンで雑誌をマメにチェックしてるし奇跡の世代もやっぱり妹がファンで何回かは観戦に付き合わされたからうる覚えで覚えてた…程度かな？

人ごみが嫌いなアタシにはアンタ等の出てる試合会場にいなきやいけないってのはほぼ拷問なんだからな？

まあ、二年になってから二ヶ月過ぎてるのにクラスの半分も顔も名前も覚えてないアタシにしては上出来な方なんじゃね？」

そう言つて乾いた笑い声をあげるアタシに

「君さえその気ならイグナイトパス伝授しますよ？これは身長の無さを気にする必要がないばかりか君くらいの高身長の子が男子に混じつてストバスをしたら君のパスをカットするのは赤司くんですら厳しいでしょうね…」

そう言われて

「何でアタシなんかそんな優しく…」

アタシがそう聞いたらキセリヨが

「君は俺達が見付けたマイフェアレディなんすから磨きあげたくなる気持ちに理由が要るんなら自己満足なんですけどね？」

そう言つて笑うと

「どうですか、訳を話してもらえますか？」

そう言われて少しだけ考えてから

「学校で球技大会があるんだ… 今年はバレーボールとバスケットでどっちもちびのアタシには厳しい競技だけどバレーなら後衛専門で出れば良かったって思ってたんだけど…」

「女子に嫌われてる？ 同姓感覚で男子と接してるから」

言い淀むアタシにそう言ってくれたから

「そっか… 緑の人は医大生だったし赤の人はうん、一度だけ陽乃さんと話してるのを見てるから陽乃さんルートで知ったのか…」

まああの人が話せるレベルの人なら問題ないか、信用できない人なら適当なこと言つて煙に巻くんだろうからね」

そう言つて肩をすくめる

「冷静かつ客観的に彼女を観察できているんだね？ どうりで彼女が君を気に入る訳だ」

そう言われて

「うん、陽乃さんと話すときは陽乃お姉ちゃんって呼ばないとメチャクチャ機嫌悪くなるんだよね…」

つて言つたら赤の人は溜め息を吐いたけど青い人は

「僕はそこまでじゃないですが桃井さんやリコさんなら雪ノ下さんと同じ反応するでしょうし夏の一時帰国の際に彼女と出会つたら

アメリカに連れてくと言いかねませんよ？」
そう言ったら

「確かにね、駄々を捏ねてる彼女の姿が浮かんだよ
と、言うと残りの二人も頷いてた」

イグナイト

② ニヨタ師弟コンビ誕生？

「僕の名は黒子テツナ、大学二回生で親の趣味である中国拳法をかじってますしイグナイトと呼んでますがその実、通背拳と呼ばれる技なんですよ、あの技は」

そう言われてもその違いがさっぱりわからないアタシが首をコテンと倒していると黒子さんが笑いながら

「まずは通背拳の実演からしましょう」

そう言つてキセリヨに腹の辺りにバスケットボールを持たせる物凄気合いと共にボールに掌打を打ち込んだら何故かから打をくの時に曲げて悶絶してるキセリヨを見下ろして

「緑間君、申し訳ないのですが練習の邪魔になるそれを脇においてもらえますか？」

と、言うのを聞いて

(うわっ、あのキセリヨが材木並みの扱い受けてるよ…)

そう思つて驚いてたら

「テツナの涼太の扱いはいつもこんなものだよ」

そう言われて

「残念イケメンだったんですね？ キセリヨって…」

なんつっつかアホ？ まあアホ可愛いって言われてるアタシが偉そうなことは言えないんだけどさ」

そう言つて肩をすくめると

「ですが、進学校の総武の生徒さんなら頭は良いのでしょ？

黄瀬君はそちらの意味でも残念な人ですからね？」

そう言つて透き通る笑顔で微笑んでいた

緑の人からドリブルの基礎をから習い、キセリヨは3Pはイメージが大事って教えてくれた

「今、ここにこう投げれば入るってイメージができたならそれを実行する」

そう、教えてくれた

暗くなるまで練習して試しにキセリヨの前でサイドステップしてみたら

「消えた…」

そうきせりよが呟いたから

「消えた訳ではないのだよ、涼太… だが、俺もお前の位置で見えたら消えたように感じたと思う」

「ただのサイドステップですよ、黄瀬君… ですが、身体の小ささとそれ故の体重の軽さからの素早い切り返りでサイドステップされたら一瞬見失うのも無理有りません

フットサルの仲間からは蜃気楼の猫、そう呼ばれらしいですから十分に身長の手短を補えると思いますよ？」

そう言われて感心されていた

その特訓を三日受けて望んだ球技大会

もちろん習った事を完璧に修得… できる訳はないけど学校の球技大会なら十分に通用するとお墨付きをもらって望んだアタシの髪は既に深紅に染まっている

「ジャンプボール、行かせてくれるんだろ？」

そう挑発的にサガミン言って望んだけどアタシを見て侮った敵チームは眼中になく驚異的なジャンプ力でボールを奪うと呆気にとられている会場を尻目にドリブルでゴール下に走り

「もらいっ♪」

そう言って決めたダンクショットだけどあり得ないものを見た…

そんな感じでポカンとしていたけど興奮した結衣の

「八重ちゃん、スッゴーいつ！」

と、そう絶叫すると我に返った会場が興奮の坩堝と化しコートの人々はアタシの実力を認めアタシについてきてくれた

しよせんサガミンは、コートの外でギャンギャン吠えてるだけだからな

対戦相手を圧倒的な実力差で撃破していき決勝戦

優勝候補の3ーCは、女子バスのレギュラー三人がいるけど女子バスのレギュラーが校内の球技大会にバスケチームに入れる時点で総武の女子バスのレベルがね…

それに引き換え、奇跡の世代に見出だされ鍛えられ悔し涙をバネにして力に変えたアタシの敵じゃなく2ーFを優勝に導きバスケ部に勧誘されている

もちろん沙希と優美子が中心になった女子バレーチームに隼人と戸部の男子バスケチーム

それに続いて大岡、大和の男子バレーチームも優勝して2ーFが完全制覇して終わった球技大会だったけどアタシに恥を掻かせたいアチ八重派の目論見は完全に外してやった反面

思い切り目立ってしまったアタシの周囲は騒がしくなり

「ナンでこうなったっ！」

そう言って頭を抱えているアタシガイル

第69話

風魔の猫八

アタシは忍猫の八重略して猫八

イヤ、声帯模写できないからね？ できたら便利だけどさ

アタシのご主人様は、現代に生きる隠れ里である風魔の里の忍…

風魔のネ小次郎様なんだけど正直言つてアホです

アホ猫と言われているアタシの斜め上をいくアホであるから救いようがない

どうかち長様ネ小次郎様食事抜きと言う罰はお止めくださいませんか？ そのたんびにアタシのご飯取り上げて食べてますから意味ないですからね？

まあ、アタシの食い物の恨みだけは募っていきますけどね…

ええ、それはもうこの恨み晴らさずでおくものか… っと思つてますとも

テニススクールに向かう彩加と別れ川崎家に向かうアタシは正直暑さに負けそうだったりする、八月生まれなんだけどね

到着時は大志とコンビニに出掛けてる蒼空とけーちゃんが戻る前に出掛ける沙希に気を付けるように声を掛け見送り三人の帰りを待つ

三人が帰ってきてきて大志と蒼空は自習でけーちゃんはお絵描きしてるからアタシは三人を見守りながら静かに浴衣を縫っている、花火大会に間に合わせたいからな

沙希が帰ってきたが今日は予備校がある日だから結構遅くなってる

帰るともう10時近いから着替えて寝落ち

暑さに負けながらけーちゃんのお迎えに…一雨欲しいなつて空を見上げ睨んだら立ち眩みつてナニソレ？

お迎えの時間になりけーちゃん団扇で扇ぎながらよたよた歩く姿は我なが見れたもんじゃないのは自覚してる

…暑さに負けたアタシはスーパーの店先でけーちゃんとアイスを食べてる

けーちゃんはパピコでアタシはジャンボチョコもなか

はあくつ…生き返る…

アイスが美味しいいくつ♪

アイス食べながら無料のクーラーに当たる…うん、何て贅沢な一時だ

結構な確率でけーちゃんとの席に座ってアイスを食べるアタシは割りと知られた存在でいつの間にか川崎家の次女的なポジで見られてる

大志も最初ツレに

「義妹さんを紹介してよ？」

そう言われて訳がわからずに戸惑ったって言ってたしな

至福の一時を過ごすアタシに鮮魚コーナーで働くおばちゃんが

「八重ちゃん、良い鯉が入ってるからお父さんアライにして出して上げたら？」

そう声を掛けてきたから値段を聞いて三枚に下ろしてもらい後冷酒を買ってからスーパーを後にしたんだ

川崎家に着くとアタシとけーちゃんとはシャワーを浴びせられてから出された服に着替えるとタキシード着た彩加がいて

「さあ八重ちゃん…パーティーの時間だよ、皆が待ってるからねっ！」

そう言っアタシの手を引っ張り都筑さんが運転する車にエスコートしてくれた

車内には雪乃がいて遅れてけーちゃんを連れた沙希が荷物を持ってきた

「あのさ、パーティーって今日はなにも聞いてないけどなんかあつたっけ？」

そう言ったら苦笑いし

「自分の誕生日を忘れる人がありますかあ…」

そう呆れて言われたけどアタシにとつては八の誕生日でしかかな上にその八も小町以外の人に祝ってもらっている形跡がないから余計にどうでもいい日に過ぎなかったから

「アタシには八の誕生日としか思えなかったから忘れてた…」

そう言いながら彩加の頭を見てたら

「八重ちゃん、さつきからボクの頭をじっと見てるけどなにかついでる？」

そう聞かれたアタシは

「何も無いよ、むしろウサミミがないのが残念だと思ってるかな？」

アタシが残念そうに言う的都筑さんが

「そちらの紙袋に用意してございますよ」

そう言いながら微笑むのを見て

「さすが都筑さん、アタシの考えてる事わかった？」

そう聞いたら

「いいえ、わかっていたわけではなく八重様なら戸塚様のお姿を見てこう思われるだろうと言う推測をお建てしただけでして…」

そう言われてやっぱリスゴいい人だなと思いつつ

「彩加、アリスをワンダーランドに誘うのは白ウサギの役目だよね？」

だから白ウサギになってパーティー会場に案内してよ、白ウサギさん？」

「不思議な国のアリスっ！」

彩加と沙希が言い

「アリスinワンダーランドっ！」

さすが雪乃はそつちかと思

「アリス、アリスうっっ♪」

けーちゃんもはしやぐ

雪ノ下家に到着し雪乃の案内でパーティー会場に案内されたアタシ達

アタシの為に集まってくれたのはパーティー会場を提供してくれた雪ノ下家に料理作りに協力してくれた沙希とその家族

鶴見母娘に彩加、葉山グループ、材木とたくさん集まってくれた

メインのバースデーケーキはアイスケーキって…沙希スゴいと、ゆーかけーちゃんと話してたの聞いててくれたんだな

うん、素直に嬉しい…そつか、誕生日を祝ってもらえるのつてこんなに嬉しい事だったんだな …

アタシはまたひとつ利口になった気がした

余談ではあるけど

「小町ちゃん、ちよつと良いかな？ボクのお母さんが浴衣に姿の僕と八重ちゃんが二人で並んで写る写メ送られて聞かなくてね…ちよつと撮ってもらえる？」

そう頼まれ小町の手により彩加と八のスマホにデジカメで撮られたのはゆーまでもない事だろう

ただ今三時を回ったばかりだから勿論時間は未々早いと言うか早すぎるけど開始前の混雑は嫌だから早めに現地入りしてブラブラしてるだけ

特に欲しいものがあるわけでもしたい用事があるわけでもない

ゲーセン、か…時の流れに従い以前は差の無かったアタシと八の違いが徐々に浮き彫りになってきた

ゲームもそのひとつなんだけど嫌いじゃないし八の習得したテクニクで下手なわけではない

だけどアタシには八みたいには熱くなれないんだよね…

特にアクション系のゲームにはね

彩加と二人、アイスを食べながらベンチに腰掛けてたら

「そうだ、八重ちゃん…せつかくだから浴衣のプリクラ一緒にとろ

うよっ♪」

彩加にそう言われてカップル専用コーナーに向かったんだ

そしてガイドのアナウンスにしたがい撮影して二人で落書き…

完成したプリクラを見たら改めて思ったんだよね…うん、なんか恥ずかしいけどこれもアタシと彩加の思い出なんだよな？

アタシは仕上がったばかりのプリクラを見ながらそう思った

夏の終わりを感じさせる日が陰り始めいよいよ雰囲気盛り上がって来はじめ取り敢えず小町に頼まれたものと加彩加と二人で食べるものを買って集め会場内を彷徨ってたら

「あれ〜っ、戸塚じゃん…今日は妹さんと花火見物？暇ならあたし等と一緒に観ようよっ♪」

そうアタシに対して挑発的な視線で睨む…何て言ったっけ？

あ〜っ、そうそう…自称優美子のライバルの女ご一行様なのな、当の優美子からは全く相手にされてないけどな

「お兄ちゃん、先輩さんなの？あのケバさで言えば卒業生？

何にしる頭悪そーだから友達は選んだ方が良いよ？」

そう言っつてヤマカガシに向けた視線を一瞬向けてやったら黙り混み適当にお茶を濁しその場を離れていった

「全く…鬱陶しいやつらだよ…名前知らんけど」

アタシがそー呟くと

「八重ちゃん、八重ちゃんが話してた人は同じクラスの相模さんだよ。」

そう言われて考えてみたんだけどさっぱり思い浮かばない

「相模？…ああ、思い出した結衣が『さがみん』って呼んでるヤツとその取り巻きね」

どうでもよさそうに言うアタシに

「全く八重ちゃんときたら…」

そう言っつて苦笑いを浮かべる彩加だった

奇跡のストバス

夢砕かれて理想と現実の違いは違います

「小町に会わせたい人がいるからついてきて」
そう言つて会わせた奇跡の世代：　そしてキセリヨ
うん、喜こんでる喜んでるよ、会わせた甲斐が有るつてもんだよ
でも、おおつ：　クリーンヒットっ！　良いところに入ったね、あれ
は

キセリヨ、完全にグロッキーでまたも緑の人にごみ扱いでコートの外に放置だよ：　合掌

ン、陽乃さん来て今回のコスプレ衣裳渡されたんだけど青林（誠凛じゃないです）　高校バスケット部のダボダボジャージつてナニコレ？

赤いジャージみたいで見たことも聞いたことないと思うんだけど
：　全く訳わからないですよ？　陽乃さん

そう思つていたんだが：

アタシ、黒子さんに緑の人の人でゲームスタート

対戦相手はあの時もここに居てアタシに「ジャマだっ！　お前みたいなチビが、コート内をうろちよろしてんじゃねえよっ！」

そう言つてバスケットを教えて欲しいと頼むアタシをコートから追い出したヤツラで

どうやらアタシの事は覚えてないみたいだけど、アタシは忘れてねえからな

しかも、どんだけ上手いつもりかは知らないけど、アタシと黒子さんの事を緑の人のハンデつて思つてるらしくアタシ達は全くのフリーつて：　早速吠え面かかせてやる

黒子さんのミスディレクトとアタシのミラーージュキヤットでコートには緑の人と敵チームの三人しか居ない状態で気が付くとアタシ

か黒子さんにボールを奪われる敵チームの三人に同情の溜め息を吐く緑の人

「目に見えるものだけで物事を判断するからだよ」

訂正、同情と言うよりは哀れんでるよね

そして、不意に決められている3Pと対戦相手に為す術はない

そして、驚異の跳躍力でアリウープを決めるとコートの上には異様な興奮に包まれていたけどそれ以上の高揚感に支配されているアタシにはナンの痛痒も感じない

2度目のダンクを決めるべくゴール目指して宙を舞い上がったアタシだけど完全にゴール前をブロックされているのはアタシみたいなチビに2度もダンクを決められたくないから？

男の意地ってヤツなの？

なら、男の余裕で助けを求めていたアタシに手を差し出してくれよなっ、マジ受けるんですけど

そんな事を考えながら空中で、次の一手をどうしようかと迷うアタシに

「八重ちゃん、体勢を変えなさいっ！ 頭を下にしてっ!!」

そう叫ぶ陽乃さんの声に応えて空中で姿勢を変え、頭を下にすると空気がジャージと身体に入り込みウエストで縛ったジャージが大きく開いて空気抵抗になり

重力を無視して落下速度が緩やかになってガードの居ないゴールにヒョイッと投げ入れゴールを決めたアタシを見て

「むおっ… あれぞまさしく、秘技トキオっ！」

って誰もついていけないぞ、材木… あ、このジャージ用意した陽乃さんは知ってそうだな？

うん、TOKIOなら知ってるぞ？ ジャニ系の… 嘘です、往年のスーパースターのヒット曲で確かステージ衣装？ セット？ にパラシュートが…

あっ、そーゆー事か

このブカブカのジャージがさながらパラシュートの様にアタシを

万有引力の法則を無視させたからトキオなんだな？

そう考えていたらニヤリと笑う陽乃さんの笑みが見え、沙希に手を引かれたけーちゃんと大志に手を引かれた蒼空の四人が現れて蒼空とけーちゃんの声援が届いたから次々にゴールを決めていった

アタシと黒子さんの姿を捉えきれない対戦相手に、つまらないとばかりに緑の人は傍観している

でも、うん… 確かにつまらないかもね

アタシの目から見ても大した技術はなくちよつとばかり背が高いだけのプレーヤーでしかない事に気付けたのはアタシが成長したから？

第2試合は暫く休憩してからすることにして…

「はやっ、もう蒼空とけーちゃんの二人が黒子さんに馴染んでる

…

そう呟くと

「あの二人が人見知りしないのが大きいな…、慎太郎位の背になると怖がる子も居るからね」

そう言つて緑の人にも変わらない笑顔を向ける二人を見ていると

「アタシの時もすぐに馴染んでくれて色々助かったな…」

そう言つて二人との出会いを思い出していた

low altitude flight : 低空飛行と背の低いアタシの繰り出すイグナイトパスをそう命名してくれた黒子さん

今度はキセリヨと赤の人と組んでるけど、キセリヨはアタシのパスを取るのには窮屈そうだけどさすがだよな

アタシのパスに手を弾かれる事はない

黒子さん直伝のアタシの low altitude flight は、下手なパスカットの手を弾きかえして目指す目的の相手にボールを届けるパスなんだから甘く見たら怪我をするよんっ♪

「千葉くんだりまで来て何やってんだと思や赤司のヤツ、随分と

楽しそうな顔をしてるじゃねかよ？」

「そんな事より、あの可愛い娘は誰なの？ テツちゃん： あの
子がテツちゃんや征ちゃんに慎ちゃん達を笑顔にさせてるんでしょ
？」

「そう言われて

「えっ… 僕、笑ってますか？」

驚いた黒子さんがピンクの人にそう尋ねると

「あまり笑わない三人が… 特に皮肉っぽい笑い方しかない征
ちゃんに慎ちゃんが穏やかに笑ってるから大 ちゃんも驚いてるん
じゃないの？」

「そう言われて改めてコートの三人ともう一人の友人を見て微笑む
と

「あの娘は僕達が見付け、手塩にかけて育てた僕達の
M Y f
a i r l a d y ですからね

あの娘が僕達の手で輝いていくのを見るのは楽しかったですよ？

「

そうテツナに言われてちよつと悔しい陽乃さんとピンクの人

さり そして、奇跡の一人にして現役のNBAプレイヤーガングロ
さんまで揃っちゃったよ…

お陰でコートの外がざわついているじゃん

試合を楽しむとゆーよりアタシの中の秘めたる力を引き出す事を
楽しむ赤の人とトリツキーなアタシの動きに合わせて自らもいつも
とは違う…

アタシ限定の動きで対応してくれるキセリヨ

盛り上がるコートとアタシを黒笑みを浮かべて見守る彩加… っ

て「え”っ！、彩加っ!？」

あ… あははっ… 彩加さん、怒ってますよね？ 明らかに… う
ん、激おこぶんぶん丸レベル？